

古代法の翻訳と解釈 II

ハンムラビ法典の石柱に刻まれた楔形文字全文の原典
その翻訳および解釈の方法について

Comment on traduit et comprend “le Droit ancien”
(i.e.)-L’interprétation du code cunéiforme de
Hammurapi-II

佐 藤 信 夫

目次

法の象徴図像「王笏」(山梨学院大学『法学論集』第40号
1998年6月10日 p.220～p.304に既述)

まえがき

ハンムラビ法典石柱原文の読み方

最古の法律辞典

ハンムラビ法典前文

ハンムラビ法典各条文の邦訳と解釈

第I章 訴訟法と訴訟手続法、偽証の罪(第1条～第5条)

第1条 誣告罪、同害報復 Lex talionis

殺人罪の原告が立証できなかつたら死刑

第2条 河神の処罰、正義と法(神罰)

「魔術を使ったかど」での告発

第3条 脅迫による偽証罪

偽証罪の処置、人の生死に関わる訴訟

第4条 訴訟と同額の賠償、収賄の禁止

偽証が金銭に関わる場合の措置

第5条 裁判官の責務

判決の変更、判事は12倍の賠償額

第Ⅱ章 窃盗罪、所有権の侵犯、処罰方法（第6条～第13条）

第6条 窃盗と赃物牙保罪

神殿と宮廷からの窃盗—死罪

第7条 契約と供託物、準盗財

証人なしの契約と窃盗とみなされる場合は死罪

第8条 盗品が神と宮廷の品

盗んだものが神か宮廷のものだと30倍の賠償、ムシュケーヌムのも
のだと10倍の賠償

第9条 喪失物、証拠裁判

喪失物を他人の手中に発見した時の措置

第10条 赃物の取り戻し（準盗財）

裁判所で売買の立証が可否による罰則規定

第11条 原告の責任、遺失物回復

喪失者が所有していた事実を立証できない場合、紛争を起こした責
任者として死罪

第12条 赃物牙保罪

赃物故売人の死亡、被告は訴訟費用の5倍を取得

第13条 証人の確保期間

証人を確保する期間6ヶ月まで

第Ⅲ章 誘拐罪と奴隷の法規（第14条～第20条）

第14条 幼児誘拐

他人の幼児を誘拐した者は死罪

第15条 奴隷の逃亡幫助罪

宮廷の奴隷を逃亡させた者は死罪

第16条 逃亡奴隷の保護

宮廷から逃亡した奴隷を保護した者も死罪

第17条 逃亡奴隷の逮捕

奴隷の所有者は逃亡奴隷を逮捕してくれた者に2 シェケルの報酬を出す

第18条 奴隷の身元確認

逮捕した奴隷は宮殿で身元確認

第19条 奴隷の隠匿者

一度奴隷を隠匿した者は必ず死罪

第20条 捕獲奴隷の逃亡

奴隷を捕獲した者がその奴隷に逃げられたる場合は「神への宣誓」で放免される

第IV章 強盗罪、強奪如何の処置（第21条～第25条）

第21条 侵入者の殺害、家宅侵入

他人の家に侵入した者は殺害される

第22条 窃盗犯、強盗（追い剥ぎ）

人の財物を略奪する目的で強盗－死罪

第23条 盗難物件の申告

盗難された物件を神の前で申告－その地域の行政責任者がその賠償をする

第24条 強盗殺人への賠償金

強盗に殺された者への賠償－1 マナの銀

第25条 火事場泥棒

火災の消火に來た者が－その家の財物を窃取、その火中に投げ込まれる

第V章 兵士階級に関する諸規定（第26条～第41条）

第26条 憲兵・軍族と按察官の出征

憲兵・軍族や按察官が出征を命じられたのに徴兵拒否または傭兵に代理させたら死罪

第27条 出征兵士の土地返還

出征した兵士が捕虜となっている間その土地を使用していた者の返

還義務

第28条 出征兵士の息子、私領相続

出征した兵士に、息子がいたら、その田畑の経営を継承できる

第29条 幼少の息子、不動産相続

まだ息子が幼少の時は、その田畑の3分の1は母に与えられ成人するまで継承

第30条 不動産の取得

兵士の土地が放置され、他の者が三年の間その田畑を耕やしたら自分のものになる

第31条 短期の放置

放置した期間が一年間ならば、その出征兵士に田畑は戻される

第32条 兵士の身代金

戦争で捕虜になった兵士が、もとの身分になるには身代金を払って身受けしてもらう

第33条 指令官と長官

軍隊における指令官や長官が国王の命令以外に勝手に徴兵をすることの禁止

第34条 指令官の服務違反

兵士の虐待禁止、兵士の給与保護

第35条 兵士との取引

国王から兵士に与えられた家畜の取引

第36条 憲兵・軍族の不動産売買

公的な役職者に国王から与えられた不動産の売買禁止

第37条 不動産売買の禁止

公職者の不動産は例え売買されて銀が支払われていても無効で銀は没収される

第38条 妻と娘への譲渡禁止

公職者の不動産は自分の妻や娘に譲渡できず、負債のため売却してもいけない

第39条 個人的に購入した不動産

自分の妻や娘のために個人的に購入した不動産は売買できること

第40条 不動産の売買

商人や企業家は不動産の売買自由

第41条 公職者の不動産売買禁止

公職者の不動産を売買するのを斡旋したり、担保に入れることの禁止

第VI章 農耕地と灌漑に関する規定（第42条～第66条）

第42条 不動産の賃貸借

田畑を耕作するために賃貸借した者が収穫できなかった時の賠償

第43条 田畑賃貸借の責任

田畑を賃貸借して耕やさなかった者の回復義務

第44条 長期の開墾放棄

原野を三年間開墾する約束で賃貸借したがそれを放棄した者の責任と損害賠償

第45条 洪水にあった田畑の損害

田畑を農夫に売却した後その田畑が洪水にあったらその損害は農夫の負担

第46条 田畑売買の契約

田畑を売買したがその代金を支払っていなかった場合の収穫の分配

第47条 田畑の維持管理

売買の後、田畑の維持管理を他人にまかせた場合の分配

第48条 債務者の支払猶予

洪水にあった田畑を持っていて負債のある者はその年の支払いと利息が猶予される

第49条 商人からの賃借

商人より金銭を借りて田畑を入手して穀物やゴマを植えたその収穫は商人のもの

第50条 借財と利息

上記で、穀物やゴマの収穫高はその借用した銀貨と利息分だけ商人のものとなる

第51条 法令換算表による返済

返済する銀貨なき時は、借用額と利息分だけ国王の法令換算表の額面で返済できる

第52条 契約の変更不可

その田畑で穀物もゴマも収穫できなかった時はその契約を変更できない

第53条 堤の修復不全と賠償

土手の堤を堅固にしておかず他人の耕作地に災害を与えたらその穀物を弁償する

第54条 穀物の損害賠償分配

上記で穀物の弁償ができなかった場合に農夫は売り上げ金を互いに分配できる

第55条 灌漑の水門放置

灌漑の目的で水門をあけ他人の畑を水で押し流した時の損害賠償

第56条 隣の田畑への損害賠償

自分の水門を開き隣の田畑の供給物に害を与えた場合、10イクー大麥10グルの賠償

第57条 牧畜の責任

他人の田畑に家畜を放し草を食べさせたる牧人の損害賠償前条の倍額

第58条 家畜の暴走

前条で草を食べた家畜が公共の広場などに暴走した場合の牧人の責任とその目撃

第59条 果樹園の樹木伐採

果樹園の所有者がいない時にその樹木を伐採したならば半マナの罰金

第60条 果樹園の植樹

果樹園に植樹した時、五年目からその所有者と園丁師とが平等に分割する

第61条 造園の未完成

造園を開始したが完成しないまま放置した場合の園丁師の取り分

第62条 畝地の造園

畝地に造園しようとして植樹しなかった場合、隣の田畑に準じて損害賠償

第63条 原野の造園

田畑が原野に位置するならば田畑の所有者に返却し、10イクーにつき10グルの賠償

第64条 園丁師の取り分

園の管理者は果樹園の収穫物の3分の2を地主に納め残りの3分の1が自分の収入

第65条 園丁師の管理不適切

園丁師がその管理をきちんとせず収穫高を減らすようなら、隣の果樹園の収穫で賠償

第66条 (訳文の一部分のみ)

(以上は山梨学院大学『法学論集』第47号2001年3月26日 p.98～354に既述)

第66条から第99条まで石柱の表面が削り取られているから省略、他に発見された粘土板で、家屋や建物のある土地の所有等の規定が盛られていたと考えられている

第Ⅶ章 委託者(商人)と受託者の規定(第100条～第107条)

第100条 商人(タムカル)への利息 27頁

(原文が欠如) 利息の支払いは日数を計算して商人に返済

第101条 ^{シヤマルルム} 受託者の損害賠償 31頁

商人から依頼を受けた寄託者が派遣された土地で利益を出せなかった時の賠償2倍

第102条 ^{シヤマルルム} 不正の受託者(行商人) 33頁

商人がその寄託者に出資金を渡す時相手の不正をみつけたら出資金の返却を求める

第103条 ^{シヤマルルム} 強盗にあった受託者 36頁

寄託者が旅の途中強盗にあったら帰国後神の前で宣誓することで放免される

第104条 署名領収書の取引 38頁

商品を預り、財物を取引きしたる者は銀の支払いとともに署名領収書を受取る

第105条 契約文書なき取引 40頁

署名領収書なき取引きでは銀貨を受け取れず、ない分の計算に加えられない

第106条 寄託行為の責任 42頁

貿易・販売契約が寄託者の側の責任で破綻したことを商人が立証した時は3倍の罰金

第107条 商人側（委託者）の責任 45頁

上記の契約で、その破綻が商人側の過失で破綻したことが立証されれば6倍の罰金

第Ⅷ章 居酒屋の女将（第108条～第111条）

第108条 酒代金の受取り 48頁

酒代金を銀で受け取ったりゴマかして受け取ったりした居酒屋の女将は川に投げ込まれる

第109条 治安維持義務 53頁

居酒屋に犯罪人が群れ集っていた時にそれを取り押えなかったら居酒屋の女将は死罪となる

第110条 修道女の飲酒禁止、違反者は火刑 55頁

修道女が居酒屋を経営したり酒を飲みに居酒屋に入ったりしたら火刑に処せられる

第111条 居酒屋での支払い 58頁

ツケで飲んだ客は穀物の収穫時に50シラの穀物を支払う

第Ⅸ章 債権法（債務者、抵当、留置権）（第112条～第119条）

第112条 物品の横領 62頁

他人に搬送を依頼されたものが搬送しないで横領してしまった場合

に5倍の損害賠償が科せられる

第113条 債務の取立て 66頁

債権者は無理に債務者から財物を取りあげた時にはその債権者の地位を失う

第114条 債権なき差し押えに対する罰則 70頁

実際には債権がないにも関わらず、ある者が他人の家から人質を取ったら1人1/3マナの罰金

第115条 人質の死亡 72頁

前条のような場合、差し押えた人質が死亡した場合その人質を差し押える原因となった債権も消滅する

第116条 虐待による人質死亡 75頁

差し押えた人質が虐待によって死亡した時は同害報復、奴隷ならば3分の1マナの罰金

第117条 債務の抵当 78頁

債務者が自分の妻、息子や娘を債務の抵当として引渡したなら三年間労働力として働かすことができる

第118条 奴隷の抵当処分 82頁

上記の抵当として自分の奴隷を提供したならば、それは譲渡・売却事由としては取り戻せない

第119条 子供を生んだ女奴隷 84頁

債務者は前条の例外として自分の子供を生んだ女奴隷だけは同額の銀で取り戻せる

第X章 財産権の規定（第120条～第126条）

第120条 穀類の貯蔵の寄託 87頁

穀物を信託した者が貯かったことを否定した時それが立証できたら2倍の損害賠償

第121条 年間貯蔵費 91頁

穀物の貯蔵を寄託したらその年間貯蔵費は大麦1グルにつき5シラの穀物を支払わなければならない

第122条 貴金属類の寄託方法 93頁

貴金属類等の寄託には粘土板による契約書の作成が必要条件であった

第123条 訴訟の請求権 95頁

寄託をした証人も契約書もなくその寄託が否認されたる場合、訴訟の請求権はない

第124条 寄託の立証責任 98頁

証人を前に寄託したが相手が受託を否認した時には、その立証に成功すれば2倍の損害賠償

第125条 受託者の責任 103頁

受託者はその預った品物について盗まれたら完全に賠償するか窃盗犯から取り返さなければならない

第126条 虚偽の紛失物に関する告訴 108頁

自分の所有物が紛失していないのに紛失したと虚偽の告訴をした者は2倍の損害賠償

第 XI 章 家族法（婚姻と相続、第127条～第152条）

第127条 誑誘・誣告の罪 112頁

他人の妻女や女神官に後ろ指をさしその挙証が出来ない時は額に刻印を打たれる

第128条 婚姻契約書の作成 115頁

妻を娶っても正式に婚姻契約書を作成しなかったならばその婚姻は無効となる

第129条 妻女の不貞 125頁

現行犯で妻の不貞が見つかった時男と共に水中に没せられるが亭主が助命すれば許される

第130条 乙女の強姦 128頁

婚約はしたが未だ父の家にいる乙女を強姦したる男は死刑、娘は無罪放免される

第131条 密通の嫌疑 132頁

妻が夫から密通の疑いをかけられても現行犯でないなら神に宣誓して実家に帰ることができる

- 第132条 密通の反証 134頁
 他人の後ろ指で密通の疑いをかけられた妻女は河神の神明裁判によって反証できた
- 第133条 留守宅の妻は再婚禁止 137頁
 出征した者の家に食料とする蓄えがまだある時は再婚禁止、違反者は溺死の処刑
- 第134条 再婚可能の条件 140頁
 出征して捕虜となった者の家に財産がない場合にはその妻女は再婚することができる
- 第135条 再婚の破綻 143頁
 前条の場合元の夫が戻ってきた時は妻は元の夫のもとに帰り再婚で出来た子供達はその実父のところに
- 第136条 逃亡夫の妻 147頁
 自分から居住地を捨てた夫の妻は誰と再婚しても良く戻ってきた夫につれ戻されない
- 第137条 女神官妻の離婚 149頁
 女神官だった妻女を離婚する場合は持参金と不動産の一部を与え子供の相続に関わる
- 第138条 ^{うまづめ}石女の追い出し離婚 155頁
 子供を生まなかった妻女を離婚するには結納額の銀と持参金を払い戻す
- 第139条 持参金なき女の離婚 163頁
 婚姻するに際し持参金（結納料）を持ってこなかった妻を離婚するには1マナの銀
- 第140条 ムシュケーヌム階層の離婚 166頁
 離婚しようとする妻がムシュケーヌム階層の出身である場合その離婚料は3分の1マナの銀
- 第141条 妻の婚姻継承責任 177頁
 妻が離婚しようと勝手に世帯道具をまとめたら妻を追出すことも奴隷の如くすることもできる

- 第142条 妻側からの離婚** 184頁
妻女から離婚を申出たる時その決定は家門会議で夫に欠陥ある場合
持参金を持って実家に帰れる
- 第143条 家門による審判** 188頁
前条による審判で妻に責任ありと認められた時は水中に投げ込まれ
処罰
- 第144条 妻たる女神官の地位** 190頁
女神官を妻に娶りその女奴隷が子供を生んだ時はその妻女が同意し
ない妾を囲うことができない
- 第145条 妾を囲える場合** 194頁
前条で妻の女奴隷に子供が生まれなかったら妾を囲えるが同居した
妾の地位は常に妻の下に置かれる
- 第146条 子を生んだ女奴隷** 198頁
前2ケ条で女神官の連れてきた女奴隷はその後も妻の下に置かれる
が売り払われることはない
- 第147条 女奴隷の売却** 202頁
前3ケ条で妻女となった女神官の女奴隷が子供を生まなかったらそ
の主人は女奴隷を売却できる
- 第148条 病気の妻離別禁止** 204頁
娶った妻女がラアブム病になって、他に妻女は娶れはするが元の妻
を離別することはできない
- 第149条 妻の同意で離婚可** 206頁
前条の妻女が自分の方からその家に住むことを欲しないなら持参金
を持って実家に帰る
- 第150条 封印遺言証書** 209頁
生前のとき自分の妻に粘土板の封印遺言証書が作成されていればそ
の妻女は不動産を自由に処理できる
- 第151条 妻の債権拘束性なし** 212頁
前条でその妻女が婚前に債権があったとしても封印遺言証書の内容
の方が優先する

- 第152条 共同の債権は率先支払 216頁
結婚してから生じた債権は夫婦共同して先に商人に支払いをおこなうこと

第 XII 章 刑事法（殺人・近親相姦等）（第153条～第158条）

- 第153条 夫の殺害 218頁
他の男のために自分の夫を殺害した妻は杭刺し刑に処せられる
- 第154条 姦通罪 220頁
他人の子女と肉體関係をもちその他人（の男）がこの都市から出ていけと命じたら追放される
- 第155条 息子の嫁との相姦 222頁
息子の嫁に手をつけた息子の父がその嫁と同衾している時にみつかったら水死の刑
- 第156条 婚約中の息子の嫁 224頁
まだ婚約中の息子の嫁に手を出したら1マナの罰金と持参金を返還しなければならない
- 第157条 近親相姦 227頁
母と相姦した者は火刑によってその母親と二人とも焼殺される
- 第158条 父の女奴隷との相姦 228頁
父親の死後その女奴隷のところで自分の子供が生まれたことが判明したら追放される

第 XIII 章 婚姻法、婚約と結婚（第159条～第184条）

- 第159条 婚姻の取消し 231頁
婚姻の無効及び取消しの場合、結納金等持参したすべてのものを放棄すれば可能
- 第160条 婚姻申込みの拒否 233頁
花嫁の側で結婚の申し込みをしに来た花婿を拒否した場合は結納品の倍を返却する
- 第161条 中傷による拒否 235頁
中傷によって娘の婚姻を拒否した義父も倍額返済、中傷した者もその娘を娶れない

- 第162条 結婚の持参金** 237頁
子供を生んだ後死亡した妻の持参金はその子供達が相続し実家の父は請求できない
- 第163条 持参金の返還** 240頁
子供を生まずに死んだ妻の持参金は実家の父親が返還請求できる但し結納は嫁ぎ先へ
- 第164条 持参金と結納の相殺** 242頁
前条で結納を返さない実家の父には持参金と相殺して返却すれば良い
- 第165条 長所ある子の優先相続** 244頁
ある者が自分の気に入った息子に優先相続させた法的証書はその死後も有効
- 第166条 未婚兄弟の保護** 247頁
父親死亡後まだ未婚の弟がいる場合はその弟に銀を与え妻を娶らせる
- 第167条 母親の持参金で相続** 249頁
最初の妻と二人目の妻がともに死亡し子供が残った時その妻の持参金に応じて相続
- 第168条 相続権の剥奪に関する一般原則** 252頁
ある息子だけその相続権を剥奪しようとしてもその正当事由なき場合は不可
- 第169条 相続剥奪事由が二つ以上の場合** 256頁
前条と同じくその訴訟を起こすには相続権を剥奪する理由が二つ以上なければ不可
(今月掲載分はここまで。これ以降は次号につづく。)
- 第170条 嫡出の認定、女奴隷の生んだ子供、嫡出庶子**
父親の存命中に女奴隷の生んだ子を自分の子と宣言したならば、その子供の相続は平等
- 第171条 認知しない女奴隷の子供(非嫡出子)**
前条と同じ状況で認知しなかったら相続はできないが自由の身分だ

けは与えられる

第172条 結納金なき婚姻の家

前条から続きその男が結納金を与えないで本妻をもらった時その妻と子の将来

第173条 再婚と子供の相続

再婚して子供を生んでから死亡した妻の持参金は前の夫と後の夫の子供達で分割

第174条 前夫の子供への相続

前条の再婚した女が後の夫との間に子供がなかったら前の夫の子供達のみ相続可能

第175条 奴隷と自由人女との子

奴隷がアウィルム階層の女との間に子供をつくったら奴隷の主人はその子を奴隷にできない

第176条 前条の持参金

前条の奴隷が死亡したならば結婚後得た財産は奴隷の主人とその妻とが二分割する

第177条 幼児ある女の再婚

幼児のいる女の再婚は裁判官の決定、旧夫の幼児の成長のため家具類は売却禁止

第178条 女神官の持参金

持参金を与えられた女神官が父親の死亡後受け取る不動産の措置

第179条 女神官の相続優位

前条と同じ場合で父親が粘土板にその女神官の意志を優先する記載があった不動産の措置

第180条 相続の特権なき女神官

父親がまだ特別の持参金を与える約束をしていなかった女神官は他の子供と同じ相続

第181条 特別の神への女神官

父親がその娘を特別の神へ捧げる女神官とした場合その家の財産の1/3を相続する

第182条 マルドゥク神の女神官

父親がその娘をバビロンの守護神マルドゥクに捧げる女神官にした
ら同額の相続可

第183条 生前贈与は相続不可

父親が他人の妻となっている自分の娘に生前贈与たる持参金を与え
たら娘の相続不可

第184条 生前贈与のなき妻

前条と同じく他人の妻になった娘に父が存命中持参金も与えなかつ
たら父の死後その兄弟が与える

第 XIV 章 養子縁組と家族法（第185条～第191条）

第185条 養子縁組

幼い子供の時から自分の名をつけて養子にし成長させた後はその子
を返せと言えない

第186条 養子の解消

養子を採用しようとする時その両親が反対なら採用した幼児は実家
に戻される

第187条 宮廷関係者の養子

宮廷の廷吏や奉公人の子供の養子縁組み手続きは後で解消されるこ
とがない

第188条 職工人の養子

職人が子供を養子として自分の手工芸の技術を修得させたら縁組み
は解消できない

第189条 技術未修の養子、養子離縁

前条でその養子とした子供が職工の技術未修得なら養子縁組み解消
できる

第190条 養家での不遇

養子として採用した子供を成長させたが実子がその養子を同等に扱
わないなら解消

第191条 養子の追い出し、養子の取扱い

養子をもってから実子ができ養子を追い出そうとしたなら成人し

た後1/3の生前贈与

第 XV 章 特殊な刑法規範（第192条～第195条）

第192条 宮廷奉公人の養子

宮廷の廷臣がもらった養子が自分の両親に親であることを否定したら舌を切り落とす

第193条 養子が実家に戻る件

前条の廷臣の養子となった者が養親を嫌って実父の家に戻ったならば眼球を割り抜く

第194条 養子及び乳母の責任と刑罰

乳母に預けた子供が死亡しそれを隠すため乳母が他の子供と取替えたなら胸を切り裂く

第195条 傷害罪、息子の暴力

息子がその父親を打つなら手を切られる

第 XVI 章 傷害罪と反坐法（タリオ規範とその例外）

（第196条～第214条）

第196条 「目には目」の同害報復

他人の目を潰したら自分の眼も潰される

第197条 「骨には骨」の同害報復

他人の骨を折ったら自分の骨も折られる

第198条 ムシュケーヌムの目と骨

ムシュケーヌムの目を潰すか骨を折ったならば銀1マナの罰金

第199条 奴隸の目と骨の賠償

奴隸の目を潰すか骨を折ったらその奴隸の値段の半額を支払えばよい

第200条 「歯には歯」の同害報復

他人の歯を折ったら自分の歯も折る

第201条 ムシュケーヌムの歯、殴打賠償

ムシュケーヌムの歯を折ったら銀1/3マナ

第202条 高位の者に対する頬の殴打

自分よりも身分の高い人の頬を打ったら牛の鞭で60回叩かれる

第203条 同身分の頬を殴打

同じ身分の者の頬を殴打した場合1マナの銀貨をその賠償として支払う

第204条 ムシュケーヌムの頬を殴打

同じムシュケーヌムの頬を殴打した場合は10シェケルの賠償

第205条 奴隷が殴打したる時

奴隷がアウィルム階層の者を殴打した時その奴隷の耳は切り落とされる

第206条 殴打による傷害の賠償

他人を殴打して傷害を与えた時は宣誓の上相手の傷の治療費を支払う

第207条 殴打による死亡

前条で相手が死亡した時、銀1/2マナ（500g）の損害賠償を支払う

第208条 ムシュケーヌムの殺害

前2ケ条と同じ場合で、相手がムシュケーヌムなら1/3マナの銀が損害賠償となる

第209条 殴打流産致死、妊娠中の女性を流産

殴打した相手が妊娠中の女性でそのために流産したら10シェケルの銀貨が損害賠償

第210条 女性の殴打殺人

殺した相手がアウィルム階層の女性だったら、自分の娘も殺される

第211条 ムシュケーヌム女性の殴打、流産の損害賠償

殴打した女性がムシュケーヌム階級の女性でそのために流産したら5シェケルの賠償

第212条 ムシュケーヌム妊婦の流産致死

前の条文の女性が死亡したら銀1/2マナの損害賠償を支払う

第213条 女奴隷の胎児流産

殴打したのが他のアウィルム階層の女奴隷でそれで胎児が流産したら2シェケルの賠償

第214条 女奴隷を殴打殺人

前条の女奴隷が死亡したら銀1/3マナの損害賠償

第 XVII 章 医師に関する規定（第215条～第223条）

第215条 外科と眼科治療

外科医が青銅のメスを使いアウィルム階層の者に外科手術をしたら
銀10シェケルの謝礼を受け取ることができる

第216条 ムシュケーヌムの患者が外科手術

前条の外科手術をおこなった患者がムシュケーヌムであつたらその
治療費 5 シェケル

第217条 奴隷の患者が外科手術

前 2 ケ条と同じ外科手術をした患者がアウィルム階層の奴隷なら治
療費は 2 シェケル

第218条 外科手術の失敗、医師の法的責任

青銅メスによる外科手術で患者を殺害してしまつたり目を潰したら
外科医は手を切られる

第219条 外科手術で奴隷が死亡した時の損害賠償

前条と同じ手術でムシュケーヌムの奴隷を殺害したらその奴隷と同
程度の奴隷を賠償

第220条 手術で奴隷の目が失明

外科手術で奴隷の目が失明したらその奴隷の購入額の半額を損害賠
償

第221条 骨折治療の治療費

患者がアウィルム階層の場合その治療費は銀10シェケル

第222条 ムシュケーヌムの患者、骨折と内臓治療費

外科医が骨折と内臓の治療をした患者がムシュケーヌムの人だつた
ら治療費 3 シェケル

第223条 奴隷の治療費

前条の治療をおこなった患者がアウィルム階層所有の奴隷なら治療
費は銀 2 シェケル

第224条 獣医の治療代

外科医が牛や驢馬を切開手術したらその治療費は1/6シェケルの銀片

第225条 獣医の手術ミス

外科医が牛や驢馬を手術ミスで殺した時はその家畜の値段の1/4を家畜の持主に払う

第 XVIII 章 烙印官の規定（第226条と第227条）

第226条 烙印官の責任

売買の出来ない奴隷を主人の許可をえないで烙印したらその烙印官の指は切られる

第227条 虚偽の烙印

烙印官を騙して売買の出来ない奴隷に烙印を押させたらその者は死刑、烙印官は知らなかった旨を宣誓すれば釈放

第 XIX 章 建築家に関する規定（第228条～第233条）

第228条 建築家への報酬

家屋の建造を依頼した者は家が完成したら建坪1サルあたり2シェケルの建設費

第229条 建物の倒壊

依頼された建築家が手を抜いて家屋が倒壊しその家の主人が死亡したら建築家も死罪

第230条 倒壊による息子の死

前条の建物が倒壊して屋主の息子が死亡したら建築家の息子も殺される

第231条 奴隷の死亡

前二ケ条で建物の主人の奴隷が死亡したらその奴隷と同程度の奴隷を賠償する

第232条 家具や家財道具の破損

同じく家具類が家の倒壊で破損したら同等の家具類の賠償と家屋の再建

第233条 壁面の損壊

建築家は自己の資金で壁面の補修

第 XX 章 船頭・船大工の規定（第234条～第240条）

第234条 船大工の賃金

60グルの船の建造費は2 シェケル

第235条 船の補修

船を建造した年に破損したら補修義務

第236条 船の賃貸借料

船を賃貸借して船頭が沈めたら賠償

第237条 船の荷物損失に対する賠償

船頭が不注意で船を沈め積載した荷物を失ったならばその船と荷物を賠償する

第238条 沈没船の引上げ

船頭が自分の沈没させた船を引き上げたらその値段の半額を銀貨で支払う

第239条 船頭の年収

船頭の給料は年に大麦6 グルとする

第240条 船の衝突

川を上下する船と横断する船が衝突したら川を上下する船が横断する船の荷を賠償

第 XXI 章 各種賃貸料と管理責任（第241条～第252条）

第241条 牛の抵当料

牛を抵当に取る時その値は1/3マナの銀薄

第242条 馬鋤付き牛の賃貸

馬鋤のついた牛を一年賃貸するには大麦4 グル

第243条 胴繫ぎ牛の賃貸

胴で繫いだ牛を一年賃貸するには3 グル

第244条 賃貸した家畜の殺害

野原で賃貸した家畜がライオンに殺されたならその損害は持ち主の側に負担

第245条 賃貸した牛の殺害

不注意か打擲のため賃貸した牛が死んでしまったら同じ程度の牛を損害賠償する

第246条 牛の足を折った賠償

賃貸した牛の足を折れば同程度の牛賠償

第247条 牛の目を潰した賠償

賃貸した牛の目を潰せば牛の価半分賠償

第248条 角と尾の賠償

賃貸牛の角や尾等を切ったら1/4の価賠償

第249条 賃貸した牛の自然死

賃貸した牛を神が殺したら誓約の上放免

第250条 牛の角で人殺害

牛が歩行中の者を角で殺害—処罰なし

第251条 突き癖ある牛が人殺害

突き刺す癖がある牛を保護措置をしなかったため人が殺されたら1/2

マナの銀を賠償

第252条 奴隷を殺した時の賠償

前条で奴隷を突き殺したら1/3マナの銀

第 XXII 章 人の管理責任と盗難（第253条～第277条）

第253条 管理者の横領

田畑の管理を依頼された者が種子や飼料を横領したら指を切り落される

第254条 穀物食糧の横領

前条の者が穀物食糧を横領したらそれに相応する大麦の賠償でよい

第255条 賃借の不誠実

前2ヶ条で、賃借した牛を他人に重ねて賃借したり飼料を盗んだため田畑に何も生えないようなら収穫時に10イクーに60グル賠償

第256条 賃貸借の賠償不能

前条の賠償不能の場合牛の代りに労働

第257条 耕作人の雇傭

耕作人の雇傭費は1年間に7グルの大麦

第258条 牛飼いの雇傭

牛飼いの雇傭費は1年間に6グルの大麦

第259条 鋤の盗難

野原で鋤を盗んだら罰金5シェケルの銀

第260条 開墾鋤か馬鋤の盗難

開墾鋤か馬鋤の盗難は罰金3シェケル

第261条 牧人の雇傭

牛や羊を飼育する牧人の雇傭費は1年間128グルの大麦

第262条 〔原文欠損〕

「ある者が、牛や羊を……に」だけ記載

第263条 牛や羊の損失

渡された牛や羊の損失は同程度の賠償

第264条 牧人の損失負担

手当を渡されて預かった牛や羊の生産率を減少させたらその減少分の負担をなす

第265条 牧人の盗み

飼育のために渡された牛や羊を牧人が銀のために売却したら10倍に至るまでの賠償

第266条 牧人の責任解除

家畜の自然死と野獣による殺害の時は牧人が神の前で宣誓しその責任を免かれる

第267条 牧人の責任事項

牧人の不注意で牛や羊が倒れたらそれらを回復させ持ち主に渡す

第268条 牛の脱穀用賃貸

脱穀のため牛を賃貸したら20シラの大麦

第269条 ロバの賃貸

前条でロバを賃貸したら賃料大麦10シラ

第270条 子羊の賃貸

前2ケ条で子羊の賃貸は賃料大麦1シラ

第271条 運搬人の賃貸

荷車の牛やそれを運ぶ者を賃貸借したらその賃貸借料は1日180シラの大麦

第272条 荷車の賃借料

自分で動かす荷車を賃借したら40シラの大麦を支払う

第273条 日雇い労働者の賃銀

日雇い労働者の賃金は季節により異り、5月までは6シェの銀、6月からは5シェの銀

第274条 各職人の給料

〔楔形原文が各部分欠損しているが〕各職人の給料はだいたい1日4シェ〜5シェの銀

第275条 〔原文欠落〕

前条と同じく但しかなり安い1日3シェの職業が記されていたと思われる

第276条 河川の上下船賃借

河川を上下する船を賃借する時は1日につき2.5シェの銀貨がその賃借料

第277条 60グル船の賃借

60グルの容積をもつ船を賃借する時は1日につき1/6シェケルの銀貨がその賃借料

第 XXIII 章 奴隸に関する法規範（第278条〜第282条）

第278条 病気の奴隸購入

奴隸を購入して1ヶ月以内にペヌヌ病が発病したら売った者に戻し支払った銀を取りかえせる

第279条 奴隸の所有権

奴隸を購入したがその所有権を戻すよう要請されたら売り主はそれを認める必要あり

第280条 外国での奴隸購入

外国で購入した奴隸をそのもとの主人がバビロニア人だと確認したら解放される

第281条 奴隸の地位確認

前条の外国で購入した奴隸が他国の者であると判明したら神前で支払った金額を告げ、奴隸を取り戻すことができる

第282条 奴隸の身分否定

奴隸がその主人に向って「貴方は自分の主人ではない」と言ったり

したらその身分を確認した上で耳を切り落とす

ハンムラビ法典後文

あとがき

ハンムラビ法典は、全部でその条文が282ヶ条より出来ている、ということがほぼ定説になっているが、それはフランスの考古学者を中心とする発掘隊が1901年から1902年にかけて、当時すでにイランの領土となっていた古代エラム国家の旧都スーサで発掘した石柱を、早速考古学者シャイユ（シュイユあるいはシェイル、シャイルと呼ぶことがある V. Scheil）氏が、碑文を拓本として282項目（パラグラフ）に直ちに分類し、それを解読した考古学者のみならず古代言語学者、歴史学者、法律学者なども、そのままシャイユの分類した項目の箇条を条文として公表することが慣例となってきたからなのである。

しかしその理由は実際に、歴史学のうえで古代エラムの国王シュトゥルク・ナフンテ I 世が、中近東のメソポタミア地方に向って紀元前12世紀頃に遠征し、その頃未だ建っていたバビロニアの神殿からこのハンムラビ王の法典石柱を戦勝記念として持ち帰り、その石柱の下部を削り取って、自分の戦勝記念文をここに書き込もうとしたからこそ、そこの楔形文字が削り取られているのだ、と発掘隊員達が判断したからなのである。

この石柱下部の削り取られた箇所を、最初に楔形文字を解読してその楔形文字の拓本を公表したシャイユ（シュイユ V. Scheil）氏は、上から楔形文字の縦書きの（区切りの）欄（段目すなわちコラムが16コラムあるその1段目の平均（約6 cm～8 cm）から判断して、削り取られた部分が約7区切り（約縦方向の幅で50cm 位）の縦書き段落であったと判断し、そこには約34ヶ条の文が書かれていた、と推測したのであった。

そして全く削り取られていない裏側の楔形文字条文の前面側から続いてくる裏側右上部分のアッカド語文章の断片部分を第100条とし、完全に解読できる第101条から各区切りの段目（原田氏と中田氏がラテン数詞の大文字で記入しているもの）が、表(前)側が平均して約70行楔形文字縦書き（本書ではそれを横書きとしている）なのに、裏側は少し両脇部分から始


めと終りが延びているので約20行くらいの幅となって282ヶ条分の条文にあたる記述がなされた後、後文が始まり、左下ですべての文章が完了している、とみたのである。

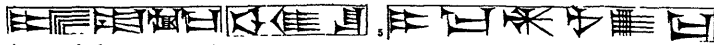
本書では、シャイユ（V. Scheil）氏が分類したそのままの条文を伝統的なやり方で各条文毎に解釈をしてゆく、という方針をとっているので、先ず裏側右上方の断片となっている条文をそのまま第100条としてそこから訳出し始め、その解釈をこの箇所から順次以下のごとくおこなってゆくことにしたい、と考えている。

ハンムラビ法典の全訳を試みられた原田慶吉氏と中田一郎氏は、ともにこの削り取られた部分を後から発見された粘土板の文書で補正するという形をとっているため、不完全ながら第66条から第99条までの明らかになったと思われる部分を粘土板をもとに翻訳してその著書の中に記述しているが、本書ではハンムラビ法典の「石柱原典」の翻訳と解釈だけに限定することにしたので、石柱原典に記されていないこの部分は省略して、断片の第100条から翻訳を開始することにした。

〔従って、ハンムラビ法典石柱裏側の上部右端から、左に向かって、上下に約6 cm～8 cm のところを縦に読み進めてゆく、一般の通説に従った条文の読解箇条をその翻訳方法として従うこととして、これを第100条とし、以下楔形原文を順を追って記載してゆくこととする〕

第100条（原文・逐語訳）

Col. XVII. 
 /--- si-ba-a-at kaspim ma-la il-qu₂-u₂ liqū 取る、受ける
 利息を 銀の と同程度の 受けた mala 同程度の、～だけの



i-sa-ad-dar ma ūmi šu i-ma-an-nu-u2 ma ūmi = u4-mi

記入し、 日数を その 計算して、



tamkari šu i-ip-pa-al

商人に その 返す

第100条（試訳）

（楔形文字の最初に記されたローマ数字のXVII（17）は、この石柱の表側上から縦書きの段（コラム）を数えて17段目という意味。裏側から数えれば当然第1段目（コラム欄）となる。）〔……欠落……〕その受けた銀（前貸しの金銭分）の利息を記入し、その日数を計算してから、その商人に返済をおこなわなければならない。

第100条の解釈

多分、ハンムラピ法典前面の下部左側から楔形文字のアッカド語文章が続いていると思われるが、この欠落した楔形文字が正確には何かかわからないので、利息分を記入して、その利息に対する日数を計算してから商人に返済することを記したことしか、事実上わかっていないのである。

他に見つかっている粘土板文書などからこの部分を再現すると「その者は、受け取ったものに応じて、金利を書きとめておかなければならない、それからその者の旅行した日数を計算して商人に支払う」と解釈することができるようであるが、実際にこの部分が再現されたわけではない。

モルガン De Morgan 氏を団長とするフランスの考古学者が、1901年から1902年にかけて、イランのスーサ（古エラム王国の旧都）において発見したハンムラピ法典の石柱（黒閃緑岩の三つに折れた石材と当時発表されていたが、後に玄武岩だとわかった）は、完全な形に復元されて、直ちに

翻訳作業に取り掛り、1902年ただちにフランス隊のシャイユ(V. Scheil)氏によって条文の分類が事実上なされ、前面の下部が削り取られているところを第65条の後半から第100条の前半部分までと判断したのである。

その削り取られた理由は、B.C.12世紀の中頃に古代エラムの国王シュトゥルク・ナフンテなる者が、シッパルを含むバビロニアの北部にあった諸都市を攻略した時に、ナラム・シンの戦勝記念碑などとともに現在はイラン・イスラーム共和国となっている領域に位置している古代エラムの首都スーサに持ち帰り、多分そこで自分の戦勝記念文か何かを書き入れようとしたのだ、と推測されている。

この第100条にあたるところは、石柱前面で下部分の削られたところが、約7段(欄)分くらいで各条文の長さを推測したところが約35ヶ条分の条文だとシャイユ(V. Scheil)氏が判断したために、後部右上方から始まるこの第100条という条文が推定されたのである。それでは他の粘土板テキストから推測して翻訳した原田慶吉氏の訳と更にペーベル A. Poebel 氏の粘土板テキストから復元して翻訳した中田一郎氏の訳文をここでみてみよう。原田慶吉氏の訳文は「もし赴きたる所にて、利得を発見したるときは、取りたる銀全額の利息を記入し、かつその日数を計算して、その商人に弁済す。」となっており、それに対して中田一郎氏の訳文は「もし商人が行商人に〔売買の〕ために銀を与え、(商用)旅行に派遣したなら、行商人は(商用)旅行において[……しなければならない。]もし彼が行き先で〔利益を〕上げたなら、彼が受け取った銀に見合う利息を、その日数を数えて彼の商人に(与える)責任を負う。」という欠落部分をカギ括弧でくくった訳文となっている。

上に示した原田氏と中田氏の翻訳は、そもそも石柱の完全な翻訳ではなく、他に見つかった粘土板と石柱の後半部とを合成して翻訳したものであることを先ずここにお断りしておかなければならない。従ってアッカド語

の文章と字句の解釈は全くおこなわないことにする。中田氏は、この欠落した部分から第100条に続くところを「商業旅行への投資」がテーマになっていると推定し、その「註解」の項で、この第100条から第107条の条文が、現代語で「コマーシャル・ローン」を述べたところとして解釈している。それでは中田氏の「註解」のほうをみてみよう。「……§§100-107は商人 (*tamkārum* と行商人 (*šamallām*) の責任その他にかかわる。商人 (*tamkārum*) は、ハンムラビ「法典」ではむしろ商業資本家とでも呼べる役割を果たしており、実際に遠隔地に赴き営業を行う行商人 (*šamallām*) に投資したり商品を提供する立場にあった。⁵⁹⁾ハンムラビの時代までの約1世紀間は、これらの私営の商人達が活発に遠隔地交易に携わった時代であった。§100は商人が行商人に資本金を融資した場合で、行商人が利益を上げられなかった場合でも、商人は100%の利息が保障されていたことがわかるが (§101)、商業旅行の途中敵に遭遇、持ち物を失った場合は、融資を受けた資本金の返済が免除された (§103)。他に、*tadmīqtum* ローンもあった。これは銀あるいは商品の前貸とも考えられる (テキストの注参照) (§102)。§104は売り掛けの形で、行商人に商品を提供した場合。おそらく§104の場合にも§102と§103が適用されたものと思われる。§§105-106は、行商人の責任を、また§107は商人の責任を規定している。§106の賠償義務と§107のそれは大きく違うが、この違いは、商人の不正により厳しい賠償義務を科すという考え方によるものか、あるいはドライバー-マイルズの言うように、⁶⁰⁾ (融資を受けたことを) 否定する罪より、根拠なく (返済を) 要求する罪の方が重いという考えによるものか、あるいは別の考え方によるものか、確かなことはわからない。」この中田氏の註解はハンムラビ法典第100条から続く第107条までに規定された当時のメソポタミア全域でおこなわれていた一般的な「商業旅行」の何たるかをここで註解したものであるが、それには以下の学者の諸説を参考にしたことが

脚註の形で入れられている。


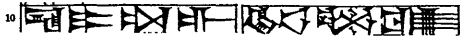


58) G.R. Driver-J.C. Miles, *BLI*, pp. 179-80.

59) いわゆる Great Šamaš Hymn の65-70行 (W.G Lambert, *Babylonian Wisdom Literature*, Oxford, 1967, pp. 128-138) と138行以下を参照。商人と行商人については、W.W. Hallo, “A Merchantile Agreement from the Reign of Gungunum of Larsa”, *Landsberger, Festschrift*, AS16, Chicago, 1965, p. 199, n. 5a; W.F. Leemans, *Merchant*, pp. 25-35; G.R. Driver-J. C. Miles, *BLI*, pp. 198-202; K.R. Veenhof, “Assyrian Commercial Activities in Old Babylonian Sippar” in *Marchands, diplomates et empereurs* (Festschrift P. Garelli) ed. by D. Charpin and F. Joannès, Paris, 1991, p. 300などを参照。

60) G.R. Driver-J. C. Miles. *BL I*, p. 197.

ただし、これら西欧のメソポタミアに関連する学者が、正鵠を得た内容を論述しているか否かは、今日においてもなお疑問を残すところである。

第101条 (原文・逐語訳)

	
šum-ma a-sar il-li-ku ne-me-lam	alāku 行く
もし 場所で 行った 成功を	注意 i-li-ik < ilku 仕事
	< liqū 取る
la i-ta-mar kaspam il-qu-u ₂	amāru 見る、調べる
ないなら 発見し 銀を 受けた (借りた)	
	
uš-ta-ša-na ma samallum a-na tamkarim	šanū 二重にする
二倍にして、 販売人は に 商人	šamallū 取扱店、貿易商
	< šakan-la ₂
i-na-ad-din	
払う	

第101条 (試訳)

(多分、第100条以前から続く楔形文字の文章に連なる内容で) (その契

約あるいは事業を)出張した場所において、借用したる銀(金銭)を発見しない(その利潤があがらない)なら、受託者(行商人)^{シャマルルム}=(その雇用されたる者)は、その商人に対して二倍額の金額を(多分その取引に関して)支払わなければならない。

第101条の解釈

第100条以前の楔形文字が欠落しているので、正確な全部の内容はわからないが、商取引においてそれが成約した場所(多分、出張した先)で、借用した銀(金銭)が見当らなかった、つまり、その取引引きで利益が出なかったとしたならば、販売人(受託者、商人と取引のある者あるいは商人の雇用者)はその商人(委託者)に対して二倍の額面を支払わなければならない、とする規定である、と思われる。

なお、この原文と逐語訳にある「販売人」という訳語の語源で、シャマルルムša-mal-lum という単語に関して言えば、これは「その商売の取扱い代理人」、あるいは「その商人の目的をかなえてやるため遠隔地に行き貿易する人」という意味がともに含まれており、その商人^{タムカルム}から依頼を受けて、その商人の扱う商品を販売するとともに、貿易するために旅行などをしてその商人の商品を遠隔地に届けるとともに他の商品をその商人に代って買いつけてくる役目も有していたのではないかと思われるが、その詳細はなお不明である。





またアッカド語の語源から考慮すると「財布をもち運ぶ人」という意味から派生したようであり、その業務から現代の法律用語では「受託者」と訳することもかなり可能であるだろう。

そういうところから、この受託者はその委託者たる商人から依頼された土地に赴いて仕事をし、それにかかったあらゆる経費を差し引くことでその利益だけを商人に引き渡す役目を負っていたと思われる。そこでこの第

101条の訳としては「もしシャマルルムが、自分の派遣されたところで全く利益をえられなかったような場合には、自分の受け取った（その委託した商人の出資金）銀（貨）を二倍にして、その商人に返さなければならない」とも解釈できるのである。この条文に関して原田慶吉氏の訳は「もし赴きたる所にて、利益を発見せざりしときは、取りたる銀を二倍にして、営業補助者は商人に与う。」となっており、それに対して中田一郎氏の訳文は「もし行った先で彼（その行商人）が利益を上げられなかったら、その行商人は借り受けた銀を倍にして彼の商人に与えなければならない。」というようになり現代風の翻訳になっている。

このアッカド語の文章も翻訳するのにかなり厄介であるが、前半が欠落している前の第100条との関係から、だいたい以上のような翻訳と解釈が可能になると思われるのである。

第102条（原文・逐語訳）

15	
	šum-ma tamkarum a-na šamallim
	もし 商人が に 販売人
	
	kaspam a-na ta-ad-mi-iq-tim
	銀を に 好意的
	
	it-ta-di-in ma a-sar il-li-ku
	渡した場合は、 場所で 行った
20	
	bi-ti-iq-tam i-ta-mar ga-ga-ad kaspim gagad <qaqqadu <sag(du)
	損害を 見つけたならば 出資金を 銀の



a-na tamkarim u2-ta-ar

に 商人 返す

第102条（試訳）

ある商人が、受託者（販売人、その雇用者）に善意で（前貸しの）銀（金銭）を渡したる場合において、その現場（出張先）で損害を見つけたならば、（委託者たるその商人は）自分の出資金として、出した銀（金銭）を返却することを求めることができることとする。

第102条の解釈

商人階級の人が、自分の雇用したる者に（何かある目的があつて）雇用条件以外の余分な金銭を与えようとした場合において、その時に雇用した者が（旅先で）不正なことをおこなったかあるいはその商人の損になるようなことをしていたことが判明した時、その商人は自分の払った銀（金銭）をいずれは撤回することができる、ということをあらかじめ規定したものだと思われる。

一般的な「贈与の撤回」とも受け取られるが、商人がその商行為としておこなったもので原文の「好意的に a-na ta-ad-mi-iq-tim（タドミクトゥム、前貸し、前渡し金）」という言葉の解釈も、自分が雇った人間が不正なことをしていないという前提で給与を支払ったぐらいの意味で解釈しておいたほうが、むしろ「前貸し」とはっきり限定するよりも、よいのかも知れない。

直前の第101条で、受け取った銀を二倍にして返すことからわかるように、当時の古代バビロニアの社会で遠隔地に出かけて行って商売をし、その結果がうまくいって戻ってくると、それは当然何倍もの利益を生んだ

ことだろう。それゆえにその商人がこのシャマルルム（受託者、販売人）に金銭を渡す時（もちろん、当時まだ金貨はないから銀の薄片）その者に関する不正をみつけたら、その出資金の返却を求めることができたのである、と一般的に解すべきである。この条文に関する原田慶吉氏の訳は「もし商人が営業補助者に、銀を好意貸のために与えたるに、赴きたる所にて、損害を見出し（蒙り）たるときは、銀の元本を〔無利息にて〕商人に返す。」となっている。同じ条文を中田一郎氏の訳としては「もし商人が行商人に前貸（タドミクトウム）資金⁸³⁾として銀を与え、彼（行商人）が行った先で損失をこうむったなら、彼（行商人）は元金（のみ）を商人に返さなければならない。」という文章となっている。





中田氏は、この第102条楔形文字の第2行目末にある ta-ad-mi-iq-tim を「前貸し」と訳しその後に括弧つきで片仮名タドミクトウムと入れ、この下の脚註で以下の如き説明を加えている。中田氏は、なおこのアッカド語法律用語と思われるものを先行する第100条でも「tadmīqtum ローン」と原語による片仮名書きで使用しているが、このようなローンに似た「好意的な前貸し」という慣習が本当に古代バビロニアにあったのかどうかは不明である。なおこの第102条につけられた脚註で

83) *tadmīqum* についてはいろいろな解釈があるが、ここでは営利目的のための銀あるいは商品を前貸しすることで、決まった利息はないとする K.R. Veenhof の意見にしたがっておく（“Assyrian Commercial Activities in Old Babylonian Sippar – Some New Evidence” in *Marchands, diplomates et empereurs. Études sur la civilisation mésopotamienne offertes à Paul Garelli*, ed. by D. Charpin et F. Joannès, Paris, 1991, p. 300 and n. 28）。

このタドミクトウムなどという商慣習の派生も、おそらくメソポタミアの商業活動で、バビロニア商人が考え出した商業システムあるいは慣習なのであろうが、他の言語には正確に翻訳できないようなその当時に出来あがった慣習的法律用語なのかもしれない。ここでは中田氏同様ヴェエンホ

フ氏の解釈をそのまま継承させていただくことにしたいと思う。

第103条（原文・逐語訳）

	sum-ma har-ra-nam i-na a-la-ki su
もし 途中 での 旅 彼の	
	na-ak-ru-um mi-im-ma ša na-su-u2 na-su 招う、運ぶ
敵（盗賊）が 何であれ 所の 運ぶ	
	uš-ta-ad-di su samallūm ni-iš i-lim nadū 置く、投げる
投げさせたなら 彼に 販売人は 手を挙げ 神に 注意 it-ta-din < nadānu与える	
	u-te-id-di< adū 認める
i-za-kar ma u2-ta-aš-šar	mašāru 自由に行く
宣誓する事によって 釈放される	zakāru 名を呼ぶ、宣誓する

第103条（試訳）

その（第102条等に出てくる）商人（委託者）に雇われた販売人（^{シャマルルム}受託者）が、旅行（貿易をするための旅）の途中において盗賊に襲われ、その運搬しているものを奪われるような事態に陥った時、受託者（行商人として商人に雇われた貿易従事者）は、「両手をあげて神に宣誓する」ことによって、その身柄は釈放されなければならない。

第103条の解釈

この原文にある「販売人」（^{シャマルルム}受託者）は、明らかに商人階層の者（委託者）から依頼を受けて遠隔地に商品などを届ける役目を担った者（すなわち営業補助者のこと）であって、その者がその旅行の途中に、盗賊などに

襲撃されたりしたような場合において、その現場で「手をあげ神に宣誓したことで盗賊がその者を許して釈放してくれた」とはどうしても思えない。

つまりこの条文は、その旅行の途中盗賊に襲われて商品等を盗まれた者が、(その商人のもとに帰還した後で)「神の前で決った宣誓をすること」によって、その商品が盗難にあったことを神明行為によって立証し、「自分が着服したのではないかと疑われる嫌疑を晴らすことができる」一連の法定手続きを定めたもの、と考えることができる。

受託者(販売人または行商人)は、その商人(委託者)から依頼を受けて遠隔地に赴いたので、その旅行の途中において強盗等に襲われて全ての商品やら現金(銀の薄片)等を奪われることが多かったに相違ない。そのような場合、常に全額の損害賠償をしていたらきりがないので、神の前で決った宣誓をすることでその責任を免かれた、と思われる。原田慶吉氏は、この第103条の訳文として「もし旅に赴く途中、敵が如何なるものたりとも荷えるものを彼をして投げ捨てしめたるときは、営業補者は神のもとに誓いて、放免せらる。」という文章を記しておられるが、同様に中田一郎氏の訳も「もし、(商用)旅行の途中、敵が彼に(行商人)の持っていた物を彼に放棄させたなら、行商人は(そのことが真実であることを)神に誓ったのち釈放される。」となっている。楔形文字本文中のšamallum シャマルムと呼ばれるアッカド語は、原田氏がこの第103条で「営業補者」としているが、第101条から始まる各条で「営業補助者」としているから明らかにこの条文では「助」という字を脱落させた印刷ミスであろう。同じアッカド語を中田一郎氏は「行商人」と邦訳しておられるが、自分一人ですべての商業活動をするわけでもなく、第101条3行目末にあるように商人 tamkarim から「前借りした銀」をもって遠隔地に行き、どうやら商人から指示された通りの取り引きをしてその商人のもとに帰って

くる、というのがそのシャマルルムの主たる役割であったようだ。

そしてこの第103条にあるように、その途中で盗難にあったような場合には、神明裁判あるいは神の前で一定の形式に則って宣誓することによって、結局その最終的な責任を免れることができたようである。

こういう関係を現代の法律事務の観点から考察してみると、商人タムカリム tamkarim が「委託者」、このシャマルルム šamallum は「受託者」として寄託契約関係のもとにあるのではないか、と思われる。

現代の日本民法では、その第657条に「寄託は当事者の一方が相手方のために保管を為すことを約して或物を受取るに因りてその効力を生ず」とあるが、はたしてシャマルルムにはこれらの条文に記載されている以上に、どのような具体的な仕事がかかされていたのか、実際のところ良くわからない。いずれにせよ中田氏の「行商人」では、かなり自由に営業活動ができるという印象を受けるので次の第104条のように「いくつかの商品を販売のために与える手続き」もアウィルム階層どうしでおこなわれていたのかどうか、身分関係の詳細はこの条文だけでは不明なのである。

第104条（原文・逐語訳）

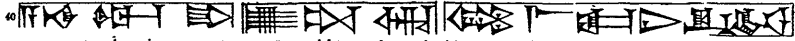
šum-ma tamkarum	a-na	šamallim
もし	商人が	に 販売人
šeam šipātam	šamnam u ₃ mi-im-ma	bi-sa-am
穀物、羊毛、油	や	何であれ 財産を
a-na	pa-sa-ri-im	id-di-in
で	取引	渡した時は



sa¹mallū²m kaspa³m i-sa⁴-ad⁵-dar⁶ ma

sa⁷taru 書く、サインする

販売人は 銀を 記名して、



a-na¹ tamka²rim u³2-tar⁴ sa⁵mallū⁶m ka⁷-ni⁸-ik⁹ kaspi¹⁰m

に 商人 返し、 販売人は 署名領収書を 銀の



sa¹ a-na² tamka³rim i-na⁴-ad⁵-di⁶-nu⁷ i-li⁸-qi⁹2

所の に 商人 払った 受け取る

第104条 (試訳)

ある商人（^{タルカルム}委託者）が、^{シャマルルム}受託者（販売人、この場合、明らかに遠隔地に行き貿易に従事する商人の雇用者）に、穀物、羊毛、油などの貿易商品の何であれ財物をその取引で引き渡した時は、その受託者（雇用された者）は（その取引高を）銀（金銭高において）を記名して商人に渡し、（その旅行から帰還した後で）販売人は商人のところで、（商品の受け渡しをした）銀を支払ったことで、（自分の）銀の捺印粘土板契約文書（領収書）を受け取ることができる。

第104条の解釈

この条文を解釈するには。当時の古代バビロニア社会の^{タルカルム}商人（委託者）と^{シャマルルム}（受託者、出張営業補助者）の商取引契約を概括的に理解しておかなければならないだろう。



シャマルルムは、商人から多くの商品を販売することを依頼され、それを遠隔地で売り捌くことに成功した場合には、その商取引契約で受け取っていた銀を商人に返却して取引きを完了する必要がある、その時に商人はシャマルルムにその取引に関する署名領収書（捺印した粘土板文書）を発

行しなくてはならない条件が課せられていた。この第104条に関する原田慶吉氏の訳が「もし商人が営業補助者に、穀物、羊毛、油または何等かの動産を、取引のために与えるときは、営業補助者は銀を記入して、商人に返し、営業補助者は商人に与うる銀の捺印受取証書を取る。」となっているのに対し、中田一郎氏の訳は「もし商人が行商人に大麦、羊毛、油あるいはその他の品物を販売のために与えたなら、その行商人は商人に定期的に銀を返さなければならない。行商人は、彼が商人に与える銀の捺印証書（領収書）を受け取らなければならない。」というように「定期的に」という単語を入れておられるが、それが楔形文字のどこをどう訳したのかもわからない。

この第104条の5行目にある ka-ni-ik とは、原田氏の訳で「捺印受領証書」、中田氏の訳では「捺印証書（領収書）」となるが、おそらく粘土板でその契約内容を楔形文字によって記し、その前後をレンズ状スタンプ印章か円筒印章で押したものでまた粘土板に封をして、その上に重ねて印章をつけたもの、と思われる。

従って、一応「署名領収書」という法的な名称は使用してあるものの、自分の署名などはおそくなされなかったであろうと思われる。

第105条（原文・逐語訳）


 sum-ma samallūm i-te-gi ma ka-ni-ik kaspim
 もし 販売人が 不注意で 署名領収書を 銀の egū 不注意である

 ša a-na tamkarim id-di-nu la il-te-qi₂
 所の に 商人 渡した なかったなら 受け取ら



kaspi la ka-ni-ki-im a-na ni-ik-ka-az-zi-im

銀は ない 領収書の には 計算



u2-ul is-sa-ak-ka-an

決して 加えられない

šakānu 固定する、指名する

第105条（試訳）

シャマルルム

受託者（販売人）が、不注意によって商人のところで銀（金銭）の捺印粘土板契約文書（領収書）を渡さなかったならば、銀は受け取れず、（その分の銀は）捺印粘土板文書（領収書）のない分の計算には、決して加えられることができないものとする。

第105条の解釈

領収書という訳語を用いたが、ka-ni-ik とはもちろん直前の第104条にも出てきた捺印をした粘土板の契約文書（領収書）のことで、商人とそこから委託されてその商品の運搬を行うシャマルルムたる受託者šamallūm（営業補助の販売人）との間では、それを受け取った、という証拠の書類（寄託証明文書）を残しておく必要があった、と思われる。



シャマルルム

受託者が、その原文逐語訳で言う署名領収書（捺印した粘土板文書）を受け取ることを忘れた時は、署名領収書が発行されていない銀（出資金）が精算手続きをまだ済ませていないことになる。この条文を原田慶吉氏の訳としては「もし営業補助者が怠慢にして、商人に与えたる銀の捺印受取証書を取らざりしときは、捺印受取証書なき銀は、計算に決して置かるることなし。」としており、また一方の中田一郎氏は訳文として「もし行商人が怠慢で、彼が商人に与えた銀の捺印証書（領収書）を受け取らなかったら、捺印証書を伴わない銀は勘定に入れてはならない。」と現代文で記

しておられる。

この第105条の中に位置するアッカド語の法律文書で、ka-ni-ik (第1行目)と ka-ni-ik-in (第3行目) という用語は、この条文のすぐ後に記された ni-ik-ka-az-zi-im 「計算」という名詞と語源的に共通する ni-ik-kaz-zu または NI₃-KA 「請求書」と同じく「計算する」という動詞から派生した単語で、商業取引の当事者間でその計算した結果を確認する、という動機から使われるようになったものと思われる。アッカド語で「計る」という動詞としては ma-da-du のほうが多く用いられているが、この ka-ni-ik 「捺印粘土板の契約文書」という用語はこの時代すでに所定の法律的な文書として、粘土板にどのような形と様式で記入され、その粘土板文書の中にレンズ状スタンプ印章もしくは円筒印章など今日の日本人が良く用いる印鑑みたいな印章を自分の存在と契約内容を立証するものとして使用し、その上で粘土板による封印をもまれており、そうした印章の一部を使って長く保存できるように用いていた、と思われる。

第106条 (原文・逐語訳)



 sum-ma samallūm kaspam it-ti tamkarim
 もし 販売人が 銀(資金)を より 商人

 il-qi₂-ma tamkari šu it-ta-ki-ir nakāru 異なる、敵意ある
 得ており 商人と その 仲違いした場合

 tamkarum šu-u₂ i-na ma-har i-lim
 商人は その で 前 神


u₃ ši-bi i-na kaspim li-qi₂-im

と証人の 関し 銀の 受領に


Samallām u₂-ka-an ma Samallūm kaspam kānu 確認する、固める

販売人に 確認して、（その後）販売人は 銀を


ma-la il-qu₂-u₂ a-du 3 šu a-na tamkarim

同程度の 借りたと 三倍量まで へ 商人


i-na-ad-di-in

払う

第106条（試訳）

（すでに）^{シャマルルム}受託者（営業補助の販売人）が、商人より銀（出資金）を受け取っており（その後に）商人と仲違いしたる場合に、その商人（^{タムカルム}委託者）は神（神殿の神の像）の前で、銀の受領に関する事項は商人（委託者）をたてて^{シャマルルム}受託者（その営業補助の販売人）に確認する必要がある。（その後）受託者（その営業補助の販売人）は、商人（委託者）から借り受けたと同額の三倍にあたる銀の量をその商人に支払うこと、が必要である。

第106条の解釈

この条文は近代民法でいうところの解約手附の原則（ローマ法の arrha poenitentialis から発展したもの）を最も古くから規定していたもの、といえるだろう。この時代の商人が手渡した銀（資金）をローマ法でいう arrhae（複数の手附）とみなせるかどうかは問題があるが、近代民法でも「締結せられるべき、もしくは締結せられた契約につき、与えられる金

銭その他の有価物」を広く手附とみなしているから、その差はあまり大きくないと言えるだろう。

日本民法では、第557条第1項によって、「賠償を償還する」ことで契約の解除をなすことができるが、古代バビロニア時代の商人とその販売人（行商人あるいは営業補助者）という特殊な階級の人々の間で、解約手附が3倍に定められていたのは、その当時の経済情況にあつては、かなり常識的な解約手附額ではなかっただろうか。

この条文の解釈は、シャマルルムが商人から出資金を受け取ったことは否認したものの、商人（^{タムカルム}委託者）のほうの側が神の前で宣誓をしたり証人を立ててそれを証明できたような時には、商人から受け取ったとされる出資金の三倍を返却しなくてはならない、と定めたものである。

古代の解約のほうが、現代日本の契約の解除よりも「神明手続き」等があるだけ重く、その損害賠償が1.5倍も高く評価されていたと言える。この第106条に関する原田慶吉氏の訳は「もし営業補助者が銀を商人より取り、彼の商人に争いたるときは、その商人は、神と証人の前において、銀の受領（借用）に付いて営業補助者に確証し、しかる後営業補助者は、取りたる銀総額をその三倍方商人に与う。」というものであった。それに対して最近翻訳した中田一郎氏の訳文は「もし行商人が商人から銀を受け取ったのち、彼の商人に対してそのこと（銀を受け取ったこと）を否定したなら、その商人は神と証人の前で行商人が銀を受け取ったことを立証しなければならない。そして、行商人は受け取ったかぎりの銀を3倍にして商人に与えなければならない。」となっている。


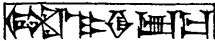

この条文の解釈としては、楔形文字原文の終りから二行目の冒頭にある ma-la をアッカド語の文章の中でどこに位置づけて解釈するか、ということにあるだろう。それが受け取った銀の「総額」（原田氏）か受け「取ったかぎりの銀」（中田氏）をもとの価とするか、アッカド語の本来の意味

は「同程度の」であるから、かなり限定して解釈する必要がある。中田氏のように「(銀を受け取ったこと)を否定した……」と解釈したら、その三倍を返却するという根拠そのものを失い、このような数値上の規定が定められなかったであろう。

現代日本の民法では、民法557条の第1項に「買主が売主到手附を交付したときは当事者の一方が契約の履行に著手するまでは、買主はその手附を抛棄し売主はその倍額を償還して契約の解除をなすことを得」とある。ハンムラビ法典の第106条は、売主と買主ではないが商人(委託者)と販売人(行商人、営業の補助者で受託者とも考えられる)との寄託契約の解除とも考えられ、この場合は解除権留保の対価として交付される手附と解釈でき、履行の着手があるまでなら、手附の交付者はこれを放棄し、受領者は手附の倍額を償還して、契約を解除できるとも解釈することが可能である。

古代バビロニアの社会では、この契約の解除が2倍でなく、3倍であるから契約に関する価値が現代の日本よりもかなり重要に扱われていたものと思われる。

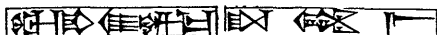
第107条 (原文・逐語訳)

						任す、借りる
sum-ma	tamkarum	samallām	i-qi ₂ -ip	ma	qāpu	
もし	商人が	販売人に	任せていたが、			
						
samallūm	mi-im-ma	sa	tamkarum	id-di-nu	šum	
販売人が	何かを	所の	商人が	渡した	彼に	

 Col. XVIII

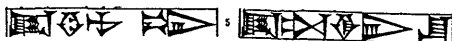
a-na tamkari šu / ut-te-ir

に 商人 その 返した（に拘わらず）



tamkarum mi-im-ma ša samallūm

商人は 何かで 所の 販売人が



id-di-nu šum it-ta-ki-ir šu

与えた 彼に 仲違いするなら 彼と



samallūm šu-u₂ i-na ma-har i-lim

販売人は その で 前 神



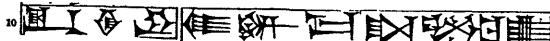
u₃ šī-bī tamkaram u₂-ka-an ma

と証人の 商人に 確認を取り、（その後）



tamukarum aš-šum samallī šu

商人は 理由で 販売人への 彼の



ik-ki-ru mi-im-ma ša il-qu₂-u₂

仲違いの 何かの 所の 受け取った



a-du 6 šu a-na samallim i-na-ad-di-in

6 倍までを に 販売人 支払う

第107条（試訳）

（今までは）、商人（^{タムカルム}委託者）が受託者（^{シャマルルム}販売人）にそのまま委任しておいたもので、受託者（販売人）が商人の渡していたその物（商品）を商人に返したのにも関わらず、商人がその件で（販売人と）仲違いするならば、その商人と受託者（販売人）は証人を伴って神の前で確認をおこない、（その後になって）商人は受託者（販売人）と仲違いの理由となった受け取った金額の6倍までを販売人に支払わなければならない。

第107条の解釈

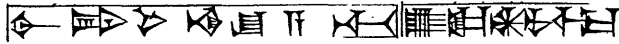
第106条は主として受託者の側に問題がある解約手附と解釈できるが、本条は逆に商人^{タムカルム}の側（委託者）が自分の過失で買け取っていたにも関わらず何らかの事由で忘れていたか書類上の間違いで受託者（販売人）の側に責任を転化したい場合、証人をたてて受託者（販売人）が商人の側に過失があることを立証できれば、商人は第106条の倍にあたる金額まで受託者^{シャマルルム}（販売人）の側に支払わなければならない、という規定である。

委託者である商人が「シャマルルムが自分の出資した資金を返してくれない」と主張した場合、それに反証することが難しく、それ故にこのような高額な損害賠償が規定された、と思われる。この第107条を原田慶吉氏は以下の如く訳しておられる「もし商人が営業補助者に委託し、しかして営業補助者は商人が彼に与えたるものを、彼の商人に返したるに、商人は営業補助者が彼に与えたるものを彼に争いたるときは、その営業補助者は、神と証人の前において、商人に確証し、しかる後、商人はその営業補助者に争いたるのゆえをもって、取りたるものをその六倍方営業補助者に与う。」が原田氏の訳文で、それに対して中田一郎氏のほうは「もし商人が行商人に銀を託し、そのあと行商人が（彼の）商人が与えた物は何であれ彼の商人に返したが、（その）商人が、行商人が返した物を（受け取ったことを）彼（行商人）に対して否定したなら、その行商人は神と証人の前で⁸⁴⁾（その）商人（の虚偽）を立証しなければならない。商人は彼の行商人を否定したゆえに、彼（商人）が受け取った物を6倍にして行商人に与えなければならない。」となっている。ところでこの中田氏の翻訳は、法律的にみた場合この前にある第106条とこの第107条の差が倍になることの合理的な説明がつかず、おそらく前の第106条が一般的な契約解除で、こちらのほう（第107条）が、特約があるものと解釈したほうが文章の筋が通っているとみるべきだろう。

日本の民法の場合、同じ第557条の2項で、特約がない限り解除に基づく損害賠償の問題を生じないが、商人（委託者）という地位が上の者が否定したことを、販売人（営業の補助者、受託者）というもともと財産を有さないはずの者が自分の身体をかけて神と証人の前（この解釈は「神あるいは証人の前で」という訳も可能という脚註が中田氏の著書にある）で宣誓するという困難な立証手続きをも考慮に入れて第106条のさらに2倍の損害賠償額が示され、商人（委託者）の横暴な経済活動を法典で規制しているのではないかと、思う次第である。なおこの第107条の上から第3行目途中で石柱裏面の一番上の行は（上の部分は幅が狭いから）右端から数えて72行目が左端で終り、次の第3行目の末にある動詞 *ut-te-ir*（……に返したい……）のところから楔形文字の段落として上から第2段目の右端に移って、縦に6～7 cm ずつ左へと読み進めてゆくことになる。

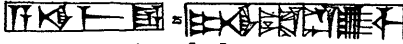
第108条（原文・逐語訳）

15		
	<i>šum-ma mi²ges-tin-na a-na šim šikarim</i>	<i>mi²ges-tin-na > sābū</i>
もし	居酒屋の女将が	として 代価 酒の
		<i>ges-tin を kas-tinと書く</i>
	<i>šeam la im-ta-har i-na abnim ra-bi-tim</i>	<i>šikar < kas</i>
		<i>abnu < za₂</i>
穀物を	ず 受け取ら	で 石（分銅）大きな
	<i>kaspam im-ta-har u₃ ki-lam šikarim</i>	<i>šim < šam₂</i>
		<i>ki-lam > mahīru 銀殿</i>
銀を	受け取り、又は	分量を 酒の
	<i>a-na ki-lam šeim um-ta-di</i>	<i>māṭu 減らす</i>
より 分量	穀物の	減らしたならば



mi² geš-tin-na šu-a-ti u₂-ka-an-nu-ši ma

居酒屋の女将に その 確認して、（その後）



a-na me-e i-na-[ad]-du-u₂-ši

に 水中 （彼女を）投げ込む

nadū 投げる

注 意 i-na-ad-di-nu-ši<nadānu

第108条（試訳）

居酒屋の女将が、酒の代金に穀物を受け取らず、大きな分銅（石）で銀（代価としての金銭）を受け取り、穀物の代価よりも高く酒の代価を受け取ったような場合にあって、その居酒屋の女将は河川（の神）に投げ込まれることになる。

第108条の解釈

河川の神に投げ込まれて処罰されるという処刑方法において、漢字の「法」の字源がどうしてもこの処罰と深く関係することをここで改めて指摘しておかなければならない。

拙著『法の源流』（芦書房1995年刊 p. 39～p. 52）でも解説しておいたが、もともとシュメール人そのものがどこから由来し、その人々が象形文字（絵文字）から楔形文字を創作したその発達過程を考えると、どうしても漢字の字源と発想に深く関連していると考えざるを得ない。中国では、確かに少数の異説ではあるが、裁判に負けて汚れた「鷹」を皮袋に入れ、水に投じる状況から法が「おきて」の意味を表わすとされるが、シュメールからセム系のアッカド文化の中でもこのように罪人を河川の神に投じて裁きをおこなうことが継承されたことは、このハンムラピ法典第2条とともに、重大な意義をもつものと言わざるを得ない。

この酒は多分ビールであると言われているが、それが確認されたわけで

はない。その代金支払いに穀物（もしくは果実）を受け取らず大きな分銅で量って銀（貨）を受け取りさらに（又は）穀物（果実？）の規定量に比してその穀物から醸造される分量を少なくしようとしたような場合は、この居酒屋の女将はその証拠をつきつけられてから水の中に投げ込まれる、というのがこの第108条の規定なのである。

第2条のように河神の神明裁判として投げ込まれたわけではないから、手足を縛って川に投げ込んだかどうかははっきりわからない。なぜ居酒屋の女将がその代金を銀で受け取りたかったかについては、穀物よりも銀のほうが腐ったりせず通貨（未だこの当時に貨幣は出来ていないが）として持ち運びが便利だったからであろう。勿論、すでに古代バビロニアでは銀の細かい重量によってすでに通貨としての機能は十分にはたしていた、と思われる。

大きな分銅で量るという、その分銅とは、だいたい以下のようなものであったろう。〔大英博物館蔵、ハンムラビ法典の公布された時代から約千年後のライオン形の分銅、ニムルド北西宮殿B室から出土したシャルマネセルII世時代（B.C.726～722）に作られた計量具。〕

（小）1/5マナ



（中）1/3マナ



（大）王の5マナ



原田慶吉氏のこの第108条に関する邦訳は「もし居酒屋の女が、酒の代価に穀物を受け取らずして、大なる〔秤〕石にて銀を受け取り、または穀

物の分量に対する酒の分量を減少せしめたるときは、〔彼等その居酒屋の女に【彼の女に】確証して、水に彼の女を投ず。〕となっており、それに対して中田一郎氏のほうはこの酒をビールと特定して「もし居酒屋の女主人がビールの値として大麦を受け取らず、銀を大きな分銅で（計って）受け取り、その結果大麦の販売価格に対するビールの販売価格をつり上げたなら（直訳：〔一定額の銀で得られる〕大麦の量に対し〔一定額の銀で得られる〕ビールの量を少なくしたなら）、彼等はその居酒屋の女主人（の不法行為）を立証しなければならない。そして、彼女を水に投げ込まなければならない。」という訳文を記しておられる。

この第108条の楔形文字第1行目末にある「酒šikarim」がはたしてどのような酒であるかについて、原田慶吉氏が翻訳した時期（第二次世界大戦前のドイツ、その「はしがき」を書き終えた昭和24年、そして『楔形文字法の研究』を出版した昭和42年9月の段階まで）は、酒を特定せず、それを醸造するものだけを「穀物」と記していた。しかしその後の日本では、ホルスト・クレンゲル Horst Klengel 氏の著作 “Hammurapi von Babylon und seine Zeit” を『古代バビロニアの歴史－ハンムラピ王とその社会－』（山川出版社、1980年）として翻訳した江上波夫氏と五味亨氏がクレンゲル氏の原文通りビールと訳し、その後ハンス J. ベッカー Hans Jochen Boecker 氏の著書 “Recht und Gesetz im Alten Testamen und im Alten Orient” を『古代オリエントの法と社会』－旧約聖書とハンムラピ法典－（ヨルダン社1989年）と訳した鈴木桂秀氏も、ともにビールという訳をつけていた。たとえば鈴木氏の訳をみると「ある居酒屋の女主人がビールの代金に穀物を受け取らず、大きめの（秤）石で銀を受け取り、穀物による代金より高くビールの代金を受け取った場合、その居酒屋の女主人は河に投げ込まなければならない」（loc cit., p. 143）という訳文を書いておられる。この二人のみならずアッシリア学者ならびにアッカ


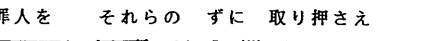
ド語学者の多くが当時メソポタミア地方でブドウが取れず、大麦でビールを醸造していた、と考えていたので、この酒は「ビール」ということに決まってしまったような観がある。中田一郎氏などは、その全ての条文訳で穀物šeimを大麦としてこの酒をビールと断定し翻訳しておられるようである。確かに現在のビールとは異ったホップの無い頃のビールも古代シュメール時代から醸造されており、シュメール語の ULUŠIN そしてこのシュメール語をそのままアッカド語に採用した ulušnu は、メソポタミアにおいても「ビール専門の職人」によって醸造されていたことは事実である。そしてシュメール語によって書かれた医学書の中に「薬草を碎いて塗る時にビールを用い、これを患部に湿布したりすること」が記されている。

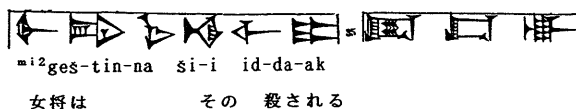
しかしこの第108条に出てくる「酒」は、アッカド語でšikarim と記された後、それがセム系の言語としてはヘブライ語のšekhār に発展したとも考えられ、これはアッカド語šikaru がそのまま伝わったと考えられるビールではない一般的な「酒」を意味し、それが後にギリシア語に転用されて σίκερα (síkera) 更にその単語がラテン語に入って sícera となり、フランス語の cidre (シードル、リンゴ酒) ともなったと考えられるので、この酒をビールと断定し、それを醸造する穀物をすべて大麦というのは将来また再考されるかも知れない。因みに旧約聖書により、ノアが洪水の後ブドウ酒を醸造したのがアルメニアであり、ヘロドトスの『歴史』第1巻194章でもディグリス・ユーフラテス両大河を下って、アルメニアからバビロニアまでブドウ酒が運ばれ、それを運んできた人々は、船体や藁をも売り払ってしまうが、ブドウ酒を入れてきた皮袋だけは口バの背に乗せてアルメニアへと帰ってゆく」と記述されているのである。このアルメニア高原では、インド・ヨーロッパ語族であるアルメニア人が定住する以前のウラルトゥ人そして更にそれ以前からブドウ酒を醸造しており、それ

らをバビロニアまで運んでいた、と推測できるからである。従ってこの「酒šikarim」は未だビールと断定しないほうがよい、と思われる。(拙著『アルメニア史』泰流社、1986年刊 p. 41参照のこと)

ところで、これらアッカド語学者あるいはアッシリア学者たちと正反対に、ワインの専門家を中心とする酒の研究家の多くは、「このšikarim がワインでšeam をブドウの果実である」と記述することが多い。その一例として古賀守氏著『ワインの世界史』(中公新書415)には、このハンムラピ王の法典で記されていた酒を躊躇なくブドウ酒として記している (loc. cit., p. 31~p. 32)。しかしながら、アッカド語のみならず他の言語学的考察においても、このšikarim をワインと断定する根拠はなく、いずれにしてもこれら専門家と称する人々の勝手な思い込みで、この酒の種類を特定して解釈しているようである。

第109条 (原文・逐語訳)

	šum-ma ^{m12} geš-tin-na ša-ar-ru-tum もし 居酒屋の女将が、犯罪人が
	řarrūti 反逆人、乱暴者
	i-na bitī ša it-tar-ka-zu ma に 家 その 集まっている時、
	rakāsu 集める、接触する
	řa-ar-ru-tim šu-nu-ti la iř-ša-ab-tam ma řabātu 取る、掴む
	犯罪人を それらの ずに 取り押さえ
	a-na ēkallim la ir-di-a-am řidū 塵り立てる、生ずる
	に 宮殿 ないなら 連れ行か



第109条（試訳）

犯罪人が、居酒屋の女将の経営する家屋に群れ集っていた時に、その女将がそれらの犯罪人を取り押さえず、（また）宮殿に引き立てていかなかった場合、その（居酒屋の）女将は死罪に処せられるものとする。

第109条の解釈

居酒屋の女将に対する治安維持義務を課したもので、四千年近く前の犯罪人も群れをなして居酒屋（しかも女給のいる）に集っていたものと思われる。そうした場所を管理する女主人の責任が、いかに治安を維持する上で重大なものであったかが、この第109条の条文によく現れている。

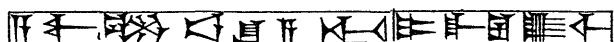
当然のことながら、居酒屋の内部で女将がそこに集っている犯罪人を素手で捕まえて宮殿に連行するような有効な手段があるわけではなく、捕まえるというのはその地域の治安担当の役人に知らせに行くことなどを意味していたものではないか、と思われる。この当時、犯罪人はその都市の役所ではなく国家の役所に連れていかれることになっていたから、宮殿とは国家の役所に行ってそこの治安担当の警察官あるいはそのような任務を帯びた人間に通報することで、「この犯罪人を捕えたこと」になったのではないかと思われる。この第109条に関する原田慶吉氏の訳は「もし居酒屋の女〔ありて〕犯罪人共が彼の女の家の中に集合したるに、それらの犯罪人どもを取り押さえずして、宮廷に連れ行かざりしときは、その居酒屋の女は殺さる。」としており、また同様にこの第109条についての翻訳は、どの翻訳者の訳文もそれほど差異がないが、先ず中田一郎氏の訳は「もし無法

者たちが居酒屋の女主人の家で謀議を行い、彼女がそれらの無法者たちを捕え王宮に連行しなかったなら、その居酒屋の女主人は殺されなければならない。」となっている。この第109条の条文1行目にあるša-ar-ru-tumが「犯罪人」であるのか単なる「無法者」なのかについて、古代法にこのような規定がある以上、それは当然なこととして犯罪者とみるべきであつて、中田氏は敢てこのハンムラピ法典を法律の条文とは見ようとしなからこのような訳語となったのではないかと思われる。このša-ar-ru-tumは単に「犯罪者」というだけでなく、古代インドのマヌ法典第九章271条にもあるように「盗賊」あるいは強盜等をも指すもの、と考えられる。

どこの古代社会でも、このように犯罪人の集まる場所に対する規制は、「治安」という点からも当然のこととして、少くとも実定法上の法規集の1条文として規定されてあるべきで、マヌ法典同様にそれよりも古いハンムラピ法典でも、そういう場所を提供したる者には「死刑」という刑罰が記されていた、と考えられるのである。

第110条（原文・逐語訳）

			
sum-ma lukur	nin-dingir	ša i-na ga ₂ -gi-a	ga ₂ -gi-a > gagū
もし	ナデイトウ、エントウが	所の	に 修道院
			
la wa-aš-ba-at	bīt geš-tin-na ip-te-te	asābu	留まる、住む
ない	留まら	居酒屋を	開き
			
u ₃ lu a-na šikarim	a-na bīt geš-tin-na i-te-ru-ub		
又は	のため 酒	に	居酒屋 入るならば

a-wi-il-tam su-a-ti i-qa-l-lu-u₂-si

人は その 焼かれる

erēbu 中に入る

qalū 焼く

第110条（試訳）

ナディトゥムとエントゥム（またはウグバプトゥム）と呼ばれている女の
 の大司祭、（語末の——ウムはアッカド語の主格形）が、修道院内に住ま
 わず、居酒屋を開店するかまたは酒のために飲み……居酒屋に立ち入っ
 た場合、そのものども（女司祭）は火あぶりに処せられる。

第110条の解釈

ナディトゥムとエントゥム（ウグバプトゥム）という名称は、上記の逐語
 訳右端にも記したようにその名称自体が女子の大司祭を意味したもので、
 当然そのような聖職者の階層にある者が、居酒屋などの商売を営業するこ
 とは禁じられていたばかりでなく、その女司祭たちが酒房や飲食店に立入
 ることなども、禁止されていたものと思われる。

ハンムラピ王が統治していた時代のバビロニア社会で、居酒屋の女将と
 いう職業がかなり特殊な地位を占め、その責任が重大であったことはこの
 前の条文第109条においても推察されるところであるが、この条文にもあ
 る通りナディトゥムとエントゥムという聖職者の階級に属する女達が、こ
 のような裏社会にも特殊な地位を占めていたら、取り締ることが非常に難
 しかったに相異なる。

後で第178条～第182条にも登場してくるように、当時のアウィルム階層
 において自分の気に入った娘をこの女神官に就かせその父親も古代バビロ
 ニアの社会で重要な立場に立つことができ、それだからこそ、その娘には
 他の兄弟姉妹よりも特殊な地位を与えたものと思われる。

この第110条に対する原田慶吉氏の翻訳と註釈は以下の通り「もし尼僧院の中に止宿せざるネディートウム (*naditum*)、エントウム (*entum*) が、居酒屋を開き、あるいはまた酒のために居酒屋に赴きたるときは、〔彼等〕その者を【彼の女を】焼〔き殺す〕。」この条文に関する原田慶吉氏の〔註〕は(36行)「*naditum* 高位の尼僧。尼僧院に住する者と、しからざる者とあり。マルドックに奉納せられた後者は結婚することはできず、子を儲けることができず、従って *šugitum* (137条参照) または女奴を伴って、これをして子を産ましめることが必要である。137条、144条参照。 *entum* 最高位の尼僧。結婚を許されない。」としている。

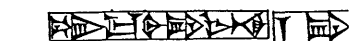
この第110条については、どの翻訳者も〔註〕をつけることが多いように、中田一郎氏の訳文と脚註のほうは以下の通り「もし尼僧院に居住しないウグバプトウムでもあるナディートウム修道女⁸⁷⁾が、居酒屋を開いたり、⁸⁸⁾ビールを飲むために居酒屋に入ったなら、彼らはその女性を焼き殺さなければならない。」となっており、その中田一郎氏の脚註は次のように「87) 「法典」碑では、*naditum ugbabtum ša*……となっており、*naditum* と *ugbabtum* は同格と考えざるを得ない。S テキストでは2つの単語の間に接続詞 *u* (および／あるいは) が読みとれそうであるが、はっきりしない。これらの女性については、注解を参照。なお、ハンムラビ「法典」に出てくる *NIN. DINGIR (ugbabtum)* の読み方については、CAD E, p. 173 にしたがう。

88) 店を開店するという意味か (G.R. Driver-J.C. Miles, *BL* II. p. 45 : 原田慶吉, p. 316 ; M.T. Roth, *Law Collections*, p. 101—ただし、*Law Collections* の第2版(1997年)では「居酒屋(のドアを)開けたり」と変更している— ; E. Szlechter, *Codex*, p. 106)、店のドアを開けて中に入るという意味か (R. Borger, *TUAT* I/1, p. 55 ; W. Eilers, *Die Gesetzesstele* p. 31 ; A. Finet, *Le code*, p. 75 ; R. Haase, *Rechtssammlungen*, p.

36)、かならずしも明瞭ではない。」と、なっている。

いずれにせよ、中田氏が「ビールを飲むために……」という翻訳は、楔形文字原典をこれら外国の研究者の意見に従って、かなり拡大解釈したとみるべきだろう。またアッカド語のウグバブトゥムの解釈は、やはり原語をそのまま使うだけでなく、その単語の意味が文章上ではっきり理解できるように、翻訳するか脚註できちんと解説していない以上、翻訳と解釈の上でかなり問題がある、と言わざるをえないだろう。第110条の楔形文字 *nin-dingir* を原田氏はエントゥと呼び、中田氏はウグバブトゥムと呼ぶが、この女神官については第178条の解釈を参照されたい。こうした女神官の名称についてはハンス J.ベッカー氏も若干論じておられる (loc. cit., p. 144, p. 154~p. 155) が、とどのつまりその時代に生きていない限り正確な社会的地位とその呼称は把握できないものと思われる。

第111条 (原文・逐語訳)



⁴⁵ *sum-ma* ^{mi2} *geš-tin-na* 60 (*sila*₃) *Sikarim*

1 *sila*₃ = 842 ml

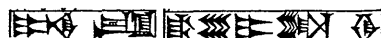
もし 居酒屋の女将が 60 シラを 酒



u₂-sa-ka-du₃ *a-na* *di-ib-tim* *id-di-in*

u₂-sa-ka-du₃ > *pihu*

ビーフーの で 信用 与えた時は



i-na *ebūrim* 50 (*sila*₃) *šeim* *i-li-qi₂*

時には 収獲の 50 シラを 穀物 取り上げる

第111条（試訳）

居酒屋の女将がピーフー酒を（ピーフー容器で）、（常連客に）60シラの分量になるまで信用によって与えた（ツケで飲ませたる）場合には、（そのツケの精算のため、常連客は）穀物の収穫時に50シラの穀物を取り上げられることになる。

第111条の解釈

現代でも約4千年前の古代バビロニア時代であっても、常連客あるいは身元の良く知られた客を信用（ツケ）で飲ませたことはままあるようで、そのツケの精算にはその社会独特の決まりや支払い方法の慣習が存在していたようである。

この前の第110条に記された酒（シカリム）は、おそらくビールであつたろうと思われているが、この第111条に記されたšikarimと同じ文章中に出てくる「ピーフー酒」pihu<u₂-sa-ka-du₃が如何なる酒であるかは良くわからない。しかしながら、収穫の時50シラという飲ませた酒の量より少ない分量の穀物（おそらく大麦あるいは小麦）を納めさせたところからみると、その収穫の何倍あるいは何十倍もの分量がとれるビールのような大麦から製造できる酒であろうと思われる。

この時代の液体あるいは穀物を計量する単位シラは、原文・逐語訳の右端に示したように、約842ml、そうするとツケで飲ませる最大限の額は約5052ℓとなるが、当時の計量の単位は1グル≒300シラで、約255リットルに相当したものではないかと考えられる。これは古代シュメール時代の初期王朝では1グル≒144シラと考えられているので、シュメールからアッカド時代にかけて約2倍に増額されたことになっていると考えられる。

しかしながら、これらの数値は考古学者達の推測によるものだから、正確な数値は依然としてわからない。

この第111条が規定するところからもわかるように、当時の居酒屋ではビールなどの酒をツケで飲ませ、その掛け金をその酒の原料である穀物（あるいは果実）の収穫時に収穫した同じ穀物（果実）で支払っても良かったものと思われる。その穀物は、多分その後にそのままその酒などの醸造所へと直接持っていき、そのまま同じ酒の原料となったものと思われる。

第108条から登場する穀物（šeam, šeim）が穀物の大麦ではなく、葡萄であると解釈する文献も多く、日本でも、古賀 守氏著『ワインの世界史』中公新書415などでは、この酒が「ブドウ酒」とであると記されている（loc. cit., p. 31～p. 32）が、古代バビロニアより後のウラルトゥ帝国など、メソポタミアの上流地域で葡萄で作られた酒が普及し、それより昔のシュメールの時代からその領域で葡萄で作られた酒も多分その当時から飲まれていたことは確かであろうが、この第108条から第111条に記された「ピーフ酒」はやはり穀物から作られたビールの一種であったろうと思われる。この条文に対する原田慶吉氏の訳は「もし居酒屋の女が、60クーのピーフム（pīhum）酒を信用貸に与えたるときは、収穫〔時〕においては、穀物50クーを取る。」となっていたのに関し、中田一郎氏の訳は「もし居酒屋の女主人が1 ピーフ（容器）のビールを掛けて売ったなら、彼女は収穫時に5 スート（約50リットル）の大麦を受けとることができる。」という風にこの pīhum を酒の種類とは考えずに、その容器と考える解釈方法に変った。ところでこの第111条の第2行目冒頭 u_2 -sa-ka-du₃は、アッカド語で pīhu（ピーフ）と読み、それが従来酒の種類と考えられてきたが、最近のアッカド語学者の見解によって酒類の容器であると解釈されるようになってきたことがこの中田氏の解釈に良く表れている。従って原田氏の翻訳では片仮名で「ピーフム酒」となっていたが中田氏の訳では「1 ピーフ（容器）のビールを掛けて売ったなら……」となっており、

(マル括弧)をつけているところを見ると中田氏も酒であるのか容器であるのか未だ確定していない状況にあるのではないかとみてよいだろう。しかし、はたしてこのこの時代このような特殊な酒の容器（壺か壺、もしくは瓶あるいは樽）などで、その都度「量売（はかり売り）」していたものであろうか、その正確な理解はなかなか難しいところである。

その量る穀物にしてみても、原田氏は60クーであるのに対し、中田氏は1 スート sūtu(m)と読んでいる。確かに楔形文字の原型では1であり、1 sūtu は10クー qû(m)で古代のパピロニア時代には、かつてシュメール時代に使われていた PI/BARIGA（パーソあるいはバルカ、バリガかバルカシット）アッカド語では pānu(m)と書かれパーンと呼ばれていたようである。そして1パーンが6 スートだから、かつては60クーあるいは60シラと翻訳して書かれていたのである（因みにシュメールの1シラ SĪLA は今日の約1リットルにほぼ近い）。それ故に、ツケ売りした分量の60シラは約60リットルと考えられてきた。

中田氏のように、この第1行目の1を容器と考え、分量を特定せず、その容器でツケで飲ませたと解釈するのもひとつの結論を導くもの、と思われる。中田氏は、その容器で測り売りしたと考えているようであるが、もともと居酒屋で飲む酒飲みは、また居酒屋の女主人も正確にどれだけ測り売りしたかの分量を記録するのはなかなか困難であり、ある特定の容器でいたい何杯飲ませたという算定方法しかないのではなかろうか。

あるいは、このピーフーを一般的に飲ませる酒とは違った特殊な酒の酒類と考える解釈もあると思われる（多分この時代ではまだ蒸留酒は出来てなかったろうから、ビールやワインなど）が、古代も現在も酒飲みというものとは一種類の酒だけを飲む者は少なく、たいてい混同して飲むもので、それをツケで飲ませる場合、良く飲む酒の量に換算して計算するものなので「容器」というふうに解釈するほうも筋が通っているのではないかと

も思われるがはたしてそれが何であったか正確に解釈することは難しい。

因みにシュメール時代からのビールとビールモルト容器を意味していたと考えられる象形文字（絵文字）から楔形文字への変化は以下の通り。

絵 文 字	古拙文字	古典的 楔形文字	後 期 楔形文字	音 価		意 味
				シュメール	アッシリア	
				kaS kas ₂ be ₂	kaS kas ₂	ビール
				gul sun ₂	gul sun ₂	毀す ビールモルト容器

第112条（原文・逐語訳）

50

sum-ma a-wi-lum i-na har-ra-nim

もし 人が 中に 旅行

wa-si-ib ma kaspam hurāšam abnam

あって、 銀 金 宝石

kaspu < kug-babbar

ašābu 蓄まる

hurāšu < kug-gi

u₃ bi-iš ga-ti šu a-na a-wi-lim

や 財産を 手の 彼の に 他人

abnu < za₂ = du₃-u₄

id-di-in ma a-na ši-bu-ul-tim

与え（預け）て のため 運送

u₂-ša-bil šu a-wi-lum šu-u₂

運ばせたが 彼に 人は その

abālu 運ぶ

60

mi-im-ma ša šu-bu-lu a-šar šu-bu-lu

何であれ 所の 運んだ 場所で 運んだ



la id-[di-]in ma it-ba-al

tabālu 取る、所有する

ずに 渡さ

横領した時は、



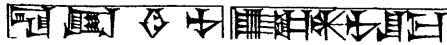
be-el si-bu-ul-tim a-wi-lam su-a-ti

(依頼) 主は 運送の 人に その



i-na mi-im-ma sa su-bu-lu ma

事につき 物を (何であれ) 所の 運んだ



la id-di-nu u₂-ka-an-nu su-ma

なかった 渡さな 確認をする 彼に (その後)



a-wi-lum su-u₂ a-du 5 su mi-im-ma

人は この 5 倍までして 物を

第112条 (試訳)

ある者が、その (商用の) 旅行中に金や銀の宝石その他の財産を他人の手に渡し (財産の一部を旅行する間に他人に預け) て、品物の搬送を依頼したところ (委託物契約の成立)、その者が搬送されるべき品物を搬送しないで横領してしまったような場合において、搬送を依頼した品物の所有者 (委託者) は、搬送されるべきもので (実際に) 搬送されなかった品物の (何であれ) そのすべてを立証する (証拠責任) 必要がある。そしてその後搬送を依頼されていた者 (受託者) はその品物の所有者にたいして依頼されていた品物 (の対価の) 5 倍までのもので (損害) 賠償しなければならないものとする。

第112条の解釈

物品搬送の寄託を受けた者 (多分、当時の輸送業者である受託者) に対

する損害賠償額を規定したもので、当時こうした搬送を依頼された業者がその品物を無事に届けなかったような場合、その損害賠償額は依頼された品物の5倍（の額面）までと定められていた。しかし、その前に、そうした物品の搬送を依頼したる者は搬送されなかった品物について挙証する立証責任が課せられていたことが、この第112条の条文から明らかに見てとれる。それがどのような手段によってなされたかは正確なところ明らかになってはいないが、かなり正確に立証される必要があったのだらうと考えられている。

この第112条から始まって第126条ぐらいまで、今日の民法で規定される債権法、特に物品の寄託（この第112条）から所収物の差し押さえ規定、債務による奴隸化など、当時のバビロニア社会における経済活動の法律的な規範が多く出てくる。

委託物に関するこの横領の規定は、もっと平易な文章で解釈すると「ある者が、その商用旅行中であって他の者に金や銀などをはじめとする自分の手持ちの動産を与えてそれを搬送させようとしたところ、その依頼を受けた者が搬送するべきものをその搬送先に送らずにそのまま横領してしまったような場合に、その搬送される筈の動産を所有していた者は、その者が搬送されるべき動産を何も引き渡してはくれなかったことを何等かの手段で立証しなければならない、とされている規定である。そういう手続きを踏んだことで、この者は搬送すべき動産の所有者に自分が任されていたもの全ての5倍までの額面を損害賠償として支払わねばならないことになる」という事例である。

この条文に関する原田慶吉氏の翻訳は「もし人が旅行の途にありて、銀、金、宝石または彼の手の動産を人に与えて（渡して）、運搬のために彼をして運搬せしめたるに、その者が運搬せらるべきものを、運搬せらるべきところにて与えずして、横領したるときは、運搬品の主は、その者に


運搬せらるべきものを与えざりしことに付いて【彼に】確証し、しかる後その者は、彼に与えられたるものをその5倍方、運搬品の主に与う。」というものであったが、それに対する中田一郎氏の訳文としては「もし人が（商用）旅行中に銀、金、（貴）石あるいは彼の所有する他の品物を（別の）人に委託し、彼に運送品として運ばせたが、その人が運送すべき物を送り先に届けず、持ち去ったなら、運送品の所有者は、その人が運送すべき物で届けなかった物を彼に対して立証しなければならない。そして、その人は自分に委託された物を5倍にして運送品の所有者に与えなければならない。」というかなり具体的な文章と化している。


この第112条の規定から次の第113条まで、現代刑法でいうところの「委託物横領罪」（または「詐欺罪」にあたるもの）であるが、ハンムラビ法典においては、まさに委託物横領の規定だけが本条に規定され、委託者は立証責任を負ってはいるものの、その罰則は民事上のことだけに限られ、その委託されたものの額面を5倍にして返却することで解決できる、と定められている。これに対して現代日本の刑法では「自己の占有する他の物を横領したる者は五年以下の懲役に処す」（刑法252条）と規定され、その構成要件の一態様として、委託に基いて自己が支配する他人の財物を横領すること「委託物横領罪」として刑事法上認識されているのである。


この第112条に関し、ハンス J. ベッカー（Hans Jochen Boeker）氏は、「寄託された品物の輸送時における特例という観点で捉えており、横領に対する刑罰は厳しく定められていた。」〔op. cit., “Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient” 邦訳、鈴木佳秀氏訳『古代オリエントの法と社会』-旧約聖書とハンムラビ法典-ヨルダン社1989年刊 p.145参照〕と記述しており、それに対して、ホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏は「委託物はここでは横領されたのであり、盗まれたわけではない。罪を犯すことになったその人に所有者は承知の上でその


品物を引き渡したのであるから、おそらくそうであればこそ比較的軽い罰となったのであろう」〔op. cit., “Hammurapi von Babylon und seine Zeit” 邦訳は江上波夫氏と五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』ハンムラビ王とその社会、山川出版社1980年刊、p.208参照〕と全く正反対の評価を与えている（双方とも引用文下のアンダーラインは筆者が書き入れたもの）。いずれにせよ、ハンムラビ法典では民事法上の損害賠償額だけが規定されているだけであるから、今日の現代刑法上の体系と比較すればそれは軽いと見るか厳しいと見るかは評価が分れるとしても、この犯罪に対する（もっとも当時の社会ではこれを犯罪という認識でとらえなかったのであろう）刑法上の措置は古代バビロニア社会にはなかったと思われるので、現代人の感覚では「軽い」とみて差しつかえはなかろう。しかし古代においては民事上の損害賠償のほうが負担が大きかったことはこのハンムラビ法典第112条をみて一目瞭然であったことだろう。

第113条（原文・逐語訳）


⁷⁵ sum-ma a-wi-lum e-li a-wi-lim
 もし 人が に 他人


 Col. XIX / Seam u₃ kas-pam i-su ma
 穀物 や 銀（の負権）を 持っている時


 i-na ba-lum be-el seim
 に なし 主（の了解）穀物の


 i-na na-as-pa-ki-im u₃ lu i-na ma-as-ka-nim
 より 穀物置き場 又は より 穀倉

5. 
 seam il-te-qiz a-wi-lam šu-a-ti

穀物を 取ったならば 人に その



 i-na ba-lum be-el seim

に なし 主（の了解） 穀物の



 i-na na-aš-pa-ki-im u₃ lu i-na maškanim

maškanu < ki-lah

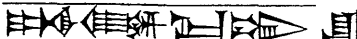
より 穀物置き場 又は より 穀倉

10. 
 i-na seim li-qiz-im u₂-ka-an-nu šu-ma

につき 穀物を 取ったこと（人々は）確認し彼に（その後）


 seam ma-la il-qu₂-u₂ u₂-ta-ar u₃

穀物を 同じだけの 取ったと 返すが且つ


 i-na mi-im-ma šum šu

何であれ 名が その

15. 
 ma-la id-di-nu i-te-el-li

に限り 貸した物 失う

elū 上る、失う

第113条（試訳）

ある者が、他の人に対して穀物とか銀（貨）の債権を有していた時に、（そういう優位な身分であるにも関わらず）その者が（他人の有する）穀物の所有者が了解することなしに、穀物の貯蔵所あるいは倉庫（穀物倉）から穀物を窃取したる場合において、（他の）人々はその者に（その者が他人の倉庫から窃取したることを）確認し、その確認手続が終ってから、その者はその者が窃取したと同じ（分量）だけの穀物を返済しなければならない。更にその者が（他人に貸していた対象物に関して）有していた債務は何であろうと全て（その権利を）失うものとする。

第113条の解釈

他人に債権を有していた者（ある者）が、バビロニア時代の貴族・上級平民階層のアウィルムであるせいか、この条文の罰則は今日の観点から見れば軽すぎるように思われる。邦訳では、原文の「取る」という動詞 *il-te-qi₂* を一応「窃取」と訳しておいたが（文章の前後から）実際は何か他の意味するところがあって、今日の刑法上は「窃盗罪」になる（日本刑法第235条参照）と思われるが、古代のバビロニアではただ取った（盗んだ）だけだから「取ったものと同じ額だけの返済」ですむのかもしれない。

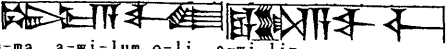
いずれにせよ、そのような不法行為をおこなった者が今後とも債権者の地位にあることを許さず、その者から債務を負った者は民事上その債務者の地位から解放される（独 *Schulderlaß*、仏 *remise de la dette* 債務免除、日本民法第519条参照）と解釈されるべきであろう。但し、その者のアウィルムの階層としての地位はそのまま落とされずに継続されてゆく、と思われる。

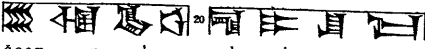
古代バビロニア社会において、債権・債務関係が発生すると債権者とはとも直さず債務者を有無を言わず無理やり差し押えること、が良くあったのではないかと考えられる。しかしながら債権者が差し押さえられている穀物を倉庫などから勝手に取りあげることなどはできなかった。そのような行為を敢ておこなった時には、その者が入取した品物はおろか貸している穀物や銀の債権なども全て失うことに陥ったのである。この第113条に関する原田慶吉氏の翻訳としては「もし人が人の上に、穀物または銀〔の債権〕を有し、穀物の主〔の同意〕なくして、穀倉より、あるいはまた打禾場より、穀物を取りたるときは、その者に、穀物の主〔の同意〕なくして、穀倉より、あるいはまた打禾場より、穀物を取りたることに付いて【彼に】確証し、しかる後〔彼（債権者）は〕取りたる全穀物を返し、かつ如何なるものたりとも与えたるものは総てこれを失う。」となってい


た。この第113条についてはさらに原田氏の註がついており（4行）「打禾場は Eilers の訳。もっとも多くは貯蔵所と訳している」という追加の文で終わっている。これに対して、最近翻訳に着手した中田一郎氏の訳としては「もし人が（他の）人に対し大麦あるいは銀の貸しがあり、大麦の所有者（の同意）なしに穀倉あるいは打ち場から大麦を取ったなら、彼らは、その人が大麦の所有者（の同意）なしに穀倉あるいは打ち場から大麦を取ったことを立証しなければならない。そして彼は取った大麦をすべて返し、彼が（貸し）与えた物は何であれ失う。」と穀物をすべて大麦としてまた法的な解釈を全く考慮しないで訳文を記しておられる。


この第113条の楔形文字の中で、第4行と第7行に出てくる na-as-pa-ki-im と ma-aš-ka-nim は、前者を「穀倉」とし、また後者を「打禾場」もしくは「打ち場」という同じ穀物を貯蔵する場でありながらその役割りに応じてかなり細かく区別する訳文が出されているが、それほど厳格に区別する必要はないのではなかろうか。この第113条の第1行目で、ハンムラピ法典の石柱に記されていた楔形文字としては、その石柱裏面の上部から刻まれた（勿論、正面下の削り取られた部分から続く）縦書きの第2欄（上から第2段目すなわち第2コラム、楔形原文の前にあるローマ数字の19は正面上から削り取られた部分を除いて数えている）が左端で終了し、第2行目左から裏面の上から数えて第3欄に入り、第3欄の右側（かなり側面部分に入り込んでいる）上部から6～7 cm 縦書きに読み進め、次の第3行、第4行と左側、本書では上から下に読み進めてゆくことになる。

第114条（原文・逐語訳）


 Sum-ma a-wi-lum e-li a-wi-lim
 もし 人が に 他人


 šeam u₃ kaspam la i-su-ma
 穀物や 銀（の 負権）を めのに 持た


 ni-bu-zu it-te-bi a-na ni-bu-tim nibū 差し押さえる、抵当に取る
 彼の人質を 押さえるなら として 抵当 注意 ut-te-bi < tabū 沈む


 is-ti-a-at 1/3 ma-na kaspim i-sa-qal ša-qal 支払う
 一人につき 1/3 マナを 銀 支払う

第114条（試訳）

ある者が、他人に対して穀物や銀（貨）の債権を有していないのに（も関わらず）、その他人の人質を抵当として差し押さえるならば、（その人質を押えた罰則として）人質一人につき銀3分の1マナを支払わなければならない。

第114条の解釈

この第114条は、次に続く第115条と深く関わっており、次の第115条が債権を有していて人質を押えた場合であるのに対し、この第114条は、債権を有していないにも関わらず人質を抵当として押えた場合、それが如何なる理由であろうとも、その人質一人につき銀3分の1マナの罰金を支払う、という規定である。

銀1マナは、標準的な重量の単位としてこの古代バビロニアの時代においては約500gに相当するものと決定され、それが60シェケルに分割され

ていた（60進法）。従って3分の1マナは20シェケルの銀ということになる。後のアッシリア時代では、この単位を「軽量マナ」として、新たに「重量マナ」なるものを制定し、この重量マナは約1 kgと計量されることになったが、古代バニロニア時代では未だ約500gの約3分の1だから、従って3分の1マナは168gくらいであった、と想像される。

誰かが、債権を持っていなかったにも関わらず、他人を差し押さえたりしたらその者は他人の家から奪ってきた一人の人質につき3分の1マナの罰金を支払う、というのは現代人の感覚からすれば「罰金としてはいかにも安い」ように思えるが、その人質が抵当として評価される ni-bu-zu の階層が良くわからないので、当時の罰金としては妥当なものだったのかも知れない。しかし3分の1マナ（20シェケル）というのは「一人の奴隷を購入する価格」だったようで、そこからすると奴隷を差し押えたのではないか、と思われる。但し、これに続く第116条では打擲や虐待によって死亡したる例として、アウィルム階層の息子と奴隷とで損害賠償額を変えており、そこから判断するとアウィルム階層の息子を押えた場合でも奴隷に対する賠償額ですんだのかも知れない。いずれにせよ、この第114条を原田慶吉氏は「もし人が人の上に、穀物または銀〔の債権〕を有せざるに、彼の質（人質）を質に取りたるときは、一人の質（人質）につき、銀3分の1マヌーを支払う。」と翻訳しており、それに対して中田一郎氏のほうは現代文として理解できるように「もし人が（他の）人に対し大麦あるいは銀の貸しが無いのに、彼から人質をとったなら、彼は、人質1人につき銀3分の1マナ（20シキル、約167グラム）を支払わなければならない。」と、相も変わらず穀物を大麦と特定して訳出しておられる。

奴隷制度の存在しない現代社会では、なかなか容易にこの文章の本質は理解できそうもないが、古代社会においてはその者に債務があると誤認して、人質を強制的に取りあげる（古代ドイツで Schuld knecht 債務奴隷と

したこと) などという無茶なことも、よくおこなわれていたに相違ない。この楔形文字によるアッカド語からもわかるように、アウィルム階層の者が他のアウィルム階層の有するおそらく奴隷階級の者を「人質として差し押える」ことを意味し、「抵当として差し押える」という動詞が nibū で、それによって差し押えられた人質も、同じ語源から出た ni-bu-zu (人質、差し押えられたるもの) である。丁度古代ローマの十二表法に規定された第三表の規定による「債権による人質」のようなものが古代バビロニアにおいても先行していたもの、と解釈できるだろう。

ただしこの人質が、正式に債権の抵当としてだけ差し押えられたもので、それがそのまま奴隷となったかどうかの詳細は不明である。ただし、ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏は、この 3 分の 1 マナという金額は通常奴隷一人を購入するのに等しいことを指摘しているが、担保あるいは利子の代わりに債権者に引き渡された人質は安価な労働者ではあったが、奴隷ではなく依然として自由であったことを、続いて規定された第 117 条と対比して述べておられる〔op. cit., “Hammurapi von Babylon und seine Zeit” 江上波夫氏と五味亨氏の共訳「古代バビロニアの歴史」山川出版社 p. 209 参照〕。しかしながらそのような解釈が絶対的なものかどうかは、いささか疑問が残るところである。

第115条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lum e-li a-wi-lim
 もし 人が に 他人

 se-am u3 kas-pam i-su ma ni-bu-zu ib-bi ma
 穀物や 銀 (の 負権) を 持ち 彼の 人質 を 押さえた が



ni-bu-tum i-na bit ne-bi-sa

人質が で 家 人質を取った



i-na ši-ma-ti sa im-tu-ut

では 運命 所の 死亡した

mā tu 死ぬ



di-nu-um šu-u₂ ru-gu-um-ma-am u₂-u₁ i-šu

場合 その 請求権は 決してない

第115条（試訳）

ある者が、他人に対して穀物や銀の債権を有しており、（その債権を履行するために）人質を押えたが、その押えた人質がその者の家（人質を取った人の家屋内）で運命に従って死亡したる場合、（その債権の）請求権は最早消滅し（今後）決して生ずることはない。

第115条の解釈

前の第114条の場合と異なり、今度は「穀物や銀による債権」を有していたある者（アウィルム階層の者）が、その債権の抵当として、債務者の人質を押えたが、その人質が死亡したる時においては、もうその債権を債務者に請求することなどはできない、という内容の条文である。




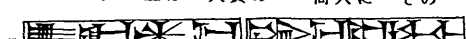
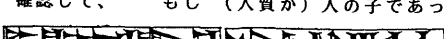
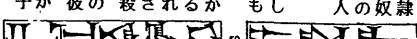
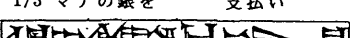
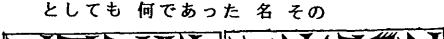
この条文中に「運命（ši-ma-ti）」という単語が入っているが、これは次の第116条の条文と比較すればわかるように、その人質を殴打するなどして虐待したため殺したのではなく、人質が病気等によってその債権者のところで自然死したことを意味するように思われる。

この条文をもう少し易しく書くと「もしある者が、他人に対して穀物ないし銀の債権を有していて、その人（債務者）から債権に代るものとして人質を受け取ったところ、その人質がその者の家で死亡してしまったよう

な時は、これは（その人質が死亡したことについての）損害賠償の根拠にはならないものとされる」すなわち人質が自然死した場合、それは債務者の損害となり、債務者はその損害を理由に債権者を告訴することができない、と解釈するべきであろう。この第115条を原田慶吉氏は「もし人が人のうえに、穀物または銀〔の債権〕を有して、彼の質（人質）を質に取りたるに、質（人質）がその質取主の家において、その（人質）運命の結果死亡したときは、その場合は請求権決してなし。」と翻訳しており、それに対して中田一郎氏のほうは相変らずこの穀物を大麦として特定して「もし人が（他の）人に対して大麦あるいは銀の貸しがあり、彼から人質を取り、その人質が人質を取った人の家で死んだなら、この事例は（損害賠償）請求の対象とはならない。」と現代法としても解釈できる訳文を掲げておられる。

そして同じく、ホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏の翻訳として、江上波夫と五味亨の両氏が訳した第115条の訳は「もしもある人が他の人に対して穀物ないし銀の債権を有し、かれからある者を人質として受け取ったところが、その人質がかれを抵当として受け取った者の家で運命によって死亡したときには、これは賠償請求の根拠とならない」〔op. cit., p. 208〕とし、その前後でこの条文を、「もしもそれが自然死であれば債務者の損となった……債務者はとにかく損害を蒙ったとして債務者を告訴することができなかったのである」〔loc. cit.,〕と結論づけている。

第116条 (原文・逐語訳)

	
šum-ma ni-bu-tum i-na bit ne-bi-ša	
もし 人質が で 家 人質を取った	
	
i-na ma-ha-zi-im uš lu i-na uš-su-ši-im	
のため 殴打 又は のため 軽視	
	
im-tu-ut be-el ni-bu-tim tamkari šu	
死んだ時は 主は 人質の 商人に その	
	
u ₂ -ka-an ma šum-ma mār a-wi-lim	
確認して、 もし (人質が) 人の子であったなら	
	
mār šu i-du-uk-ku šum-ma warad a-wi-lim	
子が 彼の 殺されるが もし 人の奴隷であったら	
	
1/3 ma-na kaspim i-ša-qal	
1/3 マナの銀を 支払い	
	
u ₃ i-na mi-im-ma šum-šu	
としても 何であった 名 その	
	
ma-la id-di-nu i-te-el-li	
同量を 貸した物と 失う	

第116条 (試訳)

(前2ケ条に引続き)、抵当として人質を取ったところが、(人質を押えて連れてきた家で) その人質が殴打されるかあるいは虐待(原文逐語訳の「軽視」はおそらく食事を与えないか拘束されたまま放っておかれるか)されるかして、その人質が死亡したような時には、人質の所有者はその商人(債権者、人質を抵当にして押えた者)に確認して、その死んだ人質が

アウィルムの子であったならばその商人（債権者）の子供が殺害されるが、その死んだ人質が奴隷階級の者だったならば（その商人は）3分の1 マナ（約168g）の銀（貨）を支払って、その債権が何であったとしてもその債権にあたる賃貸物と同量のものを失うこととなる（すべてのその債権にあたるものを失う）。

第116条の解釈

ハンムラビ法典は、原則として反坐法 *Lex talionis* が貫かれているが、それは貴族・平民の自由階層においてのみ言えることであって、この第116条の条文を見ればわかる通り、抵当として取った人質がアウィルム（自由人）の子供であったならばその人質を取った商人の子供も殺されなければならないが、その人質に取った者が奴隷階級の場合、罰金を支払う（3分の1 マナ）のとその債権を失うことで損害賠償がつぐなわれるようになるのである。

これはその殺された被害者の身分による差と言うよりは、奴隷階級は人間でなく共和政時代の最盛期ローマ法のように、奴隷はその奴隷を所有しているものの財産で物質であるとする発想が、既にこの古代バビロニアの時代からあったとみるべきなのである。しかしながら抵当として自由人（アウィルム）の子供も人質となって債権者のところに引きたてられて行かされた点に於て、古代のギリシアや古代ローマ時代の「奴隷制」とは未だかなり異なった取り扱いがなされていたものと考えられる。

西欧法思想あるいはキリスト教の研究者は、この第116条の条文を旧約聖書の規定と関連づけて考えがちであるが、非セム系のシュメール人とセム系のアッカド人を併合して成り立つアッカド時代の法体制をセム語系の奴隷制度に発展させた旧約聖書・出エジプト記との比較だけで考察することは所詮無理があるように思われる。（cf. Hans Jochen Boecker 氏著

“Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient” Neukirch-
che Verlag 1984. 参照)


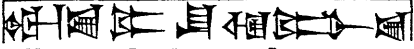
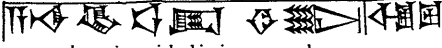
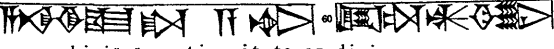

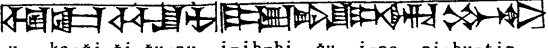

この第116条の解釈は、かなり問題があり、原田慶吉氏はこの第4行目と第5行目の mār について、第7条の「人の息」ではないだろう、とその註で述べておられる。その原田慶吉氏の訳文は「もし質（人質）がそれの質取主の家において、殴打の結果、あるいはまた酷使の結果死亡したるときは、質の主は彼の商人に確証し、しかる後、もし人の子なるときは、〔彼等〕彼の子を殺し、もし人の奴隷なるときは、〔彼は〕銀3分の1マヌーを支払い、かついかなるものたりとも与えたるものはすべてこれを失う。」となっており、それに対して現代文としての中田一郎氏の翻訳は「もし人質が人質を取った人の家で殴打または虐待によって死んだなら、人質の所有者が彼の商人（に対してそのこと）を立証しなければならない。もし（犠牲者が）アヴィールムの息子なら、彼らは彼の息子を殺さなければならない。もしアヴィールムの奴隷なら、彼は銀3分の1マナ（約167グラム）を支払わなければならない。また、彼は、彼が（貸し）与えた者は何であれ失う。」とされている。

江上波夫氏と五味亨氏の第116条に関する共訳は「もしも人質がかれを
抵当として取った者の家で打^{ちようちやく}擲や虐待により死亡したときは、その人質の主人はかれの債権者にそれを証明する。もしもかれが（自由）人の息子を抵当として取ったのであったならば、かれの息子も殺される。それがある人の奴隷であったときには、かれは銀3分の1マヌーを量り、さらにかれが貸し付けとして与えていたものすべてをも失う。」〔op. cit.,〕という文章で解釈しておられる。

ホルスト・クレンゲル氏は、この第116条の全文訳を出した後、さらにその解釈として「従って債務者の殺された息子のためには同態復讐法（= Lex talionis）の原則が適用されたが、他方奴隷は20シェケル（約160g）

の銀の支払いによって、その対価にみあった損害賠償がなされただけでしかなかったのである」と一歩進んで解釈し、それを記述されている〔loc. cit., p. 209〕。

第117条（原文・逐語訳）


 Sum-ma a-wi-lum e-hi-il-tum iṣ-ba-zu ma iltu 負債
 もし 人が 負債を 得たので、

 ašša zu mār šu u₃ mārā zu
 妻 彼の 息子 彼の や娘を 彼の

 a-na kaspim id-di-in u₃ lu
 のため 銀 売り 又は

 a-na ki-iš-ša-a-tim it-ta-an-di-in
 に 抵当（人質） 渡すならば

 šattam 3^{kaš} bit ša-a-a-ma-ni su-nu
 3 年間 家で 買い主の 彼らの 注意 ib-bi<nibū 差押える

 u₃ ka-ši-ši su-nu i-ib-bi su i-na ri-bu-tim li-ib-bi 心
 又は 主人の 彼らの 働き 彼に には 第四 epešū する

 ša-at-tim an-du-ra-ar šu-nu iš-ša-ak-ka-an šakānu 置く、固定する
 年 自由に 彼らを 指定する

第117条（試訳）

ある者が負債を負ったので、（そのことの結果として）自分の妻、自分

の息子や娘を銀（その債務）のために売り払い、または債務の抵当として引き渡した場合において、それらの者（自分の妻、息子、娘）は買い手（または債権者）の家で3年の間は働かなければならない。そして4年目にはその者たちの解放が決定されるものとする。

第117条の解釈

ある者と言っても、それは原文を見ればわかる通り、アウィルム階層の者（貴族・平民階層の自由人）であるからして、そのまま奴隷となつて一生涯その債権者の家で働くわけではなく、3年間だけ奉公すれば4年目には自由の身分が回復される、と決められているのである。

このように特定の身分の者に限って、一定の奉公をおこなつてその債務相当額を支払つたと同様の労働をした後、自由の身分となつて解放される規定は、旧約聖書『出エジプト記』第21章2節～第4節に「ヘブライ人である奴隷」を買う規定となつて残っており、ヘブライ人である奴隷を買つたならば、6年間奴隷として働かせられるが7年目には無償で自由の身となることができる、と定められている。

יַעֲבֹד שְׁשִׁים שָׁנָה עֶבֶד עִבְרִי כִּי תִקְנֶה (ここから左へ始まる)
he-may-serve years six Hebrew slave you-buy if (2)

אִם-וּבְשִׁבְעָה יֵצֵא לְחֶפְזָא חָנָם: (3) without-pay to-the-freedom he-shall-go-out but-in-the-seventh
if (3) without-pay to-the-freedom he-shall-go-out but-in-the-seventh

בְּנָפּוֹ יָבֹא בְּנָפּוֹ יֵצֵא אִם-בַּעַל אִשָּׁה הוּא וְיָצָא
then-she-goes he wife husband-of if he-goes-free by-himself he-comes by-himself

אִשְׁתּוֹ עִמּוֹ: אִם-אֲדֹנָיו יִתֵּן לָּהּ אִשָּׁה וְיִלְדָּה-
and-she-bears wife to-him he-gives masters-of-him if (4) with-him wife-of-him

לּוֹ בָנִים אִוּ בָנוֹת הָאִשָּׁה וְיִלְדֶיהָ תִּהְיֶה לְאֲדֹנֶיהָ
to-masters-of-her she-is and-children-of-her the-woman daughters or sons to-him

(ibid. 以上がその内容を定めたところである) : בְּנָפּוֹ יֵצֵא וְהָיָא
by-himself he-goes-free only-he


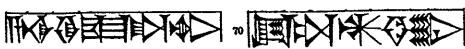

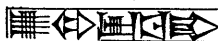
このヘブライ人である奴隷の規定は、明らかにハンムラピ法典第117条の条文が、その後、セム系法文化の中で発展してユダヤ教の聖典の中に結実したものとみるべきで、特定の身分のものを（例え債務や負債があったところで）解放するという根本的な原則に貫かねたもの、とすることができよう。しかしながら、ハンムラピ法典のほうは、この間これらの者たち（債務者の妻、息子、娘）が奴隷の階層に落とされるという条文上の文章が入っていないところに違いがある。つまり、返済する担保もしくは利息のかわりに債権者に引き渡された人質は、確かに安価な労働力ではあったが、決して奴隷などにはならなかったのである。この第117条の翻訳に関して、原田慶吉氏の訳文は「もし人を責任が捕えて、彼の妻、彼の息、彼の娘を銀のために与え（売却し）あるいはまた占有〔質〕に与えたるときは、3年彼等の買主または彼等の占有主の家にて彼に奉公し、第4年には、彼等の解放が行わる。」となっていた。一方、最近翻訳文を出した中田一郎氏の訳は「もし人が債務を負い、自分の妻、息子あるいは／および娘を売ったなら、あるいは彼（自身）が（債務の）担保として与えられたなら、⁸⁹⁾彼らは3年間彼らの買手あるいは差押え人の家で働かなければならない。（しかし）4年目には彼らは自由の身とされなければならない。」と記し、その上で中田氏はこの第117条の脚註として、二人の学者の解釈を紹介し、特にフィネ氏が楔形文字の第4行目 a-na ki-iš-ša-a-tim it-ta-an-di-in を単なる過去ではなく完了形と解釈していることから、自分も上記のような訳文となったことを明らかにしている。更にまた中田氏の註としては、「(89) このパラグラフの条件文は、文字どおりには、「もし債務が人を捕え、彼が彼の妻、息子あるいは／および娘を銀のために与えるか、彼／彼女が債務の担保として与えられたなら」となっているが、E. Szlechter は、債権者が債務者を差押え、その妻、息子あるいは娘を売るか、別の債務の担保として（第三者に）与えた場合と理解している

(*Codex*, pp. 109-111)。しかし、抽象名詞「債務」を債権者の意味にとることは文法的に無理があるうえ、差押えた債務者の家族を債権者(?)の別の債務の担保として与えた場合を想定することには、少し無理がある。A. Finet はこの語を Gtn Preterit ではなく N Perfect と解釈し、「彼(自身)が債務の担保として与えらえたなら」と訳す(*Le code*, pp. 78-79)。ここでは A. Finet にしたがう。」と重ねて記述してある。アッカド語の動詞をフィネ氏のように単なる過去ではなく完了形とみても、担保の時期が古くなるか新しくなるかだけの相異で、それ程大きな解釈の差はこの第117条の条文では出てこないように思われる。

直前の第116条の解釈でも紹介したホルスト・クレンゲル(Horst Klen-gel)氏は、この第117条について翻訳は出していないが、その解釈として「この条文では、債務者の妻女、息子もしくは娘を手渡した場合が問題となってくる。このような家族構成員がその者たちを銀の代りに獲得した者もしくは担保として受領した者のところで3年という限度で労働することになってはいたが、4年目には再度自由の身になるはずであった。しかしながらそれも仮に今その者たちの労働力を使用している者が他の別のやり方でその者たちを更に継続して使ってゆく根拠を有していなければという条件でのことであった。それはともかくハンムラピ王はそれらの者を長期間もとの家族から切り離さないように措置した。そうしないとこの一家の経済状況にも家族にとっても良くない影響を及ぼしかねないからなのである。仮にその者たちが三年のあいだ新しい主人の下で労働していたならば、その事項でもうすでに新しい主人はその者たちの為に与えた銀(貨)に相応するものを取り戻した、すなわち債務者への弁済はすでに完了したとみなされることになる」[loc. cit., p. 209 参照]とみているのである。

クレンゲル氏のこのような解釈は、第117条の一般的な解釈としては、まあ順当なところに位置していると言えるだろう。

第118条（原文・逐語訳）


 sum-ma wardam u₃ lu antam
 もし 奴隷 又は 女奴隷を

 a-na ki-iš-sa-tim it-ta-an-di-in
 として 抵当 渡している時

 tankarum u₂-še-ti-iq a-na kaspim i-na-ad-din etēqu 移す
 商人が 譲渡するか のため 銀 売り渡したならば

 u₂-ul ib-ba-gar
 baqāru 請求する
 決して（取り戻しを）請求できない

第118条（試訳）

（これに先行する第114条から第116条と関連してこの条文は）、（ある者が商人に債務があって）その抵当として奴隷または女奴隷を抵当として渡している時には、（その債務を有している）商人が（その奴隷または女奴隷を）譲渡するか銀のために売り渡してしまったとしたならば（その奴隷を商人に抵当として渡した者は）その取り戻すことを決して請求できないものとする。

第118条の解釈

第117条の規範とはその対象が完全に異なっていて、奴隷の身分にある者が、債務の抵当として商人に引き渡された場合には、その商人によって奴隷が売り渡されようがどうしても、もとの所有者であったアウィルム（自由人）階層の者はもうその奴隷を取り戻すことはできない、というのである。なぜならば、前にも述べた通り、古代にあって奴隷は人格などがなくすでに他人の所有物としての価値しかなかったからである。

前の第117条に規定されているのはアウィルム階層が人質になっている場合で、奴隷がその債務のかわりに一度手放されてしまうと、手に入れた債権者は買い戻し期限の経過がすぎってしまった後は譲渡しようと転売しようとその債権者の自由であり、債務者は最早返してくれとは請求することができなくなったことが規定されている。それがこの第118条の条文であると思われる。


この第118条について原田慶吉氏はその訳として「もし奴隷あるいはまた女奴を、占有〔質〕に与え、商人が〔期間を〕経過せしめたるときは、銀のために与う（売却す）。〔彼または彼の女は〕決して取戻を請求せらるることなし。」となっていた。それに対して中田一郎氏の訳文は「もし彼（債務者）が男奴隷あるいは女奴隷を債務の担保として与えたなら、商人は（買い戻し期間を）経過させなければならない。⁹⁰⁾そののち、彼（商人）は（その奴隷を）売ることができる。彼（男あるいは女奴隷）の返還を要求されることはない。」となっており、中田一郎氏は同様にこの第118条の脚註として「どの位の期間経過させれば、それらの者たちを売却できるか」について、主として前述のフィネ氏とボルガー氏などの解釈を採りあげている。それでは中田一郎氏の脚註をみてみよう。「90）「経過させなければならない」は、Pテキスト（*û-še-et-te-iq*）およびtテキスト（*û-še-et-te-eq*）による。「法典」碑では（*û-še-te-eq*）とと preterit（過去）形になっており、この場合は、パラグラフの最初の「もし」が *û-še-te-eq* までかかることになり、A. Finet のごとく、「債務者が商人をして一定期間（買い戻し期間？）を経過させたなら」と解釈せざるをえない。この動詞の理解に関わるもう1つの問題点は、「（場所を）通過させる→（別の町に）移動させる」（CAD E, p. 391a; *AHw*, p. 262a）の意味にとるか（この場合主語は商人となる）、「（商人は一定期間を）経過させる」の意味にとるかである。前者の意味に解する場合、どうして§118で「（別の町に）

移動させる」ことが必要なのか説明できない。後者の意味に理解する際の問題点は、「一定期間」を意味する目的語がないことであるが、これは§ 117の「3年間」が想定されていると見る以外にない。ここでは、R. Borger (*TUAT* I/1, p. 57)、R. Haase (*Rechtssammlungen*, p. 37)、G.R. Driver-J. C. Miles (*BL* I, p. 49)などと共に、商人が一定期間のあとに担保に取った奴隷を売却できるという意味にとっておく。」というのが中田氏の脚註である。

ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏は、やはり条文の翻訳を出さずにその解釈として「奴隷の場合にはここでもやはり事情が異なっていた。その者たちが主人によってその債務の代りに手渡されるとすると、その債務者は買い戻し期間が経過した後には転売しても良く、最早返せと要求することができなかった (118条)」とだけ記し [loc. cit., p. 209]、その著書の「註」の中で、この部分の解釈には異説があり、文意がはっきりしない、とだけ追記している。

中田氏のようにアッカド語の文法的解釈だけに拘泥すると、確かに説得力はあるが、詳細な解釈においてはまだかなり無理があるように思われる。

第119条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lum e-hi-il-tum iṣ-ba-zu ma

もし 人が 負債を 得たので、



ama-zu ša mārē ul-du-šum

alādu 生む

女奴隷を 彼の 所の 子供を生んだ

	a-na kaspim it-ta-din	
のため 銀 売ったならば		
Col. XX.		
/ kaspam tamkarum is-qu-lu be-el amtim		
銀を 商人が 支払った 主は 女奴隷の		
	i-sa-qal ma ama-zu i-pa-dar	padāru 取り戻す、身受けする
支払って、 女奴隷を 彼の 身請けできる		amu-zu = amtu su

第119条（試訳）

ある者が、債務を負ったので、自分の子供を生んだ女奴隷を銀（貨）のために（支払いのために）売ったならば、その女奴隷の所有者は、商人が支払った銀（貨）（と同額の銀を支払うこと）によって、自分の女奴隷を身請けできる（買い戻せる）こととする。

第119条の解釈

これに先立つ第118条の例外規範で、ある者が債務を負ったのでやむなく自分の子供を生んだ女奴隷を売ってしまったが、自分の生活に余裕ができて銀（金銭）を支払えるようになった時に、その場合だけは例外として、女奴隷を手渡した時と同額の銀を支払って、取り戻すことができると定めた例外規定なのである。


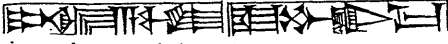

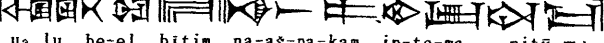


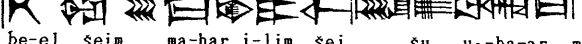
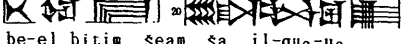
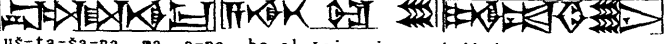
この規定は、ハンムラビ法典第117条の解釈と解説のところで示した旧約聖書『出エジプト記』の第21章の後段とかなり異った規定となっている。第117条の解説で、旧約聖書は「ヘブライ人の奴隷が妻帯者であった場合とそのヘブライ人に妻を与えて子供を生んだ場合の規定」があるが、自分の子供を生んだ女奴隷を売りに出す規定などはないからである。しかしながら旧約聖書はそれに続く出エジプト記の「身体の傷害」の項（第21

条、第20節～21節）で、「人が自分の男奴隷あるいは女奴隷を棒で打ち、その場で死なせた場合は、必ず罰せられる。但し一兩日でも生きていた場合は、罰せられない、それは自分の財産だからである」という規定が置かれている。このハンムラピ法典第119条を原田慶吉氏の訳文としては「もし人を責任が捕えて、〔その債務者が〕彼に子供を生みたる彼の女奴を、銀のために与え（売却し）たるときは、商人が支払いたる銀を、女奴の主は支払い、彼の女奴を請け戻す。」と翻訳していたが、それに対して中田一郎氏の翻訳は「もし人が債務を負い、彼に息子たちを生んでくれた彼の女奴隷を売ったなら、（その）女奴隷の所有者はその商人が支払った銀を支払って彼の女奴隷を請け出〔す〕ことができる。」と記述している。

この第119条に規定された内容は、ホルスト・クレンゲル氏によれば、それはまさしく第117条で規定されたことの例外として述べられている。すなわち「主人の子供を生んだ女奴隷に関する限りは、所有者は債権者に彼女を売却した時でもその代金さえ持参してゆけば、いつでも彼女を買い戻すことができたのである」とだけ記述しているからである。

この第119条楔形文字原文の第4行目冒頭にある col. xx とはコラム20のことで、ハンムラピ法典正面の象徴図像下から始った楔型文字の縦書き6～8 cmの段「欄すなわちコラム column」が正面第1欄から始って（削除されたところを除いて）裏面上部に続き、正面から連続している続き番号の第20欄（段）目に入る、ということを意味している。すなわち、ルーヴル博物館に安置されているスーサーで発掘されたハンムラピ法典の石柱原文という観点では、その裏面に刻まれた楔形文字欄がこの第119条の第3行目で丁度上から第3欄（段コラム）が左端で終了し、第4行目から第4欄（段）目の右端上部から下に6～7 cm間隔で、次の第5行目を左に読み進んでゆくことになる。

第120条 (原文・逐語訳)

	
šum-ma a-wi-lum sei šu a-na na-aš-pa-ku-tim	
もし 人が 穀物を 彼の に 貯蔵所	
	
i-na bit a-wi-lum is-pu-uk ma	
の 家 他人の 貯えていたが、	
	
i-na ga-ri-tim i-ib-bu-u ₂ -um it-tab-ši bašū ある、持つ	
に 倉庫 事故が 起きたり ibbū 突発事故	
¹⁰ 	
u ₃ lu be-el bitim na-aš-pa-kam ip-te-ma pitū 開く、要す	
又は 主が 家の 貯蔵所を 開いて	
	
šeam il-qi u ₃ lu šeam ša i-na biti šu	
穀物を取るとか、又は 穀物 所の に 家 彼の	
	
is-ša-ap-ku a-na ga-am-ri-im it-ta-ki-ir šapāku 貯える	
貯えた につき 全部 争いが生じたなら gamru 全部、合計	
	
be-el seim ma-har i-lim sei šu u ₂ -ba-ar ma nakāru 異なる	
主は 穀物の 前に 神の 穀物(量)を 彼の 明細にしたのち、	
	
be-el bitim šeam ša il-qu ₂ -u ₂ bāru 明細を記す	
主は 家の 穀物の 所の 取った	
	
uš-ta-ša-na ma a-na be-el seim i-na-ad-di-in	
二倍にして、 に 主 穀物の 払う	

第120条 (試訳)

ある者が、貯蔵する目的で自分の穀物を他人の家の貯蔵所に貯えていた
(寄託契約を結んでいた) が、その倉庫に突然事故が起きたりあるいは倉

庫の家の主が貯蔵庫を開いて穀物を横領するとか、あるいは自分が穀物を預かったことを否定するなど、その家に預けた穀物全般について争いが生じたような場合、穀物の所有者 (be-el、委託者) は神の前で自分の穀物のことを申し立て (その内容を) 明細にしなければならない。そうした手続きの後、穀物倉のある家の主 (受託者) は、自分の横領した穀物量を2倍にして穀物の所有者に損害賠償をなすことを要す。

第120条の解釈

この第120条から第126条までは、今日でいう民法の債権法の中でも特に「財産権」に関する規定が網羅されている。特にこの第120条では、穀物の所有者 (be-el šeim 委託者) が他人の穀物倉庫に穀物の貯蔵を寄託した事例が掲げられている。そして、「その家に預けた穀物全般に就て争いが生じたような時」穀物の所有者は先ず「神の前での宣誓」をして、その損害がどれ位であったかを申し立てる必要があった。このような手続きをした後で、穀物倉を所有する家の主 (be-el bitim 受託者、アッカド語ではこちらのほうも be-el という単語を使っている。) は、その損害をかけた穀物の2倍の額を貯蔵を寄託した者に支払うことで、損害賠償は最終的に片がついたのである。

当時の古代バビロニア社会では、例え倉庫や穀物を貯蔵する場所を持たず、他の者から借用する必要が無くとも、穀物などを信託しておくことができたようである。しかしながらどの社会においても同じことで、これらの穀物を預ったことを否認する者などが必ず現れたのであろう。

原田慶吉氏はこの第120条の条文を法律家として以下の如く訳しておられる「もし人が彼の穀物を貯蔵のため、人の家の中に蔵めたるに、あるいは家の主が穀倉を開きて穀物を取り、あるいは彼の家の中に蔵められたる穀物を全然争いて、ために穀倉の中に損失が発生せしめられたるときは、

穀物の主は、神の前にて彼の穀物を証明し、しかる後家の主は、取りたる穀物を2倍にして、穀物の主に与う。」というのが原田氏の翻訳で、それに対して中田一郎氏の訳文として「もし人が（別の）人の家に彼の大麦を寄託したが、穀倉で損失が生じたか、その家の所有者が貯蔵庫を開けて（その）大麦を盗ったか、あるいは彼の家に大麦が貯蔵されたことを全面的に否定したなら、⁹¹⁾大麦の所有者は神前で彼の大麦（が寄託されたこと）を明らかにしなければならない。そして、その家の所有者は、彼の盗った大麦を倍にして大麦の所有者に与えなければならない。」という相変らず穀物を大麦と特定した文章が記されている。

中田氏はこの第120条の訳文について、原田氏と異った訳文とした理由として後に発表したボルガー Borger 氏などの意見に従ったからだ、とその訳註で述べているが、はたしてこの第5行と第8行に出てくる il-qi あるいは il-qu₂-u₂（取る）という動詞を「盗む」とまでアッカド語で拡大解釈して良いものかどうか、疑問が残る。原田氏に対する中田氏の脚註は以下の通りである。「91) G.R. Drivers-J.C. Miles (BL II, p. 49, I, p. 234), A. Finet (Le code, p. 81) 原田慶吉 (p. 318) および E. Szlechter (*Codex p. III*)などは損失の内容を、「その家の所有者が貯蔵庫を開けて（その）大麦を盗ったか、あるいは彼の家に大麦が貯蔵されたことを全面的に否定した」ことと理解するが、ここでは、R. Borger (*TUAT I* /1, p. 57), W. Eilers (*Die Gesetzesstele*, p. 32), R. Haase (*Rechtssammlungen*, p. 37), M. T. Roth (*Law Collections*, p. 104) などにしたがって訳しておく。」というのが中田氏の主張である。

その一方、ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏は、この第120条から第160条までの規定を「財産権に関する規定」と包括的に記述し、ここでは「穀物、貴金属その他の財産の信託について幾つかの掟」なるものがある、と述べる。そしてこの第120条は「例え倉庫を所持しておらず、

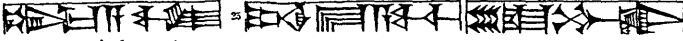

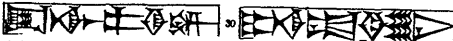
しかも誰から借りるわけにはいかないような場合であっても、穀物等を信託することは出来たのである。ところが場合によってはその後で、こうした商品を寄託された者がその預りを否認することもあったのである。しかしもしその者の有罪が立証された時には、預ったものを2倍にして支払わなければならなかった……大麦の場合には、神に誓いを立てればそれをもって証明方法として適用したのである」〔loc. cit., p. 210～211 参照〕というふうに、中田氏と同様その穀物を大麦と特定して、大麦だけが例外であることを強調しているのである。

なおハンス J.ベッカー (Hans Jochen Boecker) 氏も、この第120条の翻訳を掲げており、それを日本語に訳した鈴木桂秀氏の訳は「ある人が貯蔵のために自分の穀物を他の人の家に寄託したが、(その後) 貯蔵した穀物に損失が生じるか、または家の持ち主が倉を開けて穀物を横領するか、または自分が穀物を受託したことを否認する場合、穀物の所有者は神の前で自分の穀物のことを申し立てなければならない。そして、家の持ち主は穀物の所有者に対し、横領した穀物の二倍の物をもって償わなければならない。第120条」〔op. cit., “Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient” 鈴木桂秀氏邦訳『古代オリエンの法と社会』旧約聖書とハンムラピ法典、ヨルダン社刊1989年、p. 146〕と、大麦とは特定しない解釈をおこなっている。

この訳文でゆくとこの第120条は現代刑法でいうところの「横領罪」の色彩が強くなるが、アッカド語の「取る」という動詞の解釈についてはやはり問題がある、とみなければならないだろう。

確かに日本の現代刑法では、その第252条に横領罪の一般規定を示したもので、委託に基づく場合と解釈されているが、ハンムラピ法典第120条をそこまで拡大解釈することにはいささか問題があることだろう。

第121条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lum i-na bit a-wi-lim seam is-pu-uk
 もし 人が に 家 他人の 穀物を 貯えた時

 i-na Sa-na-at a-na 1 še-gur-e 5 sila3 šeim
 に 年 につき 大麦 1 グル 5 シラの 穀物を

 idu na-aš-pa-ki-im i-na-ad-di-in idu < a2 料金
 料金を 貯蔵の 払う

第121条 (試訳)

ある者が、他人の家に穀物の貯蔵を寄託した場合において、その者は大麦 1 グル (約255リットル) について年間貯蔵費 5 シラ (約 5 リットル) の穀物を支払わなければならないものとする。

第121条の解釈

寄託契約の最も基本的な内容を規定した条文で、今日の日本民法第657条に「寄託は当事者の一方が相手方のために保管を為すことを約して或物を受取るに因りて其効力を生ず」とある内容がそっくりそのままこのような具体例によって示され適用せられるのではないか、と思われる。

古代バビロニア時代にハンムラピ王の定めた 1 グルは300シラ (約255リットル) とされていたから有償・相務契約としての年間貯蔵費は、その貯蔵する穀物の300分の 5 で、当時の有償契約としては妥当なものだった、と思われる。





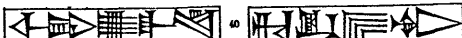


この第121条の条文によって、貯蔵費すなわち賃貸料がどれ位年間収入として入ってくるかは、その倉庫あるいは穀物貯蔵所に預けられる穀物の量如何で決ってることになった。ローマ法学者としての原田慶吉氏の訳

は「もし人が人の家の中に、穀物を蔵めたるときは、年に穀物1クールに付き、穀物5クールを穀物の借料として与う。」という単純な文章で、古代の穀物単位等の呼称こそ違え、鈴木佳秀氏の重訳文も「ある人が他の人の家に穀物を寄託する場合、彼は穀物1クルにつき年間貯蔵料5クアを支払わなければならない。」とほぼ同じ内容で、同様に中田一郎氏の翻訳も「もし人が（別の）人の家に大麦を寄託したなら、彼は年間大麦1クル（約300リットル）につき5カ（約5リットル）の大麦を穀倉の料金として与えなければならない。」と記しておられる。

このように中田氏は古代の容積単位1グル（中田氏の呼称では1クル）を現代の300リットルと計算しておられるが、筆者は255リットルと考えて解釈していることをお断りしておきたい。なおこのグルという読み方は主にシュメール時代において呼ばれていたようで、アッカド期の呼称として原田慶吉氏はクールとしていたのに対し、江上波夫氏と五味亨氏の共訳では以下に示すようにクルルという片仮名を少々変えて訳語となっているが、これらは全てシュメール時代のGURと同一の容積単位である（アッカド語となってkurru(m)と読むようになった）ことをお断りしておかなければならないだろう。

第121条の条文の翻訳こそはしていないが、前記のホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏〔江上波夫氏と五味亨氏の和文共訳『古代バビロニアの歴史』ハンムラピ王とその社会、山川出版社、1980年〕では、「倉庫の賃借料は年間1クルル（300リットル）の大麦につき5リットルと定められていた（121条）」と賃借料だけを記述するに止めている。〔loc. cit., p. 211 参照〕

第122条（原文・逐語訳）


sum-ma a-wi-lum a-na a-wi-lim
もし 人が に 他人

kaspan hurāšam u3 mi-im-ma šum šu
銀 金 や 何であれ 名が その

a-na ma-ša-ru-tim i-na-ad-di-in
に 預託 預ける時は

mi-im-ma ma-la i-na-ad-di-nu
何であれ 限り 預ける

si-bi u2-kal-lam ri-ik-sa-tim
証人に 示し、 証書（契約書）を

i-sa-ak-ka-an ma a-na ma-ša-ru-tim
作定して、 に 預託

i-na-ad-di-in
与える

kalāmu 示す

第122条（試訳）

ある者が、他人に金や銀その他その名称が何であれ（ある品物を）寄託する場合において、その者はその寄託するすべての物品（について）を証人に示し、契約書（粘土板による証書）を作成してから、その品物を寄託せねばならないものとする。

第122条の解釈

古代からある寄託制度の最も必要とされる手続きを述べたもので、現代

日本民法でも第658条から第666条まで詳細にその手続き等が記述されているが、紀元前二千年紀よりすでに法的な制度としてある寄託 *ma-ša-ru-tim*（西欧の現代語では、仏 *dépot*、英 *deposit*、独 *Verwahrung*）をなす場合に、必ずなさなければならぬことは、古代の昔からきちんとした証人をたてて、法的な契約証書 *ri-ik-sa-tim* を作成しておかなければ、法律上の寄託契約 *Hinterlegungsvertrag* などが、絶対に成立しなかったのである。

勿論、未だ紙の無かった時代だから、その証書は粘土板に楔形文字で記され、その多くは更にその周囲に粘土による封印を作り（今日の封筒のようなもの）その閉鎖する箇所を刻印することなどで保存した。いずれにせよ古代社会においても貴金属類等を信託する時は文書の形で、しかも証人の前で締結される契約が最低限必要であった、と考えられている。

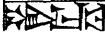



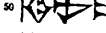


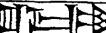
そのような契約をしないで預けてしまうと、否定された時に正当な法的措置を取ることなどができなかったのは当然である。この第122条に関する原田慶吉氏の訳文は「もし人が人に、銀、金またはいかなるものたりともこれを寄託に与うときは、与う物は総てこれを証人をして見せしめ、契約証書を定めて、寄託に与う。」というものであった。それを現代語の文章にした中田一郎氏の訳文としては「もし人が（別の）人に銀、金あるいはその他何であれ寄託しようとするなら、彼が寄託する物をすべて証人に示し、契約を結んで、寄託しなければならない。」という記述がなされている。

この第122条と次に続く第123条について、条文そのものを訳してはいないもののホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏は「貨幣とか銀その他の高価な財産を信託するときには、文書の形による、証人の前で発行される契約が必要であった。それがあれば、あとで厄介な事が生じる恐れはなかった。というのは、もしもそのような契約が結ばれないまま預けてし

まうと、これらの物件の受託者がそんな物は預からなかったと主張したときに正当な処置を取ることが不可能であったからである（122、123条）。」

〔江上波夫氏と五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』山川出版社 p. 212参照〕という文章を記載しているが、この冒頭にある「貨幣」は、未だ古代バビロニア時代には存在せず、銀の薄片を通貨として使用していたので、翻訳としては不適切であるというべきだろう。

第123条（原文・逐語訳）

				
sum-ma	ba-lum	si-bi	u3	ri-ik-sa-tim
もし	なしに	証人	や	証書
				
a-na	ma-sa	ru-tim	id-di-in	ma
に	預託	預けても		
				
a-sar	id-di-nu	it-ta-ak	ru	su
場所で	預けた	否定する時は	彼を	
				
di-nu-um	su-u2	ru-gu-um	ma-am	u2-ul
場合は	その	請求権は	決してない	

第123条の（試訳）

（前の第122条に続き、……ある者が）、証人も契約書も（作成し）ないまま寄託をなし、その者が品物を預けたその場所で寄託をしたことが否認されたる場合において、その者の（訴訟上の）請求権は全く無いものとなる。

第123条の解釈

前条で規定された手続きを取らずに寄託をおこなった場合、寄託を受けた者（受託者）がそのまま誠実にその寄託行為をおこなえばよいが、その寄託した品物の保管や返還について係争事件が起きてしまったような時、法定手続きに従って証人と寄託証書を作成しなかった寄託者（委託者の側）は、訴訟を起こして、法律上の係争をおこなう資格が無いということを明示したのが、このハンムラビ法典第123条の条文である。

言うなれば、第122条で決められた証人と寄託証書という必要不可欠な諸条件が満たされてさえいれば、受託者は自分の預かっていたあらゆる品物（金、銀その他その名称が何であろうとも）について、全責任を負わなければならなかったのである。その要件が満たされていて訴訟になった場合、以下の第124条と第125条（窃盗に遭った場合）が示すように、受託者は重大な責任を負わされることになっていたのである。この第123条をローマ法の前田慶吉氏は以下のごとく訳されている「もし証人と契約証書なくして、寄託に与えたるに、与えたる所にて、〔受寄者が〕彼に否認したるときは、その場合は請求権決してなし。」となっていた。それに対して現代文の解説口調とした中田一郎氏の訳では「もし証人および契約なしに寄託し、寄託したところで彼らが（寄託の事実を）否定しても、この事例は（損害賠償）請求の対象とはならない。」とかなりわかり易く翻訳されている。

この第123条と直前の第122条について、ハンス J.ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏は、一般の研究者と異なって、この二ヶ条と第128条を第四章、第三節「ハンムラビ法典の法規定」の「冒頭(1)法例その1、訴訟法、重犯罪法」と関連したところに分類して、第7条の次に位置せしめ「寄託した品物の保管に関する係争」が問題となっていて、先ず第122条が基本原則を提示し、それに次いでこの第123条がある、と位置づけてい

る。

それでは鈴木佳秀氏の邦訳で、この二ケ条を試みることになろう。

「ある人が他の人に銀や金、また他の品物を寄託する場合、その人は寄託するすべての品物を証人に示し、契約証書を作成した後で、品物を寄託しなければならない。」
第122条





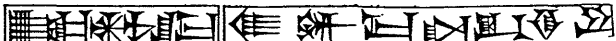
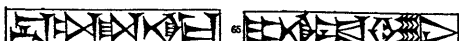
ある人が証人も契約証書もないまま寄託し、彼が品物を引き渡したその場所で寄託「の事実」が否認された場合、この事例は訴えの請求とはならない。
第123条」

そして、ハンス J.ベッカー氏は、この二ケ条の解釈は別の付論 2「旧約聖書における土地法について」の中の「(2)法例その 2・管理責任に関する法」の中で自分なりの解釈を展開させている。それではベッカー氏のこの第123条に関する解釈と思える箇所を鈴木佳秀氏の邦訳で続けて考察してみよう。「……他人の所有物を預かる場合、法的に有効で提訴可能な寄託は、証人と契約証書を必要としていた。必要な諸条件が満たされていれば、受託者は預かった品物について全責任を負うことになっていた。受託者が窃盗の被害にあった場合ですら、彼はその損害を償わなければならなかった。受託者が対処できる可能性は、窃盗を摘発するか捕えられた窃盗犯に損害を賠償させることだけであった。」[op. cit., “Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient” Neukirchner Verlag, © 1976 -2. Auflage 1984. 鈴木佳秀氏訳『古代オリエントの法と社会』旧約聖書とハンムラビ法典、ヨルダン社1989年刊。p. 146引用と参照]というのがハンス J.ベッカー (Hans Jocher Boecker) 氏の主張である。

欧米の研究者の場合、ベッカー氏のみならず聖書等の宗教などの教典書と関連づけて解釈する者が多く、ある意味では中田一郎氏の翻訳と解釈もそうした観点からハンムラビ法典を扱っているように受け取れるが、これもひとつの解釈方法として参考になると思われる。また、この古代の損害

賠償という発想が、18世紀初頭のイギリスで、保険業務となって現代にまで深く影響を与えているのである。

第124条（原文・逐語訳）


 šum-ma a-wi-lum a-na a-wi-lim
 もし 人が に 他人
 ⑤ 
 kaspaṃ hurāṣam u₃ mi-im-ma šum šu
 銀 金 や 何であれ 名が その

 ma-har šī-bi a-na ma-ša-ru-tim id-di-in ma
 前で 証人の に 預託 預けたのに
 ⑥ 
 it-ta-ki-ir su a-wi-lam su-a-ti
 否定する時は 彼を 人に この

 u₂-ka-an-nu šu-ma mi-im-ma ša ik-ki-ru
 確認する（その後）、何であれ 物が 否定した

 uš-ta-ša-na ma i-na-ad-di-in
 （この人は）二倍にして、 与える

第124条（試訳）

ある者が、他人に金や銀その他その名称が何であれ（ある品物を）証人を前にして寄託したが、その者（他人）が受託を否認したる場合において、その者にたいして寄託したることを立証しなければならない。そして

その者（受託者）は、自分が否認したすべての品物について2倍にして賠償しなければならないものとする。

第124条の解釈

ハンムラピ法典第122条で定めた寄託の法律要件のうち証人だけはいるものの、受託者がその寄託行為の成立を拒否した場合、寄託者は裁判においてその寄託の事実を立証しなければならない。そしてその寄託の事実が立証されたならば、受託者は受託者が預けたと主張する品物の2倍の額を損害賠償として支払う必要があることを定めたのが、この第124条の条文である。この条文について原田慶吉氏は翻訳として「もし人が人に、銀、金またはいかなるものたりともこれを、証人の前にて寄託に与えたるに、〔受寄者が〕彼に争いたるときは、〔寄託者は〕その者に【彼に】確証し、しかる後、〔受寄者は〕否認したるものは2倍にして与う。」という文章を記き、それに対してハンス J. ベッカー氏の重訳を出した鈴木佳秀氏の邦語訳は「ある人が銀や金、その他の物を証人の前で他の人に寄託したが、その者が受託を否認した場合、その者に対して〔寄託の事実を〕立証しなければならない。そして、その者は否認したすべての物について（更に）2倍の物をもって償わなければならない。」

第124条

鈴木氏の原著書であるベッカー氏は、この条文の翻訳に先立って直前の第123条の解釈のところにも記した以下の如きその解釈を述べておられる。すなわち「……必要な諸条件が満たされていれば、受託者は預かった品物について全責任を負うことになっていた。受託者が窃盗の被害にあった場合ですら、彼はその損害を償わなければならなかった。受託者が対処できる可能性は、窃盗を摘発するか捕えられた窃盗犯に損害を賠償させることだけであった。」〔loc. cit., 鈴木佳秀氏訳『古代オリエントの法と社会』——旧約聖書とハンムラピ法典——ヨルダン社、1989年、p. 146〕これら

の翻訳を考慮して、改めて邦訳を出版した中田一郎氏のほうの訳文は「もし人が（別の）人に銀、金その他何であれ証人の前で寄託し、彼（寄託引受人）が（寄託を引き受けたことを）彼に対して否定したなら、彼らはその人（寄託引受人）（の不法行為）を立証しなければならない。そして彼（寄託引受人）は、否定した物を倍にして与えなければならない。」としている。

上述のハンス J.ベッカー氏は、この第124条から第126条までの条文と翻訳をした後に「旧約聖書の法にも同種の債務法がある」として、その著の第五章「契約の章」のところ〔loc. cit., 邦訳 p. 261以下〕に旧約の「出エジプト記」第22章 2 節 b と 6 ～ 7 節の二ヶ所を引用して比較対照している。但し、この箇所の新約聖書の編纂がキリスト教会によって諸々問題があり、ベッカー氏が22章の 1 とするところが他の編者によっては第21章の 37 節にあたるところでもあるので、原典のヘブライ語とその対訳を以下に記すことにする。

בְּנִיבְרוֹ:	וְנִמְכַּר	לּוֹ	אֵין	אִם
for-theft-of-him	then-he-must-be-sold	to-him	nothing	if

「必ず賠償しなければならない……（場合で、もしその者が）何も持っていないような場合には、その盗みの償いに自分の身を売らなければならない（こととする）」。

ベッカー氏は、この旧約聖書の法をバビロニア法に決められているように処刑されることはなく「債務奴隷」として自分の身を売却して償うだけだと論じているわけである。この「出エジプト記」第22章第 2 節 b とするところは、もし比較するとしたら古代ローマの十二表法第三表の規定であるが、ベッカー氏はそのことに全く触れず、（この問題については拙稿「債権法の発生と形成」山梨学院大学『法学論集』第47号参照）続いて寄託された品物に関する事柄を取り扱った「債務関係法」にあたるエシュメンナ法典と同じく「出エジプト記」第22章の 6 ～ 7 節

(1995年日本聖書協会版、中央公論社の「世界の名著」12『聖書』では出エジプト記の同じ第22章だが第7節と8節になる)を例に出して、解釈を推し進めている。それではそのヘブライ語原典と日本聖書協会の『聖書』の対訳でその箇所を見くらべながら、ベッカー氏のハンムラビ法典第124条と聖書との比較考察を思料してみることになろう。

וְנָגַב	לְשָׂמֹר	כֶּלִים	אוֹ-	כֶּסֶף	רֵעֵהוּ	אִישׁ	אֶל-	יָתִן	כִּי-
and-he-is-stolen	to-safekeep	goods	or	money	neighbor-of-him	to	man	he-gives	if
שְׁנַיִם:	יְשַׁלֵּם	הַנָּגֵב	וְנִמְצָא	אִם-	הָאִישׁ	מִבֵּית			
double	he-must-pay-back	the-thief	he-is-caught	if	the-man	from-house-of			
הַבַּיִת	בְּעַל-	וְתִקְרַב	הַנָּגֵב	וְנִמְצָא	אִם-לֹא				
the-house	owner-of	then-he-must-appear	the-thief	he-is-found	not	if			
.....	רֵעֵהוּ:	בְּמִלְאָכֶת	יָדוֹ	לֹא	שָׁלַח	אִם-	הַיָּדֵי	אֶל-	
	neighbor-of-him	on-property-of	hand-of-him	he-laid	not	whether	the-judges	before	

「人が銀あるいは物品の保管を隣人に託し、それが隣人の家から盗まれた場合、もし、その盗人が見つければ、盗人は2倍にして償わねばならない。もし、盗人が見つからない場合は、その家の主人が神の御もとに進み出て、自分は決して隣人の持ち物に手をかけなかったことを誓わねばならない……」ベッカー氏はこの旧約聖書「出エジプト記」に続いて、ハンムラビ法典の解釈にも関わる内容を記述し、それに続けて「エシュヌナ法典」の第36条と第37条を記し、エシュヌナ法典のほうがハンムラビ法典よりも旧約聖書の法と多くの点で一致している、と結論づけている。それではベッカー氏の結論はともかく、鈴木佳秀氏の邦訳で、この第124条に関わるベッカー氏の理論を以下にみてみよう。「この規定によれば、一定の範囲においてではあるが、寄託された人は預かった品物について責任を負うことになっている。万一盗難に遭ったとしても、彼は預かった品物のことで持主に賠償する義務はない。この決疑法は、2つの事例に分けて規定されている。窃盗犯が捕えられた時は、窃盗に関する通常の処罰に従つ

て、その窃盗犯が盗んだ物の2倍の物をもって償わなければならない。窃盗犯が見つからない時は、品物を寄託された人は、潔白の誓いを行うことによって、他人の持ち物に手をつけたのでは、という嫌疑を払拭することができた。ハンムラビ法典の当該事例を扱ったテキストでは、品物を寄託された人に配慮を示すよりは、品物の持主に有利な規定を定めている。寄託された品物に対する責任は、どんなに特別の事情があったとしても帳消しにされることはないからである。実際、その法規定を見る限り、ハンムラビ法典は、旧約聖書よりも所有物の保障をより一層明確に打ち出しているのが分かる。エシュヌナ法典にも、これに対応する規定がある。

ある人が自分の持ち物をよその町の客（この翻訳については W. von Soden, ArOr 17, 1949, 371 f.参照）に寄託し、その家に泥棒が入った訳でなく、戸口の側柱は取り外されておらず、窓も壊されていないが、それにもかかわらず寄託された品物がなくなってしまった場合、彼（委託された人）はその品物を（依頼主に）償わなければならない。

エシュヌナ法典第36条

その人の家に泥棒が入るかまた〔戸口の側柱が〕壊されるかして、寄託された品物と一緒にその家の主人の家財も被害にあった場合、その家の主人はティシュパクの神殿で誓い「あなたの持ち物と一緒に私の持ち物もなくなりました。私は何の策謀も企てていませんし、詐欺を働いているのでもありません」と言わなければならない。彼がこのように誓う場合、（被害者には）彼に対する請求権はない。

エシュヌナ法典第37条



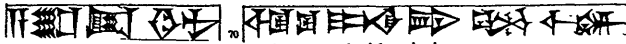
文字通り一字一句同じである規定が存在しているわけではないが、多くの事例を見る限り、古代オリエントの法表現が如何に近い関係にあるかが

ここにも示されている。契約の書と同じように、エシュヌナ法典は神の関与を法的補助機関とみなしている。潔白の誓いは神殿で行う必要があったが、神の前で誓うことによって、品物を寄託された人は横領の嫌疑を晴らすことができた。彼が潔白の誓いをすれば、なくなった品物の持主は、それ以上の法的請求を行うすべはない。興味深いことに、この点で、エシュヌナ法典はハンムラピ法典より旧約聖書の法と多くの点で一致している。A.ゲッツェ (Goetze) は、3つの法典の中で旧約聖書が一番原初のままの形態を留めているとみなした。勿論、それに対する異議が出されている (例えば、R. Yaron. *The Laws of Eshnunna* (1969) 167 参照)。」

[loc. cit., p. 261~p. 263] というのが鈴木氏の邦訳である。


筆者の観点からすれば、損害賠償額ではハンムラピ法典と旧約聖書で一致しており、その部分ではかなり近いと思われるが、各研究者と翻訳者にとってそれぞれ自分達が所属し、信仰しているキリスト教的な解釈では、かなり異なる結論が出てくるらしい。

第125条 (原文・逐語訳)

			
Sum-ma	a-wi-lum	mi-im-ma	su
もし	人が	何かを	彼の
			
a-na	ma-sa-ru-tim	id-di-in	ma
に	預託	預けたのに、	
			
a-sar	id-di-nu	us	lu i-na pi-il-si-im
場所で	預けた	のため	壁穴

u₃ lu i-na na-ba-a -ka-at-tim

又は　　のため　略奪


 mi-im-mu su it-ti mi-im-me-e be-el bitim egū 不注意である

何か 彼の と共に 何者か 主の 家の halāqu 失う、毀す

ih-ta-li-iq be-el bitim sa i-gu ma mi-im-ma sa a-na

紛失したなら 主は 家の 所の 不注意で 何かを 所の に

𐎠𐎵𐎲𐎠𐏀𐎧𐎺𐎠𐎥𐎢𐏁𐎡𐏁𐎶𐎤𐎫𐎪𐎭𐎦𐎥𐎱𐎽𐎰𐎫
ma-ša-ru-tim id-di-nu-šum-ma u₂-hal-li-gu₂

預託

預けた

失った

salāmu 良くする

Col. XIII.  
u₂-ša-lam ma / a-na be-el niš-ga i-ri-a-ab

回復（弁償）して、に 主 財産の 返し rābu 返+

be-el bitim mi-im-ma su hal-ga-am is-te-ne-i ma

主は 家の 何かを 彼の 失った 探して、halqu 失った

it-ti sar-ra-ga-ni šu i-li-qi₂ 許堂 iS-te-en

より 盗人

彼の 取り上げる

šēu 用意する、撰す

第125条 (試訳)

ある者が、自分の（所有する）ある品物を寄託したところ、預け渡した保管場所（受託者の家）で、壁に穴をあけた強盗あるいは（家屋に塀を乗り越えてきた）略奪者によって、その（倉庫のある）家の主人の所有物とともに自分の寄託したるものも紛失した（盗難にあった）ならば、その注意を怠った家の主（受託者）は委託者がその者に寄託したるすべての品物に対し、委託者に完全に賠償しなくてはならない。さらに委託者（寄託したる者）が預けて家の中から紛失したものを（市場などで）探し出して、窃盗した犯人からその品物を（受託者は）取り返さなくてはならない。

こととする。

第125条の解釈

この第125条の規定する内容は、受託者責任の重大さと、一担寄託された品物が自分の家から例え強盗にあって持ち出されたとしても、それを探索して取り戻さなくてはならない、という大変厳しいものである。今日、日本民法の寄託に関する規定は、例えそれが無報酬にて寄託を受けたとしても受託物の保管について「自己の財産におけると同一の注意義務」を課している（民法第659条参照）だけであるが、古代の時から法律上の手続きを踏んで、寄託したものに対しては非常に厳格な探索する義務が課せられていたことが、この条文によって判明するのである。

この第125条の条文を平易に訳せば「もしある者が自分の品物を預けたがそれを預けた場所で、自分に属するものとその家の主人に属するものが何者かによって、壁に穴を開けられたり塀を乗り越えてきて侵入された結果奪われてしまったような場合、（その寄託物に関して）不注意であったその家の主人は預けられていたものの中で失われた品物のすべてを、保管中の品物の所持者にすべて完璧に補償しなければならないものとする。その家の主人は、受託されたものの中喪失した品物が何であるかすべてに亘って調査し、盗んだ者からそれを取り返さなければならない」となる。寄託された保管中の品物については、これ程までに管理義務責任が明確にされていたことが明らかである。このハンムラビ法典第125条に対するローマ法学者の原田慶吉氏の訳は「もし人が彼の何物かを寄託に与えたるに、与えたる所にて、あるいは押込みの結果にせよ、あるいは壁穴破りの結果にせよ、彼の何物かが、家の主の何物かと共に紛失したるときは、不注意にして、〔寄託者が〕寄託に彼に与えたるものを紛失せしめたる家の主は、完全に賠償して、物の主に返し、家の主は紛失中の彼の何物かを探し求め

て、彼の盗人より取る。」[loc. cit., p. 319 1967年刊] というものであった。

これに対してホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏の原著で江上波夫氏と五味亨氏の共訳著『古代バビロニアの歴史』の中での訳文は「もしもある人が自分の物を預けたが、それを預けた所でかれに属する物とその家の主人に属する物とが、誰かが壁に穴を開けたり壁を乗り越えて侵入した結果失くなってしまったときには、不注意であったその家の主人はかれに預けられていた物のうち失われた物すべてを、保管中の品物の所有者に完全に弁償しなくてはならない。その家の主人は失われた物すべてについて調べ、かれから盗んだ者からそれを取り返すことができる」[ibid. 山川出版社1980年刊] といくらか口語風の訳を出し、これらに対してハンス J. ベッカー (Hans Jorhen Boecker) 氏の原著を邦訳した鈴木佳秀氏の訳文は「ある人が自分の所有物のある物を寄託したが、預け渡したその場所で、〔壁に穴を開けた〕押し込みによってであれ、(塀を) 乗り越えてきた者によってであれ、家の持ち主の所有物の一部と (一緒に) 彼の所有物のある物がなくなった場合、注意を怠った家の持ち主は、その人が彼に寄託した物で、なくしてしまった物すべてを持ち主に対し完全に償わなければならない。家の持ち主は、自分のもとからなくなった物を探索し、窃盗犯から取り戻さなければならない。」[ibid., ヨルダン社1989年刊] というかなり限定的な翻訳を出しておられる。

最近になって翻訳を出された中田一郎氏の訳文を参照してみると「もし人が自分の何かを (保管のために) 寄託し、寄託したところで、壁に穴をあけてあるいは壁を乗り越えての盗難によってその何かが、(その) 家 (保管場所) の所有者の何かとともに無くなったなら、怠慢であった (その) 家の所有者は保管を寄託され (たにもかかわらず) 無くなった何かをその財産の所有者に完全に賠償しなければならない。(その) 家の所有者

は自分の無くなった何かを探し続け、彼（その家の所有者）の盗人から取り戻すことができる。」〔loc. cit., p. 37 1999年刊〕というマル括弧（バーレン）でかなり補充した意味がとれるような翻訳となっている。

この第125条に関しては、ドイツ語からの重訳も含めて四氏の訳が出ているので、それをすべてここに掲載してみることにした。既に何度も述べてきたように、現代の日本の民法第657条以下に規定されている「寄託行為」に関して、これが有償であるか無報酬のものか（民法第659条）はこのハンムラビ法典に記されていないが、ローマ法でいう *diligentia boni patris familias*（善良なる家父の注意）から派生した「善良なる管理者の注意義務」なるものは、古今東西何らかの形で法典に規定されているものとみなればなるまい。因みにフランス民法典第1137条には“……les soins d'un bon père de famille……”という文章で、またドイツ民法典でもその第1草案第144条に“……Sorgfalt eines ordentliche. Hausvaters……”という文章で規定され、日本民法でも第298条、第350条、第400条、第644条、第671条、第852条、第869条などに、それにあたる規定がいたるところ随所に記述されている。

この第125条のアッカド語で、（第3行目と第4行目の末尾にある）*pi-il-ši-im* と *na-ba-al-ka-at-tim* についての解釈は、すでに第21条のところでおこなったが、泥棒を意味する古代語として「壁に穴をあける」を動詞とするギリシア語 *τοιχωρυχεω* からみてもわかるように、この楔形文字の第3行から第4行を原田氏のように「あるいは押込みの結果にせよ、あるいは壁穴破りの結果にせよ……」と訳すか、あるいはドイツ人の翻訳を重訳したように「壁に穴を開けたり、壁を乗り越えて侵入した……」のように訳すか、また中田氏のように「壁に穴をあけてあるいは壁を乗り越えての盗難によって……」とまで拡大解釈するか難しいところである。

現代法上の解釈では、犯罪の構成要件としては「壁に穴をあける」のは

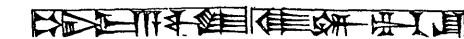
「器物損壊」で、壁を乗り越えるほうがその罪状として罪が軽いように思えるが、アッカド語の na-ba-al-ka-at-tim に「強盗」の意味が強いとしたら、この解釈は違ってくる。

このアッカド語の「強盗」に関わる動詞は、すでにハンムラピ法典第21条で palāšu「穴をあける」という過去形とそこから派生した ip-lu-uš>pi-il-ši-im「侵入、家宅侵入」(第21条、第1～2行目)から窃盗、強盗(家屋の一部を損壊して入る盗難)という単語がセム系言語として成立したことを論じたが、これは例えば現代の日本刑法第236条で規定される構成要件とは全く異なった発想から形成された刑法用語である。

従って強盗(独) Raub、(仏) vol avec violence、(英) larceny(米 robbery)というよりは、この両方とも口語でいうところの「押込み強盗(仏) cambriolage」に近いとみるべきであろう。従って中田一郎氏のような「壁に穴をあけてあるいは壁を乗り越えての盗難」という翻訳用語もかなり問題がある、と言わざるをえない。

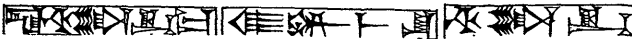

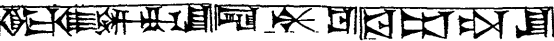
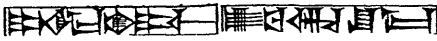
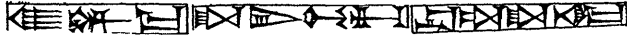

ところでこの第125条の楔形文字原文第8行目 ma のところで、ハンムラピ法典石柱裏面の上から第4段(欄)が左側で終わり、次の前置詞 a-na から下の第5欄右端に移って裏面の上方からアッカド語の「ハンムラピ法典」に関する100条以下の楔形文字を書き始めてから約30cm 位の下部を下(6～7 cm ずつ)に左方向へ読み進めることになる。

第126条 (原文・逐語訳)



sum-na a-wi-lum mi-im-mu su

もし 人が 何であれ 彼の

- 10 
 la ha-li-iq ma mi-im-[me] su ha-li[iq] halāqu 失う
 いない 紛失して のに 「物が 彼の（私の）なくなった」
- 
 iq-ta-bi ba-ab-ta su u₂-te-ib-bi-ir bābtu 紛失、家系
 と言って 家系に 彼の 告訴するなら (家門会議)
- 15 
 ki-ma mi-im-mu su la hal-qu₂ ba-ab-ta su abāru 訴える
 に拘わらず 物が 彼の いない 紛失して 家系は 彼の
- 
 i-na ma-har i-lim u-ba-ar su-ma bāru 宣告する
 で 前 神の 究明誓約し、(その後)彼は
- 20 
 mi-im-ma sa ir-gu-mu uš-ta-sa-na ma ragāmu 不平を言う
 何であれ 所の物 不平を述べた 二倍にして、 sanū 二倍にする
- 
 a-na ba-ab-ti su i-na-ad-di-in
 に 家系に 彼の 渡す

第126条 (試訳)

ある者が、自分の所有物が紛失したのではないのに「自分のものが紛失した」といって家門会議〔古代バビロニア時代にあったその領域の行政地区官庁〕に(虚偽の)申し立てをおこなった(告訴した)ような場合においては、家門会議(行政官)は何も紛失されていないという事実を神の前で究明(確証・誓約)しなければならないものとする。そしてその者(紛失したと虚偽の申し立てをした者)は、自分が(紛失したと)申し立てたすべてのものの2倍(にあたる物品をもって)損害賠償を支払うものとする。

第126条の解釈

この条文中の3行目と4行目に現れた ba-ab-ta (bābtum) という紛争処理機構（官庁）は、一応「家門会議」と訳しておいたが、国家的な事項の裁判をおこなうエサギラ神殿に出る前に、民事関係の紛争を処理し裁判する、その行政的な地域に設置された今日の家庭裁判所というよりは、上位の一種の「民事法上の裁判所」のようなもの、と考えることができるだろう。

ba-ab-tu には「家系」あるいは「都市の門」という意味もあって、かなり小規模な当時の町中にあった紛争処理機関、と解釈しておいたほうがよいと思われる。そこでは町中の有力者が、神前で身近な紛争の簡易裁判に似たようなことをおこなっていたのではないか、と思われる。（他に後の第142条と第251条に登場する）更に拡大解釈して、この bābtum が一種の行政区として司法上の主権もここに置かれていたと解釈する者もいるようだが、ここでは単に「家門会議」とだけ訳しておくことにしたい。

この条文を最初に翻訳した原田慶吉氏の訳文をみると「もし人が彼の何物かが紛失し居らざるに、「私のものが紛失して居る」と言い、彼の『門』に虚偽の訴えをなしたるときは、彼の何物も紛失し居らざるに従いて、彼の『門』は、神の前において、彼に証明し、しかる後〔彼は〕請求したる物は2倍にして彼の『門』に与う。」と訳しており、それに原田氏の〔註〕に解説がしてあるように（13行）「門」とは特定の人民が居住し、特定の門を有する地区。「Eilers 註参照。」となっている。

同じくハンス J.ベッカー氏の独文を重訳した鈴木佳秀氏の訳をみると「ある人が自分の物がなくなったのではないのに、「自分の所有物のある物がなくなった」と言って、（その事で）彼の「町の門」対し虚偽の申し立てを行なった場合、「町の門」は何もなくなっていない事実を神の前で確証しなければならない。そしてその者は、「町の門」に対し、彼が申

し立てたすべての物の2倍の物をもって償わなければならない。」となっている。これらに対して、「門」という概念をあっさり捨てた中田一郎氏の訳文は「もし人が、自分の何物も無くなっていないにもかかわらず、「私の何かが無くなった」と言って、彼の地区⁹³⁾を起訴したなら、彼の何物も無くなっていないことを彼の地区は神前で彼に対して明らかにしなければならない。そして、彼は（権利を）主張した何かを倍にして彼の地区に与えなければならない。」とその行政区を訴えることが「権利」であるかのような翻訳をおこなっており、さらに中田氏の脚註では 93)「地区」は「市」の下部行政単位で、住民に警告を発したり (§251)、地区住民の素行調査を行ったり (§142)、地区住民の治安維持にあたる (§126) など、警察や司法の機能も持っていたらしい (R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*, 1988, pp. 118f.; A. Finet. *L. code*, p. 83) [loc. cit., p. 36] と解説している。

この第126条の楔形文字原文の第3行と第4行とにある ba-ab-ta (bābtum) が、一体どのような法的機関であるか、古代バビロニアという地名の語源とからんで、その解釈上かなり興味ある研究が諸々となされてきた。

地名学 toponymie (英 Toponymy) の観点からもみると、中田氏のヤロン (R. Yaron) 氏からの引用では、少々もの足りない気がするが、下部行政単位だけにとどまらず、司法制度上のかなり重要な機構という要素もその中に含んでいたことは事実であり、地区という訳語も行政用語としてはまあ妥当と考えられるのではないだろうか。この機構は、日本の「家庭裁判所」というよりも、フランスの国家評議院コンセイユ・デタ (国参事院、合議官署 Conseil d'Etat) の下部組織機構あるいは、日本の戦前にあった「町内会」が国家的に行政上の権威をもう少し与えられたような機関とみたほうがよいのかもしれない。

第127条（原文・逐語訳）

sum-ma a-wi-lum e-li nin-an	
もし 人が に対し エントウム	
u ₃ aš-ša-at a-wi-lim u ₂ -ba-na _m u ₂ -ša-at-ri-iš ma	
又は 妻 人の （後ろ）指を指したならば	ubānu 指
	tarāsu 指摘する
la uk-ti-in a-wi-lam šu-a-ti	
ない時は 証明でき 人を この	
ma-har da-a-a-ni i-na-ad-du-u ₂ su	
前に 裁判官の 投げ出して 彼を	
u ₃ mu-ut-ta zu u ₂ -gal-la-bu	muttatu 額
額に 彼の 烙印を押す	gallabu< Su-i烙印、髪を切る

第127条（試訳）

ある者が、エントウム（女神官または女司祭）あるいは他人の（正）妻に対して後ろ指をさしたならば（その行い等について悪口を述べた場合）、もしそれが人をして証明できない（虚偽の事実を申し立てた）ならば、その者は裁判官の前に自らの身を投げ出して、自分の額に烙印を捺されなければならない。

第127条の解釈

すでにハンムラピ法典第110条に登場したこのエントウム（女神官）と呼ばれる女の司祭は、その聖職なるがゆえに居酒屋などに酒を飲むために立ち入ることもできないというその地位から、その地位の本質がいかなるものかわかってきたと思われるが、アウィルム（自由人）に属する（正）

妻となった婦人とこのアウィルム階層以上にみられる女司祭エントウムの身の上について、虚偽の事実（居酒屋に立入ったとか正妻の場合は不倫等のことだと思われるが）を公然と指摘したる者は、その事実が確実に立証できない時は裁判官の前に引き出され、そこで額に烙印を押されるというのが、この条文の主旨であると思われる。

この第127条から第193条ぐらいまで、民法（勿論、古代法であるから純粋な民法的内容だけに届かず、この第127条のように虚偽の事実の述べたら額に烙印を押されるといった刑事罰も含まれるが）ことに親族法と相続法といった家族法（特に婚姻法）が多く規定されている。

この条文の文末にある動詞 $u_2\text{-gal-la-bu}$ が「額に焼鐔か何かで刻印をつける」かあるいは単に「青銅等の刃物で顚顚^{こめかみ}部分を剃られる」かは正確なところがわからないが、いずれにせよ他人にもすぐわかるように、何らかの刻印が記されたものと解釈できよう。

この第127条のように、アウィルム階層に属する妻女や女神官なども、古代バビロニア社会の中である程度特別な「法的保護」が与えられており、特にその者達に対する誹謗や誣告には額に刻印を打つという刑事罰が科せられていたことが、この条文から直ちに分かるのである。

この第127条を平易な訳文で示すと「ある者が、高位の女神官あるいは他人の正妻に対して後ろ指をさした（誹謗あるいは中傷した）ものの、その女達についての罪ある証拠をきちんと挙証することが出来なかった場合には、その者は裁判官の前に連れていかれ、額に刻印を打たれることになる」というのがだいたい筋の通った解釈だと思われる。この第127条を原田慶吉氏の考えた訳文としては「もし人がエントウム（110条参照）または人の妻に対して、指を指し伸して、確証せざりしときは、〔彼等〕その者を裁判官（複数）の前に【彼を】投げ付け（連れ行き）、もつて彼の顚顚をきる。」という内容で解釈しており、原田氏はその後の〔註〕で（28

行)「貞操に対する悪評のしるし。」と記しておられる。これに対して中田一郎氏の訳のほうは「もし人がウグバブトゥムあるいは他人の妻にうしろ指を差し(侮辱し)たが、(その不法行為を)立証しなかったなら、彼らはその人を裁判官たちの前で鞭打ちに処し、そして彼の(頭髮の)半分を剃らなければならない。」[loc. cit., p. 37]という原田氏とは異った処罰の解釈をしておられる。

筆者の私見を述べさせてもらえば、この第127条に関する中田氏の翻訳にはかなり厄介な問題があるようにわれる。まず、楔形文字文の第4行目にある i-na-ad-du-u₂ という動詞を「鞭打つ」とまで拡大解釈しているようであるし、第5行目の u₂-gal-la-bu のほうは「(頭髮の) 半分を剃らなければならない」とかなり限定して解釈しているが、はたして当時頭髮の半分だけを剃っただけの刑罰ですんだのであろうか。古代インドの『マヌ法典』(B.C.200～A.D.200年位)の第九章第237条には「尊者(グル)、尊師)の寢床を犯した者に対しては女の陰部を刻印した焼印を捺し、スラー酒を飲んだ者に対しては酒店の(盃を刻した)焼印を捺し、バラモン階級の者の金銭を盗んだ者に対しては犬の脚形の焼印を捺し、またバラモン階級の者を殺した者に対しては頭部の無い死骸の焼印を額に捺されるべきこととする」とあり、そうした焼印を捺された者達はインド社会のすべてから排除されて結婚も出来ず、親類縁者からも遺棄されて屈辱のうちにこの世を徘徊することがマヌ法典の教え、として定められている。しかしながら、バラモン教によって定められた苦行をすでに終了したアーリア民族の上位三階級は、王の命令でこの額に焼印を捺されることが免除されるが、最高額の罰金を支払わなければならないことがこれらの条文に続くマヌ法典第九章の第240条に続けて記されている。

古代インドのマヌ法典が制定されたのは、古代バビロニアにおいて「ハンムラビ法典」が制定されてから1600～2000年という長い歳月が流れた後

ではあるが、古代社会を比較法学的に考察した場合、やはりこの gallabu という動詞の意味するところは、「烙印を焼鑊で捺した」とみるほうが、解釈上よいのではなからうか、と思う次第である。

その一方、中国の秦代（B.C.221～B.C.206年）でも、おそらく窃盗罪に關しては、それを犯した犯人の人数や贓物の総計によって夫々刑罰が定められていたようで、犯人の数が五人未満の場合、「顔に入墨を施し、強制労働に従事させた」と解釈される文献「睡虎地秦簡^{スイコチシカン}」が、1975年に湖北省の雲夢縣睡虎地にあった第11号墳墓から発掘されており、その睡虎地秦簡の第371簡と第372簡には「害盜別徼而盜、駕（加）皐之。●可（何）謂駕（加）皐。●五人盜、臧（贓）一錢以上、斬左止、有（又）黥以爲城旦。不盈五人、盜過六百六十錢、黥劓（劓）以爲城旦。不盈六百六十到二百廿錢、黥爲城旦。不盈二百廿以下到一錢、遷（遷）之。求盜比此。」となっていたが、このような強盜の場合はともかく他人の婦女子の悪口に対して入墨をおこなったという刑罰はこの後はあまり見当たらない。

第128条（原文・逐語訳）

sum-ma a-wi-lum aš-ša-tam i-hu-uz ma ahāzu 取る、罰む

もし 人が 妻を 娶り、

ri-ik-sa-ti ša la iš-ku-un sinništum si-i rikistu 契約、誓券

誓約書を その ないならば 作ら 女は その sinništu く mi₂

u₂-ul aš-ša-at

決して 妻でない


第128条（試訳）

ある者が、（自分の）妻を娶ったが、誓約書（証書）を作成して（その婚姻を公にしないようならばそしてそのことで）法的措置を完成しないならば、その女は（アウィルム階層の正式の）妻女とはならないものとする。

第128条の解釈

この条文は、アウィルム階層に属する男が結婚をする場合、必ず粘土板文書で「嫁のために法律上の婚姻契約に関して誓約書を作成する」ことが必要で、もしそれが作成されない限りその婚姻が無効で正式に妻と呼ばれないばかりか妻女としての法的地位も与えられなかったことを示している。

勿論この婚姻契約は粘土板の契約文書によって締結されたと思われるが、古代バビロニア時代にもその担い手であったアウィルム階層は（正）妻を娶る際に、きちんとした婚姻契約を結ぶ必要があり、そうした契約はユダヤ法を通じて西欧の婚姻形態に今でも影響を与えていると思われる。そしてこの第128条のような文書によって認められていない婚姻は無効とされていた。このことは正式な妻であるかどうか種々の財産問題にどのように関わってくるかが重大であったので、このように規定されていたのだろう、と考えられるのである。

セム系民族である古代バビロニア社会のアウィルム階層が、その社会で認められた形式でなされた婚姻契約は、その後ユダヤ人社会においても現在に至るまで維持され、現在「イスラエル」という世俗国家が成立した後も、このような婚姻契約は宗教上の問題として「ラビ裁判所」で取り扱われ、ハンムラビ法典第128条に出てくる ri-ik-sa-ti という契約文書の形式を継承したヘブライ語の「 ケトゥバー婚姻契約書 (ketubah)」

という約束を締結した文書を作製して、身分だけでなく財産関係もはつきりさせておくことが求められている。

そのような背景があるからこそ「ある者が妻を娶ったが、その妻のために婚姻契約書をつくらなかった場合は、この女はその者の妻ではない」という条文によって、粘土板の婚姻契約書の作成が義務づけられていたと思われる。ローマ法学者であった原田慶吉氏はこの第128条の訳として「もし人が妻を娶りて、彼の女の（に関する）契約書を定めざりしときは、その女は決して妻に非ず。」と記しておられ、後に翻訳した中田一郎氏の訳文は「もし人が妻を娶ったが、彼女に関する契約⁹⁴を結ばなければ、その女性は妻ではない。」という文章を記し、さらに中田一郎氏は、この第128条の下に註をつけ、更にバビロニア時代の婚姻について p. 113から p. 131までかなり詳細に「注解」の形でその内容を説明しておられる。それではここでその脚註と「注解」の一部分を転載しておくことにしよう〔ibid.,〕。

中田氏脚註、94) ここでの契約は、テルハトゥムの持参以前に行われる契約を指し、将来の花婿あるいはその父親と将来の花嫁の父母との間の合意を意味する。この契約は婚姻契約書（marriage contract）と呼ばれる文書とは区別しておく必要がある。この部分の注解を参照〔loc. cit., p. 37〕となっており、その中田氏の「注解」は以下の通り。

§§128-184 結婚・家族・相続

§128は「妻」を法的に規定したパラグラフとも言える。§§129-132はおもに結婚している女性の不倫／不倫疑惑、あるいは強姦について（§§153-158を参照）、§§133-136は兵役中に捕虜になったり、自ら失踪したりして長期間不在の夫を持つ妻について、§§137-149は結婚関係の解消他について、§150は夫から妻への贈物（ヌドゥンヌム）について、§§151-152は夫婦の債務責任について、§§153-158は不倫の妻による夫殺し、あるいは結婚している女性に対する近親者による性犯罪について（§§129-132を参

照)、§§159-161は仮結婚 (inchoate marriage) について、§§162-167は財産相続について、§168と§169は子供の廃除について、§§170-171は女奴隷が生んだ子供の認知について、§§171 b-174は妻の財産とその相続について、§§175-176 bは奴隷とアヴィールムの娘の結婚によって生まれた子供およびこの夫婦の財産の帰属について、§177は幼い子供を持つ寡婦の再婚について、§§178-184はウグバブトゥム、ナディートゥム、シュギートゥム、クルマシートゥム、カディシュトゥム、セクレートゥムなど、特別な身分あるいは職業の女性が結婚する際の持参財について、それぞれ扱っている。

ここではパラグラフを追っての解説は省略し、ハンムラビ「法典」に見る古バビロニア時代の結婚とそれに関する若干の問題を主にウエストブルックによって概観することにしたい。⁶⁶⁾

「娶る」

古代のバビロニアでは、結婚することを、男性側からは「～を妻とするために娶る」あるいは「～を夫婦となるために娶る」と言った。「娶る」と訳したアハーズム (*ahāzum*) という語は、「捕える」を意味する極く普通の動詞である。これに対して女性の側では、花嫁となる女性自身を主語とした表現はなく、女性の保護者である父親——父親が死亡している場合は兄弟——が「～を妻とするために与える」あるいは「～を夫婦になるために与える」と言った。

ハンムラビ「法典」では、「妻とするために」あるいは「夫婦となるために」という言葉が省略されており、男性の側からの表現として「～を娶る」 (§§144-145) が使われている。また、「妻を娶る」 (§§128、148、162-163、167)、あるいは「女性を娶る」 (§151) という表現も見られる。女性自身を主語とした表現がないことはハンムラビ「法典」においても同じ

で、女性の保護者である父親あるいは兄弟が（娘あるいは姉妹を）「嫁がせる（直訳：夫に与える）」と表現した (§§183-184)。女性の意思に多少の配慮がなされていると思われる表現として、「彼女の意にかなった夫が彼女を娶ることができる」 (§§137、156、172) という表現があるが、この場合も男性を主語とした表現であることに変わりはない。⁶⁷⁾（女性が「～の家に入る」という表現については後述する。）

66) R. Westbrook. *Old Babylonian Marriage Law. AfO. Beiheft.* 23. 1988.

67) P. Koschaker. *RvSGgH*, pp. 114-119; R. Westbrook. *OBML*, pp. 10-16.

中田氏の「注解」は、この後「結婚に至るまで」「結婚の解消」と続くがあまりにも長くなるので、この第128条に関連する「結婚に至るまで」以外は省略し、古バビロニア時代においては結婚に至るまでに次のような段階があったと考えられる、という中田氏の解説だけ引用しておくことにしたい。

(1) 仮結婚成立前の段階

夫となるべき男性あるいはその親と、妻となるべき女性の親との間で話し合いが行われ、結婚に関する合意が成立する。この合意については、エシュヌナ「法典」§§27-28が参考になる。

もし人が（別の）人の娘を、彼女の父と母の意向を尋ねることなしに娶り、彼女の父と母に対してキッルム儀式と契約を行わなかったなら、彼女が彼の家で1年間住もうとも妻ではない。（エシュヌナ「法典」§27）

もし彼が彼女の父と母に対して契約とキッルム儀式を行って、彼女を娶ったなら、彼女が（別の）人の膝で捕えられたとき、彼女は死ななければならない。彼女は生きることはいできない。（エシュヌナ「法典」§28）

女性の父母の意向を尋ね、なんらかの合意に達すると、これが彼女の父母との契約とキッルム儀式⁶⁸⁾という形を取って具体化した。エシュヌナ「法典」§28には女性の父母の意向を尋ねることについての言及がなく、契約とキッルム儀式のみが言及されているのはそのためであろう。⁶⁹⁾

ここでの契約やキッルム儀式がいつの時点で行われたのかをこれらのパラグラフから確定することは困難である。ウエストブルックは、この契約とキッルム儀式がテルハトゥム（後述）の持参以前に行われ、テルハトゥムの具体的内容が、この契約で決まったと考えている。そして、この時点からテルハトゥムの持参までの期間がいわば婚約の期間に相当するとみる。⁷⁰⁾しかし、ヤロンは、契約やキッルム儀式がテルハトゥム持参のあとに行われたと考えており、両者の意見はかみ合わない。⁷¹⁾

ハンムラビ「法典」で特定の女性が妻かどうかの問題に触れるのは§128である。

もし人が妻を娶ったが、彼女に関する契約を結ばなければ、その女性は妻ではない。

ハンムラビ「法典」の§128には、女性の父母の意向を尋ね合意を得ることおよびキッルム儀式についての言及はないが、§128の背後にはエシュヌナ「法典」§§27-28が扱っているのと同じ問題があったことは疑いない。⁷²⁾

女性の身分が「妻」に変わるのは、次に述べるように、通常はテルハトゥムの持参による。ただし、エシュヌナ「法典」§28とハンムラビ「法典」§128は、いずれも契約を結婚の必須条件としてはいるが、テルハトゥムを結婚の必須条件としてはいない（ハンムラビ「法典」§139を参照）。

なお、この契約（*riksatum*）が書かれた契約書を意味しないことは、

すでにグリーンガスが明らかにしたところで、⁷³⁾ウエストブルックもこの考え方を受け入れている。⁷⁴⁾グリーンガスによると、ハンムラビ「法典」で書かれた文書を指すときは、必ず「文書 (*tuppum*)」 (§§37、48、a = 66 = A、151、171 b、177-179)、「捺印証書 (*kanikum*)」 (§§104-105) あるいは「捺印証書 (*kunukkum*)」 (§§5、150、165、179、182-183) などの語が使われており、契約 (*riksātum*) が文書の意味で使用されることはない。⁷⁵⁾

68) キッルム (*kirrum*) は、もともとビールを入れる大きな容器のことであるが、R. Westbrook や R. Yaron は B. Landsberger, “Jungfräulichkeit: Ein Beitrag zum Thema ‘Beilager und Eheschliessung’”. in *Symbolae Iuridicae et Historicae Martino David dedicatae* II, 1968, pp. 76ff. にしたがって、宴会を意味すると考えている (R. Westbrook. *OBML*, p. 30, n. 18; R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*, 1988, p. 201). 69) R. Westbrook, *OBML*, p. 30.

70) R. Westbrook. *OBML*, pp. 30f. なお、G.R. Driver-J. C. Miles. *BL. I. pp. 245-249* をも参照。71) R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*. 1988, p. 173.

72) R. Yaron は、エシュヌナ「法典」§§27-28の背景として、かけ落ち同棲した女性が、のちにかけ落ちた男性とは別の男性と性交渉を持ったことが問題となり、裁判になったことが考えられるとしている。この場合、この女性が正式な妻であるか否かが大きな争点になる。§27は「彼女は妻ではない」という帰結になり、姦通罪は成立しなかったが、§28では、かけ落ち同棲中に結婚に必要な手続きを済ませ正式な結婚関係が成立していた場合で、当然裁判の結果は「彼女は妻である」と言うことになり、当の女性は姦通罪を犯したと判断され、死罪となったと説明する。その上で R. Yaron は、ハンムラビ「法典」の§§128-129の背後にエシュヌナ「法典」§§27-28を見ることが可能であると、その根拠の1つとしてエシュヌナ「法典」§§27-28が強姦罪を扱った§26と一緒にまとめられているように、ハンムラビ「法典」でも§128が§127 (ウグバプトゥムと他人の妻に根拠なく不貞の疑いをかけたケース)、§129 (不倫の妻のケース)、§130 (強姦のケース)、§§131-132 (妻の不倫が問題とされたケース) などと一緒にまとめられている点を指摘している (R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*, 1988, pp. 202-205)。73) S. Greengus, *JAOS* 89, pp. 506-514.

74) R. Westbrook, *OBML*, pp. 29f.

75) いわゆる婚姻文書のそもそもの目的は、夫あるいは妻の身分や権利にかかわりうる重要な取引やテルハトゥムや持参財の授受を記録することであって、婚姻の事実を証明することではなかった (S. Greengus, *JAOS* 89, pp. 506-514)。R. Yaron はエシュヌナ「法典」の場合、契約 (*riksātum*) が契約書を意味した可能性を否定できないのではないかと述べているが (R. Yaron, *The Laws of Eshnunna*, 1988, p.

201)、一般に古代メソポタミアの証書が一定の取引が行われた事を示す補助的手段にしか過ぎなかったことに鑑みても、S. Greengus の見解の方がより説得力があると思われる (S. Greengus, *JAOs* 89, p. 513)。

なお以下に、この第128条の脚註で記されているテルハトゥムに関する「注解」のところだけ転載させていただくことにしたい。

テルハトゥム

テルハトゥム (*terhatum*) は、基本的には現金で、仮結婚——仮結婚の段階を経ない場合は結婚——の際に花婿あるいは花嫁の父親から花嫁の父親に与えられた。このテルハトゥムは、そののち、花嫁の父親から彼女の身に付けて夫 (あるいは夫の父親) に返され、夫 (あるいは夫の父親) の管理下におかれたが、あくまでも妻に所属する財産の一部で、夫の死後は実質的に妻の所有に帰した。しかし、妻の死後は彼女の子供たちがこれを相続することになっていた。もし、妻が子供を生むことなしに夫に先立って死亡した場合は、妻の持参財 (シェリクトウム) は妻の父の家に返されるが、テルハトゥムは夫に返されることになっていた (§§163-164)。⁹⁴⁾

このテルハトゥムを花嫁料と理解して売買婚説を唱えたのがコシャカーであった。コシャカーは、1917年に出版した著書⁹⁵⁾で、テルハトゥムを花嫁と引き換えに支払う花嫁の代金すなわち花嫁料であったと考え、古バビロニア時代の結婚を売買婚と特徴づけた。コシャカーは、当初、古バビロニア時代には、支払われる時期によって、テルハトゥムが手付金としての役割 (婚約の際) と花嫁料 (結婚の際) としての役割の2つの役割を持っていたと考えた。⁹⁶⁾しかし、1950年の論文では、ドライバー・マイルズの仮結婚 (*inchoate marriage*) の考え方を取り入れ、これまで婚約と考えていた段階を仮結婚の段階と考え、仮結婚に際して与えられるテルハトゥム手付金ではなく、花嫁料そのものであると述べ、この花嫁料の支払によ

って、花婿は、花嫁の取得権 (*jus ad rem*) を獲得したと旧説を改めている。そして、結婚は、花嫁が人法上の支配権者である花嫁の父親から新しい支配権者である花婿へ引き渡されること (*traditio puellae*) をもって完成すると考えた。⁹⁷⁾

94) R. Westbrook, *OBML*, pp. 99f.

95) P. Koschaker, *Rechtsvergleichende Studien zur Gesetzgebung Hammurapis*, Leipzig. 1917, pp. 130-149.

96) P. Koschaker のこのような考え方は、E. Cuq (*Études sur le droit Babylonien*, Paris, 1929, p. 31)や G. R. Driver-J. C. Miles (*BL*. I, pp. 259-265)などから批判を受け、後に一部を修正せざるを得ないことになる。

97) P. Koschaker. “Eheschliessung und Kauf nach alten Rechten, mit besonderer Berücksichtigung der älteren Keilschriftrechte”, *ArOr* 18. 1950, pp. 226-228. したがって、(夫婦の) 肉体の結合 (*copula carnalis*) をもって結婚が完成するという考え方は、P. Koschaker の売買婚説とは相容れない考え方といえる。

しかし、コシャカーの売買婚説にはいくつか問題があり、現在では一般に受け入れられているとはいえない。これらの問題点の詳細な紹介と批判については、ウエストブルックの研究⁹⁸⁾を参照していただくとして、ここではその問題点だけを紹介しておきたい。

(1) ハムラビ「法典」§139から、テルハトゥムのない結婚が存在したと考えざるを得ない。⁹⁹⁾もし結婚が売買婚であったとすると、代価(テルハトゥム)の支払がなかった結婚が存在したことになり、これは売買婚理論に矛盾する。

(2) もしテルハトゥムが花嫁の代価であるとすれば、余りにも少額で、¹⁰⁰⁾花嫁の正当な代価とは考えられない。

(3) 仮に、テルハトゥムが花嫁の代価であったとしたら、花婿から花嫁に贈られる贈物——ハムラビ「法典」ではヌドンヌム (*nudunnûm*) とよばれた——が存在したことは、理解できなくなる。

(4) 古バビロニアの法は、花嫁を夫の財産としては扱っていないので、妻は売買の対象とは見なしえない。

ウエストブルックは、結婚はそれ自体で1つの法的制度を形作っている、他の法制度との間に類似を見つけることは無理であるとしながらも、結婚を敢て何かとの類比で理解しようとするならば、商品の売買ではなく養子縁組に類比を求めるべきであるとする。養子縁組では、養父が幼児を自分の息子とするために子供に対する権限を譲り受けるように、結婚では、男性が女性を自分の妻とするためにその女性に対する権限を譲り受けるのである。ただし、養子縁組においては、テルハトゥムに当たるものはない。なお、テルハトゥムについては、コシャカーの花嫁料という解釈のほかに、贈物という解釈¹⁰¹⁾あるいは初夜権の代価という解釈¹⁰²⁾などあるが、いずれも説得性を欠く。ウエストブルックは、テルハトゥムによって妻になるべき女性を「捕える=娶る (*ahāzum*)」権限を得たと考える。このテルハトゥムは支払うべきもので、もし妻の引き渡しまでに支払わなければ、花婿側の債務として扱われた。したがって、ウエストブルックによると、これは単なる贈物ではなく、妻に対する監督権を彼女の両親から譲り受けるための支払い (*payment for the right to control over their daughter*) であった。¹⁰³⁾

98) R. Westbrook. *OBML*, pp. 53-58.

99) P. Koschaker は§139が結婚を売買とは見ないシュメール人の結婚制度を反映していると説明する (*RvSGH*, pp. 152f., 159. 160-163. 178-183; *ArOr*18, 1950, pp. 229-30)。この考え方は、その後 J. Renger によって受け継がれている。レンガーは古バビロニア時代に花嫁料の支払を伴う結婚と伴わない結婚があったと考えている (*OrNS* 42, 1973, p. 265)。

100) 現存の史料によれば、テルハトゥムの最高額は、銀40シキル (約333.2グラム) および奴隷1人 (*VAS* 8. 4-5)、最高額は1シキル (*VAS* 9. 192-193)、通常は銀5-10シキルであったと考えられる (R. Westbrook. *OBML*, p. 55, n. 49)。通常の額だと、奴隷1人の値段かそれ以下の額ということになる。

101) A. van Praag, *Droit matrimonial*, pp. 147-148.ただし、支払わない場合は、男性側の債務となり、債務が完済されるまでは花嫁の引き渡しを要求できないと考えられた。したがって、テルハトゥムは単なる贈物ではない。

102) van der Meer, *PA31*, 1934, pp. 121-123.ただし、すでに子供を有する女性に

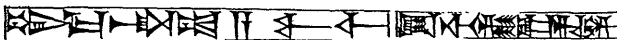


テルハトゥムを支払った例 (CT48, 53) が知られているので、この考え方は正しくないと思われる。



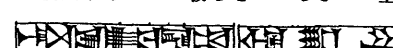
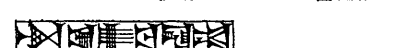
103) R. Westbrook, *OBML*, p. 60. C. Wilcke も結婚と商取引の間にある種の類似点が存在することを認めながらも、テルハトゥムを花嫁料と考えることを拒否し、これを *bridal gift* と呼ぶ。また将来の花婿がテルハトゥムを与えることで、花嫁自身に対する何らかの権利を得るのではなく、花嫁の父親に対する請求権を得ることになる点を強調している (“Familiengründung im alten Babylonien” in *Geschlechtsreife und Legitimation zur Zeugung*, ed. E.W. Müller, Freiburg/München, 1985, pp. 252-259)。[loc. cit., p. 113~p. 128]

古代バビロニア時代には、中田一郎氏がこのように詳細に解説しているように、一般的に女性が結婚し、アウィルム階層の者となるにはかなり面倒な手続きを必要としたが、現在のイスラエルにおいては、^(α)ユダヤ人同志の結婚において、それに先立つ「婚約」に一般的な家族法上の意義はなく、婚約違反をした場合は、ただ「損害賠償の請求権」が発生するという一般的な西欧民事法上の規範が生じるだけである。

α) アリエル・ビン・ナン著、半田伸訳『イスラエル法入門』p. 81 法律文化社1996年刊、参照のこと。

第129条 (原文・逐語訳)

	
Sum-ma aš-Sa-at a-wi-lim itti zi-ka-ri-im	
もし 妻が 人の と 男	
	
Sa-ni-im i-na i-tu-lim it-ta-aš-bat	itulu 横になる
他の いる時 横になって 捕まったなら	utlu, tul 横
	
i-ka-zu su-nu-ti ma a-na me-e	kasū 縛る
縛り上げて、彼らを	中に 水の

	
i-na-ad-du-u ₂ su-nu-ti sum-ma be-el aš-ša-tim	
投入する 彼らを もし 主が 妻の	
	
aš-ša zu u ₂ -ba-la-aš u ₃ šar-ru-um	aš-ša-zu = aššatu šu
妻を 彼の 救助するか 国王が	balātu 生きる、教う
	
wara-zu u ₂ -ba-la-at	wara-zu < waradu šu
奴隷（その男）を 救助するならば（許す）	

第129条（試訳）

ある者の妻女が、他人の男性と寝ている時に捕えられたる場合には、その二人は縛りあげられて（ともに）水の中に投げ込まなければならないが、その妻の亭主が自分の妻の救助を願い出たる時、国王がその男の方（奴隷）を救助するならば、その妻も許されるものとする。

第129条の解釈

この条文の末尾には若干の省略があるようで、どうもはっきりした（筋の通った）解釈が出来ないが、浮気をしていた妻の亭主が妻の処刑を許してくれるようお願い出た時、国王が自分の奴隷（そのような行為をした男はすでにその時点で zi-ka-ri-m から wa-ra-zu（奴隷）の身分におとされるのかどうか不明である）を許すなら、その妻もまた許されるもの、と解釈するのが妥当なように思われる。日本でも、江戸時代に「享保の改革」によって編纂され、「公事方御定書」によって定められた判例集には、浮気した女房の処罰が記されているが、姦夫からは五両または七両二歩の内済金を取り、あるいは「二つに重ねて四つに切る」、などとも俗説で言われていたが、古代法によってこのように明確な処罰が定められていたようなことはなかったように思われる。

古代バビロニアにおいては、このように妻が貞操を守る義務だけが法によって規定されており、夫の場合は何等制限されてはいなかった。この第129条に関する原田慶吉氏の訳文としてはあまり法的な側面に触れておらず、「もし人の妻が、他の男と共に横われる中にて、取り押えられたるときは、〔彼等〕彼等を縛して、水に彼等を投ず。もし妻の主が彼の妻を生かしむるときは、国王また彼の奴隷を生かしむ。」とだけ記して、その後原田氏の〔註〕が入っており2部65参照。(行)2部69参照。とその場所を示して「(53行) 人民はその王に対しては全部奴隷である。」という理由からして、この条文の末尾に *wara-zu* という文字をわざわざ入れたのだ、と解釈しておられる。

その一方で、中田一郎氏の翻訳は「もし人の妻が別の男性と一緒に寝ているところを捕えられたなら、彼らは彼らを縛り、水に投げ込まなければならない。もし(その)妻の主人(直訳:妻の所有者)が彼の妻の生命を救いたければ、王は彼の家臣(直訳:奴隷)(共犯者)⁹⁵⁾の生命もまた救わなければならない。」という形でマル括弧(バーレン)による直訳を補う形の解釈を加えて、その翻訳を補完している。

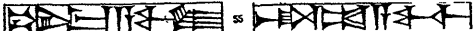


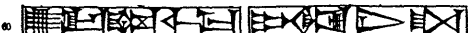

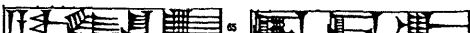

さらにその説明として中田氏はその後に脚註を入れ

95) F.R. Kraus, *Von mesopotamischen Menschen*, p. 97. M.T. Roth. *Law Collections*, p. 105 を参照。を先ず掲げて、その文章の解説の代りとしている。

[loc. cit., p. 37]

中田一郎氏は、この脚註にもあるようにクラウス氏の説をとって2つのマル括弧(バーレン)によってその直訳として「奴隷」そして第二のマル括弧内に「共犯者」としているが、はたしてこのような男女間の倫理的な事件に現代刑法でいう「共犯者」という訳語が、正当なものであるかどうかは疑わしいと言わざるをえないだろう。

第130条（原文・逐語訳）

	
Sum-ma a-wi-lum aš-ša-at a-wi-lim	
もし 人が 妻を 人の	
	
Sa zi-ka-ra-am la i-du-u2 ma	idū 知る
所の 男を ないが 知ら	
	
i-na bīt a-bi ša wa-aš-ba-at	ašābu 住む、留まる
で 家 父の 自分の 寄宿する	
	
u2-kab-bil-si ma i-na zu-ni ša	kabālu 襲撃する、押しつける zūnu 鋸、鋸
暴力で に ふところ その	
	
it-ta-ti-il ma iṣ-ša-ab-tu šu	
横になっていて、 捕まえたなら 彼を	
	
a-wi-lum šu-u2 id-da-ak	
人は その 殺されるが	
	
sinnistum šī-i u2-ta-aš-šar	mašāru 去る、自由に行く
女は その 自由に行く	

第130条（試訳）

ある者が、まだ夫と（性的）交渉がないまま、その（自分の）父の家に住んでいる他人の妻を襲い、暴力をもってその女のふところ（股間？）に横になっているところを捕えられたる場合には、その者は死罪に処せられるが、その女の方は放免されるものとする。

第130条の解釈

まだ夫と（性的な）交渉がないまま、その父の家に（継続して）住んで

いるということは、アッカド語の表現がまだそれ程に具体的でないし、その状態がいかなるものかその当時その社会で暮らしていない以上明らかではないが、今日でいうところの婚約下に置かれていて、性的には未だ処女あるいはそれに近い存在である状態をいうのではないだろうか。そのような女を襲って、「ふところ（胸）あるいは（股間）に横になる」という表現は多分すでに強姦が「既遂状態」となっていることを意味していると思われる。このような強姦罪を犯した男は死罪（殺されなければならない）となるが、女のほうは無罪放免となる、というのが本条の規定するところと思われる。

すなわちこの第130条を現代文で言うと「婚約はしたがまだ乙女だった娘をその実家の父親の家で強姦しているところを見つかった男は死罪に処せられる」というのがこの規定の内容であろう。この条文に関する原田慶吉氏の訳文としては「もし人が、人の妻にして男を未だ知らずして、その父の家の中に止宿せる者に暴力を加えて、彼の女の膝に横わりたるに、〔彼等〕彼を取り押えたときは、その者は殺され、その女は放免せらる。」となっていた。それに対して現代語文よる中田一郎氏の訳文のほうは「もし人が（未だ）男を知らず（男性と性的関係を持ったことのない）、（まだ）彼女の父の家に住んでいる（別の）人の妻に猿轡をはめて、彼女の膝で寝て、彼らが彼を捕えたなら、その人は殺されなければならない。その女性は釈放されなければならない。」という文章で、多分3行目の *u₂-kab-bil-ši* というアッカド語単独か、更に続く *it-ta-ti-il*（5行目冒頭）を直前の4行目 *zu-ni* と合せて「猿轡をはめて」と「（横になって）寝ている」との両方の意味に解釈している、と思われる。

中田一郎氏はこの第130条の解釈に関連して、バビロニア時代の「結婚・家族・相続」という注解の中に以下の記述をしているので、前の第128条の「注解」の途中に続くものであるから、ここに転載しておくこと

にしたい。なお中田氏はこの項目を「(2)の仮結婚の段階」という古代バビロニア婚姻法の第1段階と考えて解釈しているようである。

仮結婚 (inchoate marriage)⁷⁶⁾は、男性の側が女性の親にテルハトゥムを持参してはじめて成立し、女性は「妻」と呼ばれ、男性は「夫」と呼ばれた。仮結婚の期間中、妻は引き続き自分の父の家に住み続ける場合 (§§ 130、159-161)と夫の家、すなわち自分の義父の家に嫁として、移り住む場合がある (§§142、156)。前者の場合、妻に対する監督権は実父にあるが、後者の場合は彼女の義父が彼女に対する監督権をもっていた。

なお、§156で義父が処女の嫁を犯したことは、重大な人権侵害になって、§130のような強姦(死罪)とみなされず、また§155の場合のように姦淫(水に投げ込まれる)ともみなされないのは、義父が結婚の当事者とみなされていたからであろう。⁷⁷⁾また、テルハトゥムを持参しなくとも、*ah āzum*の行為があればその時点で結婚が成立したことになる事はすでに述べた。§139はテルハトゥムなしでも有効な結婚がありえたことを示している。

テルハトゥムを持参することによって、花婿は花嫁を *ah āzum* する権利を得る(ただしこの時点でも、花婿あるいは花嫁の親が、娶る [*ah āzum* する] ことによって結婚が完了することを妨げることがありえたことは、§§159-160が示すとおりである)。そして、第三者に対しては、テルハトゥムが持参されたことでこの男女が実際に結婚したと同じ効果を持つ。§130 (エシュヌンナ「法典」§26をも参照)の「(未だ)男を知らず、(まだ)彼女の父の家に住んでいる(別の)人の妻」とは、まさにこのような仮結婚の状態にある女性のことであるが、この女性に猿轡をはめその膝で寝るということは、死罪に当たると考えられた。メソポタミアの「法典」には結婚していない女性に対する強姦を扱ったパラグラフは無いが、古バビロニア時代の書記生が粘土板 (YOS I 28)⁷⁸⁾に書き残した結婚して

いない女性の強姦に対する賠償義務（せいぜい被害者の女性と結婚することとで済んでいる）が当時の社会の一般的法慣行を反映しているとするなら、§130の処罰がいかに厳しいか、換言すれば仮結婚中の女性がいかに第三者の侵害から守られていたかを理解することができる。

仮結婚の期間は、個々のケースによって異なる。基本的には、花嫁が子供を生む年齢に達するまでの間、あるいは花婿が自分の家を持つことができるようになるまでの間と考えるのが適切である。⁷⁹⁾ [loc. cit., p. 118-119 但しアンダーラインは筆者による。なお *aḥāzum* は「娶る」というアッカド語の動詞]

76) この考え方を最初に示したのが G.R. Driver-J. C. Miles, *AL*, 1935, pp. 167. 173f. である。









77) R. Westbrook は §156 では義父が嫁を *aḥāzum* したと考える (*OBML*, p. 59)。その場合、息子はのちに父親から彼女を *aḥāzum* することになる。しかし、§155 では、息子がすでに自分の妻を性的に知り、事実上 *aḥāzum* したことになっているので、義父の行為は、姦淫と見なされると述べる (*OBML*, p. 37)。

78) M.T. Roth. *Law Collections*, p. 44.

79) G.R. Driver-J. C. Miles. *BL* I, p. 262. R. Westbrook. *OBML*, p. 36, ただし, S. Greengus, *JCS* 20, pp. 55-72; C. Wilcke, "Einige Erwägungen zum Paragraph 29 des *Codex Lipiteštar*", *WO* 4. 1968, p. 154 を参照。[ibid.,]

これらの学者の意見を参考にして中田氏の翻訳では、アッカド語の *u₂-kab-bil-ši* を他の単語と合して熟語のように「猿轡をはめて」と訳しておられると思われるが、これらの単語だけでそのような具体的な意味まで含んでいるのかどうか、はなはだしく疑わしいと言わざるを得ない。

第131条（原文・逐語訳）

				
su-ma	aš-ša-at	a-wi-lim	mu-za	mu-za = mutu ša
もし	妻は	人の	夫が	その
				
u ₂ -ub-bi-ir-ši	ma	itti	zi-ka-ri-im	ša-ni-im
非難しても	と共に	男	他の	abāru 非難する、告発する
				
i-na	u ₂ -tu-lim	la	iṣ-ša-bi-it	ni-iš
時	横たわる	ないなら	捕まえ	手を挙げ
				
i-za-kar	ma	a-na	bīti	ša
宣誓して	に	家	彼女の	帰る(ことができる)

第131条（試訳）

ある者の正妻が、その夫から（浮気の）嫌疑をかけられたものの、他の男性と寝ているところを捕えられたわけではない場合に、その妻女は神にかけて宣誓して、しかる後に自分の実家へと帰ることができる。

第131条の解釈

夫から浮気の疑いをかけられた妻は、その浮気の現場に夫が踏み込まれない限り、神の前で宣誓してその無実を訴えることができ、そのような神の前で宣誓した後に自分の実家に帰ることができたのである。しかしながらこれで離婚が成立したわけではなく、実家へ帰ることで夫と同じ家に住むことを断つことができるだけ、と解釈するべきであろう。つまりある夫が妻に対して密通の疑いがあると告発しても、それがきちんと夫の側から立証されなかった時は、その妻は神前で「自分が潔白である」という内容を意味するようなある決った語句の宣誓をたてさえすれば、それだけで法的な手続きはすんだものとして、実家に帰ることができたと解釈できるの

である。だからと言ってこれで正式に離婚の手続きがすべて済んだのかどうかはわからない。この条文に関する原田慶吉氏の訳は「もし人の妻〔ありて〕、彼の女の夫が彼の女に疑をかくるも、他の男と共に横われる中にて、取り押えられざりしときは、〔彼の女は〕神のもとに誓いて、彼の女の家に帰る。」となっており、それを現代文風にした中田一郎氏の訳文は「もし人の妻が自分の夫に起訴されたが、別の男性と一緒に寝ているところを捕えられたのでなければ、彼女は（自分が潔白であることを）神に誓ったのち自分の家に戻ることができる。」と翻訳しておられる。







この第131条の条文を、アッカド語で書かれている以上に詳細な形で解釈している文献も少ないが、ホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏は「夫が妻に対し、密通罪の疑ありとして告発したがそれを立証できなかった時は、その妻は自分が潔白の身である誓いの証文を立てれば、その件は法的に解明されたことになっていた」〔loc. cit., p. 214〕とだけ記し、ハンス J. ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏も第129条から第132条までの規定を同時に取り扱って、その第129条だけが例外的な規定で、それ以下は鈴木佳秀氏の訳で以下のように記している「……むしろ、まず違法行為が隠れた場所で行われ、それが後になって、おそらくは噂によって、事が明るみに出るというのが、ごく一般的であったと言うべきであろう。妻が自分に向けられた世間の嫌疑を晴らす道は、潔白の誓いを行うか（第131条）、河による神判に訴えるか（第132条）であった。強姦を行う者に対し、既婚の女性の強姦は死刑であると規定し、威嚇している。それがハンムラビ法典の姦通罪の箇所で触れられているのは、ごく自然である。」

〔loc. cit., p. 161〕と記述し、その後で「第130条は、まだ夫と性的な交渉を持つに至っていない新妻が問題の対象となっている。こうした妻の法的立場は〔現代では〕「婚約者」のそれであるが、彼女は法的には「正式な妻」とみなされている。これと対応する規定が旧約聖書にも存在する。」

[ibid.,]と記し、項を改めて、付論三「旧約聖書における婚姻法について」という項目で、「出エジプト記」第22章15～17節を引用した上に、旧約聖書では、この出エジプト記と関連する申命記第22章29節が「花嫁の値は銀50シケル」と定めていることを述べている〔loc. cit., p. 164〕。

このベッカー氏の記述は、古代バビロニアの婚姻法を系統的に述べている中田一郎氏の注解とは一致せず、同じ「セム系の婚姻手続き」でも時代によって、かなりの差があったことがここで示されているだけではなく、現代イスラエルの婚姻法を参照してみれば良くわかるのである。

第132条（原文・逐語訳）


 šum-ma aš-ša-at a-wi-lim
 もし 妻が 人の

 aš-šum zi-ka-ri-im ša-ni-im
 原因で 男の 他の

 u₂-ba-nu-um e-li ša it-ta-ri-iš ma
 （後ろ）指を 彼女に 指されても ^{Col. xxii}

 it-ti zi-ka-ri-im / ša-ni-im
 と共に 男 他の

 i-na u₂-tu-lim la it-ta-aš-ba-at
 時 横たわる ないなら 捕えられ

 a-na mu-ti ša i^{iu}nāram i-ša-al-li šalū 殺け込む
 のため 夫 彼女の 河（神）に 潜る（だけでよい）

第132条（試訳）

ある者の妻女が、他の男性のことで後指を指されはしたものの、他の男と（一緒に）寝ているところを捕えられたわけではない場合に、その妻女は自分の夫のために、河川の神に飛び込むことができることとする。

第132条の解釈

先行する第131条と良く似た条文であるが、第131条ほうは、その妻の夫が直接その妻に対して浮気の嫌気を非難するものであり、この第132条のほうは、他の男のことで他人から後指をさされるという文章上のニュアンスの違いがあるので、それを反証する法的方法も異っている、とみななければならぬまい。

いずれにせよ、実際に浮気の現場で捕えられていない限り、夫から直接その嫌疑を追求された場合は神かけて宣誓し、他人から後指をさされた場合であっても、河川に飛び込んで河神にその疑念を晴らしてもらうことが、バビロニア時代の妻たちにとっては、浮気の嫌気を正式に晴らす法的な方式であったようだ。

この「河神による神明裁判」によって、妻が自分の身体の潔白を立証することがはたして「権利」であったのかどうか、良くわからない。そういう行為を選ぶことはその妻にとり実に危険極まりないことだと思われるが、第132条の条文でアッカド語の文章はどうも自分の夫の顔をたてるために河川の神に身を任せる、と解釈することができるからである。このような背景を意識したかどうかは別としてこの条文を原田慶吉氏は以下の如く訳されている。すなわち「もし人の妻〔ありて〕、他の男のゆえに指が彼の女に対して差し伸されたるも、他の男と共に横われる中にて、取り押えられざりしときは、〔彼の女は〕彼の女の夫のために、河神のもとに潜る。」というのが原田氏の翻訳で、その後の中田一郎氏の訳も「もし人の

妻が別の男性とのことでうしろ指を差されたが、別の男性と一緒に寝ているところを捕えられたのでなければ、彼女は自分の夫のために（裁きの神である）川に飛び込まなければならない。」と義務的な表現を強くした他に条文の内容としてはあまり変化がないように思われる。

この第132条の解釈としては、ホルスト・クレンゲル（Horst Klen-
gel）氏が「仮に妻が何の証拠もなく、密通したというような悪評をたてられた場合に、彼女は、『河神による神明裁判によって身の潔白を証明する権利』を有した。これは当然彼女にとってはまったく危険極まりない企てであるが、この条文では彼女が「自分の亭主の顔をたてるために河川に身を沈めてみる」のだと解されている、という風に江上波夫氏と五味亨氏の共訳〔loc. cit., p. 214 参照〕としては記述されている。

この条文を普通に読んでみた場合、同じような神明裁判といってもハンムラビ法典第2条に規定された身の潔白の証明とはかなり違った方法と手段によってなされたもの、と推測できるのである。従って、中田一郎氏の訳で「自分の夫のために（裁きの神である）川に飛び込まなければならない」というアッカド文の解釈は、その楔形文字原文から考察しても、かなり厳しすぎるように思う。


これは「立証するための権利」というべき性格のものを彼女が有しているただけ解すべきではないだろうか。

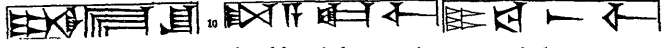
この第132条については、ハンス J.ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏も中田氏と同様の解釈をおこなっているが、同氏が第129条から続く条文で「犯罪者は縛られたまま河に投げ込まれた」とあるのは、この第132条に関して甚だ疑問である〔loc. cit., “Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient”, Neukirchener Verlag, Auflage 1984 鈴木佳秀氏邦訳『古代オリエントの法と社会』1989年刊ヨルダン社、p. 160参照〕。これはベッカー氏が勝手に「縛られたまま」などと拡大解釈しただ


けのものと思われる。


なおこの条文の楔形文字上から第4行目の *zi-ka-ri-im* (男) のところで、ハンムラピ法典石柱裏面にある楔形文字原文は、上から数えて第5欄(段コラム)が左端において終了し、次の *ša-ni-im* (他の……) から下の段の右端に(右側面)に移って第6欄(段)の上から下に、その後はそのまま左側へ同じ要領で読み進めてゆくことになる。


第133条 (原文・逐語訳)



šum-ma a-wi-lum iš-ša-li-il ma *šalālu* 捕まる
 もし 人が 捕虜となった時



i-na biti šu ša a-ka-lim i-ba-aš-ši *akālu* 食べる
 に 家 彼の 物が 食べる あるなら


[aš-ša]-zu [i-na bi]-za [wa-az-za-a]t *ašū* 出かける、逃げる
 妻は 彼の から 家 彼女の 出かける時は


[pa-gar š]a [i-na-ša-a]r [a-na bi]tim ša-ni]-im
 体を 彼女の 守って に 家 他人の *našāru* 守る


[u₂-ul i-ir]-ru-ub
 決して 入らない


šum-ma sinništum šī-i [pa]-gar ša
 もし 女が その 体を 自分の


la iš-šur ma a-na bi]tim ša-ni-im i-ir-ru-ub
 ないで 守ら に 家 他人の 入るならば



sinnistam su-a-ti u₂-ka-an-nu-si ma

女に その 確認してから



a-na me-e i-na-ad-du-u₂ ši

中に 水 投げ込む 彼女を

第133条（試訳）

ある者が捕虜となって捕捉されたる場合、その捕捉されたる（者の）家に自分の食用とするもの（あるいは食糧を購入できる財産）があるならば、その妻は自分の家から外出する時に自分の貞操を守って、他人の家に決して入ってはならない（その間に浮気をしてはならない）。もしその女が自分の貞操を守らないで他人の家に入ったならば、その女に（その浮気の実事があったかどうか）確認してから、その女を水中に投げ込んで処罰することができる。

第133条の解釈

ある者が出征して他国で捕虜となったような場合において、その者の留守宅にその者の妻女が食料とするような蓄え（貯蔵品もしくは財産？）があるならば（すなわち出征兵士が帰らずとも妻女と家族が十分に生活してゆける食料等の貯蓄が残されているような場合においては）その妻女は他人の家に入る（すなわち身体等を売って金銭を得る）ようなことがあってはならず、そのようなことをした場合その妻女は水中に投げ込まれる、という処罰を下されるものとする。

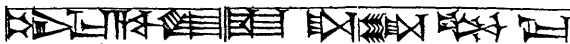
この第133条から始まるいくつかの条文のように、領土を拡大して遠征をおこなったハンムラピ王の治下において、国王の命令などで出征した者が捕虜となった場合には、もしその留守宅においてその妻女が夫の財産会

計（あるいは現実の食料等）から自分達（妻子）の生活費を作り出すだけの余裕がある場合、その妻女は他の男の家へ移って（再婚して）はならなかっただけではなく、そのために売春等身体を売ってはならなかったと解釈できる。

この第133条の規定に違反すればその妻女は水によって溺死させられる刑罰に処せられた。この第133条は水による溺死の罰で、第132条のように「河川の神によるある種の神明裁判」の形式をとった反証とは異なる刑罰と解釈すべきである。この第133条の条文は丁度中程に切れているところがあるので、原田慶吉氏の訳文としては、まずその前半をイ．として出し「イ．もし人が捕虜となりたるに、彼の家の中には、食う可きもの存するときは、彼の妻は……と彼の女の身を護り、他人の家には決して立ち入ることなし。」という訳文をあげ、この条文の真中に楔形文字が欠けているところから、そこでアッカド語の文章が切れるかどうかで後半部分を別に分けて訳すことがなされている。原田慶吉氏はこの後半を（ロ）という片仮名を文頭につけて別に翻訳し、中田一郎氏は133-b というアルファベットの添えて別々に訳出している。それでは原田慶吉氏の（ロ）は、「ロ．もしその女が彼の女の身を護らずして、他人の家に立ち入りたるときは、〔彼等〕その女に【彼の女に】確証して、水に彼の女を投ず。」という形で分離して翻訳していた。同じく中田一郎氏のほうの訳文も§133「もし人が捕虜となったが彼の家に食べ物があるなら、彼の〔妻は〕彼女の〔夫が捕えられている間〕〔自分の身（の貞操）を守らなければならない。〕〔別の人の家に〕入っ〔てはならない。〕というのが前半で、同じく後半を§133 bとして「〔もし〕その女性が自分の〔身（の貞節）〕を守らず、別の人の家に入ったなら、彼らは彼女に対して（そのことを）立証し、彼女を水に投げ込まなければならない。」という二つに分けた翻訳を出しておられる。

この原田氏と中田氏の訳文のように二つに分離する方法は、コシャカー (Koschaker) 氏が最初にとった方法らしく (原田氏は最初に〔註〕でそう記述している)、このように2つに分けて訳すのが良いかどうかは疑問であるが、楔形文字の原文を敢て意識するとうならざるを得ないだろう。ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏は、この第133条の独訳はしていないが、その解釈として「妻の再婚の問題も同様に規定しておく必要があった。何故ならば、とりわけ王の賦役負担者たちの場合長期間の不在がしばしば起り、留守家族の経済的存在が脅かされることもあったからである。妻がまだ夫の家計から自分たち妻子の生計費を捻り出すことができるかぎり、かの女は他の男のところへ移ってはならなかった。違反すれば、その処罰は溺死である (133条)」〔loc. cit., “Hammurapi von Babylon und seine Zeit” 江上波夫氏と五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』ハンムラピ王とその社会、山川出版社、p. 214)〕と、このように記述しているが、それは第133条から第141条までを連続して解釈しているので、この第133条だけに関して言えばその解釈にいささか問題がある、と思われる。




第134条 (原文・逐語訳)


 sum-ma a-wi-lum iS-sa-li-il ma

もし 人が 捕虜となったのに


 i-na biti su sa a-ka-li-im la i-ba-as-si

に 家 彼の 物が 食べる ないならば


 as-sa-zu a-na bitim sa-ni-im
 彼の妻は に 家 他人の

 i-ir-ru-ub sinnistum si-i
 入っても 女に その

 ar-nam u₂-ul i-su
 罪は 決してない

第134条（試訳）

ある者が捕虜となった時に、その者の家に食べる物がない（動産としての銀の薄片あるいは貯蓄された食料などが欠如しているような）場合には、その者の妻が（自分の生計を維持するために）他人の家に入ったとしても、その妻女に決して罪はないものとする。

第134条の解釈

これに先行する第133条との比較で、もし捕虜となった者の留守宅に十分な食料とするものの蓄えが無かったような場合、その出征した兵士が妻女のために生活する糧あるいは財産を残しておかなかったのだから、その妻女は自分の生活を維持してゆくために他人の家に入る、アッカド語で a-na bitim ša-ni-im i-ir-ru-ub（すなわち他の男から面倒をみられる、これらはたして他人の正妻となったのかあるいは単なる妾として他人の家に入ったのか不明である）ような状態となっても、その妻女に何等罪はないものとされる、という規定である。この第134条の条文を原田慶吉氏は以下のごとく訳しておられる。すなわち「もし人が捕虜となりて、彼の家の中には、食うべきもの存せざるときは、彼の妻は他人の家に立ち入る、その女は決して責なし。」というのが原田氏の翻訳である。この条文に関して

は中田氏も原田氏とほぼ同じ内容で、中田一郎氏のほうの訳としては「もし人が捕虜となり、彼の家に食べ物が無いなら、彼の妻は別の人の家に入ることができる。その女性は罪を負わない。」となっている。

この第134条の規定は、ホルスト・クレンゲル (Horst Klengel) 氏の解釈などにおいても「最早何も残っていないときには、家を出て他の男を受け入れることが許された」と一行足らずであり重要視されていないようである [ibid.] が、同じセム系の法としてかなり後世に成立するイスラーム法の「一夫多妻制」にかなり大きな影響を与えたのではないかと思われる。以下に示す「一夫多妻制」を認めたコーラン (聖クルアーン) 第4章第3節の規範は、西暦625年におこなわれた「ウフド Uhud の戦後」において、かなり多くの戦死者を出し、これら戦死者の家族、特に多くの寡婦や孤児をいかに救済するか、という状況において一種の「社会福祉制度」のようなものとして規定されたもの、とされている。

それではこのコーラン第4章第3節と英語の対訳を以下に掲げる。

<p>وَأِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تُقْسِطُوا فِي الْيَتَامَىٰ فَانْكِحُوا مَا طَابَ لَكُمْ مِنَ النِّسَاءِ مَثْنَىٰ وَثُلَاثَ وَرُبْعَ فَإِنْ خِفْتُمْ أَلَّا تُعَدِلُوا فَوَاحِدَةً أَوْ مَا مَلَكَتْ أَيْمَانُكُمْ ذَلِكَ أَذَىٰ أَلَّا تَعْلَمُوا</p>	<p>If ye fear that ye shall not Be able to deal justly With the orphans, Marry women of your choice, Two, or three, or four; But if ye fear that ye shall not Be able to deal justly (with them), Then only one, or (a captive) That your right hands possess. That will be more suitable, To prevent you From doing injustice.</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

ハンムラビ法典でも、やはり古代バビロニアの軍務についていた者は戦死したり、そこまで至らずとも捕虜になった者も多く、その妻や子の扶養は重大な経済上の問題であった、と考えられるからである。

なおイスラーム法の「一夫多妻制」についての詳細は、真田芳憲氏著『イスラーム法の世界』(改訂増補版、2000年11月10日発行、中央大学出

版部刊、p. 319～p. 368）を参照されたい。

第135条（原文・逐語訳）

sum-ma a-wi-lum is-sa-li-il ma

もし 人が 捕虜となり、しかも

i-na biti su sa a-ka-li-im la i-ba-aš-si

に 家 彼の 物が 食べる ない時

a-na pa-ni su aš-sa-zu a-na bitim sa-ni-im

で 前 彼の 彼の妻は に 家 他人の ana pani su 公然と

i-te-ru-ub ma māre it-ta-la-ad alādu 生む

入って（入籍して）子達を産み māre < dumu me-eš

i-na wa-ar-ka mu-za it-tu-ra-am ma

に その後 彼女の夫が 帰ってきて、

ali su ik-ta-aš-dam sinnistum si-i kašādu 到達する

町に 彼の 到達したなら 女は この

a-na ha-wi-ri sa i-ta-ar tāru 返る

所に 配偶者 彼女の 戻り

māre wa-ar-ki a-bi su-nu i-il-la-ku nadū 授ける abātu 逃げる

子達も の方へ 父 彼らの 行く 注意 i-di-in < dānu 決める

第135条（試訳）

ある者が捕虜となった時に、（前の第134条と同じく）その者の家に食糧（料）とするような物が無かった場合において、その者の妻が他人の家に入って（他人の女となって）子供達を生み、その後に（捕虜となっていた）夫が帰ってきて、自分の町（出身地）にもどった場合、その女は自分のもとの夫のところに帰り、その子供達もまた自分達の父のもとに帰らねばならない。

第135条の解釈

前条からの続きで、ある者が捕虜になった時に、その者の留守宅にあって食糧（料）となるべき資産などがなかったならば、その者の妻は他人のもとに身を寄せ生活することができる（他の男の厄介になり、情交関係をもっても許されると解釈できる）が、その捕虜となった者が釈放されて、そのもとの留守宅のあるところに戻ってきたならば、その者の妻はもとの夫のところに確実に戻らねばならない、という規定である。

最後の行にあたる解釈について「自分達の父親のところに戻る」という原文の解釈は、ある者が捕虜になる前に妊娠していた（その徴候が顕著に現れていて後で生まれた）子供だけを意味するのか、捕虜になってその留守の間においては他の男と情交関係をもって出来た子供をも意味するのか、難しいところであるが、原文の上ではその間に出来た子供は（その種に関わらず）すべて（子供たちの）夫の帰属となる、と解釈するべきものではないかと思われる。

だが、再婚期間中にできた子供はその再婚していた相手の家に留まる、と解釈するべきであるとも考えられ事実上の再婚期間の前に妊娠していた子供の帰属は、この第135条の解釈からは、前の夫に帰属するのか、事実上の再婚期間の夫に帰属するのか不明のままである。この第135条の内容

に関して原田慶吉氏の訳としては「もし人が捕虜となりて、彼の家の中には、食うべきもの存せざるとき、彼の帰還前、彼の妻が他人の家に立ち入りて、子供を産み、その後彼の女の夫が帰還して、彼の町に到達したるときは、その女は彼の女の前配偶者に帰り、子供は彼等の父の方に赴く。」と翻訳し、その一方で後に翻訳した中田一郎氏のほうの翻訳は「もし人が捕虜となり、彼の家に食べ物が無く、彼の妻が彼の帰還の前に別の人の家に入り、息子たちを生み、そのあと、彼女の夫が帰還し、自分の市に到着したなら、その女性は彼女の（先の）夫⁹⁶⁾（の許）に戻らなければならない。息子たちは（それぞれ）彼らの父につき従わなければならない。」という文章を記しており、その上でなおこの第135条の楔形文字本文第7行目に出てくる「夫、亭主」に関する中田氏による脚註がついていて、それには、96) より一般的な *mātum* ではなく *hāwirum* が使われている。ハンムラビ「法典」中では§174でも *hāwirum* が使われている。R. Westbrook は、最初の夫を2度目の夫と対比させる必要があるときに *hāwirum* が使われたのではないかと述べている (*OBML*, pp. 18-19)。と追記されている。

この本文7行目にある *hāwirum* (逐語訳のラテン文字変換では ha-wi-ri) が、はたしてどの次点での「夫、亭主」であるかについて、中田氏の脚註ではウエストブルック (R. Westbrook) 氏の説を入れバーレン (マル括弧) つきで「(先の) 夫」と訳しているが、古代バビロニアにおいては彼の夫すなわちもとの夫が捕虜となって帰らなかった時に、それまで一緒にいた夫との間に出来た子供は一体どうなったであろうか。日本民法では民法第733条(1)に「女は、前婚の解消又は取消の日から6箇月を経過した後でなければ、再婚をすることはできない」と待婚期間(再婚期限、寡居期間とも言う Wartefrist) が設けられており、これは一般的に道徳的な再婚禁止規定ではなく、前婚の子と後婚の子との混乱を防ぐためであ

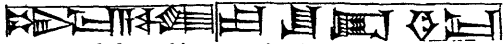
る。それ故にその第2項として「女が、前婚の解消又は取消の前から懐胎していた場合には、その出産の日から、前項の規定を適用しない」と定められている。しかしそれでも古今東西どこでも、男と女の関係は経済的理由や生活など他人では推しはかれない種々の事情があるもので、現代法では、A原告が被告に対し他人間の親子関係の存否の確認を求めるもの、B原告と被告間の親子関係の存否の確認を求めるもの、という2種類の訴訟が考えられる。Aの場合は日本の裁判で普通の民事訴訟事件として取り扱われるが、後者は人事訴訟手続法によるべきものとされている。現代日本では、この日本民法第733条に違反して女が再婚前婚解消後300日以内、後婚成立後200日以内に子供が出生した場合、日本民法第733条によって子供の父親が裁判所によって決定されることになっているのである。

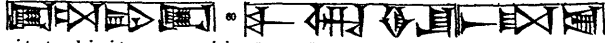
もっとも近年のDNA鑑定など医学の進歩により、親子鑑定は更に科学的要素が重視され、日本民法の第733条は男女差別だから改正するよう人権擁護の団体などから追求されているところである。古代バビロニアにおいては、子供のほうから親子関係の鑑定など求めるということは全く無かったであろうが、ウェストブルック氏のように、前の夫 *hāwirim* がそのまま第135条の最終行 a-bi となってしまう、後の夫（多分 *mūtum*）には子供を自分のところに留め置いておく法的根拠はなくなってしまう。この *hāwirim* というアッカド語の単語は、ハンムラビ法典の第174条でも出てくるが、この規定は第160条文の後半から続く近代民法でいう「親族・相続法」に関与する箇所、自分の嫁のもってきた *šeriktum*（持参金、実家からの贈与）をこの *hāwirim* がすべて取ることができる、という規定である。


そのあたりの事情を総合的に考慮すると、この *hāwirim* という単語は、古代バビロニア法において「前の夫」という意味だけではない「何か特別な親族上の権利」のみならず、父と子の関係を決定する重大な要素をも有


していた、と思えるがはたしてどのような含意が当時あったかは定かでない。


第136条 (原文・逐語訳)


 di-in < dinu 事件
 sum-ma a-wi-lum ali su id-di ma i-du-u2 < idū 知る
 もし 人が 町を 彼の 捨てて、 id-di-nu < nadānu 与える


 it-ta-bi-it wa-ar-ki su aš-ša-zu
 逃げたので 後で その 彼の妻が

 a-na bitim ša-ni-im i-te-ru-ub
 に 家 他人の 入った時

 sum-ma a-wi-lum su-u2 it-tu-ra-am ma
 もし 人が その 戻ってきて、

 aš-ša-zu iṣ-ša-ba-at aš-šum ali su
 彼の妻を 取り押さえても が故に 町を 彼の

 i-zi-ru ma in-na-bi-tu aš-ša-at mu-na-ab-tim zāru 嫌う
 嫌って 逃げた 妻は 逃亡者の

 a-na mu-ti sa u2-ul i-ta-ar
 のもとへ 夫 彼女の 決して 帰らない

第136条 (試訳)

ある者が、自分の都市(国家)を捨てて(居住地の社会体制を嫌って)逃亡したので、その逃亡の後、その者の妻が他人の家に入ったような場合

には（他人の男に面倒みられるようになった場合には）、仮にその者が自分の居住地に戻ってきて自分の（かつての）妻を取り押える（復縁をせまる）ようなことがあっても、（その者は）自分の都市（居住地）を嫌悪して逃亡したるが故に、その妻は逃亡したる夫のもとに決して戻る必要はないものとする。

第136条の解釈




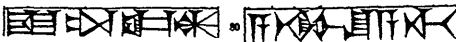

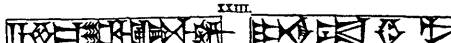

ハンムラピ法典のこれまで記述されてきた第133条から第135条は、ある者が軍人として出征した場合に、その残された妻がどのように生活してゆくか、について規定したるものであったが、この第136条は、ある者が自分の意志でその居住地の社会を嫌悪して逃亡したるような場合を定めてあり、そのような場合に逃亡された者の妻は、その逃亡した男が例え戻ってきたとしても決してその男のもとに戻る必要がないこと、を明文で定めたのがこの条文であると考えられている。

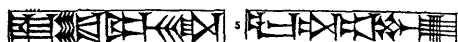
なぜその男が自分の都市（居住地）を見捨てたのかは、この条文の内容と文章だけでは不明であるが、政治的あるいは経済的理由（おそらく何らかの出来事がそこにあったろう）で妻を置き去りにして自分の居住地を自らの意思で出ていった者に、その妻が見限って他の男のもとに身を寄せていたからには、もとの亭主が再びその居住地へ戻ってきたとしても決してその夫のところへ帰る必要がなかったのである。この第136条の条文によって、他の男のもとに身を寄せた妻が、もとの夫から離婚することが出来、その時に身を寄せていた男と古代バビロニア社会の中で法律上正式に再婚できたのかどうか良くわからないが、この第136条はそれが実質的には可能となった、と解釈するべきであろうか。

この条文に関する原田慶吉氏の訳は「もし人が彼の町を投げ棄てて逃亡し、彼の〔去りたる〕後に、彼の妻が他人の家に立ち入りたるときは、も

しその者が帰還して、彼の妻を取り押うるも、彼の町を嫌悪して逃亡した
 るのゆえをもつて、逃亡者の妻は、彼の女の夫に決して帰ることなし。」
 であり、それを現代語風にした中田一郎氏の訳が「もし人が自分の市を捨て
 て逃亡し、そのあと彼の妻が別の人の家に入ったなら、たとえその人が
 戻ってきて彼の妻を捕えたとしても、彼は自分の市を拒絶して逃亡したの
 で、逃亡者の妻はその夫の許に戻らなくてもよい。」となっている。

第137条 (原文・逐語訳)

 šum-ma a-wi-lum a-na mi ² su-ge-tim もし 人が を めかけ	
 ša mārē ul-du šum u ₃ lu lukur ša mārē 所の子を生んだ彼に 或いは ナデイトウ 所の子を	naditu 高位の尼僧、在俗と修道 院とにおり、マルドゥクに 捧げられてからは結婚でき
 u ₂ -sar-šu šu e-ši-bi-im pa-ni šu もたらした 彼に 棄てると 公然に	rašū 取得する、あてがう ezēbu 去る、放棄する
 iš-ta-ka-an a-na sinništīm šu-a-ti 決めたなら ヘ 女 この	
 še-ri-iq-ta ša u ₂ -ta-ar-ru ši-im u ₃ mu-ut-ta-at 持参金を 彼女の 返し 彼女に 且つ 収入を	šakānu 固定する
 eqli ^{Col. XXIII} m kirēm u ₃ bi-ši-im / i-na-ad-di-nu 畑 果樹園や 家からの 与えて、	eqļu < a-ša ₃ kiru < giš šar
 ši-im ma mārē ša u ₂ -ra-ab-ba 彼女に 子達を 彼女の 成長させ	



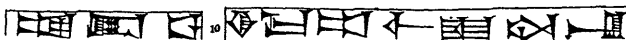
is-tu māre ša ur₂-ta-ab-bu-u₂ rabū 大きくする

の後は 子達の 彼女の 成長



i-na mi-im-ma ša a-na māre ša in-na-ad-nu

から 物 所に に 子達 彼女の 与えた



ši-it-tam ki-ma ab-lim iš-te-en ablu = aplu 相続人

分け前を と同じ 長男 一人分の



i-na-ad-di-nu ši-im ma

与えて、 彼女に



mu-tu li-ib-bi ša i-ih-ha-az-zi ahāzu 取る、顧む

夫を 意中の 彼女の 取らせる

第137条（試訳）

ある者が、自分のために子供を産んだシュゲーティム階層の下女（第1行目末の妾、シュギートウム、シュギーティムとも片仮名で書かれる）かあるいはその者に子供をもうけさせしめた（妻女となった）ナディトゥム（ナディートゥムとも書かれる）女神官を離縁しようとする場合に、その者はこの女（シンニシュティム）に彼女の持参金（^{シエリクトム}入嫁資産）を返却しなければならず、かつまたその女に田畑と果樹園など家からの財産の一部を与えて、その女が自分の子供たちを養育できるようにしなければならない。そしてその女の子供達が成長した後は、子供達に与えられたところの全てのものの中から、彼女には息子（長男）一人分の相続がなされることになる。その後、彼女の意中の者がその女を妻にすることができるものとする（その女が好みの者と結婚することができる）。

第137条の解釈

古代バビロニア社会の婚姻制度の複雑さは、今日我々が簡単に解釈できるものではないが、この条文中に出てくるナディートゥムという女の神官階層（女司祭）はすでに第110条に登場していたところからもわかるように「ある一定の神官として居酒屋に足を入るとかそのような商売をすることなどが禁止されていた」神聖な立場にいたことが明らかである。しかしながら結婚することはできたようで、その場合、子供を産むことを禁じられていたが、自分に系属するシュゲーティムという呼称の妾を連れてその妾と自分の亭主との間に子供をもうけることは出来た、と考えられている。

本条文の翻訳で「シュゲートゥム妾（シュゲーティム、シュギーティム）」としたこのシュゲーティムも一種の（下位の）神官ともみられているが、ナディートゥムよりも下位に位置し、こちらのほうは子供を生むことができたため、ナディートゥムが結婚し自分の夫が子供を欲した場合、自分に所属したシュゲーティムを子供を生むために自分の夫の妾として（その結婚に係属するものとして）そのまま夫の家に同居を許したもの、と思われる。それゆえに単に妾とは訳さず、もとのナディートゥムに係属する下位の女神官であるとともに「神殿娼婦」のような役割りもはたしていた、ということも出来るだろう。〔なおこのシュギートゥム女官とその父親については第183条も参照のこと〕

古代アッカド法文化社会における婚姻の実際に就ては、日本オリエント学会『オリエント』第37巻第1号に掲載された川崎康司氏の「キュルテベ文書中の結婚契約から見た女性の地位と結婚形態」にその概略が解説されており、時期的にハンムラビ法典の親族・相続法もこのキュルテベ文書中の記載された内容を踏襲していたものと思われる。

すなわち、古バビロニア社会もこのキュルテベ文書に記された古アッシ

リア期（1950B.C.～1750B.C.）と同様「一夫多妻制」が原則であり、女性の身分としては「本妻」のほかに「側妻」とも呼べる存在の女がありその他にさらに「妾」あるいは「女奴隷」がいたとも考えられる。その中で女神官がどのような立場でその結婚形態の中に入り込んでいたか、この条文のみならずかなり興味ある課題である、とみななければならないだろう。この第137条をローマ法学者の原田慶吉氏は以下のように訳している。すなわち「もし人が子供を彼に産みたるシュギートゥム（*šugītum*）、あるいはまた子供を彼に儲けしめたるナディートゥム（110条参照）を離別せんと企ててるときは、〔彼等〕その女に彼の女の嫁資を【彼の女に】返し、かつ原、園及び動産の一部を彼の女に与え、しかる後〔彼の女は〕彼の女の子供を成長せしめ、彼の女の子供を成長せしめたる後は、彼の女の子供に与えらるるものの中より、一人の相続人に相応する分前を、〔彼等〕彼の女に与え、しかる後〔彼の女は〕彼の女の心中の夫を取る。」という日本語としてもかなり複雑な文章となっており、さらにその後に原田氏の〔註〕が以下のごとく追加されている。「*šugītum* 下級の尼僧。往々 *nadītum*（110条参照）に伴われて、彼の女に代つて、彼の女のために子を産む。」というのがその内容であった。

これに対して中田一郎氏のほうがいくらか日本語として分かり易く、その訳文として「もし人が彼のために息子たちを生んだシュギートゥム女性あるいは彼に息子たちを得させてくれたナディートゥム修道女を離婚することを決意したなら、彼らはその女性に彼女の持参財⁹⁷⁾を返し、耕地と果樹園と動産の半分を彼女に与え、彼女は彼女の息子たちを育てなければならない。彼女の息子たちが育ったあと、彼らは、彼女の息子たちに与えられた物のうち嫡出子1人分の取り分を彼女に与えなければならない。そして、彼女の意になかった夫が彼女を娶ることができる。」と変えられて翻訳文となっており、更に中田一郎氏の脚註として以下の（97）が下に記さ

れ、その上で p. 128～129に「持参財」に関する「注解」の記事が後に掲載され、それを全て読むことで理解できるようになっている。

97) シェリクトゥム (*šeriktum*) と呼ばれる。花嫁が花婿の家に持参するために自分の親から贈られた花嫁固有の財産（道具、什器のほか消費財を含む）。§§128-184についての注解の「持参財」についての説明を参照。[loc. cit., p. 39]（すぐ上の脚注の説明がこのすぐ下に記されている）

持参財（シェリクトゥム）

結婚した花嫁に属する財産は、もともと父から贈られ、¹⁰⁴⁾花嫁が妻として花婿の家、あるいは花婿と花嫁がまだ若過ぎる場合は、義理の娘として義理の父の家に、持参した物、すなわち持参財（シェリクトゥム *šeriktum*）と夫から花嫁への贈物（ヌドゥンヌム *nudunnûm*）からなる。場合によっては、花婿が花嫁の父に贈ったテルハトゥムが持参財に加えられることもあった。持参財には衣類、装身具、油、「台所用品」家具、奴隷、家畜などいろいろのものが含まれていたが、現存の婚姻契約書などから見るかぎり、現金は含まれない。¹⁰⁵⁾

ところで、ハンムラビ「法典」で持参財を意味するシェリクトゥムという名詞は、ハンムラビ「法典」以外では、贈物一般を指し、持参財を意味する用語はむしろヌドゥンヌム *nudunnûm* という名詞であるということに注意しておきたい。

持参財は、テルハトゥムが持参財の一部に含まれている場合はその部分を除き、妻が生きている限り彼女の「取る」べき物として残り、彼女の子供たちといえども彼女の生存中はそれに対する権利を主張することができなかった (§§171 b、172、176)。¹⁰⁶⁾

持参財は、花嫁が花婿の家に入るときに持参し、花婿あるいは花婿の父親の手に管理が委ねられたが、持参財の所有権は、妻の生存中は、あくまでも妻が有していた。もし妻が子供なしに死亡した場合は、もともと実の

父から与えられた部分は、実の父の家に返されるべきもので、夫あるいは義理の父が持参財に対する所有権を主張することはできなかった (§163。ただし §141 のような場合は例外)。もし彼女に子供がいた場合は、彼女の子供が持参財を相続することができた (§§162、173、174。ただし女性がウグバブトゥム、ナディートゥム修道女あるいはセクレトゥム女官などの場合 [§§178-182] を除く)。夫が先に死亡した場合は、彼女の持参財は夫の遺産からはっきりと区別された (§§171 b、176)。¹⁰⁷⁾

104) 母あるいは兄弟から彼女に持参財が贈られることもあった。これはもともと父の財産であったが、父が死亡したため母あるいは兄弟から贈られることになったものであろう。105) R. Westbrook, *OBML*, pp. 89-95.

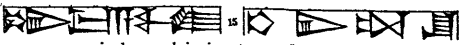
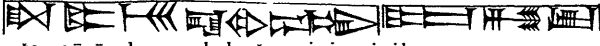

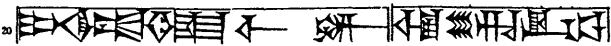


106) エシュメンナ「法典」§18も同じ問題にかかわるが、その解釈については、R. Westbrook. *OBML*, pp. 91f. を参照。107) シェリクトゥムについては、G.R. Driver-J. C. Miles, *BL* I. pp. 271-275 をも参照。[loc. cit., p. 128~p. 129]

第137条の楔形文字原文第5行の冒頭に記された *šeriktum* (インターリネアルのラテン文字表記では *k* が *q* になり *še-ri-iq-ta* となる) の解釈はともかく、最終行の訳文と解釈について、古代バビロニアにおいて「女の意味」が法的にどのように表明され、それがその後の婚姻関係にいかに関与したか、この第137条の解釈は、一般的には全く女の意味表示によって法律関係が決定することが無かったと思われる古代バビロニア法のなかで、興味あるアッカド語の文体である。楔形文字第4行目にあるその女(シンニシュティム女官)は、ナディトゥム女神官とみられているが、その下位にいるシュゲーティムと一体となって同一人格を形成しているのではないかと思われる。

この第137条の楔形文字第6行目 *bi-ši-im* (家からの……) ところで石柱裏側の上から数えて第6欄(第6段目、第6コラム)は左端にすべて終了し、次の *i-na-ad-di-nu* (与えて……) からその下の第7欄右端(裏から見て右側面のほうに若干入ったところ)の上から下へ読み、それからその

要領で左側（この第137条では第7行、第8行）の方向へと読み進めてゆくことになる。

第138条（原文・逐語訳）

	
Sum-ma a-wi-lum hi-ir-ta šu	
もし 人が 配偶者を 彼の	
	
ša mārē la ul-du-šum i-iz-zi-ib	
所の 子を なかった 生ま 棄てるならば	
	
kaspam ma-la tir-ha-ti ša	
銀を 同程度の 結納料と 彼女の	
	
i-na-ad-di-iš si-im u ₃ se-ri-iq-tam	
与え 彼女に 且つ 持参金を	
	
ša is-tu bit a-bi ša ub-lam	abālu もたらす
所の から 家 父の 彼女の もたらせた	
	
u ₂ -ša-lam si-im ma i-iz-zi-ib-si	šalāmu 安全である、回復する
回復して、彼女に 分かれる	

第138条（試訳）

ある者が、自分の子供を生まなかった妻を離縁しようとする場合、その者は彼女の結納料と同程度の銀の額を彼女に支払い、かつ彼女が自分の父の家（実家）から持参してきた持参金を、彼女に払い戻さなければならないものとする。

第138条の解釈

古代バビロニアにおける広義の「離婚法」で、最も普遍的な条文のひとつであると思われるが、やはり家族制度とその階層を維持してゆかねばならない古代社会において、自分の家を継承する子孫をつくれない女すなわち^{うまづめ}石女（楔形文字原文では hi-ir-ta šu ša mārē la ul-du-šum 「自分の子供を生まなかった配偶者」という文章となっている）は、当然のこととして離縁される運命にあったものと言える。しかしながら、他の古代社会と異なって古代バビロニアではそのような場合、その女が持参したすべてのものを払い戻さない限り、離婚は合法的に成立できないもの、とされていた。

日本でも江戸時代まで、通称「足入れ婚」という慣習法上の婚姻法があり、三年の間子供が出来ない^{うまづめ}石女と思われる嫁は、その実家に適当な離婚料を与えて離婚させられていたのである。

特に封建時代の武士階級の家督を次ぐ者にとっては、男子に恵まれないことはその家の断絶をも意味していたので、妾を置くなどしてその家の子孫を絶やさないことが奨励されていたのである。中田一郎氏が注解であげておられるバビロニア婚姻法の「仮結婚の段階」もまさに江戸慣習法の「足入れ婚」とほぼ同じようなものが古代階層社会の中で複雑化したと思われるもので、未嫁の身分はまだ嫁方に属していたのが本来の足入れ婚の制度なのであるから、何もバビロニア婚姻法特有のものではないのである。この第138条を翻訳した初期の研究者でもある原田慶吉氏による訳文は「もし人が、子供を彼に産まざりし彼の配偶者を離別するときは、彼の女の花嫁代の総額に当る銀を彼の女に与え、かつ〔彼の女が〕彼の女の父の家より持参したる嫁資を彼の女に完済して、彼の女を離別す。」となっていた。それに対して古代バビロニアの婚姻法をその制度の上で、欧米の研究者の学説を参考にして考察した中田一郎氏の訳文のほうは「もし人が

彼に息子たちを生まなかった正妻を離婚しようとするなら、彼は彼女に彼女のテルハトゥム相当の銀を与え、彼女が自分の父の家（実家）から持参した彼女の持参財を元通りにして返し、⁹⁸⁾彼女を離婚することができる。」という脚註が無ければわからない文章となっている。[loc. cit., p. 39. それ以下は p. 125～p. 129]

そしてその中田氏の脚註としては 98) *šeriktam*.....*ušallamšimma* となっている。「持参財」(*šeriktum*) には、消費財も含まれているため、現時点で残っているものを返す (*turru*) (§137参照) だけなら「持参財」を元の形（あるいは量）にして弁済する (*šullumum*) ことにはならない。§§138、149、156などでは「弁済する (*šullumum*)」が使われている。R. Westbrook, *OBML*, p. 92参照。」という内容が記されている。

中田氏がこの第138条の翻訳で始めて使用するテルハトゥム（楔形文字原文第3行目のインターリネアルでは *tir-ha-ti* 「結納料」としてある）に関しては、すでに第128条の解釈で引用したが、この第138条を解釈するために必要であるからここで再び以下に引用することにしたい。

テルハトゥム

テルハトゥム (*ter hatum*) は、基本的には現金で、仮結婚——仮結婚の段階を経ない場合は結婚——の際に花婿あるいは花婿の父親から花嫁の父親に与えられた。このテルハトゥムは、そののち、花嫁の父親から彼女の身に付けて夫（あるいは夫の父親）に返され、夫（あるいは夫の父親）の管理下におかれたが、あくまでも妻に所属する財産の一部で、夫の死後は実質的に妻の所有に帰した。しかし、妻の死後は彼女の子供たちがこれを相続することになっていた。もし、妻が子供を生むことなしに夫に先立って死亡した場合は、妻の持参財（シェリクトゥム）は妻の父の家に返されるが、テルハトゥムは夫に返されることになっていた (§§163-164)。⁹⁴⁾

このテルハトゥムを花嫁料として理解して売買婚説を唱えたのがコシャ

カーであった。コシャカーは、1917年に出版した著書⁹⁵⁾で、テルハトゥムを花嫁と引き換えに支払う花嫁の代金すなわち花嫁料であったと考え、古巴ビロニア時代の結婚を売買婚と特徴づけた。コシャカーは、当初、古巴ビロニア時代には、支払われる時期によって、テルハトゥムが手付金としての役割（婚約の際）と花嫁料（結婚の際）としての役割の2つの役割を持っていたと考えた。⁹⁶⁾しかし、1950年の論文では、ドライバー-マイルズの仮結婚（*inchoate marriage*）の考え方を取り入れ、これまで婚約と考えていた段階を仮結婚の段階と考え、仮結婚に際して与えられるテルハトゥムを手付金ではなく花嫁料そのものであると述べ、この花嫁料の支払によって、花婿は、花嫁の取得権（*jus ad rem*）を獲得したと旧説を改めている。そして、結婚は、花嫁が人法上の支配権者である花嫁の父親から新しい支配権者である花婿へ引き渡されること（*traditio puellae*）をもって完成すると考えた。⁹⁷⁾

しかし、コシャカーの売買婚説にはいくつかの問題があり、現在では一般に受け入れられているとはいえない。これらの問題点の詳細な紹介と批判については、ウエストブルックの研究⁹⁸⁾を参照していただくとして、ここではその問題点だけを紹介しておきたい。

(1)ハンムラビ「法典」§139から、テルハトゥムのない結婚が存在したと考えざるを得ない。⁹⁹⁾もし結婚が売買婚であったとすると、代価（テルハトゥム）の支払がなかった結婚が存在したことになり、これは売買婚理論に矛盾する。

(2)もしテルハトゥムが花嫁の代価であるとすれば、余りにも少額で、¹⁰⁰⁾花嫁の正当な代価とは考えられない。

(3)仮に、テルハトゥムが花嫁の代価であったとしたら、花婿から花嫁に贈られる贈物——ハンムラビ「法典」ではヌドゥンナム（*nudunnām*）とよばれた——が存在したことは、理解できなくなる。

(4)古バビロニアの法は、花嫁を夫の財産としては扱っていないので、妻は売買の対象とは見なしえない。

ウエストブルックは、結婚はそれ自体で1つの法的制度を形作っていて、他の法制度との間に類似を見つけることは無理であるとしながらも、結婚を敢て何かとの類比で理解しようとするならば、商品の売買ではなく養子縁組に類比を求めるべきであるとする。養子縁組では、養父が幼児を自分の息子とするために子供に対する権限を譲り受けるように、結婚では、男性が女性を自分の妻とするためにその女性に対する権限を譲り受けるのである。ただし、養子縁組においては、テルハトゥムに当たるものはない。なお、テルハトゥムについては、コシャカーの花嫁料という解釈のほかに、贈物という解釈、¹⁰¹⁾あるいは初夜権の代価という解釈¹⁰²⁾などあるが、いずれも説得性を欠く。ウエストブルックは、テルハトゥムによって妻になるべき女性を「捕える=娶る (*ahāzum*)」権限を得たと考える。このテルハトゥムは支払うべきもので、もし妻の引き渡しまでに支払わなければ、花婿側の債務として扱われた。したがって、ウエストブルックによると、これは単なる贈物ではなく、妻に対する監督権を彼女の両親から譲り受けるための支払 (*payment for the right to control over their daughter*) であった。¹⁰³⁾〔脚註は、第128条の解釈のところ、更に第130条の解釈も参照のこと〕

また、中田一郎氏がこの第138条で特に問題とし、そのすぐ下の脚註でも採りあげている楔形文字原文の第4行目末にある *šeriktum* (インターリネアルのラテン文字転化では *k* が *q* 音となり *še-ri-iq-tam* という対格形となっている) に関しても、中田氏の「注解」が重要なのでここにまた引用することにしたい。

持参財 (シェリクトゥム)

結婚した花嫁に属する財産は、もともと父から贈られ、¹⁰⁴⁾花嫁が妻とし

て花婿の家、あるいは、花婿と花嫁がまだ若過ぎる場合は、義理の娘として義理の父の家に、持参した物、すなわち持参財（シェリクトゥム *šeriktum*）と、夫から花嫁への贈物（ヌドゥンヌム *nudunnûm*）からなる。場合によっては、花婿が花嫁の父に贈ったテルハトゥムが持参財に加えられることもあった。持参財には衣類、装身具、油、「台所用品」、家具、奴隷、家畜などいろいろのものが含まれていたが、現存の婚姻契約書などから見るかぎり、現金は含まれない。¹⁰⁵⁾

ところで、ハンムラビ「法典」で持参財を意味するシェリクトゥムという名詞は、ハンムラビ「法典」以外では、贈物一般を指し、持参財を意味する用語はむしろヌドゥンヌム *nudunnûm* という名詞であるということに注意しておきたい。

持参財は、テルハトゥムが持参財の一部に含まれている場合はその部分を除き、妻が生きている限り彼女の「取る」べき物として残り、彼女の子供たちといえども彼女の生存中はそれに対する権利を主張することができなかった (§§171 b、172、176)。¹⁰⁶⁾

持参財は、花嫁が花婿の家に入るときに持参し、花婿あるいは花婿の父親の手に管理が委ねられたが、持参財の所有権は、妻の生存中は、あくまでも妻が有していた。もし妻が子供なしに死亡した場合は、もともと実の父から与えられた部分は、実の父の家に返されるべきもので、夫あるいは義理の父が持参財に対する所有権を主張することはできなかった (§163。ただし§141のような場合は例外)。もし彼女に子供がいた場合は、彼女の子供が持参財を相続することができた (§§162、173、174。ただし女性がウグバプトゥム、ナディートゥム修道女あるいはセクレートゥム女官などの場合 [§§178-182] を除く)。夫が先に死亡した場合は、彼女の持参財は夫の遺産からはっきりと区別された (§§171 b、176)。¹⁰⁷⁾

104) 母あるいは兄弟から彼女に持参財が贈られることもあった。これはもともと

父の財産であったが、父が死亡したため母あるいは兄弟から贈られることになったものであろう。105) R. Westbrook, *OBML*, pp. 89-95.

106) エシュメンナ「法典」§18も同じ問題にかかわるが、その解釈については、R. Westbrook, *OBML*, pp. 91f.を参照。

107) シェリクトゥムについては、G.R. Driver-J. C. Miles, *BL*. I. pp. 271-275 をも参照。[loc. cit., p. 128~p. 129]

夫からの贈物（ヌドゥンヌム）

夫からの贈物は、おそらく子供の誕生に際して妻に贈られたもので、妻が寡婦になった際の生活補償を目的とした贈物であろう。¹⁰⁸⁾§150で言及されている夫が贈った耕地、果樹園、家あるいは動産と§§171b-172に言及されている夫からの贈物（ヌドゥンヌム）が同じ性格の贈物かどうかについて議論があるが、仮にドライバー-マイルズやウエストブルックの言うように、¹⁰⁹⁾同じ性格の贈物すなわちヌドゥンヌムだとすれば、その所有権は夫の死後実質的に妻に移り、ヌドゥンヌムとして彼女に与えられた土地の経営を亡夫と彼女の間に生まれたお気に入りの子供に委ねることができた。¹¹⁰⁾この贈物は、離婚された場合でも、妻に非がなければ、子供の養育義務を負う妻に与えられるべきものであった（§137参照）。

108) P. Koschaker, *RuSGgH*, pp. 164f. R. Westbrook. *OBML*, p. 96.

109) G.R. Driver-J. C. Miles, *BL* I, p. 268. R. Westbrook. *OBML*, pp. 95-96.

110) G.R. Driver-J. C. Miles は、彼女の生存中ヌドゥンヌムとして与えられた土地の経営を自分の寵愛する子供に委ねるの意味にとる（*BL* I, p. 269; *BL* II, p. 59）。しかし、Westbrook は、妻がヌドゥンヌムを夫と彼女の間に生まれたお気に入りの子供に相続させることができたと考えている（*OBML*, p. 98）[loc. cit., p. 125~p. 130]。

このハンムラビ法典と類似した法規範が、東洋にもあり、唐の律令を受けた「養老令」（天平勝宝九年施行、律十卷令十卷）を養老二年、藤原不比等らが大宝律令を改修する形で出したが、律の大部分は散逸し、そのなかで「令義解」に収録された「戸令第八」に以下の如き規定があり、その「七出の状」ある場合、嫁に來た女は婚家を出ていかなければならなかつ

た。すなわち「一には子無き、二には淫^{インイッ}佚、三には舅^{キウコ}姑^{ツカ}に事へず、四には口^ク舌^{ゼチ}、五には盜^{クウ}竊^{セチ}、六には如忌、七には惡^{シチ}疾」の以上が嫁が婚家を出なければならぬ「七出の状」と規定されていたのである。この規定は江戸時代になるとかなり緩和されて解釈されるようになり、貝原益軒『和俗童子訓』巻之五「女子を教ゆる法」いわゆる女大学の10には、律令の第1に掲げられていた「子無きは去れ」が、第2となり、そして年齢が五十歳（数えて五十）になっても男子が出来ない女だけが離婚されるように解釈されてゆく。

それでは貝原益軒の「女大学」で嫁が離婚される理由をみてみることにしよう。


「婦人に七^{しつきよ}去とて、あしき事七つあり。一つにてもあれば、夫より遂^おい去らるる理なり。故に是れを七去と云う。是れ古の法なり。女子に教えきかすべし。一には父母にしたがわざるは去る。二に子なければさる。三に淫^{いん}なればさる。四に嫉^{ねた}めばさる。五には惡^あしき疾^{やまい}あればさる。六に多言あればさる。六に竊^{ぬすみ}盜すればさる。此の七つの内、子なきは生まれ付きなり、惡^あしき疾^{やまい}はやまいなり。此の二つは天命にて、ちからに及ばざる事なれば、婦のとがにあらず……（以下略）」〔op. cit., 東洋文庫302「女大学集」石川松太郎編、平凡社、p. 13～p. 14を参照のこと〕

このように「子供が生まれなければ離婚の対象となった」制度は、徐々に緩和され、日本の江戸時代でも子供が出来なかつただけで直ちに離婚されるようなことは殆どなくなつたことから比較すれば、古代バビロニア法の婚姻法は東西の比較法のうえで考慮してみても、女にとってかなり苛酷なものであった、と言うことができよう。

第139条 (原文・逐語訳)


 Sum-ma tir-ha-tum la i-ba-as-Si

もし 結納料が ないならば


 1 mana kaspim a-na u2-zu-ub-bi-im

1 マナの銀を として 絶縁料


 i-na-ad-di-is si-im

与える 彼女に

第139条 (試訳)

(婚姻をした時に際し、花嫁となった女に) ティルハートゥム (テルハトゥム、結納料) がなかったならば、(その亭主となった者は、その婚姻の) 絶縁料として、彼女に 1 マナ (約500g) の銀を与えなければならない。

第139条の解釈

婚姻法のなかの条文であるから、前後の文章が完全でないのは仕方がないとしても、前の第138条にもあるティルハートゥム tir-ha-ti (テルハトゥム結納料あるいは持参金) がこの条文ではどのような意味をもっているかによって、第139条を解釈するにあたっての訳文に問題が出てくる。

一般的に考えてみると、この条文中にあるティルハートゥム (テルハトゥム) という単語は、今日でいう俗に「結納料」(持参金) の一種とみることができるが、結納料ということは、古代セム系社会から今日の中近東における特に遊牧民族のなかでその花嫁の価値においてつけられた値打ちのことで、それが無いということは花嫁としての根本的な欠陥を有していた、ということになる。すなわち「ティルハートゥムがない……」ということでその花嫁が肉体的あるいは精神的に大いなる欠点を有していること

を意味していたのではないか、と思われる。そのような場合、欠陥ある花嫁をもらった夫（配偶者）は、1 マナの銀（古代バビロニアのこの時期で約500gの銀）を離婚料として支払うことによって離縁が可能であった、と考えられる。この第139条をローマ法学者の原田慶吉氏は訳文として「もし花嫁代が存せざるときは、銀1 マヌーを手切金として、彼の女に与う。」とだけ記し、なぜそうなるのかの解説は全くつけられていない。

これに対して中田一郎氏の訳文は「もしテルハトゥムが無い場合は、銀1 マナ（約500グラム）を離婚料として⁹⁹⁾彼女に与えなければならない。」とだけ本文を翻訳し、その後に中田氏は脚註として以下のような文章をつけ加えて解釈しておられる。

99) 「テルハトゥムが無い場合は、銀1 マナを離婚料として」という文章から、テルハトゥムは通常1 マナが相場との印象を受けるが、テルハトゥムは通常5－10シキル程度であった。銀1 マナというのは離婚料としては最高額に当たる。(G.R. Driver-J. C. Miles, *BL* I, pp. 297-298) [ibid.,]

中田氏が脚註をはじめ、その注解の中で述べているテルハトゥム（筆者の試訳中では、楔形文字本文のインターリネアル部で最初ティルハートゥムとしてある、結納料）だけがその性格をすべて意味しているものとは思われない。原田氏はその当時ここまで詳しく解釈しなかったようで、ただ単に「花嫁代」とだけ訳しておられる。

テルハトゥム（ティルハートゥム）という古バビロニア法の慣習について、日本語の訳としては「結納料」という解釈しか無いのだろうが、日本の江戸時代の項で述べた「足入れ婚」において、その嫁が石女^{うまづめ}であった時に手渡して実家に戻す金額が何両であったかは、その階級によって大いに異なっただろうが、一夫多妻というよりは妾を何人持つかあるいはその階級によって例えば武士の場合に石女だったとしても離婚という形はとらずに、各藩の領主ともいうべき総領たる家督相続できる長男などとして生

まれた者は、他に側室あるいは妾を何人もったことであろう。

これは単に日本の婚姻制度を比較法的に表面的な考察をしただけであるが、中田氏がテルハトゥム（第128条と第138条の解釈のところに二重に入れておいた中田氏の注解などを先ずを参照されたい）という言葉の説明をただけの内容だけではないような気がする。

主人がその嫁に支払う U_2 -qu-ub-bi-im も、原田氏の翻訳する「手切金」という用語か、あるいは原田氏の訳す「離婚料」という言語の内容かどうかの詳細は、どうもはっきりとはわからない。中田氏のように古代バビロニア婚姻法をこのような系統的な捉え方をすれば、離婚料とも言えるだろうが、日本のような階級間におけるものを含めて比較法的に考えると、正確にはどのように解釈すれば良いかわからなくなる。

日本の江戸時代において、武士階級以外の一般庶民で村落の当主などが離縁するに際しては、やはり「趣意金」ないし「縁切金」と称する慰謝料が支払われることがあり、その一例として「詫入申」離縁状では、妻方が趣意金として二両二分を受取り、妻が不埒でオカシラが介入した離縁では、夫が縁切金として五両を受理している〔op. cit., 高木侃著「三くだり半」江戸の離婚と女性たち、平凡社選書105、p. 110参照〕が、古バビロニアにおいては、このハンムラピ法典第139条などを考察してみると、女が不埒あるいは欠陥があったとしても、夫の側から慰謝料のようなものを取れなかったに相違ないと推察できる。


いずれにせよ、この第139条の規定は、直前の第138条の冒頭にあるアウィルム間の規定で、嫁がムシュケーヌム階層などの出ならば次の第140条に見られるように離婚料とも言うべき「手切金」なるものはこの第139条の½しか支払わなくてもよかったようである。

この第139条と次の第140条のみならず、後の第198条以降も離婚料ばかりか損害賠償などの支払いにも、古代バビロニアでは言わば「銀本位制」

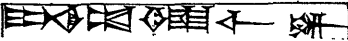
とも呼べる銀の薄片が通貨の代りに使用されていたことがこの当時普遍的慣習となっていたことがよくわかるが、同じセム系民族でも、これから約850年位後の古代におけるユダヤ社会ではもう銀はそれ程通貨としての役割をはたさないようになっており、古代イスラエル王国のソロモン王（B.C.971年頃～B.C.931年頃）の時代では、金と銅のほうが通貨としては重要なものとなって、通貨制度の金属としての価値そのものがすでに変化していたようである。

因みにそれから更に650年以上経った古代ローマでも、特に共和制下においては、貿易等で銀があまり入手できなかったせいでもあるが、十二表法公布以降のローマ共和制時代は、言わば「銅本位制」に近い形で、多分1ポンドの重量であったと推量される「青銅 aēs の貨錠 (ās librālis)」を一定の形で鋳造することで、それを天秤で秤って使用していたと考えられ、銅のほうが銀よりも多く使われていたことが考古学上も確かめられている。

第140条（原文・逐語訳）


 šum-ma maš-en-kak 1/3 ma-na kaspim

もし ムシュケーヌなら 1/3 マナの銀を


 i-na-ad-di-iš si-im
 与える 彼女に

第140条（試訳）

（もし、離婚しようとする妻女が）ムシュケーヌムである場合、（その

夫は）彼女に 3 分の 1 マナ（約170g 弱）の銀を与えなければならないこととする。

第140条の解釈

前の第139条が、一般的なアウィルム階層の妻女であるのに対し、この条文はその相手の妻女がムシュケーヌム階層である場合、離婚料（手切金）はその 3 分の 1 マナ（約170g 弱）の銀でよい、とする規定である。この条文でみる限り、単に数値の額で比較するならムシュケーヌムの女の価値はアウィルムの 3 分の 1 ということになるが、それでも奴隸階層には属さず、このような条文によって正式な婚姻関係の対象としてきちんと位置づけられている。

ムシュケーヌムは、殆どの条文で「ムシュケーヌム階層」と記述してきたが、この第140条などに関する限りは階層というよりも宮廷における職業的な地位とみたほうが良いだろう。この第140条の条文を原田慶吉氏の訳としては「もしムシュケーヌム（8条参照）なときは、銀 3 分の 1 マナーを彼の女に与う。」という文章で表わしているが、翻訳文としては後に改訳した中田一郎氏の訳文も同様に「もし（夫が）ムシュケーヌムの場合は、銀 3 分の 1 マナ（約167グラム）を彼女に与えなければならない。」と重量を細かく表示した形で翻訳している差があるだけである。

この第140条の訳文は、アッカド語の文章自体が短いので訳文の解釈においてあまり問題がないと思われるが、原田氏がムシュケーヌムの後にバーレン（マル括弧）でわざわざ（8条参照）と入れていることからわかるように、ここでムシュケーヌムという階層が正確にどのような存在であったかを再考しておかなければ、その正確な法的内容をきちんと把握できないことであろう。

単純に金銭的な側面から判断すれば、第 8 条で盗難にあったものの賠償

額がアウィルム階層の3分の1であり、この第140条にもみられるように「嫁の価値あるいは値段も丁度3分の1」であるから、人格もアウィルム階層の女の3分の1のように受け取られがちであるが、他方面から諸々と考察すると、決してそのような単純なものではないように思われる。

ムシュケーヌムについては、このハンムラビ法典石柱が発掘されて以降ハンムラビ法典について論述しようとする殆ど全ての研究者と著者がこの事項を採りあげており、例えば何度も掲げた日本語訳の出ている著作に限定してみただけでも、ホルスト・クレンゲル氏は、その意味するところが「地面に向って身を屈める者」とであるという記述に始まって約2頁〔op. cit., 邦訳『古代バビロニアの歴史』山川出版社刊 p. 186～187.〕処罰と損害賠償などの項〔邦訳 loc. cit., p. 226～227〕の他2ヶ所に亘って論じ、ハンス J. ベッカー氏の“Recht und Gesetz im Alten Testament und im Alten Orient”でも約十ヶ所に亘って論じられている〔ibid.,〕が、その代表的なところを鈴木佳秀氏の邦訳でみてみよう。なおここは鈴木氏の邦訳で第4章第2節の（2）となっているところである。

ムシュケーヌム階層

文献：F.R. Kraus. Ein Edikt des Königs Ammi-Šaduqa von Babylon (1958), bes. 144-155. ders.: Vom mesopotamischen Menschen der alt-babylonischen Zeit und seiner Welt (1973), bes. 92-125; Th. J. Meek. ANET. 166 Anm. 39 und 44; W. von Soden, muškēnum und die Mawāli des frühen Islam: ZA NF 22 (1964). 133-141; A. Speiser, The muškēnum: Or NS 27 (1958). 19-28, R. Yaron. The Laws of Eshnunna (1969), bes. 83-93. 「ハンムラビ法典研究のこの領域では、近年1つの解釈が広く定着している。それは、アウィールムは通常の自由市民で、ムシュケーヌムは社会的にアウィールムの下位に位置する特殊階層であるという解釈である（例えば、W.フォン・ゾーデンの見解がそうである）。ムシュケーヌ

ムは自由人階層に属してはいたが、社会的経済的に他者に従属する人々で、具体的には、王に従属し王に仕える者たちであった。そこから、彼らムシュケーヌムに対する特別な保護が、王によって公布された法典に数箇条にわたって明記されている理由が明らかになるという。

これは今日大多数のアッシリア学者によって擁護されている学説だが、全く異論なく確立されている学説という訳ではない。少なくとも、特に異論の方を擁護しているアッシリア学研究者の1人がクラウドであることを述べておかなければならない。クラウドは、原則的にR.ヤロン(Yaron)やTh. J.ミーク(Meek)と同意見である。通常アウィールムやムシュケーヌムは特定の住民階級を指す確固とした概念とみなされているが、クラウドはそれに相対的な意義しか認めない。つまり、最初から特定の住民階級を指す言葉として固定されていたものでなく、アウィールムとムシュケーヌムとは文脈や状況に応じて使い分けられていたのだという。彼によれば、アウィールムに言及している箇所の大部分は、もっぱら不特定の「人」あるいは「ある人」を意味しているにすぎない。他方、ムシュケーヌムと対比して言う場合は「国家のエリート層に属す者たちかエリート1個人」を意味するという(Kraus, *Vom mesopotamischen Menschen*, 117)。それに対して、ムシュケーヌムは集合概念としては「国家の指導者層から見て国の自由市民全体」を意味し、個別的な意味では「この社会の一員」であるという(Kraus, 108)。クラウドは、ミークによるムシュケーヌムの定義(private citizen)を取り入れて、研究論文等の文献で使われているムシュケーヌムを言い表わす、その他の「貧しい人」「宮廷奴隷」「半自由人」「臣下」等の表象を用いることにはっきりと反対している。〔op. cit., p. 112~p. 113〕このハンスJ.ベッカー氏の見解は、かなり一般的に普及して幾多の書物にその説明として使用されていると思われる。

ところがこの見解に対して中田一郎氏のほうは、自分の著書の「注解」で以下の如く論じておられる。

ムシュケーヌムについて

ムシュケーヌム (*muškēnum*) という言葉の初出は、ハンムラビより少なくとも500年以上前のファラ文書ということなので、¹²⁾ムシュケーヌムは早くから存在したことになるが、その実態はよくわかっていない。言及例が多いのは、古バビロニア時代で、特にエシュヌナ「法典」とハンムラビ「法典」に比較的多くの言及例が見られる。ムシュケーヌムについてのこれまでの議論の多くも、これら両「法典」のムシュケーヌムの意味をめぐる行われてきた。

ムシュケーヌムについての見解は、エシュヌナ「法典」とハンムラビ「法典」に出てくるムシュケーヌムの語に1つの意味以外認めないかあるいは認めるかによって、大きく別れる。ハンムラビ「法典」では、ムシュケーヌムが15のパラグラフに出てくるが、これらを第1グループ (§§ 8、15、16、h、175および176 [ただしVテキストでは「ムシュケーヌムの奴隷」ではなく「アヴィールムの奴隷」となっている]) と第2グループ (§§ 140、198、201、204、208、211、216、219、222) に分ける事ができる。第2グループのパラグラフでは、ムシュケーヌムはアヴィールム (*awilum*) と (そして §§196-199、209-214では奴隷に対しても) はっきり対比されている。§§166-199を例にとってみよう。

§196 もしアヴィールムがアヴィールム仲間の目を損ったなら、彼らは彼の目を損わなければならない。

§197 もし彼がアヴィールム仲間の骨を折ったなら、彼らは彼の骨を折らなければならない。

§198 もし彼がムシュケーヌムの目を損ったか、ムシュケーヌムの骨を折ったなら、彼は銀1マナ (約500グラム) を支払わなければ

ばならない。

§199 もし彼がアヴィールムの奴隷の目を損ったかアヴィールムの奴隷の骨を折ったなら、彼は彼（奴隷）の値段の半額を支払わなければならない。

§§196-199は一連のケースを扱っているが、アヴィールムがアヴィールムの目を損ったか骨を折った場合はタリオ（同害復讐）の原則が適用されるにもかかわらず、アヴィールムがムシュケーヌムの目を損ったか骨を折った場合はタリオの原則が適用されず、銀1マナ（60シキル、約500グラム）という金銭による償いで済ませることができた。さらに被害者が奴隷の場合は、奴隷の値段の半額をその所有者に支払うことで済ませることができた。奴隷の値段は、奴隷の性別、年齢その他によって異なり、時代によっても変動があったと考えられているが、ハンムラビ時代のシッパルでの奴隷の値段を例にとると、高くとも銀20シキル（約167グラム）以下であったから、¹³⁾その2分の1といえはムシュケーヌムに対する賠償額の6分の1かそれ以下で済んだことになる。加害者が同じ害を与えながら、賠償の額が大きく異なる理由は、被害者の所属する社会階層あるいは身分の違いによる。したがって、§198を含む第2グループのパラグラフから、当時バビロニアには、上から順に、アヴィールム、ムシュケーヌムそして奴隷の3つの社会階層があったと考えなければならない。

奴隷の意味については議論の余地がない。ここでアヴィールムとムシュケーヌムが、2つの異なる社会階層を表すとなると、ムシュケーヌムがアヴィールムと対比されることなく出てくる第1グループのパラグラフとエシュヌナ「法典」のパラグラフ (§§12、13、24、34、50) においても、ムシュケーヌムを特定の社会階層に所属する人を意味すると理解すべきであろうか。もし、ムシュケーヌムの語に1つの意味以外認めないとする、当然これらのパラグラフでもムシュケーヌムはアヴィールムや奴隷と

は区別される特定の社会階層に属する人を意味すると考えざるをえない。¹⁴⁾この考え方を、例えば、ハンムラビ「法典」§8に当てはめてみよう。

§8 もし人が牛、羊、ロバ、豚、あるいは船を盗んだなら、もし（その盗品が）神（殿）の物あるいは王宮の物なら、彼はその30倍を与えなければならない。もし（その盗品が）ムシュケーヌムの物なら、彼はその10倍を償わなければならない。もし盗人が与える物を持たないなら、彼は殺されなければならない。

このパラグラフを見て誰もがいだく疑問は、アヴィールムの所有物を盗んだ場合はどうなるのかということである。この疑問に対して、アヴィールムの所有物を盗んだ場合は慣習法にしたがって罰せられるのでここであえて取り上げる必要がなかった、という説明が行われた。¹⁵⁾確かに、ここで慣習法を持ち出して説明するのは具合がよいが、ソメポタミアの慣習法についてはなにもわかっていない。

スパイザーは、両「法典」におけるムシュケーヌムの言及例のうち、アヴィールムや奴隷と対比されていないパラグラフにおいては、ムシュケーヌムが王宮との関連で出てくることに注目した。彼はエシュヌナ「法典」やハンムラビ「法典」に出てくるムシュケーヌムを特別な社会集団として捉え、ムシュケーヌムが国家に対して行う奉仕ゆえに国家によって特別に保護される必要があったと考えた。

13) R. Harris, *Ancient Sippar. A Demographic Study of an Old-Babylonian City (1894-1599 B.C.)*, Istanbul, 1975, pp. 341-343 参照。人を突く癖のある牛あるいは人を噛む癖のある犬が奴隷を突いて、あるいは噛んで死に至らせたなら、牛あるいは犬の持ち主は、死亡した奴隷の持ち主に15シケル（約125グラム）を支払わなければならないとしているエシュヌナ「法典」§55および§57も、奴隷の値段を考えるうえで参考になろう。

14) 例えば、E. Szlechter と R. Borger は、それぞれ、「王の家臣 (*suget du roi*)」(E. Szlechter, *Codex* の該当箇所を参照) および「王宮所屬民 (*Palasthörige*)」(R. Borger, *TUAT* 1/1の該当箇所を参照) と一貫して訳すことによって、これらのパラグラフにおいてもムシュケーヌムが特定の階層あるいは身分に属する人々とみなしてい

ることを示している。なお、ムシュケーヌムと王宮あるいは王との関係を重視する考え方については、注16を参照。

15) 例えば、E. Szlechter. *Les lois d'Ešnunna*, 1954, pp. 41f. (R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*. 1988, p. 136 による)。

16) G.R. Driver-J. C. Miles. *BL I*. 1952, pp. 91-95 がすでにこのような見解を述べているが、ムシュケーヌムと王宮との関係を特に強調したのは、スパイザーであった (E.A. Speiser. “The *muškēnum*”, *OrNS* 27. 1958, p. 22)。

16)しかし、ムシュケーヌムが国家に対して特別重要な奉仕義務を持っていたとするスパイザーの議論は、その根拠に問題があるほか、ムシュケーヌムが本当に保護されていたと言えるかどうかについても議論の余地があり、必ずしも全面的に受け入れられてはいない。

現在、比較的妥当と思われる見解は、ミークの指摘¹⁷⁾にヒントを得たクラウスとクラウスに従うヤロンのそれであろう。¹⁸⁾クラウスは、特にスパイザーの見解に反論し、確かに、テルハトゥムがなかった場合、アヴィールム階層の夫の離婚料が銀1マナ(60シキル、約500グラム)であった (§139) のに対しムシュケーヌム階層の夫のそれが銀3分の1マナ(20シキル)であった点 (§140) などあるが、殴り合いでアヴィールムがアヴィールムを殴って死なせたなら銀2分の1マナ(30シキル)を支払わなければならないのに (§207)、相手がムシュケーヌムの場合は銀3分の1マナ(20シキル)の支払で済んでいる点 (§208)、さらに、アヴィールムがアヴィールム階層の妊婦を殴って流産させた場合は銀10シキルを支払い (§209)、妊婦自身が死んだ場合は加害者側の娘(または女性)が死ななければならないのに (§210)、相手がムシュケーヌムの場合は、流産の際は銀5シキル (§211)、妊婦が死んだ場合は銀2分の1マナ(30シキル)の支払で済んだ点 (§212)などをあげ、ムシュケーヌムが保護されていたとはいえないと反論した。¹⁹⁾

17) T. Meek, “Code of Hammurabi” in *ANET*, Princeton. 1950, p. 166, n. 44.

18) F.R. Kraus. *Ein Edikt des Königs Ammi-šaduqa von Babylon*, Leiden.

1958, pp. 144ff.; *idem*, *Von mesopotamischen Menschen der altbabylonischen Zeit und seiner Welt*, Amsterdam. 1973, pp. 92-117 (先行研究の批判的紹介を含む); R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*. 1969, pp. 83-95. 1988, pp. 132-146 (1988年版は1969年に出版された第1版を大幅に改訂している)。

19) F.R. Kraus は、§§203-204、215-216、および221-222をも S.A. Speiser に対する反論の材料としてあげるが、これらのパラグラフが反論の材料として適切かどうか疑問がある (*Von mesopotamischen Menschen*, p. 101)。

また、ハンムラビ「法典」§38に国家に対して奉仕義務を負うものとして「レドゥーム兵士、バーイルム兵士あるいはビルトゥム義務を負う者(後方支援担当者)」が言及されているが、同じ奉仕義務を負う者がサムス・イルナの手紙(TCL. 17. 761: 13f.)によると、「レドゥーム兵士、バーイルム兵士あるいはムシュケーヌム」とあることから、スパイザーがビルトゥム義務を負う者＝ムシュケーヌムという結論を引き出した。クラウスは、これに対しても、時代がやや下るが同じバビロン第一王朝のアンミ・ツアドゥカ王の勅令にビルトゥム義務を負う者とムシュケーヌムが並んで言及されていることを指摘し、ビルトゥム義務を負う者＝ムシュケーヌムという等式は成り立たないと反論し、²⁰⁾むしろハンムラビ「法典」では、ムシュケーヌムという言葉が2つの意味で使われていると主張した。

すなわち1つは、アヴィールムと奴隷の中間の社会階層に属する人の意味で、ムシュケーヌムの出てくる第2グループのパラグラフでの言及例がこれに当たる。もう1つは、「人」「市民」などの意味で、第1グループのパラグラフの言及例がこれに当たる他、エシュヌンナ「法典」のムシュケーヌムもこの意味で使われている。

スパイザーは、ムシュケーヌムと王宮の関係を特に重視したが、クラウスは、これを王宮ないしは国家の観点から見た臣民(Untertan)としての側面が表現されているに過ぎず、臣民は観点を換えれば、市民(Bürger)あるいは私人(Privatmann)に他ならないと考えた。²¹⁾したがって、クラウスは、例えば、§8のムシュケーヌムがすべての市民を意味し、§§

15-16では、王宮の奴隷とムシュケーヌムの奴隷で、すべての奴隷を意味したと解釈した。

20) F.R. Kraus. *Von mesopotamischen Menschen*, pp. 101-103.

21) F.R. Kraus. *Von mesopotamischen Menschen*, p. 106. Yaron は市民一般の意味でのムシュケーヌムの用法が見られるパラグラフは、裁判共同体ではなく王または王宮にそもそもの起源があったと見る。R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*, 1988, p. 143.

ルーヴル美術館所蔵のハンムラビ「法典」碑§176には「王宮の奴隷あるいはムシュケーヌムの奴隷」とあるが、異本Vテキストには、「王宮の奴隷あるいはアヴィールムの奴隷」となっている事についてはすでに触れた (§176のテキスト注を参照)。この箇所のムシュケーヌムは、アヴィールムと同じ「人」あるいは「市民」の意味でつかわれているのであるが、このような用法が、ムシュケーヌムをアヴィールムと写し間違える (?) 原因となったのではないだろうか。²²⁾

ムシュケーヌムは、奴隷を所有することができることから (§219)、奴隷のような不自由身分ではなく自由身分に属すると見ることができる。クラウスは、ハンムラビの時代に自由身分の市民層に階層分化が進み、エリート市民層と一般市民層に分れていったと考え、ムシュケーヌムに対比されるアヴィールムをエリート市民、そしてムシュケーヌムを一般市民とした。クラウスは、ハンムラビ「法典」には、成立時代の異なる資料が使われていると想定し、ムシュケーヌムが、エリート市民に対する一般市民の意味で使われている部分は比較的新しい資料に属すると考えている。²³⁾クラウスは、自由市民のうちエリート市民層に属する人々は比較的に数が限られていたと考えているが、ヤロンもこれに同意している。²⁴⁾ちなみに、エシュヌナ「法典」には、階層分化を明確に示すものはなにもない。²⁵⁾ [loc. cit. p. 83~p. 90]

22) また、エシュヌナ「法典」§22および§23でアヴィールムが別のアヴィール

ムに対して犯した不法行為が問題になっていて、それに続く§24が「彼に対して……」と受けて始まる。そして、この「彼」を同じパラグラフで「ムシュケーヌム」と言い換えているのであるが、ここでもハンムラビ「法典」§176（Vテキスト）の場合と同じ混乱を見ることができる（F.R. Kraus. *Edikt*, p. 151. R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*. 1969, p. 90. 1988, pp. 141f.）。ただし、M.T. Roth. *Law Collections*, p. 69, n. 8 は、§24の「彼に対して」の彼は、そのまえのアヴィールムを指すのではなく§24後半に出てくるムシュケーヌムを指していると解釈している。もしそうだとすると、エシュメンナ「法典」にアヴィールムとムシュケーヌムが対比されて出てくるのが他にないので、これは例外のケースとなる。

23) R. Yaron, *The Laws of Eshnunna*. 1969, p. 93. 1988, p. 145 ; F.R. Kraus, *Edikt*, p. 148 ; *idem*, *Von mesopotamischen Menschen*, pp. 118-120.


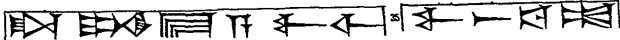







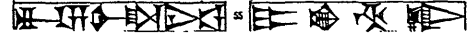

24) F.R. Kraus, *Edikt*, p. 153 ; R. Yaron, *The Laws of Eshnunna*. 1969, p. 95. 1988, p. 148.

25) R. Yaron. *The Laws of Eshnunna*. 1988, p. 148. [ibid.,]

中田一郎氏の上記のような長大な注解においてもムシュケーヌム階層という社会的階級が未だ完全に解明されたというわけではない。

特にこの第140条の解釈については、中田氏の注解の丁度中程に出てくるだけであり、なぜアヴィールム階層の女性の3分の1の離婚料の額で、言わば、今日でいう手切金として納得させる形でなぜその家から出ていけることができたかは、依然として不可解で謎となっている。しかしながら、そのことは当時のバビロニア社会では至極当然の慣習として、その社会に生きていた人々に知れ亘っていたものと思われる。なおホルスト・クレングル（Horst Klengel）氏も、ムシュケーヌムについては5～6ヶ所で説明しているが、あまり詳細な考察ではないので割愛する。

第141条 (原文・逐語訳)


 šum-ma aš-ša-at a-wi-lim
 もし 妻が 人の

 ša i-na bit a-wi-lim wa-aš-ba-at ašābu 住む、留まる
 所の に 家、人の 住む

 a-na wa-ši-im pa-ni ša iš-ta-ka-an ma ašū 出かける、逃げる
 ことを 立ち去る 公然と 決めて、

 zi-ki-il-tam i-za-ak-ki-il bi-za u₂-za-ap-pa-ah sakālu 愚行を演ずる
 愚行し 醜態を 彼女の家を 散らかし sapāhu 散らかす

 mu-za u₂-ša-am-da u₂-ka-an-nu-ši ma u₂šamda < maṭū 小さくする
 彼女の夫を 蔑ろにしたなら 確証をする (そして)

 šum-ma mu-za e-ši-ib sa iq-ta-bi
 もし 彼女の夫が 離別を 彼女の 言うなら

 i-iz-zi-ib šī ha-ra-an ša u₂-zu-ub-bu sa ešib < ezēbu 去る
 去らしめて、彼女を 旅費 彼女の 絶縁慰謝料 彼女の
 50 
 mi-im-ma u₂-ul in-na-ad-di-is šī-im
 などは 決して 払われない 彼女には

 šum-ma mu-za la e-ši-ib sa iq-ta-bi
 もし 彼女の夫が ないなら 離別を 彼女の 言わ

 mu-za sinništam šanitam i-iḥ-ha-az
 彼女の夫は 女を 第二の 娶り、

 sinništum šī-i ki-ma antim i-na bit mu-ti ša uš-ša-ab
 女は この (先の) ように 女奴隷の に 家 夫の 留まる

第141条（試訳）

ある者の妻が、（まだ）夫の家に居住しているのに（その間に）家を出ていきたいと思い（離婚しようと思って）、そのために愚行を演じ（良からぬ手段で蓄財して）、夫の家具等を疎略にし、自分の夫を蔑ろにしたことが確認（立証）された場合、その夫が離婚を決意したる時は、その妻を追放することができる。（その場合）夫は妻に何ら（その離婚によって女の実家に帰る）旅費や離婚費用等の慰謝料を支払うことは必要ないものとする。彼女の夫が、その妻に離婚を宣告しない場合（において）、夫は（その妻とは別の）新しい妻を娶ることが許される。（そのような場合、最初の妻だった）女は、夫の家に一人の女奴隷のように留まっていなければならないものとする。

第141条の解釈

事情が許せば、現代の婚姻法にもそのまま適用して欲しいと思っているような現実の「夫」が多いことだろう。ただこの当時、その妻の *zi-ki-il-tam*（愚行）がどのようにいかなる手段で立証することができたのか、このハンムラビ法典の条文だけでは明らかにされてはいない。

いずれにせよ、この第141条とそれに続く第142条は、男と女の婚姻に関する離婚の責任に就て述べたもので、本条が妻のほうの側に婚姻生活を継承してゆくにあたって重大な責任の欠如がある場合を定め、次の第142条は夫の側に古代バビロニアの社会の中でその婚姻の形態を継承してゆくことができないような責任がある場合、を定めているのである。

この条文の冒頭にあるアッカド語の解釈は、「妻女が自ら離婚を決意して、自分の世帯道具を勝手にまとめたしまったような時」という表現がそのアッカド語の大筋の解釈としてあたっていると思われる。そういう時は、夫は妻に何も持たせず叩き出しても良かったが、夫がそういう妻でも

手放したくないと思ったような場合には、夫は第二番目の妻（正妻）を娶ることができ、最初の妻は女奴隷のようにその後も夫の家で同様の（家事などに従事する）生活を継承していかなければならないことが、この第141条で義務づけられていたものと思われる。

この第141条に関する原田慶吉氏の訳文は「もし人の家の中に止宿せる人の妻が、〔家を〕立ち去らんと企てて、醜態を醜態し（演じ）、彼の女の家を乱雑にし、彼の女の夫を忽にするとき、〔彼等〕彼の女に確証し、しかしても彼の女の夫が彼の女の離別を言い渡したるときは、彼の女を離別す。⁴⁸彼の女の旅費、彼の女の手切金の類は何等決して彼の女に与えられることなし。もし彼の女の夫が女の離別を言い渡さざりしときは、彼の女の夫は他の女を娶り、その女（前妻）は女奴として、彼の女の夫の家に止宿す。」となっていた。原田氏は、更にこの条文の後で、アッカド語の ha-ra-an のところを〔註〕という形で挿入し、五人の対立する見解を（48行）Delitzsch, Landsberger 等は「旅費」と訳すも、Ungnad, Ebeling, Eilers 等は「旅立に際しては」と訳す、と書き加えて解釈の参考としている。

その一方で、中田一郎氏の第141条の訳文は「もし人の妻が、夫の家に住んでいて（家を）出ることを決意し、（何かを）横領しようとしたり、彼女の家（の財産）を浪費したり、彼女の夫を軽んじたりするなら、彼女は彼女に対して（そのことを）立証しなければならない。そして、もし彼女の夫が彼女を離婚すると表明すれば、彼は彼女を離婚することができる。彼は彼女の旅費および離婚料を彼女に与えなくてよい。もし彼女の夫が彼女を離婚しないと表明したなら、彼女の夫は二人目の女性を娶ることができる。その女性は女奴隷のように彼女の夫の家に留まらなければならない。」という内容になっている。この訳文中で iq-ta-bi がどのような「表明」であるか単に宣言だけなのかは不明である。

中田氏は、この第141条の脚注で、原田慶吉氏の訳などをあげ「女奴隸として」と訳す研究者もいるが、自分はウェストブルックなどの研究をもとに「女奴隸のように」と訳したことを短かく記述しておられる。しかしながら、この第141条で問題があるのは、むしろ楔形文字本文の第4行目から第5行目にかけての *zi-ki-il-tam i-za-ak-ki-il bi-za u₂-za-ap-pa-ah mu-za u₂-ša-am-da u₂-ka-an-nu-ši* が、一体どのような行為であるか、またそれを立証するにはどのような法的手段があったかを明らかにすることである、と思われる。

原田氏の *zi-ki-il-tam i-za-ak-ki-il* を「醜態を醜態し（「演じ」などはあまりにも抽象的であるが）、中田氏の「（何かを）横領しようとしたり」……も具体的にはっきりと意味するわけではない。古代バビロニア社会の家庭内における妻の倫理的側面を考察する場合、第138条の解釈のところであげた貝原益軒の「女大学」の記述が非常に参考になると思われるので、以下にこの第141条の前半分に関連すると思われる第九と第十の項を参考のために掲げておく。「九、婦人には、三従さんじゆう⁽¹⁾の道あり。凡そ婦人は、にゆうわ柔和にして人にしたがうを道とす。わが心にまかせて行なうべからず。故に三従の道と云う事あり。是れ亦、女子に教ゆべし。父の家にありては父にしたがい、夫の家にゆきては夫にしたがい、夫死しては子にしたがうを三従という。三つのしたがう也。いとけなきより、身をおわるまで、わがままに事を行なうべからず。必ず人にしたがいてなすべし。父の家にありても、夫の家にゆきても、つねに閨門けいもんの内に居て外にいでず。嫁して後は、父の家にゆく事もまれなるべし。いわんや、他の家には、やむ事を得ざるにあらずんば、かるふがるしくゆくべからず。只、使いをつかわして、音聞いんぶんをかよわし（たがいの事情をしらせあい）、したしみをなすべし。其のつとむる所は、しゅうと・夫につかえ、衣服をこしらえ、飲食をととのえ、内をおさめて、家をよくたもつを以て、わざとす。わが身にほこ

り、賢^{かしこ}だてにて外事^{よそごと}にあずかる事、ゆめゆめあるべからず⁽²⁾。夫をしのぎて物をいい、事をほしいままにふるまうべからず。是れ皆、女のいましむべき事なり。『詩経』の詩に、「彼^{かしこ}にあつても悪^{にく}まるる事なく、ここにあつても厭^{いと}わるる事なし」といえり。婦人の身をたもつは、つねにつつしみて、かくの如くなるべし。

注一 三従の教えの典拠は、『儀礼』喪服伝に記されている「婦人有_二三従之儀_一、無_二專用之道_一、故未_レ嫁従_レ父、既嫁従_レ夫、夫死従_レ子」である。

二 自分を誇って、賢ぶり、家庭のなかのつとめをふみだして、夫のたずさわる社会的な仕事、政治上の要務などに、口をだし、手をだすことがあつては絶対にならない。

婦人^{しつきよ}に七去⁽¹⁾とて、あしき事七つあり。一つにてもあれば、夫より逐^おい去らるる理^{ことわり}なり。故に是れを七去と云う。三に淫^{いん}なればさる⁽²⁾。四に嫉^{ねた}めざさる。五には悪^あしき疾^{やまい}あればさる。六に多言^{たご}なればさる。七に竊盗^{ぬすみ}すればさる。此の七つの内、子なきは生まれ付きなり、悪^あしき疾^{やまい}はやまいなり。此の二つは天命にて、ちからに及ばざる事なれば、婦のとがにあらず。其の余の五つは、皆わが心よりいずるとがなれば、つつしみて其の悪をやめ、善にうつりて、夫に去られざるように用心すべし。およそ人のかたちこそ、生まれ付きたれば、あらためがたかるべけれ。心は変ずる理^{ことわり}あれば、わが心だに用いなば、などか、おろかなるより賢きにも、移さばうつらざらん。然れば、わが悪しきむまれ付きをしりて、ちからを用い、悪しきをあらためてよきにうつるべし。

此の五つの内、まず父母^{したが}に順^{したが}わざると、夫の家にありてしゅうと・しゅうとめに従^{したが}わざるは、婦人第一の悪なり。しかれば、夫の去るはことわりなり。次に妻^めをめとるは子孫相続のためなれば、子なければさるもむべ(当然)也。されど其の婦の心和らかに、行ない正しくて、嫉妬の心な

く、婦の道にそむかずして、夫・しゅうとの心にかないなば、夫の家族・
 同姓の子を養い家をつがしめて、婦を出すに及ばず。或は又、妾に子あら
 ば、妻に子なくとも去るに及ぶべからず。次に淫乱^{いんらん}なるは、わが夫にそむ
 き他の男に心かよわす也。婦女は万の事いみじくとも（りっぱであつて
 も）、此の穢行^{えこう}（けがれたるおこない）だにあらば、何事のよきも見るに
 たらず。是れ女の、かたく心にいましめ、つつしむべき事なり。妬めば、
 夫にうらみ妾をいかり、家の内みだれておさまらず。又高家（高貴の家）
 には婢妾^{ひしやう}多くして世嗣^{よつぎ}をひろむる道もあれば、ねためば子孫繁昌の妨げ
 となりて、家の大なる害なれば、これをさるもむべ也。多言は、口がまし
 きなり。ことば多く、物いいさがなければ（口やかましかれば）、父子・
 兄弟・親戚の間も云いさまたげ不和になりて、家みだるるもの也。古き文
 にも、「婦に長舌^{ちやうぜつ}あるは、是れ乱の階^{はし}なり⁽⁴⁾」といえり。女の口の利きたる
 は、国家のみだるる基いとなる、という意なり。又『尚書』に、「牝鶏^{ひんけい}の
 晨^{あした}するは、家の索^{さび}しくなる也⁽⁵⁾」と云えり。鶏の牝鶏^{めどり}の、時うたうは、家の
 おとろうるわざわいとなるがごとく、女の、男子の如く物いう事を用うる
 は、家のみだれとなる。凡そ家の乱れ^{みだ}は、多くは婦人よりおこる。婦人の
 禍^{わざわい}は、必ず口よりいず。戒むべし。竊盗^{せつとう}とは、物ぬすみする也。夫の財
 をぬすみてみずから用い、或はわが父母・兄弟・他人^{あた}に与うる也。もし用
 ゆべく与うべき事あらば、しゅうと・夫にとい、命をうけて用ゆべし。し
 かるに、夫の財をひめて、わが身^{わたくし}に私し、人にあたえば、其の家^{ぬすびと}の賊なれ
 ば⁽⁶⁾、これをさるもむべなり。女は此の七去の内、五つをおそれつつしみ
 て、其の家を出でざらんこそ、女の道もたち、身のさいわいともなるべけ
 れ。一たび嫁して、其の家を出され、たとい他の富貴なる夫に嫁すとも、
 女の道にたがいぬれば、本意にあらず。幸いとは云いがたし。もし夫不徳
 にして、家賃賤なりとも、夫の幸いなきは婦の幸いなきなれば、天命のさ
 だまれるにこそと思いて、うれうべからず。

注1 夫が妻を離縁できる理由とした「七去之法」の典拠は、『大戴礼』本命の「婦有_二七去_一。不_レ順_二父母_一去、無_レ子去、淫去、妒去、有_二惡疾_一去、口多言去、窃盜去。有_二三不_レ去_一。有_レ所_レ取無_レ所_レ帰不_レ去、与更_二三年喪_一不_レ去、前貧賤後富貴不_レ去」である。ただ益軒は、この古典的な句を全面的にとりいれることなく、とくに後半の部分、わが国民の生活実態から、ほとんどをカットして自己の所説としている。

2 妻が他の男性と姦通した場合にはもとより（本編は、この意味にのみとる）、家庭以外のよろそびや仕事にふけても、離縁の理由となる。

3 「同姓」には、いろいろな意義があるけれども、ここでは男性側の親族くらの意。

4 『詩経』大雅・蕩瞻に、「婦有_二長舌_一、^{これあやうき}維^{はし}厲^{はし}之階」とある。階は、ものごとの生ずるいとぐち、の意味。口さきだけがたくみで深慮にかけた女性が、分不相応に政治むきのことにまでくちばしをいれるようになると、国家はみだれてしまう。〔op. cit.,東洋文庫302石川松太郎編『女大学集』平凡社刊1977年刊 p. 12～15〕

古代バビロニアの社会であれ、東洋古代の封建社会であれ、家庭内で妻という立場の者がどのような行為をとれば離婚の対象となるか、ある程度共通した倫理感がそこにはあるもので、現代社会からみれば当時の妻は人権など何もない、と思われようが、この第141条を正確に解釈した場合、その妻が奴隷の身分に落とされるかあるいは奴隷という立場にごく近い状態となったことは、既定の事実と思われる。それが如何に法的な措置としてとられたかは正確にはわからない。

れないのに（対して、しかるに）彼女の夫が外出しがちであり（外泊等他の女にうつつをぬかし）彼女を非常に卑しめているような場合、この妻女は何等処罰を受けず、彼女は自分の持参金（嫁に来る時持ってきた資産）を持って、自分の実家に帰ることができるものとする。

第142条の解釈

婚姻生活の破綻原因について、先の第141条は妻の側に重大な責任があったが、この第142条はその反対に夫の側に古代バビロニア社会の婚姻生活を維持していくに際して重大な過失責任があつて、妻の側には何等問題がないケースを掲げている。妻に何等落ち度がないこのような第142条のような場合、その離婚「調停」は先ず ba-ab-ti（家門、あるいは都市の門と訳したが、この場合はその一族が暮らしている生活共同体のことでもあると思われる）において審理されるものとする。そこで妻女の側の無過失が明らかにされれば、妻は婚姻の時に持参した持参金等の嫁資をそのまますべて持って実家に帰ることができる、と解釈することが出来よう。

この条文の三行目に出てくる ba-ab-ti (bābti) は、bābtum の複数斜格で、地格あるいは処格として、この「家門の場で……」と訳しておくが、bābtum は都市の中で一種の行政的機能を持った司法的な主権を行使できる場所（裁判所に近い）と、解釈するアッシリア学者もいる。このアッカド語の単語はこの条文以外にも第126条と第251条にも出てくるが、そのすべてに統一的な司法能力や行政機能が与えられているとは思えず、この条文の解釈としては一応「家門」としておくが、アウィルム階層の一家族の問題を処理するだけでなくそれよりも広い範囲の親戚等の措置をも含む行政的な機能を有しているから「都市の門」あるいは「都市の行政区域の門」としたほうが良いかも知れない。いずれにせよ離婚（訴訟）で先ず第一にこの「家の門」あるいは「都市の門」でその決定すべき客観的現実

と内容が下されたのである。この第142条に対する原田慶吉氏の翻訳は、「もし女が彼の女の夫を嫌悪して、『決して妾を抱いて下さるな』と言いたるときは、その背後にひそむ事情が、彼の女の『門』（126条参照）において審査せられ、しかしてもし〔彼の女〕が身を護れる者にして、過誤なく、これに反して彼の女の夫は外出勝にして、あまりにも彼の女を忽にしたるときは、その女は責決してなし。彼の女の嫁資を取りて、彼の女の父の家に赴く。」という文章となっていた。

この原田氏ばかりでなく、楔形文字のアカド語文章の第二行について従来妻の側から「私の身体を抱くな！」という口語的な同衾拒否の文句として解釈されてきた文章を、中田一郎氏は、古代バビロニア婚姻法上の一過程の中で把握し、以下の如く翻訳し、その根拠としておそらく原田慶吉氏も参考にしたランズベルガー氏やさらにウェストブルック氏の訳をその脚註にあげている。そして中田一郎氏はここでは特にウェストブルックの翻訳を基準に、以下の如く訳したと思われる。「もしその女性が彼女の夫を嫌い、『あなたは私を娶ることはないでしょう』¹⁰¹⁾と言ったなら、彼女の件は彼女の地区で調べられなければならない。もし彼女が身を守り、落ち度が無く、彼女の夫が家をあげ、彼女を著しく軽んじたのなら、その女性に罪はない。彼女は自分の持参財を取り、¹⁰²⁾彼女の父の家に行ってしまうことができる。」というのがその文章で、さらに中田氏が、この翻訳するにあたってその訳文に参考したとしてあげている脚註2つは以下の通り。

101) 「あなたは私を娶ることはないでしょう」と訳した言葉は *ul tahhazanni* で、常識的な訳としては、これ以外にない。問題は、パラグラフ冒頭の「もしその女性が彼女の夫を嫌い……」が示すように、この女性が既婚の女性であることから発生する。多数の研究者は、§142をすでに正式に結婚している妻が夫に（性的に）抱かれることを拒否した場合と理解するが、B. Landsberger は、これを一種の離婚宣言と見、「あなたはもはや私と結婚した状態にいないことはできない」と訳し（“Jungfraulichkeit” in *Symbolae Iuridicae et Historicae M. David dedicatae*, ed. by J.A. Ankum,

et al., Leiden, 1968, p. 87, n. 1), M.T. Roth, *Law Collections*, p. 198 は Landsberger にしたがっているように見受けられる。ahāzum という動詞は「娶る」の意味で、その中には性生活も含まれるが、動詞自体が性交渉を意味するわけではない。また、Landsberger の訳も文法的には無理がある。したがって、ここでは R. Westbrook (*OBL*, pp. 14f. and 45-47) にしたがって、仮結婚をし、義父の家に移り住んでいる花嫁が、仮結婚の状態から完全な結婚の状態に入ることを拒否し、仮結婚の解消を希望した例と考えて、上のように訳しておく。

102) この「取る (*leqūm*)」という動詞は §171b でも使われている。

以上のようにさまざまな訳が、このバビロニア時代の婚姻法を考えた上でその解釈として出されているが、この従来なされてきた解釈よりも緻密な中田氏の解釈ならびに翻訳も「娶ることはない」では文章上筋が通らず、バビロニア婚姻法の新たな資料と考古学上の発見によって大いに変わる可能性がある。そのひとつの例として第4行目末にある「身を守れる者」というのが中田氏の解説するバビロニア婚姻法の仮結婚の解消を希望した例の中でどのように具体的に解釈されるかはっきりしていない、と思われるし、そうした婚姻法の実際はその時代に生きていなければ正確なことは何もわからない、と思われる。

なおこのハンムラビ法典第142条の規定は、古代バビロニア社会において急に形成されたものではなく、それに先行するシュメール社会において既に立法化されていたものをハンムラビ王がそのまま継承したものであることが今日ではわかっている。原田慶吉氏は、その著書『楔形文字法の研究』（清弘文堂書房刊）において、中原興茂九郎氏や井上好郎氏などシュメール法の研究先駆者の業績を紹介した後『シュメール法典』第五条の訳文を以下の如くあげておられる「若し妻が其の夫に、彼を嫌って「妾の夫ではありません」と〔彼に〕請うときは、河に投ぜられる。（ことハンムラビ法典ではその解釈のところで原田氏の訳文を口語訳にし、漢字等も現代風に改めたがここでは比較法上の都合でそのまま掲載する）。これをみてもわかるように中田一郎氏の古代バビロニア婚姻法からこの条文を解釈

すると、メソポタミア地方の歴史的沿革からこの妻の言葉は中田氏の翻訳文とは矛盾するのではないかと思われる。

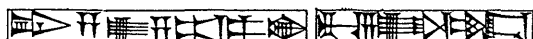
この第142条の楔形文字原文では、その第6行目末にある指示代名詞 $\dot{s}i-i$ （この……）のところで、ルーヴル博物館に安置されているフランスの考古学者がイランのスーサで発掘したハンムラピ法典の石柱裏側に刻された条文としては、上から第7欄（段）目が左端のところで終了する。次の第142条第7行目から、上から数えて第8欄の右端（裏側から見て右側に少し入ったところ）に移り、上から下に読んで（約7 cm 位）左側へ1行目ずつ読んでゆくことになる。そして第142条の（第7行目）ar-nam から、第8欄（段）目が始ってその左2行末のところでこの条文が終ることになる。

第143条（原文・逐語訳）



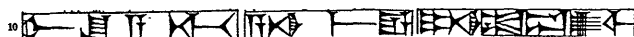
sum-ma la na-aš-ra-at ma wa-zi-a-at

（上記で）もし なく 身を守る者で 外出がちで



bī-za u₂-za-ap-pa-ah mu-za u₂-ša-am-da

彼女の家を 取り散らかし、彼女の夫を 蔑ろにするなら



sinnistam su-a-ti a-na me-e i-na-ad-du-u₂ šī

女を この に 水中 投げ込む 彼女を

第143条（試訳）

（しかしながら、前第142条中の家門による審判で）妻女のほうが、日頃から身持ちがよくなく（貞操堅固ではなく）外出しがちであり、自分の家

財を取り散らかしたり、普段から自分の夫を蔑ろないがしにしているような場合にあっては、この妻女のほうが水中に投げ込まれることになる。

第143条の解釈

前の第142条において、取りおこなわれたその行政上の地区における「家門による審判」で、その夫の罪状を訴えた妻の側にも婚姻生活を維持していくにあたって重大な欠陥を有していたことが判明したる場合、その妻は水中に投げ込まれる処罰が下されることになる。これに先立つ第141条と第142条を比較対象とした場合、一見したところ男女平等の規定のように思われるが、この第143条を見ればわかる通り、男と女が同じような婚姻生活を維持していけない不逞な行為をした時でも、アウィルム階層の男のほうは別に処罰の規定が設けられていないが、女のほうにはこの第143条の条文によって、前条の家門会議 (bābtum) による決定の結果、貞淑でなく夫の尊厳を損じていると判断された時は水中に投げ込まれる法的規範が、このように明文ではっきりと規定されているのである。

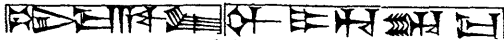
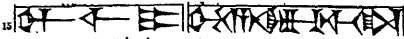

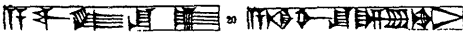


直前の第142条との関わりにおいて、その翻訳と解釈にかなり影響が出てくるが、この第143条に関する原田慶吉氏の訳は「もし〔彼の女〕が身を護る者に非ずして、外出勝にして、彼の女の家を乱雑にし、彼の女の夫を忽にしたるときは、〔彼等〕その女を水に【彼の女を】投ず。」となっており、その一方で、中田一郎氏の訳も同様に前の第142条と関連して、バビロニア婚姻法上の過程として把握した翻訳が以下の如くなされている。「もし彼女が身持ちが悪く、家をあけ、彼女の家 (の財産)¹⁰³⁾を浪費し、自分の夫を軽蔑したなら、彼らはその女性を水に投げ込まなければならない。」さらにこの第143条に関する中田一郎氏の脚註は以下の通りである。

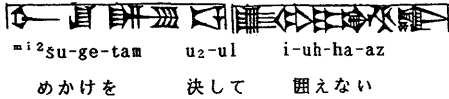
103) §143は§142の1部で、仮結婚中の花嫁の振舞いが問題になっている。したがって「彼女の家」は花婿の家のことと解釈すべきであろう (ただし R. Westbrook,

OBML, pp. 45-47 を参照)。

なお、この第143条の末にある a-na me-e i-na-ad-du-u₃ (水中に投げこむ) という me-e 「水中」とは、ハンムラビ法典第2条に出ている ilu nārum 「河神」のいる河川ではなく、一般的な「水死」をさせるべくした水のあるところと解釈するべきだろう。この場合、水による「神明裁判」ではなく、単に刑事上の処罰として水中に投げられるのであるから、この水は単なる処刑上のものと考えてしかるべきだろう。

第144条 (原文・逐語訳)

	
Sum-ma a-wi-lum lukur i-hu-uz ma	
もし 人が ナデイトウムを 娶り	ahāzu 娶ひ、取る
	naditu < lukur = mi ₂ -me
lukur šī-i amtam a-na mu-ti sa	
ナデイトウムが 女奴隷を 夫に 彼女の	
	
id-di-in ma mārē uš-tab šī	bašū ある、持つ
与えて、 子 を 持った時 彼女に	
	
a-wi-lum šu-u ₂ a-na mi ² su-ge-tim	mi ² su-ge-tu < mi ² su-gi
人が その を めかけ	下級の尼僧との説あり
	
a-ha-zi-im pa-ni šu is-ta-ka-an	
かこう事を 公然と 決めたとしても	
	
a-wi-lam šu-a-ti u ₂ -ul i-ma-ag-ga-ru šu	
人と この 決して 同意せず (彼と)	



第144条（試訳）

ある者が、ナディトゥム女（司祭）神官を（正妻として）娶り、そのナディトゥムが彼女の女奴隷をその自分の夫に与えたことによって彼女（その女奴隷）に子供が授かった場合、（その者が、この時以降）自分のシュゲーティム（シュギートゥム）女官の妾を公然と囲うことを決めたとしても、彼女（ナディトゥム女官）が決して同意しないような場合は、公然と妾たるシュゲートゥムを囲うことはできないものとする。

第144条の解釈

既に第110条や第137条などに登場してきていることからわかるように、ナディトゥム（ナディートゥムと長母音で書くこともあるが、イ音を小さく入れることで日本語は少々長母音に発音することが多いので筆者は長母音を入れない）女司祭という神官の階層は結婚することはできたがその身分上子供をつくることは許されなかった（もう既に子供を生む能力を女官になった段階で喪失するような措置がとられていたものと思われる）ので、自分の女奴隷（これもその女神官の下シュゲーティム女官）を子供を生むため自分の夫に与えることができたようである。そしてその女奴隷に子供ができたような場合、その夫はそれから後は他の妾（他のシュゲーティム）をつくることが出来ない、と定められている。

結婚したそのナディトゥムが妾をもつことに同意した場合どうするか、ということが解釈上問題となるが、この文面を逐語訳でみる限り、どうもナディトゥムは自分の夫が自分の連れてきた女奴隷以外の妾（シュゲーティム）をもつことに原則として同意してはならないもの、と解釈するのが

妥当のように思われる。そのことは、これに続く第145条以降ににおいても明らかなように、それに反して夫がシュゲーティム（シュギートゥム）女官という妾を囲った場合、どのような状況になるかが示されているからである。

古代バビロニアの「女官」職というか特別な社会的地位については、かなり複雑なところがあり、先ず、この第144条の楔形文字アッカド語文の第3行目に出てくる amtam（女奴隷）はそのままナディトゥム女神官の下に任えてその女官がアウィルム階層の男と結婚した場合に、ナディトゥム女神官は子供を生めないから自分の女奴隷をそのまま主人の自分に系属する子供を生む係（妾）とした、と考えられる。そしてその女奴隷に主人の子供が生まれた時、その主人が今度は別のシュゲーティム女官を「妾」（第4行目末）としてもらうことができるか、という解釈上の問題であろう。原田慶吉氏も中田一郎氏も、ともにこの後段において a-ha-zi-im を「娶る」と訳しておられる。また中田氏はその注釈でこの動詞をやはり「娶る」と訳しておきながら、結婚完了の項目で花婿が花嫁を娶るということとで解説しているのである。これはバビロニア婚姻法を考える上でかなり矛盾した説明ではなかろうか。

先ずは、原田氏と中田氏の訳を見えることにしよう。原田慶吉氏の訳文としては「もし人がナディートゥム（110条参照）を娶りて、そのナディートゥムが女奴を彼の女の夫に与え、しかし、〔その女奴が〕子供を存在するに至らしめ（産み）たるに、その者シュギートゥム（137条参照）を娶らんと企てたときは、〔彼等〕その者に決して〔それを〕【彼に】許すことなく、〔彼〕シュギートゥムを決して娶ることなし。」となっており、中田一郎氏の訳文も同様に「もし人がナディートゥム修道女を娶り、そのナディートゥム修道女が自分の夫に女奴隷を与え息子たちを得させたなら、（たとえ）その人が（さらに）シュギートゥム女性を娶ることを決

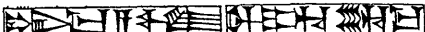




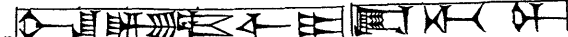

意しても、彼らは彼がシュギートゥム女性を娶ることを許してはならない。」と翻訳しておられるが、一般的にシュギートゥム（シュゲーティム）女も女（神）官であって、その地位はナディートゥム女神官よちもはるかに下に位置していたと考えられている。そして古代バビロニアでは、ナディートゥム女神官が結婚する場合、自分では子供を生んではいけないことになっていたから、シュゲーートゥム女を伴って結婚し、子供はこのシュゲーートゥムが生んだ、と考えられている。

そうするとこの第2行目の amtam（妾）と第4行目ならびに第7行目に出てくるシュゲーートゥムとの地位の差はどの位あったのであろうか。

多分同じ女が立場が変わっただけと思われる。なお中田氏は、バビロニア婚姻法の「結婚完了」の注解で、この a-ḥa-zi-im（中田氏の注解では aḥ āzum）という動詞を以下の如く記述している。「結婚は、花婿が花嫁を「娶る（aḥāzum）」ことで完了する。「娶る」の主語は、まれに花婿の父のこともあるが（例えば§166）、通常は花婿で、花嫁が「娶る」という動詞の主語になることはない。花嫁が主語として使われ、事実上結婚を意味する動詞は、「（～の家に）入る（erēbum）」である。」と書いてあり、中田氏は同じく「注解」のところで「……マルドゥクの名ディートゥムたちは、嫁入る際、しばしばシュギートゥムである自分の妹を伴って嫁入り、シュギートゥムによって子孫を得る道を夫に提供した（§145を参照）……」〔loc. cit., p. 41 と p. 131～p. 132 等に詳細〕と記述しているが、そのような事実が常にあったとは考えられない。

この両方の「女神官」職あるいは、古代社会における宗教的な意味が加った特別な地位にある女達の本当の姿は、今日まだはっきりと把握できておらず、その実像は未だ想像的な観念としてしか解釈することが出来ないのは隔靴搔痒の感を難めない。

第145条 (原文・逐語訳)

	sum-ma a-wi-lum lukur i-hu-uz ma
もし	人が ナデイトウ を娶ったが、
	mārē la u ₂ -sar-si-uš ma a-na ^{mi} 2su-ge-tim
子	を なかったので 儲け を 妾 rašū 得る、もたらす
	a-ha-zi-im pa-ni su is-ta-ka-an
持とうと	公然と 決めたなら
	a-wi-lum su-u ₂ ^{mi} 2su-ge-tam i-ih-ha-az
人は	この 妾を 持ち
	a-na biti su u ₂ -še-ir-ri-ib-si erēbu 入る
に	家 彼の 入れる (ことができる) が
	^{mi} 2su-ge-tum si-i it-ti lukur
妾は	この より ナデイトウ
	u ₂ -ul uš-ta-ma-ah-ha-ar
決して	勝るものでない

第145条 (試訳)

ある者が、ナデイトウム女 (神官) 司祭を妻に娶ったが (その妻が連れてきたシュゲーティム女奴隷が) 子供を儲けなかったのを、他に妾を持とうと公然と決定した時には、その者はこの妾を自分の家に当然のこととして入れることができる。しかしながら、この妾はその者が (正式に婚姻した) ナデイトウムよりも上位に (家庭内の立場として) 立てることは決してないものとする。

第145条の解釈

ナディトゥム女神官が、アウィルム階層の男と結婚して、その婚姻の際に連れていった女奴隷に子供が生まれなかった場合、そのアウィルム階層の男は他に妾（シュギートゥム女官）を持つことができ、その妾を自分の家に入れることができるが、正式に結婚したナディトゥムに所属する女がその家の女主人であることに変わりはなく、家に入った妾はナディトゥム女神官の下位として常に身分上位置していなければならないことを定めたのが、この第145条の条文であると思われる。中田一郎氏は、直前の第144条の解釈と注解で、この第145条の「シュギートゥムがナディートゥム女神官の妹であったことが多い」と解しているが、はたしてどうであろうか〔op. cit., p. 132〕。ところで原田慶吉氏の第145条の訳文は「もし人がナディートゥム（110条参照）を娶りたるに、〔同女が〕子供を彼に儲けしめざりしがため、シュギートゥム（137条参照）を娶らんと企てたるときは、その者はシュギートゥムを娶り、彼の家に彼の女を立ち入らしむ。〔ただし〕そのシュギートゥムは、〔正〕妻と共に決して同格に立つことなし。」となっていた。なお前条にひき続き中田一郎氏の訳文も「もし人がナディートゥム修道女を娶ったが、（その女性）は彼に息子たちを得させず、彼がシュギートゥム女性を娶る決意をしたなら、その人はシュギートゥム女性を娶り、彼女を彼の家に入れることができる。（しかし）このシュギートゥム女性は自身をナディートゥム修道女と同等とみなすことはできない。」とかなり現代人にも理解できるような口語訳としている。

中田氏が、楔形文字の第2行目と第4行目そして第6行目の3ヶ所に出てくる *su-ge* (-tim, -tam, -tum) (夫々名詞の格が違うのと語尾の -m は、もともと語尾に -ma をつけて意味を強調していたものがその末尾の a が失われた形で、第2行目の -ti(m) が属格、第4行目の -ta(m) が対格、第6行目の -tu(m) が主格である。だからアッカド語でこの語末の m は m 語尾

mimation と呼び、格そのものには関係ない)「シュギートゥム」(シュゲートィム)を片仮名で表示しているのは、中田氏が以下にその注解で述べているような意味だからである。

ナディートゥム、シュギートゥム

神殿と何らかの関係をもった女性のグループがいくつかあったが、そのなかでもナディートゥムと呼ばれる女性たちのグループは比較的よく知られている。ナディートゥムでも特によく知られているのがシッパルのシャマシュのナディートゥムである。これらのナディートゥムたちは神殿や王宮の高官、専門職人など富裕な市民を父に持つ女性たちで、なかには王女もいた。

シッパルのシャマシュのナディートゥムたちはシャマシュ神殿の境内内にあったガグー(ム)と呼ばれる一種の修道院に住んだが、修道院外の世界との接触はある程度許されていた。シッパルのナディートゥムたちはシャマシュの妻として嫁入するという形を取ったが、¹¹⁴⁾その際父の家から担当の「持参財」を持参した。¹¹⁵⁾シッパルのナディートゥムたちはこれを元手に購入した耕地を小作人を使って経営したり大麦や銀の貸付をするなど、活発な経済活動に従事した¹¹⁶⁾。

ハンムラビ「法典」に出てくるナディートゥムたちは (§§144-146)、結婚しているので、シャマシュのナディートゥムではなく、むしろバビロンのマルドゥクのナディートゥム (§182参照)であったと思われる。¹¹⁷⁾ただし、マルドゥクのナディートゥムといえども子供を生むことは許されていなかった。したがって、マルドゥクのナディートゥムたちは、嫁入の際、しばしばシュギートゥムである自分の妹を伴って嫁入り、シュギートゥムによって子孫を得る道を夫に提供した (§145を参照)。結婚したナディートゥムが夫にシュギートゥムを与えなかった場合は、そのかわりに自分の女奴隷を提供して夫に子供を得させた (§§144、146)。マルドゥクのナデ

イートゥムたちについては、よくわかっていないが、社会のエリート層出身の女性で、自身の生計を立てるに必要な資産を持っていたと思われる (§182)。ナディートゥムと呼ばれる女性たちの存在は古バビロニア時代に限られていた。

シュギートゥムと呼ばれる女性とはナディートゥムとともに第2夫人として言及されることが多いが、シュギートゥムがどのような女性であったのかははっきりしない。ただし、マルドゥクのナディートゥムがシュギートゥムを伴って嫁入った場合、2人はしばしば実の姉妹関係にあるか一種の契約によって姉妹関係を結んでいた。¹¹⁸⁾

中田氏の注解の下にある脚註は以下の通り

112) シアマシュの修道女の場合は結婚そのものが認められていなかったのも、これはおそらくマルドゥクのナディートゥム修道女の場合であろう。

113) R. Westbrook, *OBML*, pp. 107f.

114) R. Harris は、ナディートゥムをシアマシュの義理の娘と考えているが (*Ancient Sippar*, Istanbul, 1975, p. 307)、ここでは J. Renger, *ZA*58, p. 154, n. 302 や R. Westbrook, *OBML*, pp. 65-66 にしたがっておく。

115) R. Harris, *Ancient Sippar*, p. 307. ハンムラビ「法典」§§182-184をも参照。

116) R. Harris, *Ancient Sippar*, pp. 310-312.

117) R. Harris, *Ancient Sippar*, pp. 315-323.

118) シュギートゥムについては、J. Renger, *ZA*58, pp. 176ff.; R. Harris, *Ancient Sippar*, pp. 318ff.; K.R. Veenhof, “Three Old Babylonian Marriage Contracts Involving *naditum* and *šugitum*” in *Reflets des deux fleuves* (Mélanges Finet), *Akkadica*, Supplementum VI, ed. by M. Lebeau and Ph. Talon, Leuven, 1989, pp. 181ff.; R. Westbrook, *OBML*, pp. 103ff.などを参照。

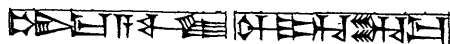
[loc cit., p. 131～p. 132]

これらの詳細な中田氏の「注解」とその脚注を参考にしても良く理解出来ないのは、この第145条に出てくる中田氏が片仮名で書く「シュギートゥム」が、その条文においてはたしてナディートゥム（中田氏はナディートゥム）の妹であるのか他人の女であるのか、という点である。中田氏の注解にあるように自分の妹だとしたらこの第145条の文面はかなり矛盾する

のではなからうか。この第145条に関する限り、第2行目と第4行目のシュギートゥム（シュゲーティム）は、別の女でしかも他人である（中田氏も契約による社会関係とは書いている）と解釈しなければどうも良く理解できないようである。そしてこの第2行目のシュギートゥムも第144条でいう amtam（女奴隷）とは違う存在のような気がするが、いずれにせよ古代社会のその地域における正確な人事と婚姻の実態が正確につかめない以上、このような解釈より先は難しいのではなからうか。

もともと現在のイスラエルにある古都エルサレムにもマルドゥク神殿があり、ユダヤ人が入り込んで自分達の神殿にするまで、マルドゥク神が崇られていたと言われている。中田氏の解説では、これらの女神官やその婚姻形態は古代バビロニア特有のものだった。という形で解説されているが古代の中近東全域にあったマルドゥク神殿で、このような女神官に似た存在と特有の制度は至るところに存在していた、と思われるが、その詳細は未だ不明のところが多い。

第146条（原文・逐語訳）



sum-ma a-wi-lum lukur i-hu-uz ma

もし 人が ナデイトゥ を 娶って、ナデイトゥ が



amtam a-na mu-ti sa id-di-in ma

女奴隷を に 夫 彼女の 与えたが （女奴隷が）




mārē it-ta-la-ad wa-ar-ka-nu-um

alādu 子を産む

子を 生んで その後


 antum si-i it-ti be-el-ti sa


女奴隷は この より 女主人 彼女の


 uš-ta-tam-hi-ir aš-šum mārē ul-du

勝るが、 故に 子を 生んだが


 be-li-za a-na kaspim u2-ul i-na-ad-di-iš si

彼女の主人は で 銀 決して 売ることはず 彼女を


 ab-bu-ut-tam i-ša-ak-ka-an si ma

奴隷の印を 付けて、 彼女に

 amtu(pl.) < geme2-ha2
 it-ti amāti i-ma-an-nu-ši

として 奴隷 数える

第146条 (試訳)

ある者が、ナディトゥム女司祭（神官）を嫁に娶って、そのナディトゥムが自分の女奴隷を夫に与えた、（そして）その女奴隷が子供を生んでから後になって（自分の）身分をわきまえず（ナディトゥムの下に系属するということを意識しないで）、同等にふるまおうとしても、そのナディトゥム女神官は（当然のこととして）女奴隷よりは（地位が上で）優位に立つことができる。しかしながら（その女奴隷は（主人の子供を生んだが故に）決して銀貨で売り払うことはできず、その後も奴隷の印をつけてずっと（主人の）奴隷として数えるような状態に置いておかねばならないものとする（ただしその女奴隷は売り払ったり、手放したりすることはできない））。

第146条の解釈

既に第110条や第137条の解釈でも記述した通り、古代バビロニアにおい

てナディトゥムという女司祭（神官）は自由人階層アウィルムと結婚することはできたが、その女神官としての身分と階層上の立場から子供をつくることは許されず、その結婚の際に連れてきた自分の女奴隷を夫に差し出しその女奴隷に子供を生ませるという方法でしか、夫との関係を保ってゆくことができなかった。しかしながら、今も昔も女というものは子供を生んだ相手に対し嫉妬するのは当然のなりゆきで、そうしたことから主人の子供を生んだ女奴隷（例えそれが自分の妹だったとしても）をそのまま他人に売り渡すことがないようにこの第146条の条文を置き、主人の子供を生んだ女奴隷を保護することにしたもの、と思われる。

原文の解釈上、女奴隷がナディトゥム女神官に優位すると受け取られかねない文章の構成となっているが、もともとナディトゥム女神官と女奴隷との身分上の差異は歴然としており、いくら子供を生んだからといって、その女奴隷が（自分の）女主人であるナディトゥム女神官よりも上位に立つことはありえない。この条文は「子供を生んだ女奴隷の身分上の保障」を明示したものと解釈するのが妥当なことと思われる。

この第146条の翻訳を見てみると、まず原田慶吉氏の訳文は「もし人がナディトゥム（110条参照）を娶りて、〔同女が〕女奴を彼の女の夫に与え、而して〔その女奴が〕子供を産み、その後その女奴が彼の女の女主と共に⁵¹同格に立ちたるときは、子供を産みたるのゆえを以つて、彼の女の女主は、銀のために、決して彼の女と与うことなく（売却することなく）〔ただ〕⁵⁶奴隷の目印を彼の女に⁵⁷施して、女奴に彼の女を算入す〔るに止まる〕。」となっており、同じく原田氏の〔註〕には（51行）事実上同格の振舞をなしたるの意ならん。（56行）シメール法（I）2条参照。」となっている。

この第146条に関しては、楔形文字第5行目冒頭の uš-ta-tam-hi-ir という動詞をどのように解釈するかで、当然のことながらその翻訳の文章も大

いに変ってくる。原田氏は「……女主と共に同格立ちたるときは……」としているが、中田氏は「……そのあと、その女奴隷が自身を女主人と同等にみなしても……」という訳にとどめている。筆者は「試訳」として、「子供を生んでから後になって女奴隷としてのその身分もわきまえず、同等にふるまっても……」すなわちその家庭内では子供に対するばかりでなく当然のことながらあらゆる事項に優位に立つもの、とだけ解釈しておくことにする。またこの第146条の末にある第8行目の解釈が、原田氏のように「女奴に彼の女を算入す〔るに止まる〕」と解釈するか、以下に述べる中田氏の訳のように「奴隷の1人とみなすことができる」という文章にするだけで正確な訳かどうか、かなり解釈に苦しむところである。

またこのひとつ前の第7行目を併せて解釈すると、この第7行目がその奴隷だけに対する処置なのか、そういう身分上の逸脱があったとき奴隷の刻印をつけてその身分をはっきりと自覚させるだけなのか正確には把握できていない。中田一郎氏は、以下の翻訳とその脚注で、奴隷の刻印を押すのではなく「奴隷の目印の髪形をさせる」と解釈しているが、はたしてそれだけですんだものかどうか分からない。


古代インドの『マヌ法典』では髪を剃るということは、その被告（ただし姦淫の罪の場合において）がバラモン階級であった場合に「死刑の代りに」課せられた（マヌ法典第八章、第379条参照）名誉刑で、このような奴隷女に対する刑罰などではなかったのである（田辺繁子氏訳『マヌの法典』岩波書店 p. 251参照）。いずれにせよ中田一郎氏の翻訳は「もし人がナディートゥム修道女を娶り、彼女が自分の夫に女奴隷を与え、（その女奴隷が）息子たちを生み、そのあと、その女奴隷が自身を女主人と同等とみなしても、彼女（女奴隷）は息子たちを生んだのだから、彼女の女主人は彼女（女奴隷）を売り払ってはならない。（しかし）彼女は彼女（女奴隷）に奴隷の目印の髪形を¹⁰⁴⁾させ、奴隷の1人とみなすことができる。」

となっていた。同様に中田氏の脚注は以下に示すようなものである。


104) 原語は *abbuttum* であるが、その解釈についてはいろいろある。ここでは CAD A₁, pp. 49f. および AHw, pp. 5f. にしたがって、「奴隷の目印の髪形」と訳しておく。これを剃り落せば奴隷の目印がなくなる (§§226-227)。G.R. Driver-J. C. Miles, *BL* I, pp. 306-309 を参照。

比較法的に考察してみた場合、単に髪形を変えさせるだけではなく、筆者はマヌ法典にあるような刻印を打ったものと考えるが、実際にこの時代に生きていたものでない限りこの第146条の第7行目冒頭にある *ab-bu-ut-tam* (*abbuttum*) がはたして刑罰的な刻印なのか、単に髪形をつけさせるだけなのか不明である。

第147条 (原文・逐語訳)


 šum-ma mārē la u₂-li-id

(上記で) もし子が なかったら 生まれ


 be-li-za a-na kaspim i-na-ad-di-is si
 彼女の主人は で 銀で 売る (ことができる)

第147条 (試訳)

(前記第146条の条文で、妻女となったナディトゥム女司祭(神官)の連れてきた女奴隷に) もしも子供が生まれなかったならば、彼女の主人は(その女奴隷を)銀貨で売り払うことができる。

第147条の解釈

前記146条の条文と深く関連して、婚家に嫁いできたアウィルム女司祭



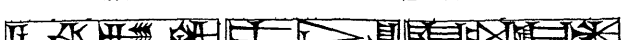

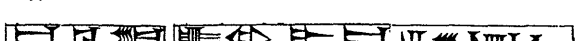
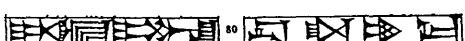

(神官) が連れてきた女奴隷(シュゲイトゥム)が主人の子供を生まなかったならば、その女奴隷は売り払われてしまうこともあり、それがその当時、古代バビロニア(その社会)の常識でもあったと考えられるのである。

奴隷はあくまでも「もの」であり人権などは有せず、これに先行する第146条は主人の子供を生んだという特殊な事由によって奴隷の身分はそのまま維持しながらも(妻女となった女神官の勝手な恣意だけで)自由に売り払われることができるという危険性がハンムラビ法典によって免除されていた、とみるべきなのである。この第147条における原田慶吉氏の訳は「もし〔その女奴が〕子供を産まざりしときは、彼の女の女主は、銀のために彼の女を与う(彼の女を売却す)。」というものであった。同様に中田一郎氏の訳は「もし彼女(女奴隷)が息子たちを生まなかったなら、彼女の女主人は彼女(女奴隷)を売ることができる。¹⁰⁵⁾」であり、その下の脚注に、105) §147は、V テキスト(Ni2358)にはない。この点については、J.J. Finkelstein, *RA* 63, pp. 14f.を参照。」とあり、そのVテキストとは、ラングドン S. Langdon 氏著の“*Historical and Religious Texts*”, *BE* 31, München, 1914, No. 22, Pl. II—III (Ni. 2358) (See also J.J. Finkelstein, *RA* 63, 1969, pp. 11ff.)//XXXI 30-59, 65-68, XXXII 22-54, XXXIII 4-42, XXXIII 71-XXXIV 27, 52-83, XXXV 72-XXXVI 33, XXXVI 62-XXXVII 4, XXXVII 30-61, XXXVII 92-XXXVIII 24 (OB or MB) [loc. cit., p. 210]

しかしいづれにせよ、ハンムラビ法典の石柱に記載されてある楔形文字には、この条文が入っており、子供を生まなかった女奴隷は売り払われる可能性があったのであると考えられる。楔形文字原文のアカド語では複数になっており、中田氏も「息子たち」とわざわざ複数形で訳しておられるが、一般的な解釈としては「一人でも生めば、売り払われることはなか

った」と理解するべきが妥当なところだろう。

第148条（原文・逐語訳）

 Sum-ma a-wi-lum aš-ša-tam i-hu-uz ma	
もし 人が 妻を 娶ったが、	
 la-a-bu-um iš-ša-ba-az zi a-na ša-ni-tim	
ラブ病に かかったのを 他の人	
 a-ha-zi-im pa-ni šu iš-ta-ka-an	
娶ることを 公然と 決めたなら	
 i-ih-ha-az aš-ša zu sa la-a-bu-um	
娶るが 彼の妻を 所の ラブ病に	
 iš-ba-tu u ₂ -ul ¹ i-iz-zi-ib-ši	
かかった 決して 離別しないで	
 i-na bitim i-pu šu uš-ša-am ma	epešu 作る、操作する
に 家 作った 彼が 住んで、	asābu 住む
 a-di ba-al-ta-at it-ta-na-aš-si si	注意 iš-ša-mu < sāmu 買う balātu 生きる
間は 生きる 面倒見る 彼女を	našū 荷を運ぶ、捧げる

第148条（試訳）

ある者が、妻女を娶ったが（その妻が）ラブム病にかかったので、他の女を（もう一人の妻として）公然に娶ることを決めた場合でも、すでにラブム病にかかった前の妻を離別することはできず、彼女は夫が建てた

家屋に居住し続けることができる。その妻が生きている間、夫は彼女の面倒を見続けなければならないものとする。

第148条の解釈

古代バビロニアにおいて流行したラアブム病が、いったいどのような病気であったのか、正確にその病気の正体を判断することは難しい。痼病した者がすぐに死ななかったところをみると、中世に爆発的に流行した黒死病（線ペスト）のような重い伝染性の強いものであった、とは考えられない。マラリアであるという説もあるが、古代においていくらレバノン杉が繁茂していたにせよ、中近東のような風土で、マラリアが流行するというのも説得力に乏しいと思われる。いずれにせよ、風邪のような軽い一時性のものでなく、かなり重い病気であったという事実だけがわかっている。私見では癩病^{ライ}レプラ（ハンセン病）等の一種の皮膚病のようなものではないかと思われるが、いずれにせよ完治しない重い病気に妻女がかかったような場合でも、アウィルム階層の男はその妻の外に公然と妾をもつことなどができるが、病気にかかった妻の面倒は死ぬまでみてやらなければならないことがこのように規定されていたと考えられる。

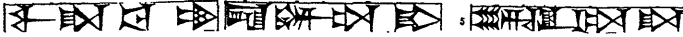
この第148条の翻訳に関して原田慶吉氏は「もし人が妻を娶りたるに、ラアブム病（癩病？）が彼の女を捕え、〔彼〕他〔の女〕を娶らんと企てたるときは娶る。〔しかれども〕ラアブム病が捕えたる彼の妻は、決して【彼の女を】離別することなし。〔同女は〕〔彼が〕建てたる家に止宿して、生存する間は、〔夫は〕彼の女を引き取る。」と括弧に疑問符つきながら、癩病（ハンセン病）としているが、中田一郎氏はその病気を特定せず「皮膚病」とだけ記して「もし人が妻を娶り、（そのあと）彼女が皮膚病を患い、彼が別の女性を娶る決意をしたなら、彼は（その女性を）娶ることができる。（しかし）彼は、皮膚病を患う彼の妻を離婚してはならない。

彼女は彼が建てた家に住み、彼は、彼女が生きている間、彼女（の扶養業務）を負い続けなければならない。」という翻訳文を掲げておられる。ところでこの第148条の条文で第6行目（終りから2行目）の i-na bītim i-pu šu（彼が作った家で）が、その主人たちが居住しているのと「同じ家屋」なのか別に「主人がその妻女のために建てた家」なのかわからない。おそらくその妻女が「居住する」ところ uš-ša-am（動詞は ašābu 住む）の場所は、その主人が建てた別の家屋または棟と思われるが、古代バビロニアの社会にあってそれだけの余裕があったのかどうかも正確なところは不明である。そしてハンムラビ法典の石柱に刻られた原文としては、この第148条の終わったところで丁度その裏面に刻された楔形文字原文の上から数えて第8欄（第8コラム、第8段目）が終了し、次の第149条から下の第9欄（楔形文字を書き始めたところから約55cm 下方）が右端から始まることになる。


第149条（原文・逐語訳）



Col. / Sum-ma sinnistum ši-i i-na bīt mu-ti sa
XXV.

（上記で）もし女がこの に 家 夫の 彼女の


wa-ša-ba-am la im-ta-gar se-ri-iq-ta ša

住むことを しない時は 同意 持参金を 彼女の


sa is-tu bīt a-bi sa ub-lam
所の から 家 父の 彼女の 持参した


u₂-sa-lam šim ma it-ta-al-la-ak
回復して、彼女に （その後）出ていく

第149条（試訳）

（第148条に規定された場合に）もしもこの妻が、自分の夫の家に居住してゆくことを同意しないような時は、その夫は妻女が実家（父の家）から持参してきた彼女の持参金を彼女に返却しなければならない。その後に妻は夫の家を出ていくことができる。

第149条の解釈

この条文に先立つ、第148条でラアプム病に感染した妻は、その後も夫の家に居住することが出来ることが定められているが、もし妻のほうがあるために夫が妾を有することを許容しないか、あるいはその他の家族と折り合いが悪くなるなど他の理由で夫の家にそのまま居住することを望まないで、自分の意志で出ていくことを決定したような場合、夫はその妻が婚姻手続き完了の時に持参してきたすべての財産（持参金など）を妻に返却しなければならない、と定めたのがこの第149条の条文である。この条文を日本で初期に訳していた原田慶吉氏は「もしその女が、彼の女の夫の家の中に止宿することに同意せざりしときは、〔彼は〕〔彼の女が〕彼の女の父の家より持参したる彼の女の嫁資を、彼の女に完済し、しかる後〔彼の女は〕行く。」という文章であったが、これに対して中田一郎氏は、楔形文字第2行目末še-ri-iq-taという単語を、原田氏が「女の嫁資」としていたものを「彼女が自分の父の家から持ってきた持参財」と三文字の単語にただけでなく後の「注解」（p. 128～p. 129）でその「持参財（シェリクトゥム）」について詳しく説明する方法をとった。その中田氏の翻訳は「もしその女性が彼女の夫の家に住むことに合意しなかったなら、彼は彼女が自分の父の家から持ってきた持参財を元通りにして彼女に返さなければならない。（そのあと）彼女は立ち去ることができる。」〔ibid.,〕とした。

中田氏の「注解」におけるこの「持参財」(シェリクトゥム)についての引用はもう既に記したが、この第149条を読解するのにも必要だから再度ここに掲載する。

持参財 (シェリクトゥム)

結婚した花嫁に属する財産は、もともと父から贈られ、¹⁰⁴⁾花嫁が妻として花婿の家、あるいは、花婿と花嫁がまだ若過ぎる場合は、義理の娘として義理の父の家に、持参した物、すなわち持参財 (シェリクトゥム *šeriktum*) と、夫から花嫁への贈物 (ヌドゥンヌム *nudunnûm*) からなる。場合によっては、花婿が花嫁の父に贈ったテルハトゥムが持参財に加えられることもあった。持参財には衣類、装身具、油、「台所用品」、家具、奴隷、家畜などいろいろなものが含まれえたが、現存の婚姻契約書などから見るかぎり、現金は含まれない¹⁰⁵⁾。

ところで、ハンムラビ「法典」で持参財を意味するシェリクトゥムという名詞は、ハンムラビ「法典」以外では、贈物一般を指し、持参財を意味する用語はむしろヌドゥンヌム *nudunnûm* という名詞であるということに注意しておきたい。

持参財は、テルハトゥムが持参財の一部に含まれている場合はその部分を除き、妻が生きているかぎり彼女の「取る」べき物として残り、彼女の子供たちといえども彼女の生存中はそれに対する権利を主張することができなかった (§§171 b、172、176)¹⁰⁶⁾。

持参財は、花嫁が花婿の家に入るときに持参し、花婿あるいは花婿の父親の手に管理が委ねられたが、持参財の所有権は、妻の生存中は、あくまでも妻が有していた。もし妻が子供なしに志望した場合は、もともと実の父から与えられた部分は、実の父の家に返されるべきもので、夫あるいは義理の父が持参財に対する所有権を主張することはできなかった (§163。ただし§141のような場合は例外)。もし彼女に子供がいた場合は、彼女の

子供が持参財を相続することができた (§§162、173、174。ただし女性がウグバブトゥム、ナディートゥム修道女あるいはセクレートゥム女官などの場合 [§§178-182] を除く)。夫が先に死亡した場合は、彼女の持参財は夫の遺産からはっきりと区別された (§§171 b、176)¹⁰⁷⁾。[loc. cit., p. 128 ~p. 129]

なお、この注解には脚注がついており、104) 母あるいは兄弟から彼女に持参財が贈られることもあった。これはもともと父の財産であったが、父が死亡したため母あるいは兄弟から贈られることになったものであろう。


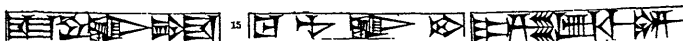
105) R. Westbrook, *OBML*, pp. 89-95.

106) エシュヌナ「法典」§18も同じ問題にかかわるが、その解釈については、R. Westbrook, *OBML*, pp. 91f.を参照。

107) シェリクトゥムについては、G.R. Driver-J.C. Miles, *BL* I, pp. 271-275 をも参照。[ibid.,]

なおこの第149条の条文から、ハンムラピ法典の刻まれた石柱原典としてはその裏側で上から数えて第9欄（第9段目、第9コラム、楔形文字の刻まれた上端から約60cm くらい下）が裏側から見て右端（右側面）のところから始まるようになっている。

第150条（原文・逐語訳）

10 
 sum-ma a-wi-lum a-na aš-sa-ti su
 もし 人が に 妻 彼の

 eqlam kirām bitam us bi-sa-am
 畑 果樹園 家 や 財産を

 iš-ru-uq sim ku-nu-uk-kam i-zi-ib si-im šarāqu 与える
 与えて 証書を 渡した時 彼女に



wa-ar-ki mu-ti sa mārē sa u₂-ul i-ba-ga-ru si

(死亡)後は 夫の 彼女の 子達は 彼女の 決して 請求できない 彼女に



um-mu-um wa-ar-ka-za a-na mārī sa

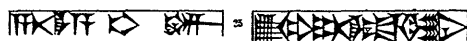
母は (死亡)後 彼女の に 子のみ 彼女の



sa i-ra-am-mu i-na-ad-di-in

rāmu 愛する

所の 愛する 与える



a-na hi-im u₂-ul i-na-ad-di-in

には (他の)兄弟 決して 与えない

第150条 (試訳)

ある者が、自分の妻女に田畑、果樹園、家屋や財産などを贈与して（そのことで）彼女のために封印証書を作製したる場合において、夫が死亡したる後、子供達は彼女に対して訴訟を起すことができない。（その妻女に子供がいる場合においては）母親は自分の子供達の中で彼女の（最も）愛している子供（最愛の息子）に自分の遺産を与えてもよいが、他人（他の兄弟）に与えることはできないものとする。

第150条の解釈

家の戸主たる人物が、自分の生前にその財産を遺贈することを定めて粘土板によって封印証書なるものを作製しておいた場合には、その者の死後、子供達を含めていかなる者もその妻女に対してその遺産に関する訴訟を起すことができない、という今日の公正証書の制度に似た規定である。このように明文で「封印証書」による遺贈の規定を設けたということは、そのような手続きを踏んでいなかった場合、その財産は主人の死後、

かなりひどい遺産相続の争いが古代のパピロニアにおいてさえ一般的には生じていたもの、と考えられる。

今日のように、一人の夫と一人の妻から生まれた子供たちの間でも「遺産相続の訴訟」が絶えない状況であるのに、古代パニロニアのように妾達あるいは妻女となったアウィルム階層あるいはナディトゥム女神官の連れてきた女奴隷たちの子供たち等多くの子供達や親類縁者等がいたであろう社会では、想像もつかない程激しい遺産相続の争いが常に展開されてきたことだろう。本条は、こうした事態に対処するため、主人が自分の死後その財産の処置を自分の妻に一切託することを封印証書にしたためておけば、他の者はそれに干渉することはできない、ということを定めたものである。

この「封印証書」は勿論粘土板で作製され、その周囲をまた粘土で覆って封印した形式のもの、と思われる。しかしながら、この第150条主文の後段で、その妻女が自分の最愛の子供だけにその財産を譲ることが出来るとしたのは、今日の観点からみて、人間の感情から至極当然のことのようと思われるが、それだからこそ、家族間の遺産に就ての争いはますます激しくなったであろうことが想像できる。従って今日の親族・相続法上の規定のようなものがあつたほうが遺贈者の意思だけにまかせるよりも社会の安定のためには、必要であつたのではなからうかと思われる。

いずれにせよ、これは今日の遺言状の規定とは異った観点から定められた当時の例外規定とみることができよう。この第150条の原田慶吉氏の翻訳は、「もし人が彼の妻に、原、園、家または動産を【彼の女に】贈与し、捺印証書を渡したときは、彼の女の夫の〔死亡〕後は、彼の女の子供は決して彼の女に取戻を請求することなし。母は彼の女の遺産を愛する彼の女の子に与え、〔他の〕兄弟には決して与うることなし。」となっていた。なおこの原田氏の翻訳文の中で、楔形文字第5行目のところで原田

氏はその書き方から「彼女の女子」とあるがこれは当然「彼女の女子」と読み息子と解釈すべきものであると考えられる。当時の書法で、原田氏は「彼女」の間に「の」の字を挿入しているからこういう場合どのように読むか厄介なのである。古代のバビロニアにおいて、こういう場合には女子に相続権があるとは考えられないからである。この条文に関する中田一郎氏の訳は「もし人が彼の妻に耕地、果樹園、家あるいは動産を贈り、彼女に対して捺印証書を残したなら、彼女の夫の（死）後、彼女の息子たちは彼女に（それらの）返還を要求することはできない。母親は自分の遺産を自分の好む息子に与えることができるが、他人¹⁰⁶⁾に与えることはできない。」となっている。

なお原田氏が「他の兄弟」としていたところを中田氏は「他人」として、脚注でその理由を述べておられる。その中田氏の「脚注」とは、106)「法典」碑の *a-hi-im* (*ahim* と読む。男性形：他人) に対し、V テキストは *a-hi-tim* (女性形：他人) となっている。CAD A₁, p. 210b を参照。」というのが中田氏の脚注である。

この当時の親族関係を改めて検証して結論を出さなければならないだろうが、女奴隷の生んだ子供など、その一家の女主人からみれば他人と同じように思えただろうが、はたしてこのアッカド語が本当に「赤の他人」を意味していたかどうかは疑問である。

第151条 (原文・逐語訳)



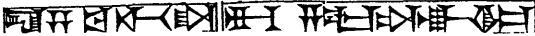
sum-ma sinništum sa i-na bit a-wi-lim wa-aš-ba-at

もし 女が 所の に 家 人の 住む



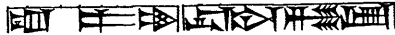
aš-sum be-el hu-bu-ul-lim ša mu-ti ša

ように 主が 債権の の 夫 彼女の



la ša-ba-ti ša mu-za ur₂-ta-ak-ki-is

ない 捕らえ 彼女を 彼女の夫と 契約して



dup-pa-am uš-te-zi-ib

粘土板を 作成した時は

rakāsu~と契約する



sum-ma a-wi-lum šu-u₂ la-ma

もし 人が この 以前に



sinništam šu-a-ti i-ih-ha-zu hu-bu-ul-lum

女を この 娶る 債権が



e-li su i-ba-aš-ši be-el hu-bu-ul-li su

の上に 彼 あるならば 主は 債権の



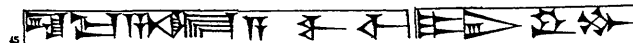
aš-ša zu u₂-ūl i-ša-ba-tu

妻を 彼の 決して 捕えられないし、



u₃ sum-ma sinništum si-i

もし 女が この



la-ma a-na bit a-wi-lim i-ir-ru-bu

以前に に 家 人の 入る



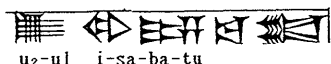
hu-bu-ul-lum e-li ša i-ba-aš-ši

債権が 上に 彼女の あるならば



be-el hu-bu-ul-li ša mu-za

主は 債権の 彼女の 夫を 彼女の



決して 捕らえられない

第151条（試訳）

その（前条の規定する内容からその妻女となった）女が、（自分の）主人の家屋に（結婚して）住むようになる以前に、彼女の夫となる人物と契約を締結して粘土板の契約文書を作製していた場合でも（そこから生じる債務によって）債権者はその妻女を拘束することができない。また、この妻女を娶る以前に、その人物が（その妻女の亭主となる男）夫の上に債権をもっていたような場合でも、彼の妻女を拘束するようなことはできないし、（その反対に）妻女となる女が、その主人と結婚する以前に彼女の上に債権があった場合にも、その債権者は、彼女の夫を（その債権に対する責務をもって）決して拘束できないものとする。

第151条の解釈

婚姻する前に、その夫婦となるアウィルム階層の男女が有していた債務については、債権者はその婚姻した相手方にその債権に関する請求権を有しないとする原則が、古代バビロニア社会において成立していたことを明らかにするのがこの第151条の条文である。この条文に対する原田慶吉氏の訳は「もし人の家の中に止宿せる女が、彼の女の夫の利息債務の主（債権者）が彼の女を捕えざらんがため、彼の女の夫を〔契約を以つて〕拘束し、証書を作成せしめたるときは、もしその者がその女を娶る以前に、彼の上に利息債務が存するときは、彼の利息債務の主（債権者）は、彼の妻を決して捕うることなく、またもしその女が人の家に立ち入る以前に、彼の女の上に存する利息債務が存するときは、彼の女の債務の主（債権者）



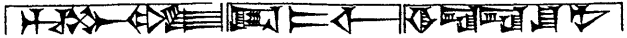

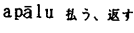
は、彼の女の夫を決して捕うることなし。」となっていたが、原田氏が「利息債務」と訳している楔形文字第2行目ならびに第6行目と次の第7行目にある hu-bu-ul-lum 語尾が li となるのが属格、その後の m は強調する-me が省略されたもの、というアッカド語を以下に示す中田一郎氏は、そのままアッカド語を片仮名書きにした「フブッルム・ローン」と片仮名書きにしたままで翻訳しておられる。

この法律用語は、ハンムラビ法典ではすでに第48条に出てきており、このハンムラビ法典の石柱で表面の下部の欠けたところにあったとみられる条文のところでも、発見された粘土板の条文のところで3～4ヶ所の条文において使われていただろうことがわかっている。この条文に対する中田一郎氏の翻訳と脚註は以下の通り、「もし人（夫）の家に住む女性が、夫の債権者が彼女を捕えないように彼女の夫と契約を結び、文書を残させたなら、もしその人がこの女性を娶る前に¹⁰⁷⁾すでにフブッルム・ローンを負っていた場合、債権者たちは彼の妻を捕えてはならない。そして、もしその女性が、その人の家に入る前にフブッルム・ローンを負っていた場合、彼女の債権者たちは彼女の夫を捕えることはできない。」というのが訳文で、その脚註は、

107) 「法典」碑の *la-ma MÍ šu-a-ti i-ih-ha-zu* (この女性を娶る前に) に対して、V テキストでは *la ih-ha-zu* となっている。*la* は一種の強調? J.J. Finkelstein, *RA* 63, p. 15 および R. Borger, *BAL* I, p. 30 を参照。」と、このように翻訳と脚註を掲げているが、次の第152条にも出てくる hu-bu-ul-lum というアッカド語の法律用語に関しては、何の解釈も説明もしないままで終っている。これが原田慶吉氏のような法律学者であっても「利息債務」と記述しているように、客観的にみてある種の債権または債務に関する特殊な法律用語であることは一般的にみて理解できるのである。しかしながら中田氏のように片仮名書きで「フブッルム・ローン」

とするならば、その法律用語が一体何を意味するのか、せめて概略だけでも解説しておくか、それを翻訳者がどのようなローンと判断しているかを説明することがせめて翻訳者としての努めではなかろうか。また第48条の解釈のところで指摘したように、この古代におけるある種の債務を片仮名書きで「～ローン」と記述することは、翻訳用語として適当とは思われない。いずれにせよ、このような古代にあって「ある種の債務を負っていた者が、婚姻によってその債務が免除される」という原則が既に存在していたことは法律学上重大な現象とみななければなるまい。

第152条（原文・逐語訳）


sum-ma is-tu sinništum ši-i
もし から 女が この

a-na bit a-wi-lim i-ru-bu e-li šu-nu
に 家 人の 入って 上に 彼らの

hu-bu-ul-lum it-tab-ši ki-la-la šu-nu
債権が 生じた時は 共に 彼ら

tamkaram i-ip-pa-lu
商人に 払う

apālu 払う、返す

第152条（試訳）

（前の第151条の条文中に記載された）この女が（自分の婚家となる）他人の家に入ってから、彼等（夫婦）の上に生じた債権については、その夫婦がともに（共同して、その家の債権者たる）商人に支払いをせねばな




らないものとする。

第152条の解釈

婚姻前に生じた、各男女の債務は第151条の規定によって夫婦が共同して支払う必要がなく（これが現代法の法規範とは大いに異なるところだが）、またそれに関して身体を拘束されたりするような責任を負わされることはないが、婚姻生活中に生じた債務は夫婦共同して（これはまさに現代法という「日常家事債務」にあたり、夫婦がこれについて連帯責任を負うことは日本民法第761条でも規定されている）、債権者にその債権額をきちんと支払わなければならないと定められていたのが本条の規定である。この短い条文に関する翻訳については、各翻訳者や研究者の訳文にあまり差が出てこないのは当然であるが、ともかく原田慶吉氏の訳はそのまま利息債務という訳語にこだわった形で「もしその女が人の家に立ち入りたる後に、彼等の上に存する利息債務が生ぜしめられたるときは、彼等両人が商人に弁済す。」という訳文をあげておられ、それに対して中田一郎氏の訳文は短い脚註を後につけて「もしその女性が人の家に入ったあと、彼ら（夫婦二人）¹⁰⁸⁾にフブッルム・ローンが生じたなら、彼ら二人が商人に対して責任を負わなければならない。」としており、同様に、この第152条に関する中田氏の脚註は、108) S テキストでは、[e-li (?)] mu-ti-ša（彼女の夫 [に]）となっている。」という「脚註」を加えておられる。古代社会において、その「自由人」とみられているアウィルム階層の住民が、妻女を娶る時に、その女が結婚する以前に商人からいかなる形の債権を負っていたか、具体的な判例をもって比較考察できない以上「ある種の債権」としか記載することができないが、すでにバビロニアのような古代社会においてある種の債務が婚姻後も「新しい家族」の上にまで追いかけて請求され、それが妻女をもらった夫にまで支払い義務を課せられたからこそ、

それを消却させるような法律上の条文と規範が必要であったと思われ、現代にも良くある消費貸借等の事例を彷彿させるものがあるが非常に面白い条文である、とみななければならないだろう。ただし古代においてはそれがどのような債権であったか、かなりその債権の内容が疑問であるが、日本でも旧民法第804条では夫が家の中心として「妻の家事代理権 (Schlüsselgewalt)」だけが認められていたことを考慮すると、この法規範はかなり重要な意義をもってくると思われる。

第153条 (原文・逐語訳)

						
šum-ma aš-ša-at a-wi-lim						
もし	妻が	人の				
						
aš-šun zi-ka-ri-im ša-ni-im mu-za uš-di-ik						
故に	男の	他の	彼女の夫を	殺すなら		
6						
sinništam šu-a-ti i-na ga-ši-ši-im i-ša-ak-ka-nu šī						
女は	この	に	杭	置く (突き刺す)		

第153条 (試訳)

ある者が妻女が、(自分の夫とは異なる) 他の男のために自分の夫を殺害したる場合、この女は杭 (先の突った杭状の処刑具) の上に身を置かれることになる。

第153条の解釈

アウィルム階層の男の妻として暮らす妻女が、自分の夫以外の男のため

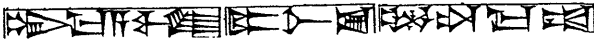

に、すなわち浮気相手の男のために自分の夫を殺害したときは、地中に打ち込んだものかあるいは埋めたてもしくは地上に置かれた先の突った杭状の処刑具によって、(その上に身を置かれる) 処刑方法で死刑の罪をつぐなわされるものとする、というのが本条の解く内容であろうと思われる。この当時の「杭」が正確にはどのようなものであったかはわからないが、おそらくは木材で先突を鋭くとがらせた部分を地上に尖らせて置いたもので、その上に身体を横にさせられて処刑されたものであろう。

杭打ちの刑は、一般的には「串刺し刑」として知られ、マルタン・モネスティエ Martin MONESTIER 氏はその著 “Peines de Mort”—Histoires et Techniques des Exécutions Capitales des Origines à Nos Jours—Le Cherche Midi Editeur, 1994で、アッシリア人のようないくつかの民族は「腹から杭を入れ脇の下や口から出していたが、この方法をとる民族は少なくとも大半は木製あるいは金属製の杭を肛門から刺していた……」(吉田春美氏と大塚宏子氏訳、図説『死刑全書』1996年刊、原書房 p. 76 参照) と記述しているが、それが具体的にどのようなになされたかについては、詳細に言及してはいない。

この条文に関する各研究者の解釈は、夫々全く別の処刑方法を想定しており、原田氏はこの条文末尾にある文章 i-na ga-ši-ši-im i-ša-ak-ka-nu si を「杭の中に置く」と解し、中田氏は「木柱に架ける」と解釈しているようである。その原田慶吉氏の訳文は「もし人の妻が他の男のゆえに、彼の女の夫を殺さしめたるときは、〔彼等〕彼の女を杭の中に【彼の女を】置く。」となっており、それに対する中田一郎氏の翻訳は、「もし人の妻が別の男性のために自分の夫を殺させなら、彼らはその女性を木柱に架けなければならない。」となっているが、この楔形文字原文およびアッカド語の文章に関してどこをどのように読めば、「木柱に架ける」という訳文が出てくるのか、一度ゆっくりお伺いしたいものである。また「……殺させな

ら」はおそらく「殺させたら」もしくは「殺させるなら」の誤植であると思われる。因みに古代インドの「マヌ法典（マーナヴァ・ダルマ・シャストラ）mānava-dharma-sāstra」の第八章においても「10クムバ（4斗から4斗半の間ぐらい）の量以上の穀物を盗んだ者（第320条）」（田辺繁子氏訳『マヌの法典』岩波書店 p. 248参照）や「押し込み強盗」で、夜中に錠を破って家屋に押し込み強盗をおこなった者に対しては、「両手を切断して、鋭い杭に串刺しにした」という処刑方法（渡瀬信之氏著『マヌ法典』中公新書 p. 218～p. 219参照）という、これに似た刑罰が記述されている。このような事例はいつの時代どこの社会でもそれこそあり余るほどあり、日本の刑法第199条の判例においても、現代的な解釈では一般的に二人以上の人間を殺さない限り死刑とはならないが、古代においてはその動機等も考慮され、日本もこれに先立つ江戸時代に、江戸の東にあった小塚原などの刑場では、処刑方法がこのような明示されて他の一般の者もその処刑された者をいつでも見られる形でそのままにしておいた、と考えられるから「杭の中」という原田氏の解釈にも問題がある、と思われる。

第154条（原文・逐語訳）

					
sum-ma	a-wi-lum	māra-zu	il-ta-ma-ad	lamādu	性的に知る
もし	人が	彼の娘を	知ったときは	mārūtu < dumu-mi₂	
					
a-wi-lam	su-a-ti	alam	u₂-še-iz-zu-u₂	šu	ašū 出かける
人に	この	町を	出て行かせる	彼に	

第154条（試訳）

ある者が、他人の子女と肉体関係をもち、その他人がその者にこの都市から出てゆけと命じたならば、その者はこの都市から出てゆかねばならないことになる。

第154条の解釈

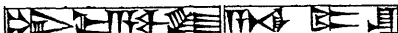

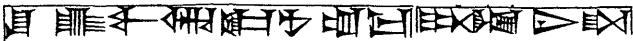
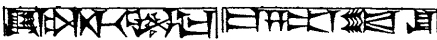


楔形文字の原文が短いので、そのまま直訳した場合によく理解できる文章とならないので、仮に以上のような「試訳」をこころみておいた。

アウィルム階層に属するある男が、ある都市（町）でそこに居住する者の娘と性的関係を持ち、その父親が怒ってそのアウィルム階層の男にこの都市（街、一定の居住区域）から出ていけと命ずるとき、その男はその父親の要求を聞いて、その街から退去し去っていかなければならないものとする。原田慶吉氏がおこなった第154条の訳は「もし人が彼の娘を知りたるときは、その者をして街を【彼に】立ち去らしむ。」と余分な字句の解釈を加えずに単刀直入で短い翻訳文を掲げているが、中田一郎氏の翻訳は「もし人が自分の娘を（性的に）知ったなら、彼らはその人を市から追放しなければならぬ。」となっており、実際にこの楔形文字の原文第1行目末に刻まれた動詞 *il-ta-ma-ad* という形は、まさしく「性的に知る」ということだと解釈して良いだろう。

古代インドの『マヌ法典』などにも未成年の少女に対する「姦淫の罪」はかなり多く規定されているが、「罰金あるいは笞で打たれる（十回位）とか、指を二本切られ、鉄板の上で焼かれる」などの処罰はあるものの、他人の子女と情交関係をもったことの刑事上の処分としてその居住している都市から追放するという処罰は、古代ではバビロニア以外ではあまりなかったように思われる。しかしながら今日でも、児童買春・児童ポルノ禁止法違反で、村木保裕東京高裁判事部の判事が直ちに現職の判事業務を外

される（平成13年5月21日）など、同じような事例は世界各地でおこなわれ、その社会独自の処罰が下されているようである。

第155条（原文・逐語訳）


 sum-ma a-wi-lum a-na māri šu
 もし 人が のため 息子 彼の

 kallātam i-hi-ir ma mār šu il-ma-zi kallātu < e₂-gi₄-a
 婚約者と 婚約して、 息子が 彼の 彼女を知ったが hāru 婚約する

 šu-u₂ wa-ar-ka-nu-um ma i-na zu-ni ša il-ma-zi = il-ma-ad ša
 彼（父）が その後 に 懐に 彼女の

 it-ta-ti-il ma iṣ-ša-ab-tu šu
 横たわっていたので 押さえた時は（彼を）

 a-wi-lam šu-a-ti i-ka-zu šu ma kasū 縛る
 人を この ^{Col. XXVI} 縛って、（彼を）

 a-na me-e / i-na-ad-du-u₂ ša
 中に 水の 投げ込む 彼を

第155条（試訳）

ある者が、自分の息子のためにある娘と婚姻契約を締結し、その息子がその娘と肉体関係をもった後に、その者（息子の父親）がその娘と同衾している時に、その者が発見されたならば、その者は捕縛されて水の中に投げ込まれることになる。

第155条の解釈

この第155条の条文では、いったい誰がこの男を捕えるのかがはっきり記載されていないので、良くわからないところがあるが、いずれにせよ、自分の息子の嫁に手を出してその姦通行為を現行犯で捕ったアウィルム階層の男は、縛られたまま水の中に投げ込まれ、溺死させられる処罰方法がとられることが、この条文で明らかになっている。

このような処刑方法は、他の条文（第129条や第133条など）にも示されているように河神（あるいは水の神）に対する供犠の要素も有していた（但し、第2条にあるような神明裁判とは異なる、と考えられる）と思われるので、古代インドのヴェーダ文献にあるヴァルナ神（司法神）との関連性があり、漢字の「法」すなわちサンズイに去るの法源とも結びついているようである。（拙著『法の源流』芦書房、第1章参照のこと）

また水には本来「清浄にする性格」があり、ヨーロッパの中世でも「姦通の罪を犯した女性」を罰するために溺死刑がおこなわれていた。

この第155条に対する原田慶吉氏の訳文は「もし人が彼の息のために花⁷³嫁⁷⁴を求婚して、彼の息彼の女を知りたるに、彼（息の父）がその後に彼の女の膝の中に横わりて、〔彼等〕彼を取り押えたときは、その者を【彼を】正しく縛して、^{82(10欄裏)1}水に彼を投ず。」となっていた。この条文に関する原田慶吉氏の註は「(73-75行) 2部44参照。(74行) 2部52参照。(1行) 原文には彼の女を水に投ずとあるも、誤写なること明らかである。」となっている。この原田氏の「註」で第155条の末尾にある第10欄というのは、ハンムラピ法典石柱の裏側上から第10段目（第10欄）の右から第1行目という意味である。なお筆者は各条文の最初に掲げた原文・逐語訳のなかで各条文毎にその楔形文字文の行数を記しているから、これと異なる。ところでこの翻訳からしても推しはかれるように、原田氏の翻訳した時代には、水に投ずる者が誤って楔形文字で書かれていることなどが気になっ

ていたようであるが、中田一郎氏は、最早このようなことは気にせず、以下の如く「もし人が彼の息子のために嫁を選び、彼の息子が彼女を（性的に）知り、そのあとで彼（父親）が彼女の膝で寝、彼等が彼を捕えたなら、彼らはその男を縛り、水に投げ込まなければならない。」のように翻訳しておられる。なおこの第155条で a-na me-e i-na-ad-du-u₂（水の中に投げ込まれる）この処罰方法は、前にも記述したようにハンムラピ法典第2条で掲げられた水による神明裁判などではなく、第143条と同じ単なる水による処罰と解釈すべきである。この処刑方法なども、当時の古代バビロニア社会における、倫理感から出た処罰と考えるべきものであろう。

第156条（原文・逐語訳）



šum-ma a-wi-lum a-na māri šu

もし 人が のため 息子 彼の



kallātam i-hi-ir ma māru šu la il-ma-zi ma

婚約者と 婚約し（まだ）息子が 彼の ないのに 彼女を 知ら




šu-u₂ i-na zu-ni ša it-ta-ti-il

彼が に 懐ろ 彼女の 横たわった時は



1/2 ma-na kaspim i-ša-qal šī-im ma

1/2 マナの 銀を 支払い、彼女に



u₃ mi-im-ma ša iš-tu bīt a-bi ša ub-lam

且つ 物を 所の から 家 父の 彼女の 持参した

15 
u2-sa-lam si-im ma

回復してから、彼女に


mu-tu li-ib-bi sa i-ih-ha-az zi

夫が 意中の 彼女の 娶る 彼女を

第156条（試訳）

ある者が、自分の息子のためにある娘と婚姻契約を締結し、未だ自分の息子がその娘と肉体関係を有していない時期に（自分の方が先に）彼女と同食して肉体関係をもったような場合、その娘には2分の1マナ（約250g）の銀（貨）を支払わなければならない、また彼女の父親の家から（嫁入りのために）持参してきたすべてのものをその娘に返還してから、その娘が自分の意中の男に彼女を嫁がせねばならない。

第156条の解釈






この条文に先立つ第155条の場合は、アウィルム階層の男が、自分の息子の嫁にすでに息子が肉体関係をもった後に手をつけた場合にどう処罰されるかを定めた条文であるが、この第156条のほうは、自分の息子のために婚姻契約を締結して相手方の娘をもらってきたが、自分のほうがその娘に欲情し先に手を出してしまった場合どうするか、という条文のようである。第155条のほうは、かなりきつい姦通罪として例えアウィルム階層の男であっても処罰の対象となったのであるが、この第156条のほうは、未だ息子がその嫁に手をつけていない時期に手を出した場合であるので、2分の1マナ、すなわち約500gの銀（貨）をその償いに支払って、その娘が自分でかねてから思っている男のもとに嫁がせればよく、今日の刑事的な訴追で刑法上の処罰を下されることがなく、今日の視点からはかなり






へだたったものと思われるが、当時のバビロニア社会では法的な基準と関心は他に向けられていた、とみななければならないだろう。







すなわち自分の息子が既に手をつけた肉体関係のある息子の嫁に手を出すことは重大な犯罪であるが、未だ息子が肉体関係をもつ前に息子の「将来の嫁」と肉体関係を結ぶことは単に民事的な今日という損害賠償とそれに伴う義務を負うだけで許される、と解釈せざるを得ないだろう。これらを今日的な民事・刑事関係の理論的感覚をそのままの形で理解しては大きな誤解を生ずるであろう、と思われる。原田慶吉氏のこの条文に関する翻訳は「もし人が彼の息のために花嫁を求婚し、彼の息が彼の女を知らざるに、彼（息の父）が彼の女の膝に横わりたるときは、〔彼は〕銀半マヌーを彼の女に支払い、なおかつ〔彼の女が〕彼の女の父の家より持参したるものを彼の女に完済し、しかる後彼の女の心中の夫が彼の女を娶る。」となっている。

その一方で中田一郎氏のほうの翻訳は「もし人が彼の息子のために¹⁰⁸⁾ 嫁を選び、彼の息子が彼女を（まだ性的に）知らないで、彼（父親）のほうで彼女の膝で寝たなら、彼は彼女に銀2分の1マナ（約250グラム）を支払い、彼女が彼女の父の家から持ってきた物は何であれ元通りにして彼女に返さなければならない。そして、彼女の意になかった夫が彼女を娶ることができる。」となっており、その下の脚註で、すなわち109)「Xテキストは *a-na DUMU-šu*（彼の息子のために）を欠く。」と記しているが、このXテキストとは、ハンムラビ法典を最初に282ヶ条に分類したシャイユ（シュイユ、シェイルとも記す）氏著の“*Mémoires Délégation en Perse*”を後にゴッセン G. Dossin 氏が註釈を加え、それを粘土板の資料で補ったものである。

第157条（原文・逐語訳）

				
sum-ma	a-wi-lum	wa-ar-ki	a-bi	su
もし	人が	(死)後に	父の	彼の

				
i-na	zu-un	um-mi	su	it-ta-ti-il
に	懷ろ	母の	彼の	横たわる時は

					
ki-la-li	su-nu	i-qal-lu-u2	su-nu-ti	qalū	焼く
二人とも	彼ら	焼く	(彼らを)		

第157条（試訳）

ある者が、自分の父親の後にその母（父親の嫁）の懷ろに横たわる（同衾する）時は、その二人とも焼殺されるべきものとする。

第157条の解釈

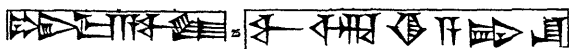
この原文に記載されたる wa-ar-ki が、単に「父親の後で……」か「父親の死後……」にか解釈に苦しむところであるが、ここでは前者と解しておくことにする。また um-mi（母親）が自分の生母があるかどうか良くわからないが、ここでは一応そういうことは考慮せず父の妻女と解釈しておくことにしたい。しかしながら、当時の社会でしかも一夫多妻制で父親も自分の母親以外に若い嫁や妾をもっていたであろう状況下で、その妻女を一般的に「母親」という立場で考えていたとは思えないので、母と息子の近親相姦とみたほうが正しいのかも知れない。当時の古代バビロニア社会にあっては、すでに近親相姦にかんする倫理的な深い配慮がなされており、それゆえにその罪を犯した者たちへは最も重い「焼き殺す」という処刑法が規定されていた、と解釈するのが正当である、と思われる。

古代ギリシアやエジプトなどで「普通におこなわれていた近親相姦に対

して、焼き殺すという厳しい処刑方法を明示したセム系法文化はこの当時かなり高い倫理規範の側面を有していたものと言えよう。原田慶吉氏の翻訳は以下のように「もし人が、彼の父の〔死亡〕後に、彼の母の膝の中に横わりたるときは、〔彼等〕彼等兩人を【彼等を】焼く。」となって父親の死後と解釈している。

その一方、中田一郎氏も同様に「もし人が、彼の父の（死）後、彼の母の膝で寝たなら、彼らは彼らを二人とも焼き殺さなければならない。」とほぼ同様の訳文にしておられるが、この処刑方法として「焼殺」とあるのは、古代バビロニアの倫理感で、かなり自分の実母という限界だけでなく、父親の妻女（それが自分の実母でなかったとしても）との同衾が、すでになんまり忌むべきもの、と考えられていたからだと解釈できるのではないだろうか。キリスト教文化が、かなり浸透した中世のヨーロッパでも火刑は「近親相姦」に対する処罰方法として残され、「聖ルイ法令集」や「フレディックⅡ世の基本法」に規定されていたことが前記（第153条の解釈に既述）マルタン・モネスティエ Martin MONESTIER 氏の著述に記載されている〔loc. cit., p. 125 参照〕


第158条（原文・逐語訳）

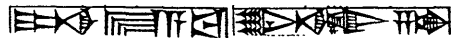

sum-ma a-wi-lum wa-ar-ki a-bi šu

もし 人が （死）後に 父の 彼の


i-na zu-un ra-bi-ti šu ša mārē

で 懷ろ 奴隷頭の 所の 子達を alādu 生む


 wa-al-da-at it-ta-aš-ba-at a-wi-lum šu-u₂
 生んだ 捕らえられた時は 人は その


 i-na bīt a-ba in-na-az-za-ah nasāhu 勘当する
 から 家 父の 追い出される

第158条（試訳）

ある者が、自分の父親の死後にその女奴隷（頭）のところ（膝の中）で自分の子供達を生んだことがわかって（あるいは、自分と同じ息子たちを生んだ女奴隷頭のところで）捕えられたる場合に、その者は父親の家からは追放されることになる。

第158条の解釈

この第158条の楔形文字原文の粘土板ならびにこの石柱に記された文書だけでは、かなり短かい内容なので、正確なことは何等わからないが、第155～157条に続くと、この条文中に書かれた ra-bi-ti が単なる奴隷女の頭目ではなく、父親の妾としての役割りをはたしていた女である、とどうやら解釈することができる。

この条文に先立つ規定の場合は、父親が正規に婚姻した妻女であったために処罰がきつかったが、この条文では父親が手をつけた奴隷女だったために、その父親の実家からの追放によって、他の刑事的罰則が加えられなかった、と総合的に考えるべきであろう。

しかしながら実家からの追放ということは「廃嫡」ということをその言外に意味し、アウィルム階層としてその一家を統括できないことになるから、当時それなりの重罪となっていたものと思われる。この条文に関する原田慶吉氏の訳は「もし人が、彼の父の〔死亡〕後に、彼を成長せしめた

る者（継母）にして、子供を生みたる者の膝の中にて取り押えられたるときは、その者は父の家より追い出さる。」となっており、それに対して中田一郎氏の翻訳は、楔形文字原文第2行目の *ra-bi-ti* を「第一夫人」とランズベルガー氏の意見に従って解しておられるようである。その中田氏の翻訳は「もし人が、彼の父の（死）後、息子たちを生んだ彼の第一夫人¹¹⁰⁾の膝で捕えられたなら、その人は父の家から追放されなければならない。」となっており、その下の脚註で「110) *CAD* M₂, p. 216b は *B. Landsberger, ZDMG* 69, 1915, p. 524, n. 2 にしたがって *<mu> ra-bi-ti-šu* と「法典」碑を訂正し「養母」と訳すが、Vテキストにはっきりと *ra-bi-ti-šu* とあるので、訂正の必要はない。亡夫の第一夫人であったが自分の母親ではない女性の懷で捕えられた場合が問題になっているのであろう。R. Borger, *BAL* I, p. 31; A. Finet, *Le code*, p. 95 を参照。」となっているが、それらをすべて参考にして考察してみても、なおこのアッカド語を「第一夫人」あるいは「正夫人」と考えるのはどうかと思う余地が残される。このように解釈した場合、それに先行する第157条の条文で「焼殺」されることが決っているのだから、第一夫人の場合にそれより軽い罪が規定されることの矛盾をどう解決してゆくべきか、良くわからなくなるだろう。これらを正確に理解するには第157条の *um-mi*（母）と *ra-bi-ti* など、アッカド語の意味するところを、更に厳格に定義し直してから、再び解釈し直してみる必要があるのではないだろうか。

第159条 (原文・逐語訳)

	
sum-ma a-wi-lum ša a-na bit e-mi šu	
もし 人が 所の に 家 義父の その	
³⁵ 	
bi-ib-lam u ₂ -ša-bi-lu tir-ha-tam id-di-nu biblu 贈り物	
結納を 届け 婚約品を 贈った abālu もたらす	
	
a-na sinnistim ša-ni-tim up-ta-al-li-is ma	
に 女 他の 目がくらみ palāšu 値れて見る	
⁴⁰ 	mārat < dumu-mi ₂
a-na e-mi šu mārat ka	
に 義父 彼の 「娘は 貴方の	
	
u ₂ -ul a-ha-az iq-ta-bi a-bi mārtim	
決して貰いません」といえば 父は 娘の	
	
mi-im-ma ša ib-ba-ab-lu šum i-tab-ba-al tabālu 所有にする	
物を 贈られた 彼に 貰っておく	

第159条 (試訳)

ある者が、(自分の将来の) 義父となる人の家屋に結納を届け、婚約品を持参することによって(花嫁の価値を定めたが、その後)、他の女に目がくらみ、(その将来の) 義父に「私は、貴方の娘は決して貰いません」と言った場合において、その娘の父親は、自分に贈与された(すべての)物品(結納品類)を貰ったまま(手もとに置いておくことができる)の状態でよい。

第159条の解釈

日本の民法で言えば、第四編親族編の第2章第1節第2款に位置する






「婚姻の無効及び取消」(第742条～第749条)にあたるところである。




古代の規定はもっと簡単で、婚姻の無効及び取り消しの理由を「他の女に目がくらんだ」からと記述するにとどまり、その場合に自分がこの婚姻の予約に支払った結納金等そのために持参したすべてのものを放棄すれば、こと足りたのである。





ハンムラビ法典ではこの第159条から「婚姻とその取消し」が規定されているが、この項で少くとも財産法上の帰結にまでその規範が決められているとみるべきで、当時の古代バビロニアの婚姻制度では、花嫁の父親が花婿の支払う花嫁仕度金たる結納金を受け取ったところから始まり、後で花婿の側から婚約を取り消したならば、彼はすでに支払った結納金等すべてのものを放棄する必要があったからで、これは当時の状況下にあっても相当な額にのぼった筈である。






この第159条に関する原田慶吉氏の訳文として「もしその義父の家に結納を持参せしめ、花嫁代を与えたる者が、他の女に眼を投じて、彼の義父に向い、『貴方の娘御は決して娶りません』と言いたるときは、娘の父は彼に持参せられたるものを留む。」とだけ記載されていたが、これに対して中田一郎氏は、原田氏が「花嫁代」と訳している *tir-ha-tam* を、そのアッカド語を使った片仮名「テルハトゥム」という形で、古代バビロニアの婚姻儀式をそのまま後に注解として入れたことで記載し、すでに第138条に登場したこの用語をそのままの言語で使用して以下の如く「もし彼の義理の父の家に結婚式のプレゼントを運ばせ、テルハトゥムを与えた人が、別の女性に目を引かれ、彼の義理の父に、『私はあなたの娘さんを娶りません』と言ったなら、娘の父は、彼のもとに運ばれた物は何であれ自分の物とすることができる。」という訳文を掲載しておられる。それゆえにこの「テルハトゥム」に関してはすでにかなり詳しく述べてあるので第138条以下の解釈のところを参照していただきたい。






第160条（原文・逐語訳）




				
sum-ma	a-wi-lum	a-na	bit	e-mi-im
もし	人が	に	家	義父の

		
bi-ib-lam	u2-sa-bi-il	tir-ha-tam
結納を	届け	婚約品を

			
id-di-in	ma	a-bi	märtim
贈ったが		父が	娘の

				
märti	i	u2-ul	a-na-ad-di-ik	kum
「娘は 私の 決して やりません 貴方に」				

				
iq-ta-bi	mi-im-ma	ma-la	ib-ba-ab-lu	sum
と言った時は 物を 同等の 贈られたと				

		
uš-ta-sa-an-na	ma	u2-ta-ar
二倍にして		返す

第160条（試訳）

ある者が、義父となる（アウィルム階層の）人の家に結納を届け婚約品を持参して花嫁の価値を定めようとしたが、その娘の父親が「私は、私の娘を決して貴方に嫁がせはしない」と言った（ような）場合、（その義父となるべくした人物は）自分のもとに（その男が）持参したすべてのもの（結納品）を2倍にして返却しなければならない。

第160条の解釈

現代の親族法の観点からみれば、自分の娘を嫁にもらいに来た男に対してその申し込みを拒否した場合の「慰謝料」として、その男が持参した結納金等の倍額を支払わなければならない、というのはいかにも法外な賠償


額のように思われるが、当時のバビロニア社会において、いきなり何もコネとか特別な関係もない家の娘を嫁としてもらいに行くわけでもなく、当時のアウィルム階層の社会秩序においては多分、特別の関係にあった知り合いの中で、その娘を嫁の候補として予め選定するのは（その仲間の社会常識としては）当然のことであつたからだと思われる。


後世のセム系法文化特にアラブ民族の中で展開されるようになる「聖クルアーン（コーラン）」とハディース（イスラーム伝承集成）に規定されたイスラーム社会での結婚と比較すると、この婚姻申し込み拒否の慰謝料は余りにも高いと思われるが、その後この規定はセム系法文化の中では発展しなかったからなのだ、とも考えられるだろう。この第160条に対する原田慶吉氏の訳は『もし人が義父の家に結納を持参せしめ、花嫁代を与えたるに、娘の父が、「私の娘は決して貴方に差し上げません」と言いたるときは、〔娘の父は〕彼に持参せられたるものはすべて2倍にして返す。』となっており、筆者の試訳で「婚約品」とし原田氏が「花嫁代」としたtir-ha-tamを中田一郎氏は、前の第159条とそれに先行する第138条から一貫してバビロニアの婚姻法を考慮したアッカド語の片仮名で、テルハトゥムという単語をそのまま使用し続けて翻訳し「もし人が義理の父の家に結婚式プレゼントを運ばせ、テルハトゥムを与え、（そのあと）娘の父親が、『私の娘をあなたにあげない』と言ったなら、彼（娘の父親）は、彼のもとに運ばれた物は何であれ、すべて倍にして返さなければならない。」と記載している。


娘を嫁にやると言っていた父親が、その将来亭主となる男が、花嫁代（婚約品テルハトゥム）を持参してきた後で、自分の娘を嫁にやるのを拒否するようになったら、その持参した花嫁代（テルハトゥム）の倍額をその亭主となる筈だった男に返還するというのは、近現代の東洋でもあつたような制度で、その規定された額はかなり正当なものとしてどこの社会で


も認められていた範囲であろう。この翻訳でも古代バビロニアの婚姻制度はわざわざ片仮名を使う程難しい内容であるとは思われないが、はたしてどうであろうか。


第161条（原文・逐語訳）



 sum-ma a-wi-lum a-na bit e-mi su
 もし 人が に（行き）家 義父の 彼の



 bi-ib-lam u₂-ša-bil₂ tir-ha-tam
 結納を 届け 婚約品を



 id-di-in ma i-bi-ir, šu ug-dar-ri-zu qarāšu そしる
 与えたが、 同僚が 彼の 彼を中傷したため ugdari-zu = ugtarišu šu


 e-mu su a-na be-el as-sa-tim
 義父が 彼の に 主 妻の


 mārti i u₂-ul ta-ah-ha-az iq-ta-bi
 「娘を 私の 決して 娶るな」と言ったならば（義父は）


 mi-im-ma ma-la ib-ba-ab-lu šum
 物を 同等の 持参したと 彼に


 uš-ta-ša-an-na ma u₂-ta-ar u₃ aš-ša-zu aš-ša-zu = aššatu šu
 二倍にして 返し、 又 彼の妻を


 i-bi-ir šu u₂-ul i-ih-ha-az
 同僚も 彼の 決して 娶らない（娶ってはならない）

第161条（試訊）

ある者が、義父となる人の家に結納を届け婚約品を持参して花嫁の価値を定めようとし、その後その者の同僚がその者を中傷したがためにその義父が妻の夫となる者に対して「私は、自分の娘を決して貴殿には嫁がせない」と明言したる場合、その義父は自分のもとの持参した全てのもの（結納品）を2倍にして返却しなければならない。また（中傷行為をした）その同僚も自分の妻としてその娘を娶ることはできないものとする。


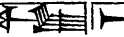


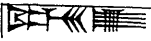


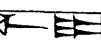
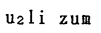
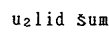
第161条の解釈

この条文に先立つ第160条と損害賠償の額は同じであるが、この第161条では、娘の父すなわち申し込みを受けた花嫁の父親（将来の義父となる人物）がその申し込みに来た者と同じアウィルム階層の同僚の人物がその花嫁となるべき娘の父親に対して、婿となろうとするその男の中傷をおこなったため、それを理由としてその父親がこの婚姻を無効にするべく「私は、自分の娘を決して貴殿には嫁がせない」と明言したような場合、その父親がその代わりに自分の娘をもらいに来た人物が持参してきた全てのもの（結納、花嫁の価値品）を2倍にして返却しなければならない、と規定されているのである。

しかしながらこの条文では、その中傷をした男にもその娘を決して嫁に嫁ることができない、という言はば反対給付とも言うべき罰則が与えられている。今日的な刑罰思想では少々軽すぎるように思われるが、当時のバビロニア社会ではそのように中傷に関する刑事上の概念が未だ明確には成立していなかったようである。このような犯罪に関しては、日本の刑法では第35章の第233条に「信用毀損及び業務妨害」などとして簡単な基定が設けられているだけだったが、英米法では slander（口頭の誹毀）と libel（文書の誹毀）という17世紀以来の区別が併合して defamation（名誉毀

損) となって刑法上のかなり確立した概念を形成するようになっていた。だが古代の法律では、この程度で単に民事上の規定が設けられているだけにすぎなかったようである。この条文に対するローマ法学者である原田慶吉氏の翻訳を見てみると「もし人が彼の義父の家に結納を持参せしめ。花嫁代を与えたるに、彼の同僚が彼を中傷し、彼の義父が妻の主に向いて、『私の娘は決して娶って下さるな』と言いたるときは、〔彼の義父は〕彼に持参せられたるものはすべて2倍にして返し、かつ彼の妻を彼の同僚は決して娶ることなし。」となっていたのに対し、現代語風の文章で訳した中田一郎氏もその文章の内容は原田氏とあまり変わりなく、以下の如く「もし人が彼の義理の父の家に結婚式のプレゼントを運ばせ、テルハトゥムを与え、(そのあと) 彼の仲間が彼を誹謗し、(そのため) 彼の義理の父が妻の主人(婿) に対して、『あなたは私の娘を娶ることができない』と言ったなら、彼のもとに運ばれた物は何であれすべて倍にして返さなければならない。また、彼の仲間は彼の妻を娶ることはできない。」と翻訳している。なおこの訳文中テルハトゥムについては第138条以下の解釈のところを参考にされたい。この第161条もその詳細が良くわからないのでこれ以上の解釈は難しいと思われる。

第162条 (原文・逐語訳)


			
sum-ma	a-wi-lum	aš-sa-tam	i-hu-uz
もし	人が	妻を	娶り (妻は)
			
mārē	u2-li	zum	ma sinništum
子を	生んだが	彼に	女が
			この
			
			si-i
			
			u2li zum = u2lid sum

Col.
XXVII




a-na šī-im-tim / it-ta-la-ak

に従って 運命 行く（死んだ）ならば



a-na še-ri-iq-ti ša a-bu ša u₂-ul

につき 持参金 彼女の 父は 彼女の 決して



ī-ra-ag-gu-um še-ri-iq-ta ša ša mārē ša ma

請求しない 持参金は 彼女の 物 子達の 彼女の（だからである）

第162条（試訳）

ある者が妻女を娶り、その妻は彼のために子供を生んだが（あいにく）この妻が運命に従って行ってしまった（死んでしまった）場合、その妻の父親は彼女の持参金（嫁資）について決して請求できないものとする。（そして）彼女の（結婚する時持ってきた）持参金は（すべて）彼女の子供達のものとして相続する（してゆく）ことになる。

第162条の解釈

古代バビロニア社会における「相続の原則」を端的に述べたもので、娘を嫁に出す時に持たせた持参金等の嫁資は、その嫁いだ先で子供達ができ後に娘が死亡したとしてもその父親はその嫁資等を取り戻すことはもうできない、という相続法の原則を述べたのが、この第162条の条文である。次の第163条には子供ができなかった時、その嫁の実家の父（義父）は、婿になった男が嫁をもらいに来た時の結納金さえ返却すれば、嫁資（持参金）として娘に与えたものは取り返せると規定している。

（原文第3行目）シェリクトウム še-ri-iq-ti（持参金）が、今日の婚姻における持参金よりもその帰属において重要な意義を有していたことがよくわかるが、はたしてどれ位のものであったか個々の事例によって異なる

ので正確には不明である。なお中田一郎氏はその注解の p. 128～p. 129のところで「持参財（シェリクトゥム）」という形で解説しておられる。

しかしながら、このような規定があるところからみて、古代社会においてはかなり重大な財産上の価値を有していたとみられ、持参金というよりも寧ろ「嫁資」という訳語のほうがそれに近いかも知れない。この内容はむしろ中世のフランスやスペインにおける嫁資に近い、と考えたほうが良いだろう。


なおこの第162条に関する訳文は、文章そのものがあまり難しくないのて殆ど同じようなものであるが、一応参照してみると、原田慶吉氏の翻訳は「もし人が妻を娶り、〔彼の女〕子供を彼に産み、しかる後その女が運命に赴き（死亡し）たるときは、彼の女の嫁資に対しては、彼の女の父は決して請求することなし。彼の女の嫁資は、正しく彼の女の子供のものなり。」となっており、同様に中田一郎氏の翻訳も「もし人が妻を娶り、彼に息子たちを生んだあと、その女性が死亡したなら、彼女の持参財について彼女の父親が権利を主張することはできない。持参財は彼女の息子たちの物である。」とあまり変化の無い文章となっている。丁度この条文の邦訳途中からハンムラビ法典の石柱裏面上から第11欄（第11段目）に入ってゆく。古代バビロニア社会において、嫁にやる父親が持たせたシェリクトゥム še-ri-iq-tim（持参金、嫁資）は、その概要はすでに第137条の解釈のところで記述したが、その後かなり長くまで花嫁の父親の権利という形でそのまま嫁の実家によって管理される余地が残されていたことが、この条文でわかるのである。この第162条の丁度半分のところ第3行目のšim-tim（運命）のところで、ハンムラビ法典の石柱に刻された楔形文字原文は、その裏面上から数えて第10欄が左端（いづらか左側面）で終り、次の楔形文字原文 it-ta-la-ak（行く、死ぬ）から裏面第11欄の右端に移って上下約7～8 cm を縦にその後は左側へと、この第162条の第4行

と第5行を読み進めてゆくことになるのである。


第163条 (原文・逐語訳)

 sum-ma a-wi-lum aš-ša-tam i-hu-uz ma

もし 人が 妻を 娶るが

¹⁰  mārē la u₂-sar-ši šu sinništum šī-i

子を ずに 儲け 彼に 女が この

 a-na šī-im-tim it-ta-la-ak

に 運命 従ったので

 sum-ma tir-ha-tam sa a-wi-lum su-u₂

もし 婚約品を 所の 人が この

 a-na bit e-mi šu ub-lu

に 家 義父の 彼の 持参した

 e-mu šu ut-te-ir šum

義父が 彼の 返したなら 彼に

 a-na se-ri-iq-ti sinništum su-a-ti

については 持参金 女の この

 mu-za u₂-ul i-ra-ag-gu-um

彼女の夫は 決して 請求しない

 se-ri-iq-ta sa sa bit a-bi sa ma

持参金は 彼女の もの 家の 父の 彼女の (だからである)

第163条（試訳）

ある者が、妻女を娶ったがその妻が彼に子供を儲けず（子を生まないまま）運命に従って行ってしまった（死んでしまった）場合において、この夫が自分の義父（嫁の実家の父親）に持参した花嫁の値（結納料として受け取った婚約品など）をその義父が彼に返却してくれた時は、その夫は妻の持参金について何の請求権も有しない（妻の持参した持参金等の嫁資について何の権利も有さない）。彼女の手参金（嫁資等）は彼女の実家の財産となるものである。

第163条の解釈

前の第162条とは逆に、嫁にきた女が子供を生まずに死んでしまったような時（古代バビロニアではあえて死とは言わず「運命に従って行く」という表現を使う）には、その義父すなわち嫁の実家の父親は、夫が自分の娘をもらう時に持参してきた結納の費用を返却したる場合において、結婚するために持たせてやった持参金（嫁資等）はすべて取り戻すことができ、夫には嫁として持ってきた妻の持参金等の権利は何等無いものとする、というのが本条の主旨と思われる。この第163条に対する原田慶吉氏の訳文は「もし人が妻を娶りたるに、〔その妻〕子供を彼に儲けしめず、〔その中〕その女が運命に赴きたるときは、もしその者が彼の義父の家に持参したる花嫁代を、彼の義父が彼に返したるときは、その女の嫁資に対しては、彼の女の夫は決して請求することなし。彼の女の嫁資は、正しく彼の女の父の家のものなり。」であり、同様に中田一郎氏は、アッカド語の「テルハトゥム」という用語をそのまま使って訳し、その脚註でこの原田氏の訳文にも触れている。その中田氏の訳文は「もし人が妻を娶り、（その妻が）彼に息子を得させないまま死亡したなら、もしその人が義理の父の許に持参したテルハトゥムを彼の義理の父が彼に返していた場

合¹¹¹⁾、彼女の夫はその女性の持参財について権利を主張することはできない。彼女の持参財は彼女の父の家の物である。」となっており、そして同じく中田氏の脚註は「111) 原田慶吉、p. 325 ; G.R. Driver-J. C. Miles, *BL II*, p. 63 ; M.T. Roth, *Law Collections*, p. 112 などは、「返す場合」と訳し、§164では「返さない場合」と訳すが、ここでは E. Szlechter, *Codex*, pp. 130f. ; R. Haase, *Rechtssammlungen*, p. 43 ; A. Finet, *Le code*, pp. 96f. などと共に、それぞれ「返していた場合」「返していなかった場合」と訳しておく。なお、この箇所については、R. Yaron, *The Laws of Eshnunna*, 1988, pp. 176-179 を参照。」となっている。このテルハトゥムという言葉の意味は、このハンムラピ法典第138条以下の（アッカド語婚姻法の）解釈のところを参照されたい。なお中田氏の「権利」という訳は、この当時そのような権利があったわけではなく、アッカド語の原文を参照してもそのような単語があるわけではなく、あまり適当とは思われない。

第164条（原文・逐語訳）



sum-ma e-mu šu tir-ha-tam

（上記で）もし義父が 彼の 婚約品を



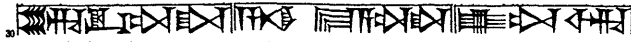
la ut-te-ir šum i-na se-ri-iq-ti ša

ないなら 返さ 彼に から 持参金 彼女の



ma-la tir-ha-ti ša i-har-ra-aš ma harāšu 控除する

同等額を 婚約品と 彼女の 差し引いて、



 se-ri-iq-ti sa a-na bit a-bi sa u₂-ta-ar -ta は bi の残り

 持参金を 彼女の に 家 父の 彼女の 返す

第164条（試訳）

（前条より引続いて）その義父が、その結納金（婚約品、花嫁の価値品）を彼（その夫）のもとに返却しないならば、彼は彼女の持参金（嫁資等）から花嫁の価値額（結納として支払った額）を差し引いて、（残った）持参金額を彼女の父（義父）に返済すればよいものとする。

第164条の解釈

第163条で、その義父がかつて夫（婿）がその娘を嫁にもらうために持参した結納金等の婚約品（花嫁の価値品）額を返却してくれなかった場合において、花嫁が結婚する時に持ってきた持参金（嫁資）からその額を差し引いただけ妻の実家（義父）に返済すればよい、という古代バビロニア社会の法原則を述べたものと思われる。

このことからみても、花嫁が結婚する時に実家から持ってきた持参金（嫁資にあたるシュリクトゥム）がいかに当時の社会においては高価であったかが理解できる。

この第164条についての原田慶吉氏の訳文は「もし彼の義父が花嫁代を彼に返さざりしときは、彼の女の嫁資の中より、彼の女の花嫁代の全額を控除して、彼の女の嫁資を彼の女の父の家に返す。」となっており、同じ条文に関する中田一郎氏の翻訳文は「もし彼の義理の父が彼にテルハトゥムを返していなかった場合、彼は彼女の持参財から彼女に対するテルハトゥム相当分を差し引いたあと、彼女の持参財（の残り）を彼女の父の家に返さなければならない。」となっている。中田氏は相変らずテルハトゥム

（花嫁代、嫁資）を片仮名で表記しておられるが、持参財（シェリクトゥム）のほうはさすがに片仮名を使うことはやめ、持参財という訳語にしておられる、このような片仮名書きとかなり特殊な当時の法律用語を条文によって使い分けて（区別して）訳語として使用すること、については翻訳上かなり問題があるのではないか、と思われる。いずれにせよヨーロッパの中世に存在した「嫁資」制度に先がけて、古代バビロニア婚姻法にこのような制度があったことは比較法史上興味ある事実と言えよう。

第165条（原文・逐語訳）



sum-ma a-wi-lum a-na abli su ablu, aplu < dumu-us

もし 人が に 長男 彼の



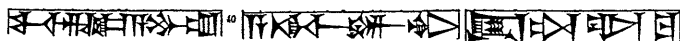
sa i-in su mah-ru eqlam kirām u₃ bitam

所の 目に 彼の 受ける（かける）畑、果樹園 や 家を



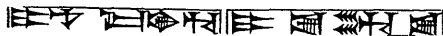
iš-ru-uq ku-nu-kam iš-tur sum šarāqu 与える

贈り 記録を 書いた時 彼に Sataru 書く



wa-ar-ka a-bu-um a-na si-im-tim it-ta-ak-ku

のち 父が に 運命 従った



i-nu-ma ah-hu i-zu-uz-zu

時には 兄弟が 分割する



qi₂-iš-ti a-bu-um id-di-nu sum i-li-qi₂ ma

贈与を 父が 与えた 彼に 取り除いて、



e-li-nu-um-ma i-na sa2-ga biit a-ba

更に を 財産 家の 父の



mi-it-ha-ri-is i-zu-uz-zu

平等に 分割する

第165条（試訳）

ある者が、自分の眼で判断した一番長所の多い（その性格が最も開けて
いる）息子（の一人）に、田畑、果樹園あるいは家屋を遺贈することを決
定し、（その法的効果を確実なものにしておくために）その者に封印をし
た（楔形文字粘土板の）法的な証書を作製したる場合にあって、この父親
が死亡したる後になって、他の兄弟達とその遺産を分割するようになった
場合において（当然のこととして）その息子は父親が彼に譲渡しようとし
た相続分を自分のものとして受領することができる。更にその後で（他の
息子達にも相続する分が残っている場合には）彼等はその父親の（残って
いる）財産をすべて平等に分配しなければならないものとする。

第165条の解釈

飯島紀氏は、abli を「長男」と逐語訳したが、この単語は次の行からの
修飾を受けていて、その父親が自分の眼でみて一番その性格が高いところ
にある「長所をもった息子」と解釈するほうが良いように思われる。

他の多くの論文や文献を参照にした場合、バビロニア社会では未だ「長
子相続の原則」が完全に成立していなかったもの、と考えられるからでも
ある。

古代バビロニア社会において、アウィルム階層の人々の間で原則に相続
権を有していたのは男の子達だけで女子は相続権がなかったものと思われ

る。そしてその相続は「相続資格を有する息子達」の間で原則として平等になされていたものとみられる。しかしながら、いつどこの時代でも自分の気に入った者への特別の配慮というものは存在するもので、古代バビロニアにおいても「ある特定の息子に対する特別贈与」をこの第165条のように法制度上容認しているのである。

しかしそうするためには、この第165条で書かれたように予め粘土板の法律遺言書を作成しておく必要があったと思われる。この条文に関する原田慶吉氏の訳文は「もし人が彼の眼にいれたる彼の長子に、原、園または家屋を贈与し、彼に捺印証書を書きたるときは、父が運命に赴きたる後は、兄弟が〔遺産を〕分割するに当りては、父が彼に与えたる贈与を取りて、この外なお父の家の財産の中より、平等に分割す。」となっており、その一方で、中田一郎氏は第1行目末に出てくる abli を「嫡出子」として第137条と同様の訳語を使用しておられるが、この現在も通用する嫡出子という法律用語を使用する以上第119条などに記された「女奴隷の生んだ息子など」は絶対に含まない、ということの意味しているのかどうか、はっきりしていない。その中田一郎氏の翻訳は「もし人が彼の目にかなった彼の嫡出子に耕地、果樹園あるいは家を贈り、捺印文書を彼のために作成したなら、その父が死亡した後、兄弟たちが（遺産を）分けるとき、彼は父が彼に与えた贈物は（そのまま）保持することができる。そして、それとは別に、彼ら（兄弟たち）は父の家の財産を平等に分けなければならない。」となっている。

この楔形文字原典第3行目に出てくる ku-nu-kam を「捺印証（文）書」と訳すことが多いが、これは勿論粘土板のなかに楔形文字の文書を刻みそれをその外側からまた粘土で封印してその閉じたところを刻印したものを保存しておくこと（すなわち今日の日本でいう「公正証書」に近いもの）、が法的な手続きとして古代バビロニアでおこなわれてきた、と考えられる

からである。


第166条 (原文・逐語訳)


 šum-ma a-wi-lum a-na māre ša ir-šu-u₂

もし 人が ために 子達の 儲けた rašū 得る、宛う


 aš-ša-tim i-hu-uz a-na māri šu ši-ih-ri-im

妻を 娶ったが だけは 息子 彼の 若い


 aš-ša-tam la i-hu-uz

妻を まだ娶らなかった場合


 wa-ar-ka a-bu-um a-na ši-im-tim it-ta-al-ku

後に 父が に 運命 従った


 i-nu-ma ah-hu i-zu-uz-zu i-na ša₂-ga bit a-ba

時は 兄弟が 分割する を 財産 家の 父の


 a-na a-hi šu-nu ši-ih-ri-im


には 弟 彼らの 若い


 ša aš-ša-tam la i-hu-uz e-li-a-at zi-it-ti šu

所の 妻を ない 持た 加えて 分け前に 彼の


 kaspi tir-ha-tim i-ša-ak-ka-nu šum ma

銀を 婚約料の 置いて、 彼に


 aš-ša-tam u₂-ša-ah-ha-zu šu

妻を 娶らせる

第166条（試訳）

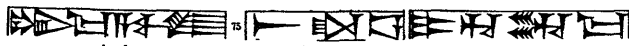
ある者が、自分の生ませた息子達のためにその妻女（嫁）たちを娶ってやったが、（その中で）若い息子だけがまだ妻を娶っていなかったような場合において、（そのような状況の下で、その後）その父親（ある者）が運命に従った（死亡してしまった）時は、兄弟が父親の家の財産を分割するに際し、妻をもっていない若い弟（古代ローマの共和制で、*puer*「プエル」すなわち少年として扱われるのは15～17才までであったが、古代バビロニアの成年は不明）に対してはその者の分割額に加えてその婚約料としての銀を分け前として特別に与え、その若い息子に（兄弟たちの責任で）妻を娶らせねばならないものとする。


第166条の解釈

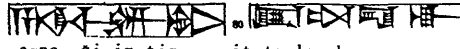
古代バビロニアの相続法において、一般的な原則としてアウィルム階層の息子たちは平等に分配されることになると思われるが、その中で未成年 *ši-ih-ri-im*〔古代ローマのプエル（少年 *puer*）あるいはプエリティア *pueritia*（少年期）にあたる子供の年齢）のまだ婚姻年齢に達していなかったような者がいた時は、その者に結婚のために必要な額（婚約料としての銀）だけ余分に上乗せして相続する分が増えることになる。そして父親によってすでに嫁をもらっている息子たちは、「その婚約料としての銀を与えるだけでなく、その未成年の息子が嫁をとれるまで面倒みてやらなければならない」ことが決定されていたものと思われる。この第166条に関する原田慶吉氏の訳は「もし人が〔彼が〕儲けたる子供のために妻を娶りたるも、年少の彼の息のためには〔未だ〕妻を娶らざりしときは、父が運命に赴きたる後は、兄弟が父の財産の中より分割するにあたりては、〔未だ〕妻を娶らざる年少の彼等の弟には、彼の分前に加えて、花嫁代の銀を彼に置き、もって妻を彼をして娶らしむ。」となっており、中田一郎氏の

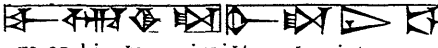
ほうは「もし人が彼が得た息子たちに妻を取ったが（直訳：娶ったが）、彼の幼い息子に妻を取らなかったなら（直訳：娶らなかったなら）、父が死亡したあと、兄弟たちが（遺産を）分けるとき、父の家の財産のうちから、（まだ）妻を娶っていない彼らの幼い弟のために、彼の取り分とは別に、テルハトゥムの銀を設定し、彼に妻を娶らせなければならない。」と相変わらずテルハトゥムという婚姻関係の用語を使用しているが、この楔形文字の第8行目にある tir-ha-tim をこの第166条の場合に第163条から第164条に記載されたのと同じ名称のものではあるが、それが全く同一の性質を有しているものかどうかは分からない。それを確認するには第128条や第138条の解釈のところなどに記載した中田一郎氏のテルハトゥムに関する注解などを参照されたい。






第167条（原文・逐語訳）


 šum-ma a-wi-lum aš-ša-tam i-hu-uz ma
 もし 人が 妻を 娶り （妻は）


 mārē u₂-li zum sinništum šī-i
 子を 生んだが 彼に 女は この


 a-na šī-im-tim it-ta-la-ak
 に従って 運命 行った（死んだ）ので


 wa-ar-ki ša sinništam ša-ni-tam
 後 彼女の 女を 第二の


 i-ta-ha-az ma mārē it-ta-la-ad
 娶り、 又 子が 生まれたけれども

 wa-ar-ka-nu-um a-bu-um a-na šī-im-tim it-ta-al-ku
 後は 父が に 運命 従った
 Col. XXVIII. 
 / mārē a-na um-ma-tim u₂-ul i-zu-uz-zu
 子達は によって 母 決して 分割せず

 še-ri-iq-ti um-ma-ti šu-nu i-li-qu ma
 持参金を 母の 彼らの（それぞれ）取り

 nig₂-ga bit a-ba mi-it-ha-ri-iš i-zu-uz-zu
 財産は 家の 父の 平等に 分割する

第167条（試訳）

ある者が、妻女を娶り、その妻が彼（のため）に子供を生んだが、この妻は運命に従って行ってしまった（死亡してしまった）ので、その後（この者は）第二の妻を娶りまた子供が生まれたが、父親（その者）も運命に従った（死亡した）ので（相続がおこなわれることになった）。子供たちは、母親によって分割せず、彼等の母親が（自分の実家から持ってきた）持参金はそれぞれ（の母親に従って）受け取り、父親の家の財産については平等に分割しなければならない。

第167条の解釈

古代バビロニアにおける相続法は原則として平等であることを示したもののだが、この相続が平等なのは父親の家の財産に関してであって、母親がその婚姻に際し持参してきた持参金にあたるもの（シェリクトゥム）等に

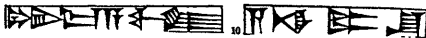
についてはその母親から生まれた息子たちだけで分けることができる。この第167条は、最初の結婚で出来た子供たちとその母親が死んだ後にその父親が娶った後妻とが生存していて、またこの後妻にも子供達が生れた場合の相続上の原則が概括的に示されている。

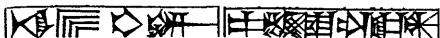
要するに父親の家の財産は、原則としてすべての息子が平等に相続しなければならないが、すでに死亡した母親が実家から持ってきた持参金等はその同じ母親の腹から生まれた息子たちで分けることができ、これは他の息子たちにとって相続の対象とはならない。すなわちバビロニアの相続法は「父親の家を基準として決められている」ので、今日の相続法の基本的な理論とはかなり異っている。


第165条～第167条はすべてアウィルム階層の子供達をその相続権者として扱っているため、平等の原則が徹底しているが、その中に奴隷妻から生まれた子供がいる場合はこれに続く第170条～第171条に規定してあるようにその父親が生前に（今日で言う嫡出子として正式に）認知していた場合には相続権者となることができるとだけ定められている。中田一郎氏はこれらの条文で前の第165条に出てくる *abli*（長子）を「嫡出子」とし、これらの条文に出てくる *mārum* と同等なものとして翻訳しているようであるが、そのように解釈して良いものかどうかはわからない。この第167条に関する原田慶吉氏の翻訳文は「もし人が妻を娶りて、〔その妻が〕子供を彼に産み、〔その中〕その女が運命に赴き、彼女の女〔死亡〕後に、〔夫が〕他の女を娶りて、〔彼の女〕子供産みたるときは、父が運命に赴きたる後は、子供は母別には決して分割することなく、彼等の〔実〕母（複数）の嫁資は〔別々に〕自ら取るも、父の家の財産は平等に分割す。」となっており、その同じ条文を中田一郎氏は「もし人が妻を娶り、（彼女が）彼に息子たちを生み、その女性が死亡し、彼女の（死）後彼が別の女性を娶り、（彼女が）彼に息子たちを生んだなら、父親が死亡したあと、息子

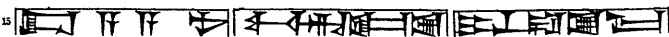
たちは（遺産を）母親別に分けてはならない。彼らは（まず、それぞれ）自分たちの母親の持参財を取り、（ついで）父の家の財産を平等に分けなければならない。」と翻訳している。この第167条の楔形文字第7行目からハンムラピ法典石柱の裏側上部より第十二段（欄）目に入り第6行目が第十一段階の左端で、そこから7行目が第十二段の右端から左に向って行数を数えてゆくことになる。


第168条（原文・逐語訳）

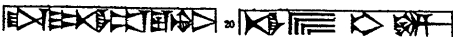

 sum-ma a-wi-lum a-na māri šu
 もし 人が を 子 自分の



 na-sa-hi-im pa-nam iš-ta-ka-an nasāhu 勘当する、償還する
 勘当しようと公然と 企て、


 a-na da-a-a-ni māri-i a-na-za-ah iq-ta-bi
 に対し 裁判官「子を私の勘当します」といっても

¹⁵ 
 da-a-a-nu wa-ar-ka zu i-par-ra-su ma parāsu 調査する
 裁判官達は 背後を その 調査して、


 šum-ma mārūm ar-nam kab-tam
 もし 子が 罪を 重大な


 ša i-na ab-lu-tim na-sa-hi-im
 べき から 相続 勘当する


 la ub-lam a-bu-um māri šu abālu 運ぶ
 ないなら 負わ 父は 子を 彼の



i-na ab-lu-tim u₂-ul i-na-za-ah

から 相続 決して 勘当しない（できない）

第168条（試訳）

ある者が、自分の息子の有している相続の権利を剥奪しようと企てて、裁判官に対して「私は息子を勘当という形に致します（私は、私の息子の相続の権利を剥奪したい）」と宣言したる場合に、裁判官はその背後（の事例）を調査し（改めて）検証し（直さ）なければならない。（そして、その結果）その息子が相続の権利を剥奪されるに該当する重大な罪状を何等犯していない時には、その父親は息子の相続の権利を剥奪するようなことは（どんなことをしても）できないものとする。

第168条の解釈

古代バビロニアの時代、その支配階層の立場にあたるアウィルム階層の内部社会で、父親の権利はかなり強かったことがいくつかの事例ではっきりしているが、こと相続権に関しては例え父親が気に入らなくとも、父親一人の自由意志で息子の相続権を奪うことなどはできず、裁判官の決定が無ければ、自分の息子の相続権を簡単には剥奪できぬことを定めていたのがこの条文である。しかもこれに続く第169条にもあることからわかるように、父親に逆らった重大な犯罪行為も、たった一回だけなら裁判官はこれを認めてはならないと決められていた。

このことから理解できるように、古代バビロニアのアウィルム階層で「相続権」の存在は、かなり重要な位置を占めていたのではないと思われる。

この第168条の条文を楔形文字法の研究という観点から、原田慶吉氏は

「もし人が彼の子を追い出さんと企て、裁判官（複数）に向いて、『私の子を追い出します』と言いたるときは、裁判官（複数）はその背後にひそむ事情を審査し、而してもし子が相続人の地位より追い出すべき重大なる責を負わざりしときは、父は彼の子を相続人の地位より決して追い出すことなし。」のように翻訳し、その註釈で「シュメール法典（I）第3条を参照するように掲げて（後述して）おられる。これに対し、中田一郎氏は楔形文字原典のこの第168条各行（第1、3、5、7行）と次の第169条に登場する *mārum* (*māri* は属格形) をすべて「嫡出子」と解して、以下の如く「もし人が自分の息子を（嫡出子の地位から）廃除する決意をし、裁判官たちに、『私は自分の息子を（嫡出子の地位から）廃除したい』と言ったなら、裁判官たちは彼の事例を審査しなければならない。もしその息子が（相続権を有する）嫡出子の地位からの廃除にあたいする重大な罪を犯していなければ、その父は彼の息子を嫡出子の地位から廃除してはならない。」という翻訳を出しておられる。この *mārum* が一般的な意味の「子供」であるか「嫡出子」であるか、古代の大家族制度のもとでその訳語を選択するのはかなり難しい。現代の法律用語としては、フランス語で *enfant légitime*、ドイツ語で *uncheliches Kind* と記される言葉を翻訳したのが、まさにこの「嫡出子」であり、日本民法第772条「妻が婚姻中に懐胎した子は、夫の子と推定する。2、婚姻成立の日から二百日後又は婚姻の解消若しくは取消しの日から三百日以内に生まれた子は、婚姻中に懐胎したものと推定する」と規定された内容を受けて、同じく日本民法第774条に「第772条の場合において、夫は、子が嫡出であることを否認することができる」と規定されており、ここで始めて「嫡出子」という法律用語の定義がなされるのである。そして現代法では、婚姻中に出生したが懐胎は婚姻前である子も嫡出子と解され、同じく民法第809条によって養子は縁組の日から養父母に対して嫡出子という身分と地位を取得する。更に







民法第789条によって、嫡出でない子も準正によって嫡出子となること、が定められているのである。古代バビロニアにおいて、ハンムラビ法典はこのように長大な法律上の文章を記述してあるが、原田慶吉氏がこの第168条の翻訳の後に記載してある〔註〕でもわかるように、それに先行するシュメール法典（I）の第3条では「もし父がその子に、「自分の子ではない」と【彼に】言うときは、家と城壁より追い出す。」[loc. cit., p. 291] という短い文章だけが記載されていただけである。そしてその解釈として、原田氏はその註釈の中で以下のように「追放される者が何人なるかは問題であるが（井上、696頁以下に詳しい。なお中原翻訳760頁）、本条は前2条と同じく、理由なき親子関係の否認を取り扱っているに違はなく、しからばその理由なき行為者が罰を受けることは当然のことであって、追放されるのは父である。如何に親権が強大であっても、父の不法な親子関係断絶宣言によって、子が罰せられる様なことは考え得られない。実証記録に見るもシュメールの昔より相続廃除は裁判所の強力をもって行われており、本条はかかる法定手続をへない不法な親子関係断絶行為による相続廃除に対する罰と解すべきである。Koschaker, v° Erbrecht in RVG. III, S. 119 ; Klima, Die Entziehung des Erbrechtes im altbabylonischen Recht, Festschrift Koschaker III (1939) S. 83.」と解しておられる。

はたしてこの解釈も、その当時の慣行を詳細に考慮すれば正確であったかどうか分からないが、いずれにせよこのような解釈もできることは確かである。

ついでながらハンス J.ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏の独文から重訳した鈴木佳秀氏は、この第168条に関し「ある人が自分の息子の相続権を剥奪することを決め、裁判官に『私は私の息子の相続権を剥奪します』と言う場合、裁判官は当の息子の事を調査しなければならない。その息子が相続権を剥奪されるに当たる重大な罪を何も犯していない時は、父

は息子の相続権を剥奪することはできない。」〔loc. cit., p. 174〕という翻訳を記しておられる。やはりこの訳文としては普通に「子」あるいは「息子」に留めておいたほうが良いのではないか、と思われる。

第169条（原文・逐語訳）


 sum-ma ar-nam kab-tam
 （上記で）もし 罪を 重大な

 sa i-na ab-lu-tim na-sa-hi-im
 ような から 相続 勘当する

 a-na a-bi su it-ba-lam a-na is-ti-is su
 に 父 彼の 負う時は 一度目は

 pa-ni su ub-ba-lu sum-ma ar-nam kab-tam
 前に 彼の 運ぶ（見送る）がもし 罪を 重大な

 a-di si-ni su it-ba-lam a-bu-um māri-su
 までも 二度 負うならば 父は 子を 自分の

 i-na ab-lu-tim i-na-za-ah
 より 相続 勘当する

第169条（試訳）

（第168条から法律の文章は継続した内容となっており、前条で裁判官から調査または検証された息子が）相続の権利を剥奪されるに該当する重大なる罪跡を犯していた場合でも、それが一度目ならば寛恕の意を示して

やる必要がある。しかしながら息子が二度までも重大な罪科を犯していた場合には、父親はその息子の相続の権利を剥奪することができるものとする。

第169条の解釈

アッカド語の文章がこの条文に先行する第168条より続いているので、この第169条の「相続権の剥奪」を最終的に決定できるのは、第168条に記された裁判官だけであると考えられるが、前の第168条の条文中にもあるように裁判官に訴える時に、父親は既に自分の息子の相続の権利を奪うのに該当するような息子の重大な罪科が二つ以上なければ、この先行する第168条に規定した相続権剥奪の訴訟を起せないもの、と解釈するべきであろう。

従って、この第169条は先行する第168条の訴因を確定的に規定したもの、と考えて良いだろう。

ともかく父親が、その息子に対して正式に廃嫡を言い渡すことができたのは、その息子が父親に対して二度以上も重罪を（その父親に対して）犯したことを裁判で実証できた時だけであった。この第169条の原田慶吉氏の訳は「もし相続人の地位より追い出すべき重大なる責を、彼の父に対して負いたるときは、〔彼等〕一度は見送るも、もし重大なる責を再度負いたるときは、父は彼の子を相続人の地位より追い出す。」となっている。

同じくこの第169条を中田一郎氏は「もし（その息子が）嫡出子の地位から廃除するに値する重大な罪を父親に対して犯したなら、彼らは初回は彼を許さなければならない。もし彼が重大な罪を2回までも犯したなら、父親は彼の息子を嫡出子の地位から廃除することができる。」と現代語として通用する翻訳をしておられる。この楔形文字原文冒頭にあるのアッカド語 ar-nam が単なる「責任」「責務」という道徳上のおこないに留まる

べきものなのか、アッカド法ではっきりと「罪科」として認められるものなのかどうか、この条文の解釈では古代バビロニアの慣習法とも絡めて微妙な解釈上の問題を残すことになる。ハンスJ.ベッカー（Hans Jochen Boecker）氏は、相続法という分野の中で、前の第165条から続く一連の条文が、ハンムラビ法典において「長子相続の原則」がなかったことを意味することを指摘し、直前の第168条とこの第169条の訳文を挿入しておられる。そして次に続く第172条までを「相続法」の枠内で解釈し論攻しておられる。それではこのベッカー氏の訳を、すでに掲載した第168条の訳文を除いて鈴木佳秀氏の訳で試みることにしよう「.....バビロニア法はある特定の息子への特別贈与を認めている。そして他方で、相続権の剥奪を非常に困難なものとしている。相続権の剥奪は、裁判での裁可がなければ実行不可能であった。裁判では、当該の息子が重大な過ちを犯した場合に限って、その相続権の剥奪に承認を与えることができた。それも、その息子が二度にわたり過ちを犯した場合に限られていた。

彼が相続権を剥奪されるに当たる重大な罪を犯している時でも、一度目は大目に見なければならない。しかし彼が二度も重大な罪を犯した時は、父はその息子の相続権を剥奪することができる。 第169条

その他にも、このバビロニアの法は、ある人の二人の妻から生まれた息子たちの相続を取り扱っている。正規に二人の妻を順次娶り、その婚姻から生まれた子供たちの相続権が問題となる場合、息子たち全員に父の遺産を平等に相続する権利がある（第167条）。彼らが奴隷妻の子供で、正妻の息子たちと共に遺産を要求する場合は、彼らには父が法的に有効な〔自分の子であるという〕認知を与えた事実が必要で、それによって〔自由人とみなされた〕奴隷妻の子供たちも相続に与ることができた（第170条、第171条）。嫁資料の相続の場合は、特別な事情が伴っていた。嫁資料は法的には原則として妻の所有物である。それゆえ、彼女が死んだ場合、彼女の

実の子供たちだけがそれを相続する権利を持っていた。

寡婦は、義理の息女として、亡くなった夫の父に対して相続権を要求することはできない。だが、彼女には権利がない訳ではなく、また生計の道がない訳でもない。彼女は引き続き夫のものであった家に住む権利を持っている。嫁資料と夫が妻に与えた贈与とが、その後の彼女の生活を保証するものである。夫からの贈与が彼女に与えられなかった場合は、息子たちの相続分の一部が、彼女の扶養を理由として配布される（第172条）。だがクリームは、この規定から寡婦の相続権を想定することはできないと強調している（56）。」〔op. cit., p. 173～p. 175〕

このハンムラピ法典に関する「相続法」の規定は、ホルスト・クレンゲル（Horst Klengel）氏も少々触れておられ「……父親が廃嫡を言い渡すことが許されたのは、長男が父親に対して二度も重罪を犯したことを実証できたときのみであり、それには裁判所の裁決が必要であった……」〔op. cit., “Hammurapi von Babylon und seine Zeit” 1976 江上波夫氏と五味亨氏の共訳『古代バビロニアの歴史』山川出版社刊 p. 217参照〕と邦訳されているが、「長男」という解釈のみならず、はたしてこのアッカド語 *ar-nam kab-tam*（重大な罪）を現代ヨーロッパ刑事法上の「重罪」〔(仏) *le delit grave* または *le crime odieux*〕とまで拡大して解釈することが、そのままで可能であったのかどうかは疑問である。